

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第29集

船 橋 遺 跡

-建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う調査報告書-

1998年2月

(財) 大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第29集

船 橋 遺 跡

- 建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う調査報告書 -

1 9 9 8 年 2 月

(財) 大阪府文化財調査研究センター

序 文

奈良盆地から大阪平野に流れ出たばかりの大和川と河内の台地を下刻して北流してきた石川との合流点の下流、現大和川の河川敷とその両岸に広がる船橋遺跡は、大和川の河床や河岸が浸食される度に土器や石器などの優品が露出し、コレクター垂涎の遺跡であった。大和川は、宝永元（1704）年に大阪湾に直接注ぐ流路が開削されたが、それまでは石川との合流点から北ないし北西流していた。そのため、船橋遺跡は、本来大和川の左岸、通称国府台地と呼ばれる洪積段丘の段丘崖から扇状地性低地に立地していた。それが、新流路により遺跡の中心部が分断され、河川内に取り込まれてしまったものである。

船橋遺跡周辺は、大和へ入る主要交通路が集中する地域であり、交通の要衝として府下でも屈指の重要な地点である。古代の文献に登場する古道だけでも、具体的な道筋比定には異説はあるものの、和泉と南河内の台地上を東西に走る大津道、丹比道、茅渟道、生駒西麓を南下する南海道、上町台地先端部から河内低地を南東に斜行してくる渋川道がある。これらの道路は、古代に官道として整備されたものであろうが、穴虫峠、竹内峠、竜田越などの各ルートを経て大和へと通じている。古代以降も、後に奈良街道、長尾街道、竹内街道などと呼称されるように、主要交通路として利用されている。

さらに、この地域は、大和川を遡上してきた舟運の終点でもあった。それは、近世においても、上流にある北の生駒山地と南の金剛・葛城山地を分断する亀ノ瀬峡谷の急流を舟が通行できず、剣先船や柏原船も一旦荷を下ろし、陸路を使って現奈良県王子町藤井まで荷を運んだ事でも証明される。近世より以前においても、この地が物資の集散場として高い役割を果たしていた事は間違いない。

このような立地条件のため、船橋遺跡周辺には、歴史的に重要な遺跡が密集している。特に、古墳時代や古代の遺跡の稠密度は特筆に値するが、ここでは本文第Ⅱ章を参照願いたい。

船橋遺跡は、非常に著名な割りには発掘調査例が少ない。遺跡発見者の山本博氏の昭和20年代の調査で遺跡の重要性が認識された後、昭和31～35年の大和川遺跡調査会による河床に露出する遺構面を対象にした発掘調査で、質量ともに卓越した遺構、遺物が検出されて注目を集めた。その後、高水敷の整備に先立って当センターが昭和50年度に試掘調査を実施し、土坑内より弥生時代から古墳時代への移行期の一括遺物を検出している。平成に入っても、大阪府教育委員会や柏原市教育委員会の手で幾つかの発掘調査が実施されているが、遺跡の広さの割りにはあまりにも小面積であり、船橋遺跡の全容が明らかになったとは到底言いがたい。

今回の発掘調査は、大和川高規格堤防建設に先立って行われたもので、当センターとしては20年振りの船橋遺跡の調査となった。今回の調査では、96-1・2地区の中心部が、平安時代の河川により削剥されていたために遺構としては残りが悪かった。それでも河川内からは通常集落では出土しない銅製帶金具未製品、石製鎧帶などが出土しており、本来遺跡の持つ歴史的内容の豊かさをうかがう成果を得ている。

これも、ひとえに大阪府教育委員会、建設省大和川工事事務所をはじめとする関係各位のご指導、ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成9年2月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪 井 清 足

例　　言

1. 本書は大阪府藤井寺市大井5丁目に所在する船橋遺跡の調査報告書である。
2. 調査は大和川高規格堤防工事・府営美陵住宅建替に伴うもので、建設省近畿地方建設局大和川工事事務所・大阪府建築部住宅建設課の委託を受け、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査は調査部長井藤徹、参事兼調整課長中西靖人、南部調査事務所所長藤田憲司の指示のもと、調整係長福田英人の協力を得て、現地調査は係長寺川史郎、技師亀井聰・奈加智美・河端智、遺物写真撮影・焼き付けは南部調査事務所調査第1係主任技師立花正治が担当者として実施した。
4. 現地調査は1996（平成8）年3月から開始し、1997（平成9）年2月に終了した。整理作業並びに本書の作成は寺川が指揮し、調査と平行して行った。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、藤井寺市教育委員会、柏原市教育委員会、建設省大和川工事事務所、大阪府建築部住宅建設課などの関係諸機関からご指導、助言・協力を賜った。
6. 本書の作成にあたっては、寺川（第Ⅰ章、第Ⅲ章遺構）・技師若林邦彦（第Ⅲ章第1節遺物）・仲原知之（第Ⅱ章、第Ⅲ章第2節遺物）が行った。
7. 本調査に関わる遺物、写真、カラースライド、実測図などの各種記録類は、財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

- ・遺構実測図の基準高については全て東京湾平均海水位（T. P.）を用いた。
- ・平面図は国土座標にのっとった平面直角座標系、第VI座標系に準拠し、挿図における座標の記載は全てメートル単位で表す。また方位の矢印が示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては小山正忠・竹原秀夫編 1995「新版標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色彩監修に準拠した。
- ・遺構番号は調査時に付与した通し番号で設定している。

目 次

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	2
第Ⅱ章 位置と環境	4
第Ⅲ章 調査の成果	8
第1節 96-1-1~5トレンチ	8
第2節 96-2-1~3トレンチ	93
第Ⅳ章 まとめにかえて	103

挿図図版目次

図1 調査位置図 (1 : 25,000)	図20 96-1-1・2・3トレンチ 第4面ベース 遺構12(1~4)・97(5.6)・99・103平・断面図、出土遺物
図2 調査区位置図	図21 96-1-1・2・3トレンチ 第5面 平面図
図3 調査区地区割図	図22 96-1-4・5トレンチ 第5-1面 平面図
図4 遺跡分布図	図23 96-1-4・5トレンチ 第5-2面 平面図
図5 96-1-1・2・3トレンチ 断面図	図24 96-1-1・3トレンチ 第5面 遺構114出土遺物
図6 96-1-5トレンチ 断面図	図25 96-1-1トレンチ 第5面 遺構142出土遺物
図7 96-1-1・2・3トレンチ 第1面 平面図	図26 96-1-5トレンチ 第5-1面 ピット190~195、197、201~203、204
図8 96-1-4・5トレンチ 第1面 平面図	図27 96-1-1トレンチ 第5面 遺構125平・断面図、出土遺物
図9 96-1-1・2・3トレンチ 第2面 平面図	図28 96-1-1トレンチ 第5面 遺構219平面図、出土遺物
図10 96-1-4・5トレンチ 第2面 平面図	図29 96-1-1トレンチ 第5面 遺構122平・断面図
図11 96-1-1・2・3トレンチ 第3面 平面図	図30 96-1-1トレンチ 第5面 遺構123平・断面図
図12 96-1-4・5トレンチ 第3面 平面図	図31 96-1-5トレンチ 第5-2面 遺構185平・断面図
図13 96-1-5トレンチ 第3面 遺構172平・断面図	図32 96-1-5トレンチ 第5-2面 遺構186遺物出土状況図1
図14 96-1-1・2トレンチ 第3面 出土遺物	図33 96-1-5トレンチ 第5-2面 遺構186遺物出土状況図2
図15 96-1-5トレンチ 第3面 遺構172 出土遺物	
図16 96-1-1・2・3トレンチ 第4面 平面図	
図17 96-1-4・5トレンチ 第4面 平面図	
図18 96-1-1・2・3トレンチ 第4面ベース 平面図	
図19 96-1-1~5トレンチ 第4面 遺構1 (1~13)・5 (14~23)出土遺物	

図34 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構206平・断面図、出土遺物	図61 96-1-5 レンチ	第6面 遺構210平・断面図
図35 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構207平・断面図	図62 96-1-1 レンチ	第6面ベース 遺構129出土遺物
図36 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構207平面図	図63 96-1-5 レンチ	第6面 遺構209(1.3)・210・21 1(2.4)平面図、出土遺物
図37 96-1-1 レンチ	第5面 遺構122出土遺物 1	図64 96-1-1 レンチ	第6面ベース 土器151~158、 160~162出土状況
図38 96-1-1 レンチ	第5面 遺構122出土遺物 2	図65 96-1-1 レンチ	第6面ベース 土器151・152・ 154-1・154-2・155・157- 1・157-3・160・161・162
図39 96-1-1 レンチ	第5面 遺構122出土遺物 3	図66 96-1-1 レンチ	第6面ベース 土器153(4)・1 56(1)・157-2(3)・158(2)・ 6層 土器279(5)・6面ベース (6~17)出土遺物
図40 96-1-1 レンチ	第5面 遺構122出土遺物 4	図67 96-1-1 レンチ	第6面ベース 遺構126出土石器
図41 96-1-1 レンチ	第5面 遺構122出土遺物 5	図68 96-1-1・2・3 レンチ	第7面ベース 平面図
図42 96-1-1 レンチ	第5面 遺構122出土遺物 6	図69 96-1-5 レンチ	第7面ベース 平面図・7b 層出土遺物
図43 96-1-1 レンチ	第5面 遺構122出土遺物 7	図70 96-1-1・2・3 レンチ	第8面 平面図
図44 96-1-1 レンチ	第5面 遺構123出土遺物 1	図71 96-1-1・2・3 レンチ	第8面ベース 平面図
図45 96-1-1 レンチ	第5面 遺構123出土遺物 2	図72 96-1-5 レンチ	第8面ベース 平面図
図46 96-1-1 レンチ	第5面 遺構123出土遺物 3	図73 96-1-1・2・3 レンチ	第9面 平面図
図47 96-1-1 レンチ	第5面 遺構123出土遺物 4	図74 96-1-1・2・3 レンチ	第9面ベース 平面図
図48 96-1-1 レンチ	第5面 遺構123出土遺物 5	図75 96-1-5 レンチ	第9面ベース 平面図
図49 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構185出土遺物 1	図76 96-1-5 レンチ	第10面 平面図
図50 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構185出土遺物 2	図77 96-1-5 レンチ	第11面 平面図
図51 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構185出土遺物 3	図78 96-2-1・2・3 レンチ	断面図
図52 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構186出土遺物	図79 96-2-1・2・3 レンチ	第1面 平面図
図53 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構207(1)・20 8(2)出土遺物	図80 96-2-1・2・3 レンチ	第2面 平面図
図54 96-1-5 レンチ	第5-2面 遺構207出土遺物	図81 96-2-1・2・3 レンチ	第6面 平面図
図55 96-1-5 レンチ	第6面 平面図	図82 96-2-1・2・3 レンチ	第7面 平面図
図56 96-1-1・2・3 レンチ	第6面ベース 平面図	図83 96-2-1・2・3 レンチ	第8面 平面図
図57 96-1-1 レンチ	第6面ベース 遺構141 平・ 断面図	図84 96-2-1・2・3 レンチ	出土遺物
図58 96-1-1 レンチ	第6面ベース 遺構141 出土 遺物	図85 96-2-1・2・3 レンチ	第8面 遺物出土状況
図59 96-1-1 レンチ	第6面ベース 遺構129・130 平・断面図		
図60 96-1-5 レンチ	第6面 遺構209平・断面図		

写真図版目次

図版1	96-1-5トレンチ1面 96-1-5トレンチ1面	南西から 東から	96-1-1トレンチ6面ベース 遺構126 石鎚出土状況 東から
図版2	96-1-5トレンチ1面 96-1-4トレンチ2面	南から 西から	図版16 96-1-1トレンチ6面ベース 遺物出土状況 96-1-1トレンチ6面ベース 土器152 南から
図版3	96-1-5トレンチ2面 96-1-5トレンチ3面 遺構172瓦積井戸枠	南から 西から	図版17 96-1-5トレンチ6層 土器279 南から 96-1-1トレンチ7面 南から
図版4	96-1-5トレンチ3面 遺構172曲げ物	西から	図版18 96-1-1トレンチ8面 南から
	96-1-5トレンチ3面 遺構172曲げ物内	西から	96-1-1トレンチ 遺構1 東壁断面 南西から
図版5	96-1-1トレンチ4面 遺構1東壁 96-1-1トレンチ4面 遺構5肩部断面	西から 西から	図版19 96-1-5トレンチ 7~9層 北壁 南西から 96-1-1トレンチ8面 8面~下層北壁 南東から
図版6	96-1-5トレンチ4面 遺構5 96-1-1トレンチ4面ベース	東から 南から	図版20 96-2-1トレンチ1面 南から 96-2-3トレンチ1面 東半 南東から
図版7	96-1-1トレンチ4面ベース 遺構99 96-1-5トレンチ5面	東から 南から	図版21 96-2-2トレンチ2面 西半 南から 96-2-3トレンチ2面 中央 南から
図版8	96-1-1トレンチ5面 96-1-1トレンチ5面 遺構122	南から 東から	図版22 96-2-1トレンチ6面 全景 南から 96-2-2トレンチ6面 東半 南から
図版9	96-1-1トレンチ5面 遺構122 96-1-1トレンチ5面 遺構123	南から 南から	図版23 96-2-2トレンチ6面 溝断面 96-2-2トレンチ7面 全景 南から
図版10	96-1-5トレンチ5面 遺構185北壁面内 96-1-5トレンチ5面 遺構185	南西から 南西から	図版24 96-2-2トレンチ7面 溝断面 96-2-1トレンチ河床検出状況 南から
図版11	96-1-5トレンチ5面 遺構185 96-1-5トレンチ5面 遺構185	南西から 南から	図版25 96-2-2トレンチ河床 全景 南から 96-2-1トレンチ河床 足跡
図版12	96-1-5トレンチ5面 遺構207 96-1-5トレンチ5面 遺構207断面	南東から 南東から	図版26 96-2-3トレンチ河床検出状況 南東から 96-2-3トレンチ河床 遺物出土状況
図版13	96-1-5トレンチ6面 96-1-5トレンチ6面	西から 南東から	図版27 96-1-1トレンチ6面ベース 遺構129出土遺物 96-1-1トレンチ6面ベース 出土遺物
図版14	96-1-1トレンチ6面ベース 遺物出土状況 96-1-1トレンチ6面ベース 遺構141	南から 西から	図版28 96-1-1トレンチ6面ベース 出土遺物 96-1-1トレンチ7b層 出土遺物
図版15	96-1-1トレンチ6面ベース 遺構129 北西から		図版29 96-1-1~5トレンチ遺構5 出土遺物 96-2-3トレンチ洪水砂層 出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

船橋遺跡は大和川と石川の合流点の西側に位置する。かつて合流点付近から北流していた大和川は下流域で度重なる洪水に見舞われていた。それを解消するために、1704（宝永元）年に現在の位置に付け替えられたため河床となった。さらに1954（昭和29）年に堰が作られると下流側は侵食を受け各種の遺構・遺物が人々の目に触れるところとなった。

今回の調査は大和川左岸堤防南側で大阪府建築部住宅建設課が計画している府営美陵住宅の老朽化に伴う建て替えと、建設省近畿地方建設局大和川工事事務所が計画している大和川河川事業に伴う工事用進入路部分の調査である。

上記工事に先立ち大阪府教育委員会文化財保護課は1995（平成7）年に府営美陵住宅内で6ヶ所の試掘調査を実施した。その結果中世の遺構面及び包含層、平安時代後期に起きたと考えられる洪水堆積層が認められ、洪水砂層には黒色土器から弥生時代中期までの土器が多量に含まれていたこと、試掘調査の掘削深度以下に弥生時代の遺構面が存在することが推測されたため本調査を実施することとなった。

発掘調査は（財）大阪府文化財調査研究センターが大阪府教育委員会の指導の下、建設省近畿地方建設局大和川工事事務所・大阪府建築部住宅建設課の委託を受けて実施した。

現地調査は1996（平成8）年2月に開始し、1997（平成9）年3月に終了した。

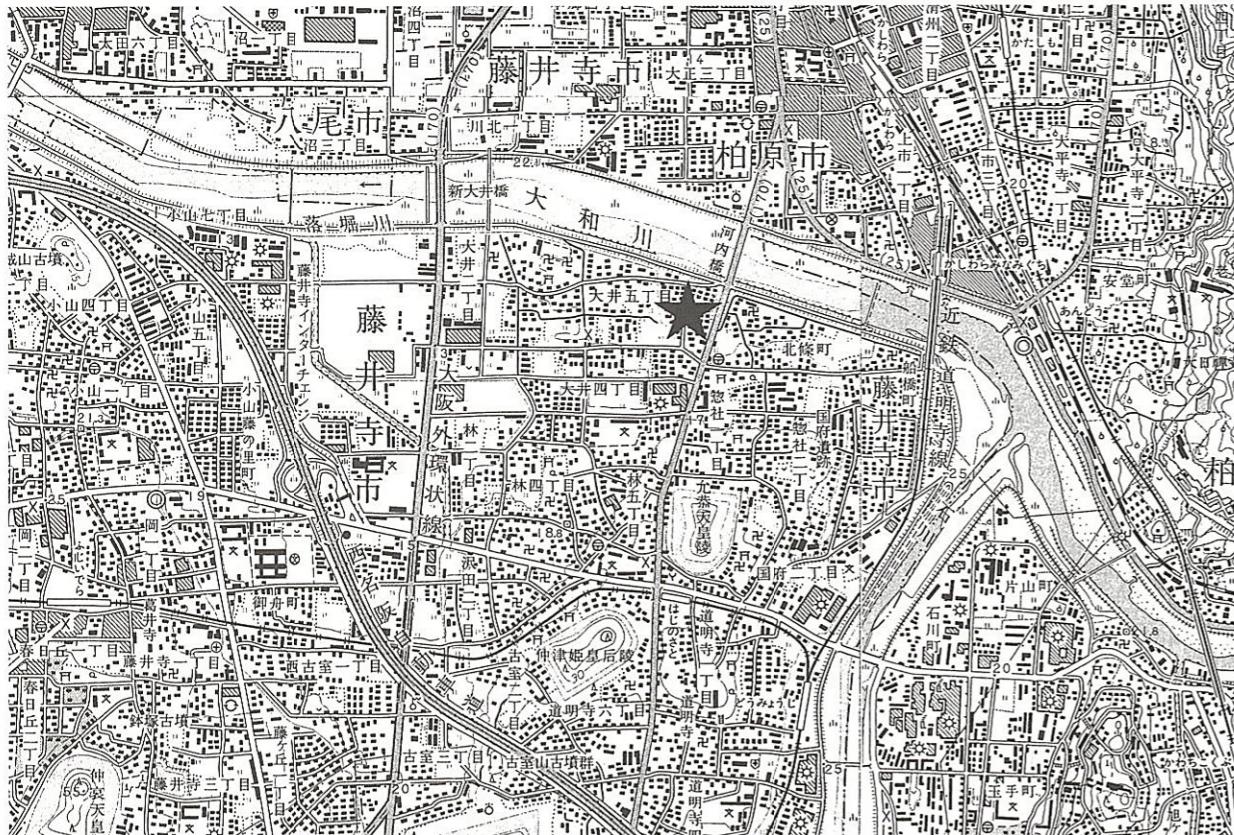


図1 調査位置図（1:25,000）

第2節 調査の方法

調査区は大きく2ヶ所に分けた。府営美陵住宅内を南北に走る道路から東側を調査年度の西暦の下二桁を冠し96-1調査区、道路を挟んで西側に位置する調査区は、96-2調査区とした。96-1調査区の河川事業工事用進入路を96-1-1トレンチ、府営住宅集会所を96-1-2トレンチ、電気室を96-1-3トレンチ、防火水槽を96-1-4トレンチ、住棟（B棟）を96-1-5トレンチとし、また96-2調査区は防火水槽を96-2-1トレンチ、住棟（A棟）西半を96-2-2トレンチ、住棟（A棟）東半を96-2-3トレンチとした。

調査面積は96-1調査区で3,434m²、96-2調査区は1,271m²、掘削予定深度は両調査区ともに現地表マイナス4.5mであるため鋼矢板を打設し、調査の途中には鋼矢板倒壊防止のため切梁腹起こしを設置した。

調査は盛土・旧表土・近代砂層をバックホーで除去し、以下は全て人力で行った。

遺構の平面実測はヘリコプターによる航空写真測量図化と平板測量を行った。また必要に応じて遺構平面図・断面図・遺物出土状況図を適宜作成した。

地区割りの方法については、（財）大阪文化財センター「遺跡調査基本マニュアル」1988に準拠し、遺物の取り上げや遺構図作成の基準とした。これは国土座標系第VI座標系を使用したものであり、同一基準を使用することにより絶対的な遺構の位置・遺物の出土地点を示すことができる。

地区割りの方法は第I区画では1万分の1地形図をそのまま使用する、東西8km、南北6kmの範囲で南西端を基点とする。第II区画は2,500分の1地形図を使用し、第I区画を縦、横各4分割し計16区画東西2km、南北1.5kmの範囲を示す。第III区画は第II区画を100m単位で区画する、縦15、横20区画となる北東端を基点とする。第IV区画は第III区画を10m単位で区画する、縦、横各10区画となる北東端を基点とする。

遺構番号は遺構の種別に関わらず検出もしくは掘削した順に通し番号を付与したが、1～3面の鋤溝のほか遺物が出土地点を示すことはない。

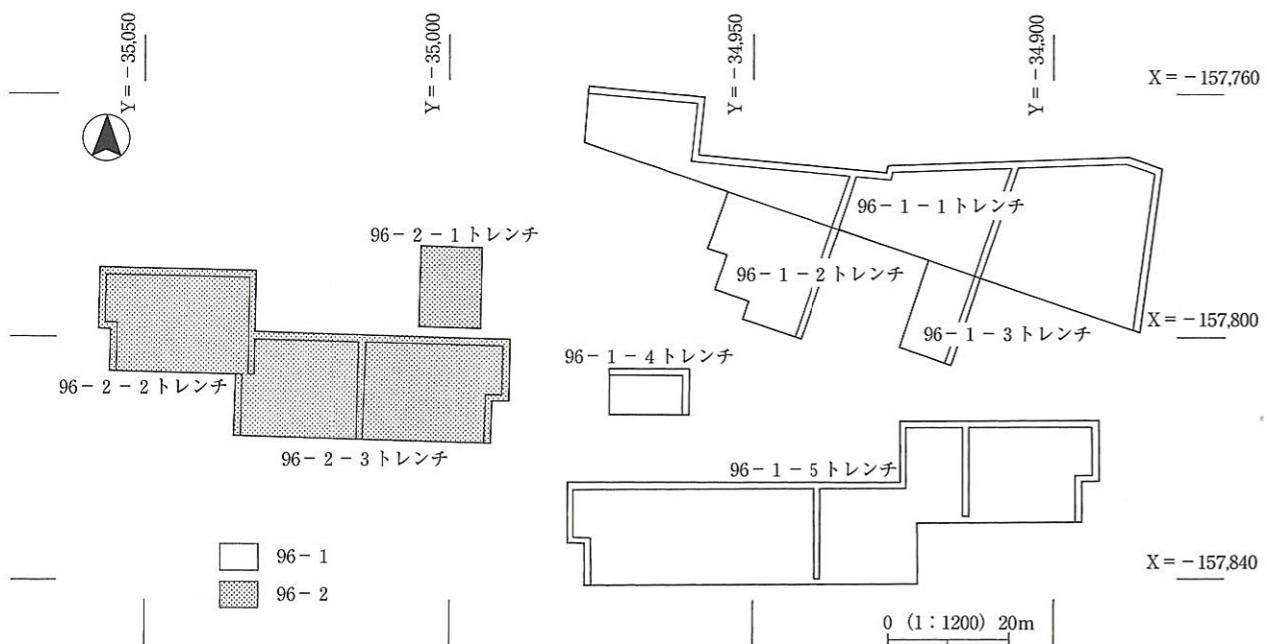
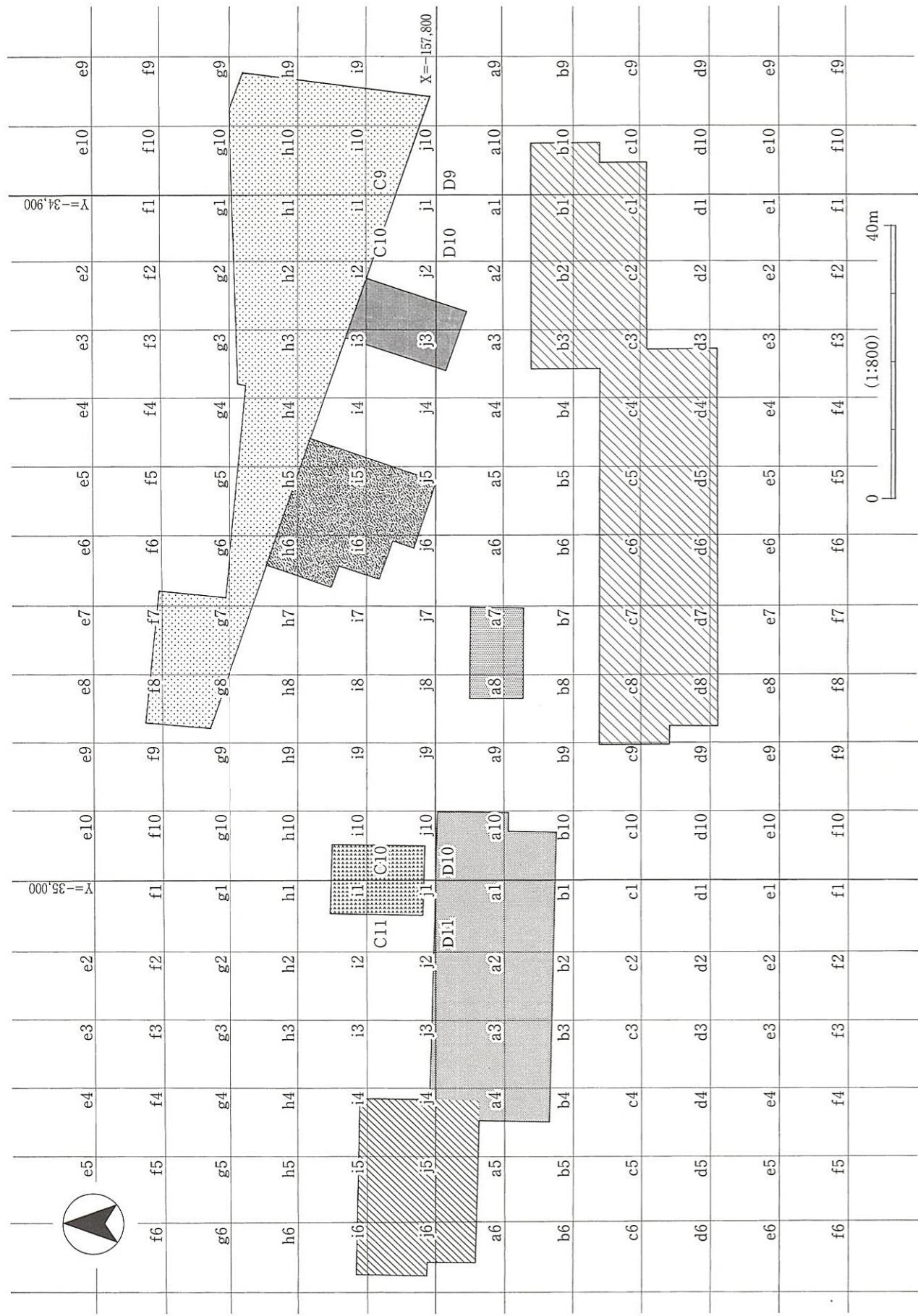


図2 調査区位置図



第Ⅱ章 位置と環境

1. 自然環境

船橋遺跡は現在の大和川と石川の合流地点のやや西側に位置し、1704（宝永元）年に付け替えられた大和川が遺跡のほぼ中央を西流している。船橋遺跡一帯には大和川や石川によってつくられた氾濫原や沖積低地が広がっている。石川は南河内地域を南から北へと流れており、右岸には玉手山丘陵が、左岸には羽曳野丘陵が石川に沿ってほぼ南北に連なっている。これらの丘陵と石川との間には低位段丘や中位段丘の発達した地形がみられ、弥生時代以降多くの集落が営まれるようになる。旧大和川は玉手山丘陵とその北側に大きく連なる生駒山地の間を奈良県から流れこみ、船橋遺跡の西側で石川と合流して北側に流れを大きく変えていた。そして旧大和川下流には広大な沖積平野が形成され、歴史上多くの遺跡が立地してきた。羽曳野丘陵北端には国府台地と呼ばれる洪積段丘が広がり、古くから人々の居住域として利用されてきた。船橋遺跡はこの国府台地の北側縁辺に接した氾濫原～自然堤防上に立地している。

船橋遺跡周辺は古くから重要な交通路が発達してきた地域である。大和川を遡れば比較的簡単に奈良県に抜けられることから、古代以降奈良・長尾街道（大津道）と呼ばれる交通路が整備された。この街道は船橋遺跡の南端部分を東西に通っている。また飛鳥川を遡って二上山南端を奈良県側に抜ける交通路として竹内街道（丹比道）も古くから存在している。

玉手山丘陵の東側にある二上山周辺に産出する石材は歴史上頻繁に利用されている。二上山の周囲には火山活動を示す火山岩の堆積が認められ、そのうち安山岩の一種であるサヌカイトと呼称される板状に剥離しやすい石材は、旧石器～弥生時代の石器石材として利用された。船橋遺跡周辺でも各遺跡よりサヌカイト製の石器が多量に出土し、その利用頻度の高さがうかがえる。同じく二上山周辺で産出する凝灰岩は、石棺や横穴式石室、寺院基壇、五輪塔など各時代を通じて様々な用途に利用してきた。ざくろ石も二上山周辺で採掘され、金剛砂と呼ばれる研磨材として使われてきた。

2. 歴史的環境

船橋遺跡が位置する南河内地域は、旧石器時代～現代に至るまでの遺跡が数多く分布する地域である。特に現在の大和川と石川が合流する船橋遺跡周辺一帯は遺跡が集中してみられる。ここでは船橋遺跡一帯を中心にして、周辺の遺跡のうち著名なものを時代順に概観していく。

旧石器時代の遺跡としては、「国府型」ナイフ形石器の標識遺跡である国府遺跡、住居跡が発見されたはざみ山遺跡、良好なユニットが確認された翠鳥園、西大井遺跡などがあげられる。このほかに林、土師の里遺跡など遺構の検出はないが旧石器時代の石器が出土する遺跡は増えている。

船橋遺跡一帯では縄文時代の遺跡も多く確認されている。国府遺跡では前期の土器とともに多量の埋葬人骨などの遺構が発掘されている。後期には土師の里遺跡では土器棺墓や住居跡、林遺跡では住居跡や埋甕などが調査されている。船橋遺跡では晩期突帯文土器が出土し、「船橋式」の標識遺跡となっている。国府遺跡で検出された埋葬人骨には晩期のものも認められる。

船橋遺跡の北西側に位置する田井中遺跡では弥生時代前期中段階に遡る集落が想定されている。船橋遺跡周辺では、国府遺跡で中段階の可能性のある土器がわずかに出土しているが遺構とともになものではなく、明確に遺構が確認されるのは新段階以降である。国府遺跡では前期～後期に至る土器が出土し、前期の土器棺などの遺構が検出されている。船橋遺跡や土師の里遺跡でも前期～後期の遺物が出土して

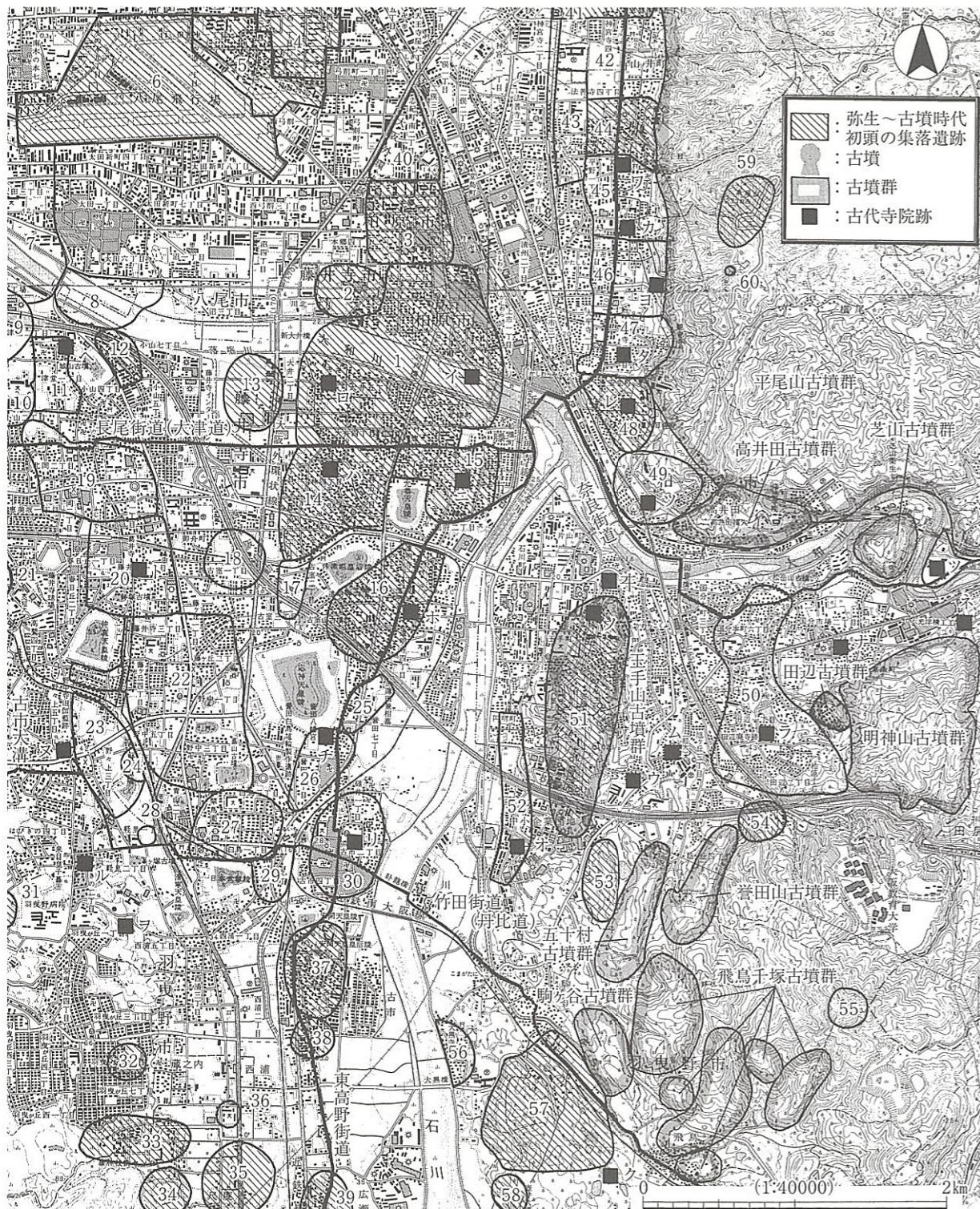


図4 遺跡分布図

1. 船橋 2. 川北 3. 本郷 4. 志紀 5. 田井中 6. 木の本 7. 太田 8. 大正橋 9. 津堂 10. 小山 11. 小山城 12. 小山平塚 13. 西大井 14. 林 15. 国府 16. 土師の里 17. 古室 18. 西古室 19. 北岡 20. 葛井寺 21. 高鷲 22. はざみ山 23. 野々上 24. 下田池瓦窯 25. 茶山 26. 上堂 27. 誉田白鳥 28. 軽里 29. 栄町 30. 古市 31. 石曳 32. 蔵の内 33. 馬谷 34. 尺度(高地性) 35. 尺度 36. 西浦銅鐸出土地 37. 高屋城跡 38. 城山 39. 東阪田 40. 弓削 41. 恩智 42. 神宮寺 43. 大県郡条里 44. 平野 45. 大県 46. 大県南 47. 太平寺 48. 安堂 49. 高井田 50. 田辺 51. 玉手山 52. 円明 53. 五十村 54. 奥山 55. 寺山 56. 大黒 57. 駒ヶ谷 58. お旅山 59. 高尾山 60. 多紐細文鏡出土地(遺跡は略)
イ. 船橋廃寺 ロ. 大井廃寺 ハ. 拝志廃寺 ニ. 衣縫廃寺 ホ. 土師寺 ヘ. 津堂廃寺(善光寺) ブ. 葛井寺 チ. 誉田八幡宮(神宮寺) リ. 西琳寺 ヌ. 野中寺 ル. 善正寺 ヲ. 坂戸廃寺 ワ. 平野廃寺(三宅寺) カ. 大県廃寺(大里寺) ヨ. 大県南廃寺(山下寺) タ. 太平寺廃寺(智織寺) レ. 安堂廃寺(家原寺) ソ. 高井田廃寺(鳥坂寺) ツ. 青谷廃寺(竹原井離宮) ネ. 東条廃寺(河内国分寺) ナ. 河内国分尼寺 ラ. 田辺廃寺 ム. 原山廃寺 ヲ. 五十村廃寺 ヲ. 片山廃寺 ノ. 玉手山廃寺 オ. 円明廃寺 ク. 飛鳥廃寺(河内飛鳥寺)

いるが、遺構などの実態はあまり明らかになっていない。このように国府・船橋遺跡周辺で前期から集落が形成されていた可能性はあるが詳細は不明である。

弥生時代中期には石川左岸を中心に集落が営まれ、喜志、中野、城山遺跡のような多量のサヌカイト製石器製作をおこなった集落が成立する。石川右岸の二上山周辺ではサヌカイトが産出し、奥山遺跡では弥生時代のサヌカイト石材採掘坑や石器製作途中品が確認されている。船橋遺跡周辺では、国府、安堂、船橋、林、土師の里、川北遺跡などで中期の遺構や遺物が認められる。

弥生時代後期になるとこれまで石川左岸の低位～中位段丘に多くみられた集落が衰退し、石川右岸を中心としていわゆる高地性集落が丘陵上に出現する。中期に盛期を迎えた喜志、中野遺跡は後期に継続せず消滅する。船橋遺跡周辺では川北遺跡で後期の方形周溝墓や土器棺墓が検出され、船橋遺跡でも比較的多くの遺物が出土するが、これまで継続してきた国府、土師の里遺跡は衰退していく。石川右岸の丘陵上の集落である玉手山、駒ヶ谷遺跡では住居が検出され、高尾山、五十村遺跡でも当該期の遺物が出土している。石川左岸にも石曳、尺度遺跡などの丘陵上の集落が認められる。

古墳時代初頭には駒ヶ谷遺跡では集落が継続するが、多くの丘陵上の集落は衰退し、再び石川左岸の低位～中位段丘上の集落が増加する。船橋遺跡では住居跡や井戸などが検出され、これらの遺構は古墳時代前期（布留式期）まで継続する。船橋遺跡では吉備系の土器が認められる。西大井遺跡では竪穴住居や方形周溝墓が検出されている。古墳時代前期には国府、川北遺跡でも住居跡が認められようになる。

古墳時代前期には石川右岸の玉手山丘陵で前方後円墳を中心とした玉手山古墳群が営まれる。松岳山古墳群も前期に造営されている。その後玉手山古墳群が衰退する中期には津堂城山古墳から始まる古市古墳群の築造が開始される。古市古墳群では大王墓とみられる大型前方後円墳とその周囲の陪塚が継続して数多く築造される。この他土師の里遺跡一帯では古市古墳群に供給した埴輪を焼成した窯跡やその埴輪製作集団の集落、埴輪棺墓群が検出された。誉田白鳥、野々上遺跡でも埴輪焼成窯跡が確認されている。土師の里遺跡をはじめ、林、小山遺跡、はざみ山遺跡などでは集落が認められる。古市大溝は古市古墳群の間に掘削され、古墳群との関係から5世紀成立説もあったが、耕地開発にともなう7世紀代の水路とする説が有力になりつつある。

古墳時代後期には平尾山古墳群、飛鳥千塚古墳群などの横穴式石室を主体とする群集墳、高井田横穴群、玉手山横穴群などの横穴群が活発に造営され、古墳時代終末期には飛鳥千塚古墳群C支群（オウコ古墳群）などの横口式石槨を主体とする古墳群も出現する。

7世紀になると大和川と石川の流域を中心に古代寺院が密集して造営される。南河内地域だけでも30以上の古代寺院が想定され、そのほとんどが古代の交通路沿いに立地している。船橋遺跡内でも大和川河床に礎石をともなう遺構が確認され、船橋廃寺と呼称されている。この船橋廃寺に対する研究史・諸説については松尾氏（柏原市教育委員会1994）が詳述しているのでここでは簡単に触れるが、これまでに多量の古代の土器類や瓦、皇朝銭、墨書き土器などが出土し、河内国府説や河内鋳銭司説、寺院（玉井寺・井上寺など）説、餌香市説などの諸説が提示されている。7世紀前半代以降に石川左岸では、野中寺や西琳寺、衣縫廃寺、土師寺、押志廃寺、大井廃寺、葛井寺、善正寺、津堂廃寺などが造営され、生駒山地南西麓では平野廃寺（三宅寺）や大県廃寺（大里寺）、大県南廃寺（山下寺）、太平寺廃寺（智識寺）、安堂廃寺（家原寺）、高井田廃寺（鳥坂寺）が後の東高野街道沿いに並んでいた。石川右岸にも片山廃寺や田辺廃寺、原山廃寺、五十村廃寺、円明廃寺など多数の古代寺院が造営され、河内国分寺や竹原井離宮と推定される青谷廃寺も所在している。これらの古代寺院造営に渡来系氏族が関与した可能性

が考えられている。寺院以外では北岡、はざみ山遺跡で大型掘立柱建物群が検出され、官衙的施設が想定される。国府、林、土師の里、葛井寺、小山、津堂、西古室、駒ヶ谷遺跡でも掘立柱建物群が検出された。土師の里、国府遺跡では土馬が多く出土することも注目できる。河内国府については諸説があつてはざみ山、船橋、国府遺跡などが候補にあげられているが結論をみていない。

西大井遺跡では平安時代の条里水田が検出されている。はざみ山遺跡や葛井寺遺跡では平安時代にも集落が継続している。中世でははざみ山遺跡で瓦器椀が多量に出土し、船橋遺跡でも瓦器椀をはじめとする中世の遺物が確認されているが前時代に比べて顕著な遺構は減少する傾向にある。この他土師の里、津堂、葛井寺、国府、西古室遺跡などで遺構・遺物が確認されている。

《引用・参考文献》

- 池田次郎 1988 「河内・国府遺跡の人」『樺原考古学研究所論集』 10 (吉川弘文館)
- 上田睦 1997 「古代寺院と集落」『第1回摂河泉古代寺院フォーラム 摂河泉の古代寺院とその周辺』(摂河泉文庫)
- 大阪府教育委員会 1980 『船橋遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 1981 『国府遺跡発掘調査概要・XI』
- 大阪府教育委員会 1985 『船橋遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 1994 『寝屋川南部流域下水道事業に伴う 本郷・船橋・太平寺遺跡発掘調査概要』
- (財)大阪府文化財センター 1976 『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書』
- (財)大阪府文化財センター 1976 『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書II』
- (財)大阪府文化財調査研究センター 1995 『西大井遺跡』
- 柏原市教育委員会 1994 『柏原市所在遺跡発掘調査概報』(柏原市文化財概報 1993-V)
- 柏原市教育委員会 1994 『船橋遺跡』(柏原市文化財概報 1993-VI)
- 柏原市教育委員会 1995 『柏原市遺跡群発掘調査概報 1994年度』(柏原市文化財概報 1994-IV)
- 柏原市教育委員会 1998 『奥山遺跡発掘調査概報』(柏原市文化財概報 1997-IV)
- 柏原市史編纂委員会編 1973 『柏原市史』第2巻本編 (I)
- 柏原市史編纂委員会編 1975 『柏原市史』第4巻史料編 (I)
- 古代を考える会 1976 『古代を考える7 玉手山遺跡の検討—推定河内国安宿戸郡郡衙遺跡—』
- 古代を考える会 1977 『古代を考える10 河内国府と国分寺址の検討』
- 古代を考える会 1979 『古代を考える18 河内土師の里遺跡の検討』
- 鍋島隆宏 2000 「南河内・石川流域における弥生後期集落の動向」『古代文化』 52-7 ((財)古代学協会)
- 羽曳野市史編纂委員会編 1994 『羽曳野市史』第3巻史料編 1
- 藤井寺市史編さん委員会編 1986 『藤井寺市史』第3巻史料編
- 平安学園考古クラブ 1972 『船橋』(I・II合冊)
- 埋蔵文化財研究会 1997 『第42回埋蔵文化財研究集会 古代寺院の出現とその背景第2分冊資料 (西日本編)』

第Ⅲ章 調査成果

第1節 96-1-1～5 トレンチ

第1面（図7.8 写真図版1.2）

機械掘削により府営住宅建設時の盛土、旧耕土、洪水砂層を除去した面である。全面に耕作の痕跡が見られる。

極細砂混じりシルトを作土とする。耕作痕は96-1-1 トレンチ西端に位置する畦から西と、96-1-1 トレンチと96-1-2 トレンチ境から南は東西方向、96-1-1 トレンチの大部分は南北方向、中央部では一部南東から北西方向地割りとなる。96-1-4 トレンチは東西方向、96-1-5 トレンチでは南北方向となり、土地利用の一端を窺うことができる。

96-1-1 トレンチ西端の南北方向の畦両肩部は鋤先によるものか垂直になっている。畦を挟んで西は一段低く、比高差は約20cmを測る。西側では土坑を検出した。深さは15cm程度である。土坑の壁には鋤の痕跡が認められる。中央部以西は鋤痕跡が平行して走る。鋤痕跡は幅約20cm、深さ5cm程度で先端部の痕跡が残る。以東は長方形の浅い土坑が整然と並ぶ。規模は幅1m前後、長さは5m前後と、8m以上のものがある。深さは5cm前後である。

96-1-1 トレンチ南東、96-1-3 トレンチは畝溝状で、溝幅は約30cm程度である。北側の土坑群との境は鋤で垂直に切られている。96-1-4 トレンチでは畦畔と溝1条を検出した。畦畔は幅約1m、高さは20cmを測る。

96-1-5 トレンチ東半は幅10cmの溝、西半は1～2m間隔で溝が平行する。

当面の標高は南東で高く、北西に低い傾向にある。南東ではT.P.15.8m、低いところではT.P.15.4mを測る。

第2面（図9.10 写真図版2.3）

96-1-1～3 トレンチ、96-1-4・96-1-5 トレンチ北半は東西方向のほかは、南北方向の耕作痕を検出した。

細砂混じりシルトを作土とする。当面の標高は1面と同じく南東が高く北西が低い傾向にある。5 トレンチ東端でT.P.15.5m、1 トレンチ西端ではT.P.15.2m前後を測る。

第3面（図11～13 写真図版3.4）

96-1-1 トレンチ東半、96-1-2 トレンチ、96-1-5 トレンチ東半では東西方向の溝群、96-1-1 トレンチ西半・96-1-2 トレンチでは東西・南北方向の溝群を検出した。南北溝は幅1～3m、深さ20～30cm、東西溝は幅2～5m、深さ30～40cmを測る。溝内からは瓦器椀・羽釜等が出土した。

96-1-5 トレンチ東半で遺構172（井戸）を1基検出した。当面で検出した東西溝を切っている。平面形はほぼ正円で径約1.1m、深さ1.45mを測る。上部は平瓦積みでうち2点は軒平瓦を利用していいる。下部は曲げ物を2段積んでそれぞれ井筒としている。曲げ物内からは拳大の石数点と瓦器椀1点が出土した。

96-1-1 トレンチ中央部・西半、96-1-5 トレンチ西半では遺構を明らかにできなかった。96-

1-5 トレンチの北壁断面をみると、調査区中央部で3層が途切れて砂層となっている。3層が遺存している東半では3層の上・下層が砂層であることから、本来は西半3面検出時に2面ベース砂層と3面ベース砂層を区別して調査するべきであった。さらに96-1-1 トレンチ北壁断面をみると同じように3層が途切れ砂層となっている。これも96-1-5 トレンチと同様である。調査時に認識できなかったことから推定の域をでないが、第3面を覆った砂層が3層を流失させたか、第3面に流路が存在していたと想定しておきたい。

96-1-1,2 トレンチ第3面出土遺物（図14）

96-1-1,2 トレンチ第3面からは、主に中世前半期の遺物が出土しているが、その主要なものを図14に掲載している。14-1～3,7,14はすべて土師器である。14-1～3は小型の、14-7は中型の土師器皿である。14-1は口縁部が平坦面をもって屈曲する「て」字形態で11～12世紀前半の所産、14-2,3,7は外面に1段ナデによる面取りを行う形態で12～13世紀に帰属する。14-14は羽釜の胴部上半～口縁部片である。強く内彎する胴上半部形態や明確に屈曲して外反し端部につまみあげを行わない口縁部形態から、12世紀の所産と考えられる。

14-4は瓦器皿、14-5,6,8～12は瓦器椀であり、いずれも内外面に密なヘラミガキ調整が行われている。外面の下地の器面調整にはヘラケズリ調整が行われているようである。瓦器椀はいずれも比較的深い器形のものであり、口縁端部は外反気味で丸く納める形態である。うち底部が残存しているものについては、高さ6～7mm程度の高台が粘土帶貼付によって作り出されている。これらの特徴から、14-5,6,8～12はいずれも12世紀前半の和泉型瓦器椀と考えられる。

14-13は、硬く焼きしまった明灰色の生地の椀で、外面には轆轤使用による稜線が幾重にも形成され、底部には明確な高台がつくりだされている。いわゆる山茶椀とよばれるものであり、東海地方で製作されたものと考えられる。この山茶碗の所属時期も11～12世紀で捉えられる。

以上、各土器の帰属年代は概ね11～13世紀であり、96-1-1,2 トレンチ第3面の帰属年代は、これらの出土遺物から中世前半期と推定される。

96-1-5 トレンチ第3面遺構172出土遺物（図15）

遺構172に関連する出土遺物として、図15に5点の遺物を掲載した。15-3は井戸枠内埋土中から出土した瓦器皿で、ヘラミガキ調整が内面にわずかに残存する特徴から13～14世紀の所産と推定され、これが当遺構の埋没時期に相当すると考えられる。また、15-4,5は井戸枠の下部に設営された曲げ物で、残存状態は良好であった。4は径約45cm・高さ約30cm、5は径約42cm・高さ約24cmの大きさである。

遺構上半の井戸枠の瓦積み部を形成する平瓦の中には、15-1,2に示す軒瓦がある。いずれも、外縁に珠文を配する唐草文様が施され、奈良時代の所産である。井戸枠上部には古代瓦が転用されたものと考えられる。

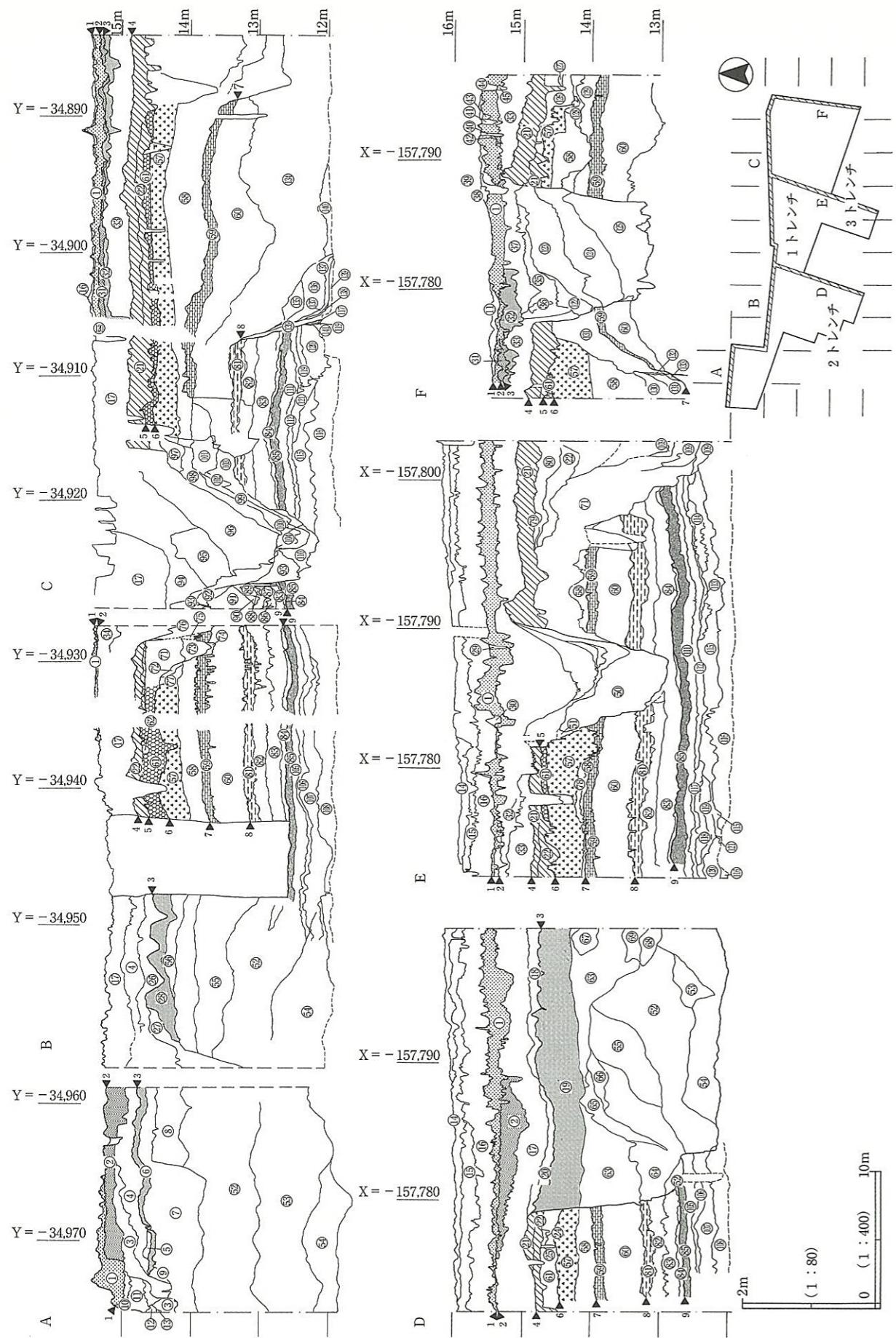


図5 96-1-1・2・3トレンチ 断面図

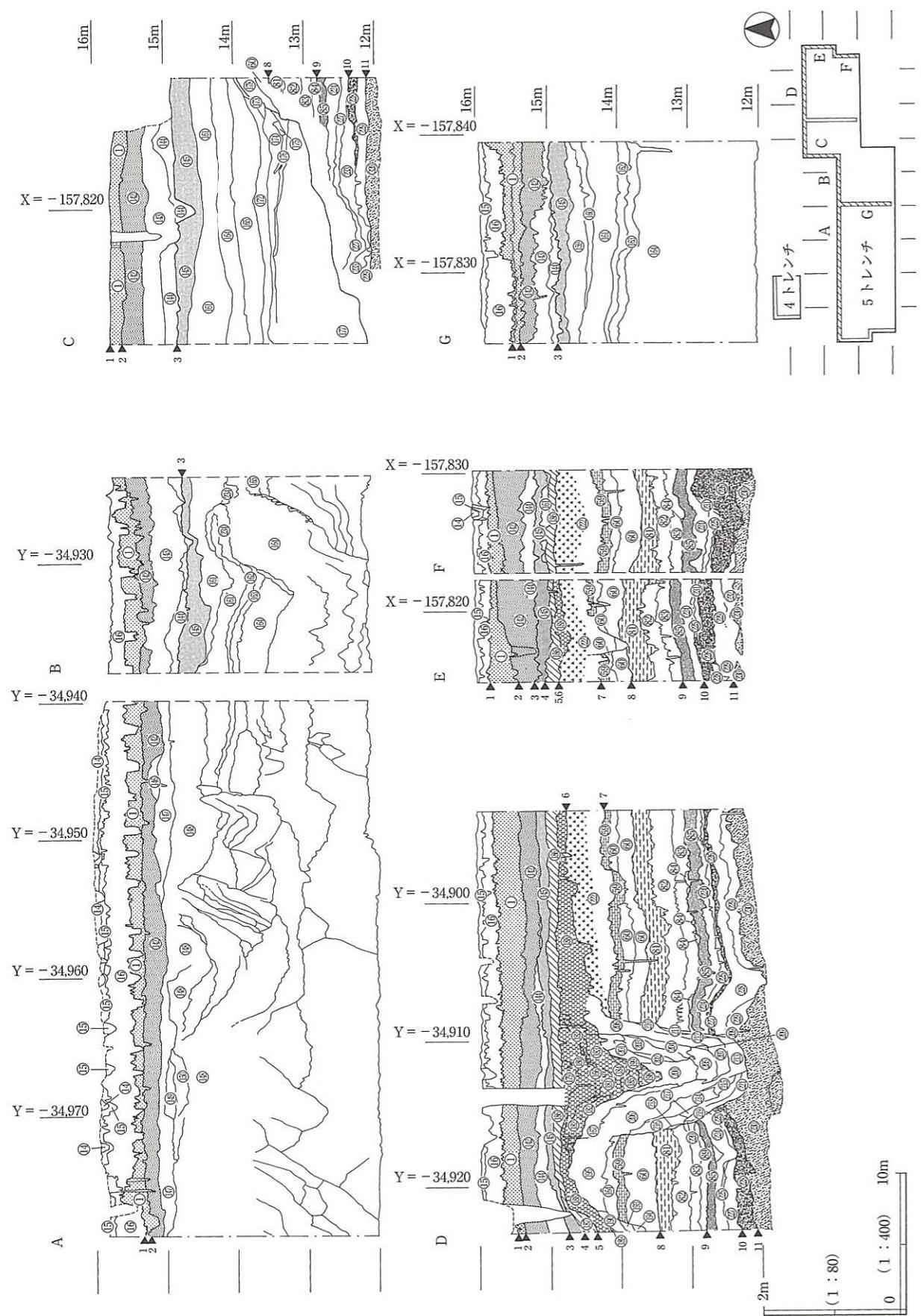


図 6 96-1-5 トレンチ 断面図

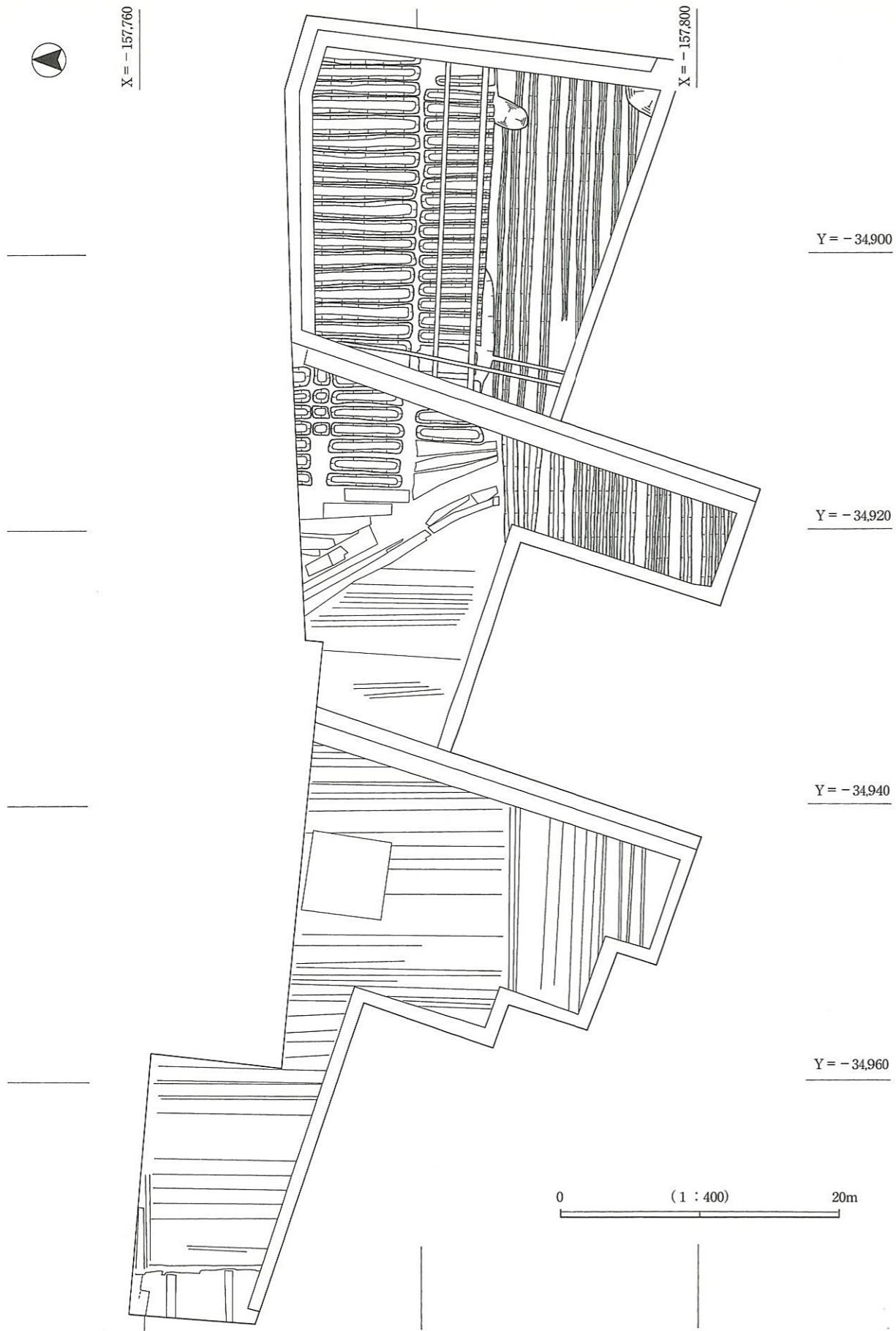


図7 96-1-1・2・3 トレンチ 第1面 平面図

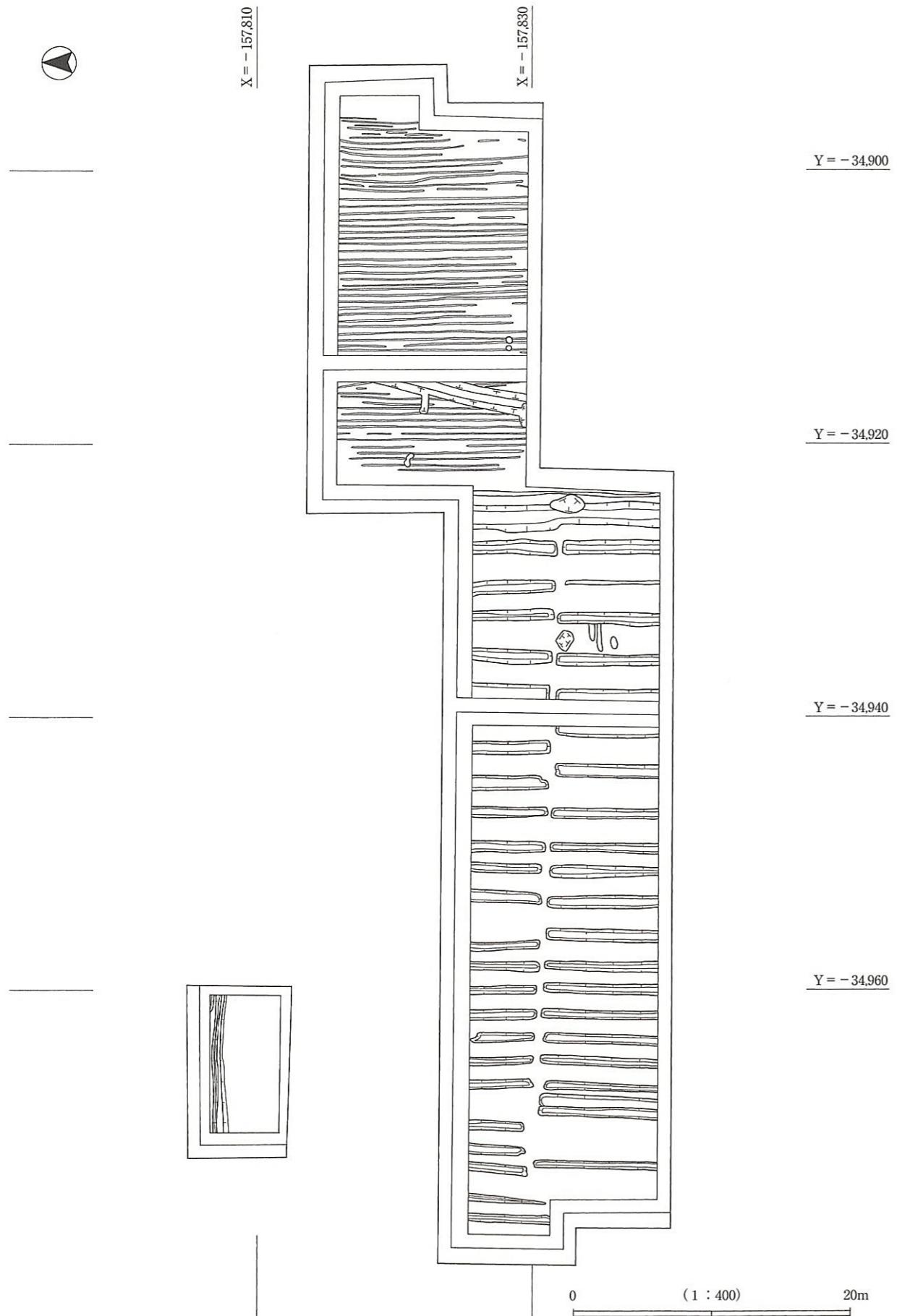


図8 96-1-4・5 トレンチ 第1面 平面図

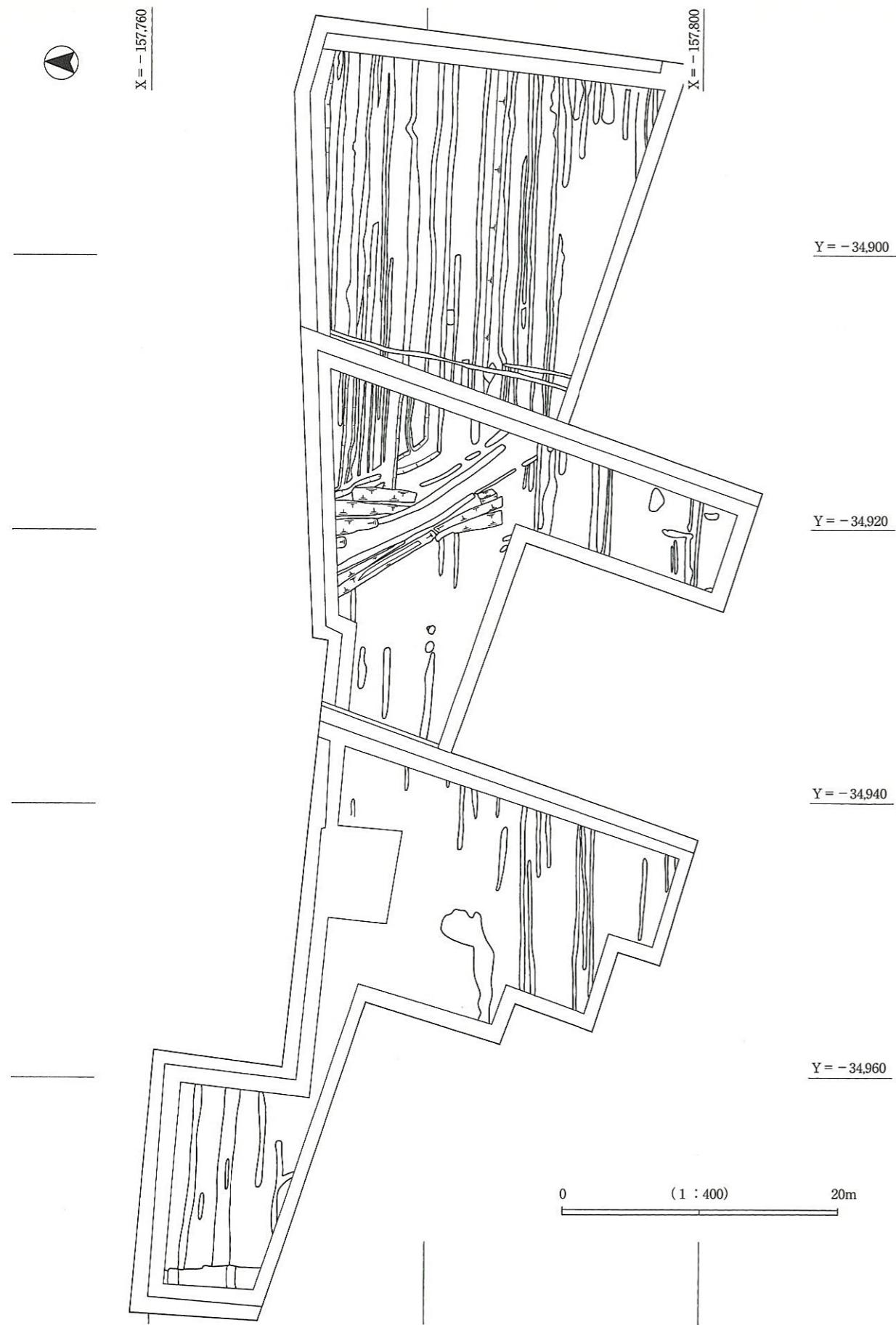


図9 96-1-1・2・3トレンチ 第2面 平面図

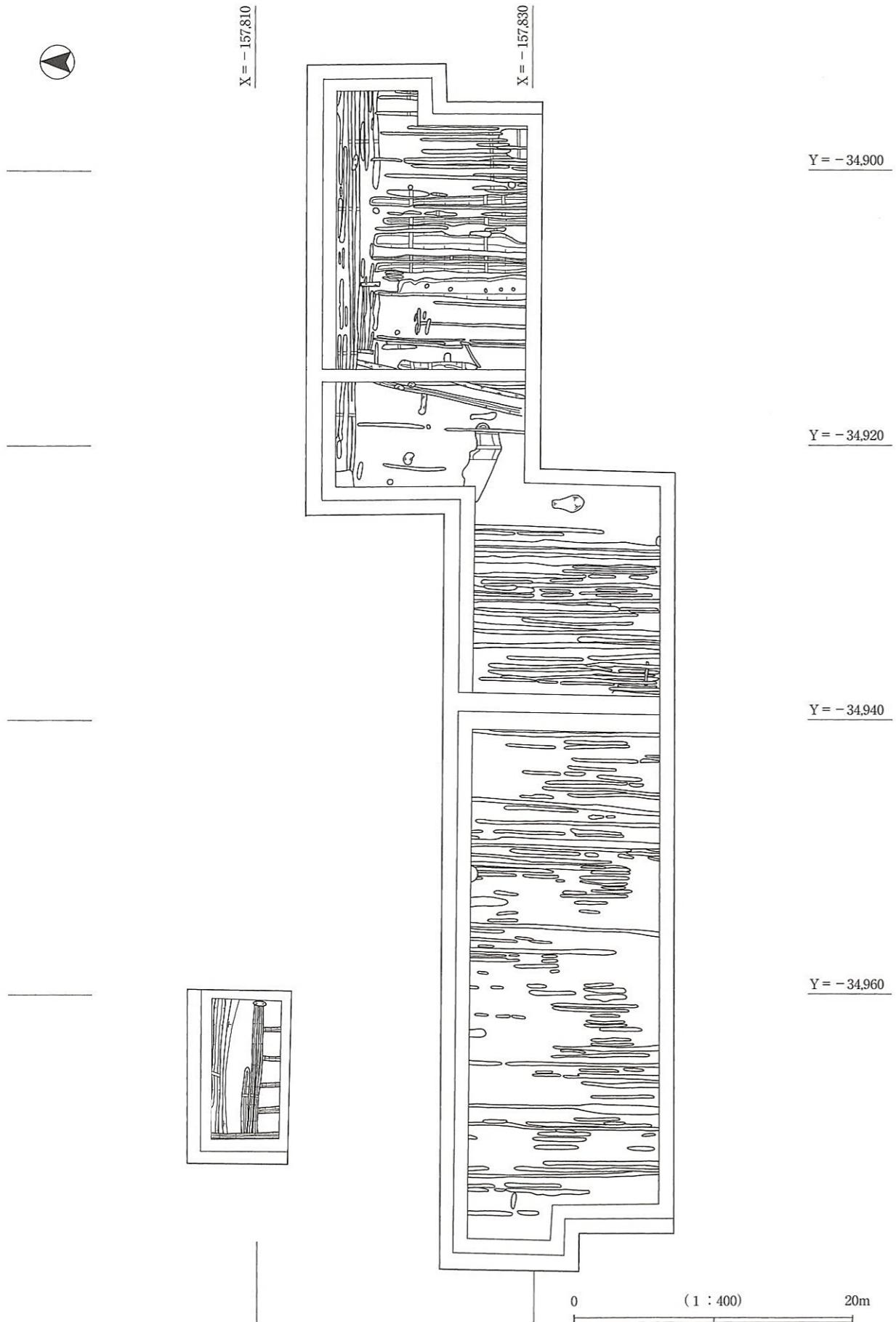


図10 96-1-4・5 トレンチ 第2面 平面図

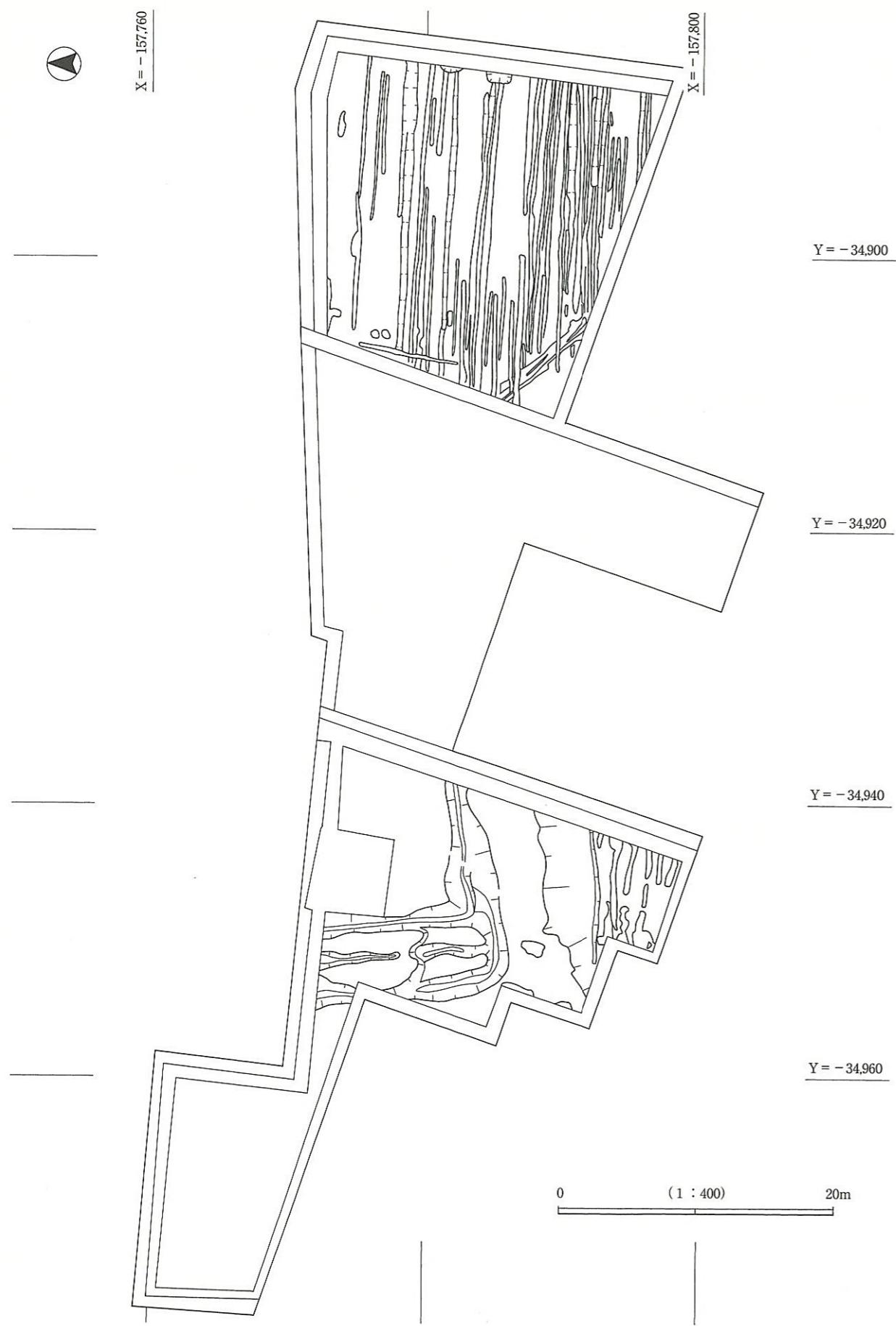


図11 96-1-1・2・3 トレンチ 第3面 平面図

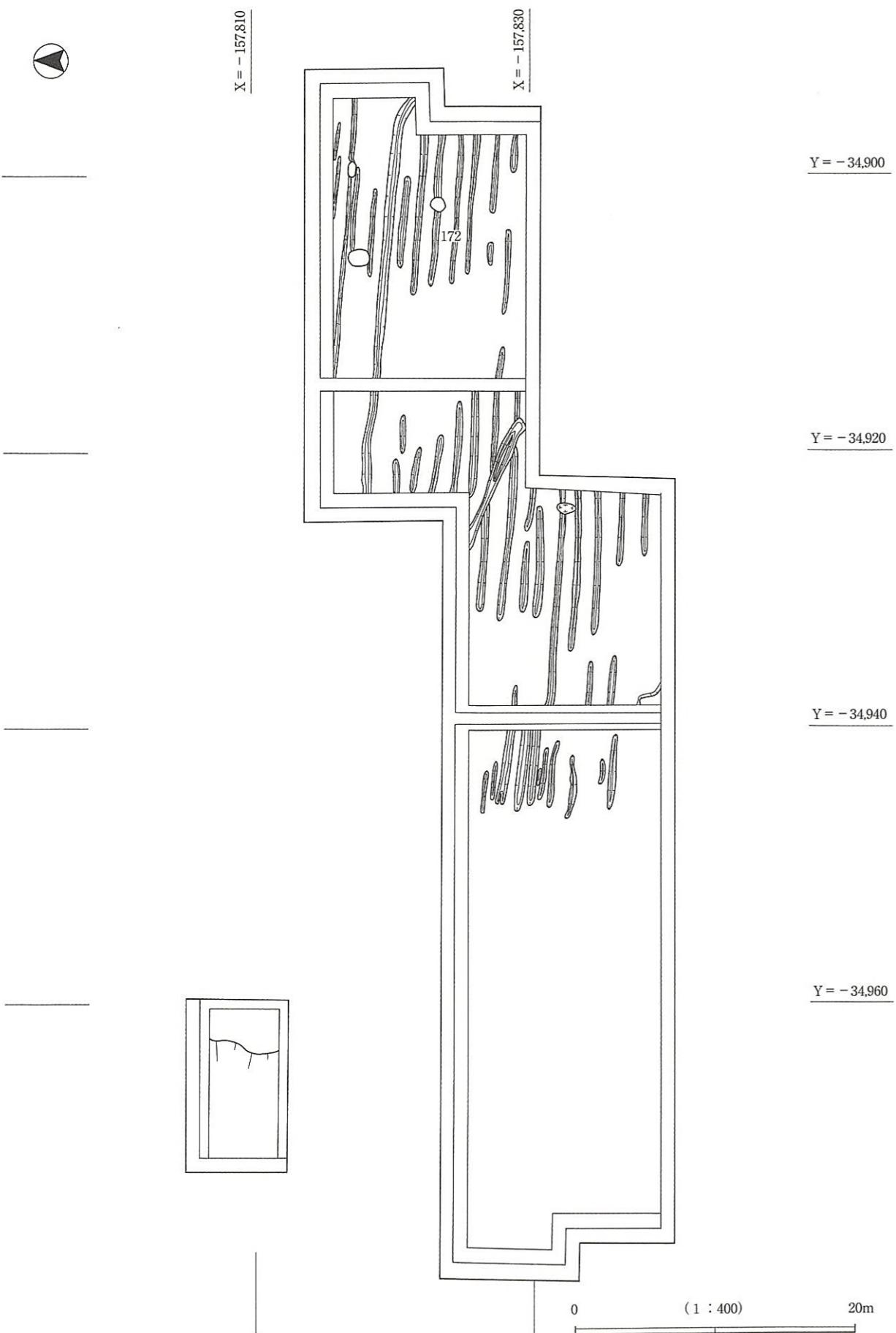


図12 96-1-4・5トレンチ 第3面 平面図

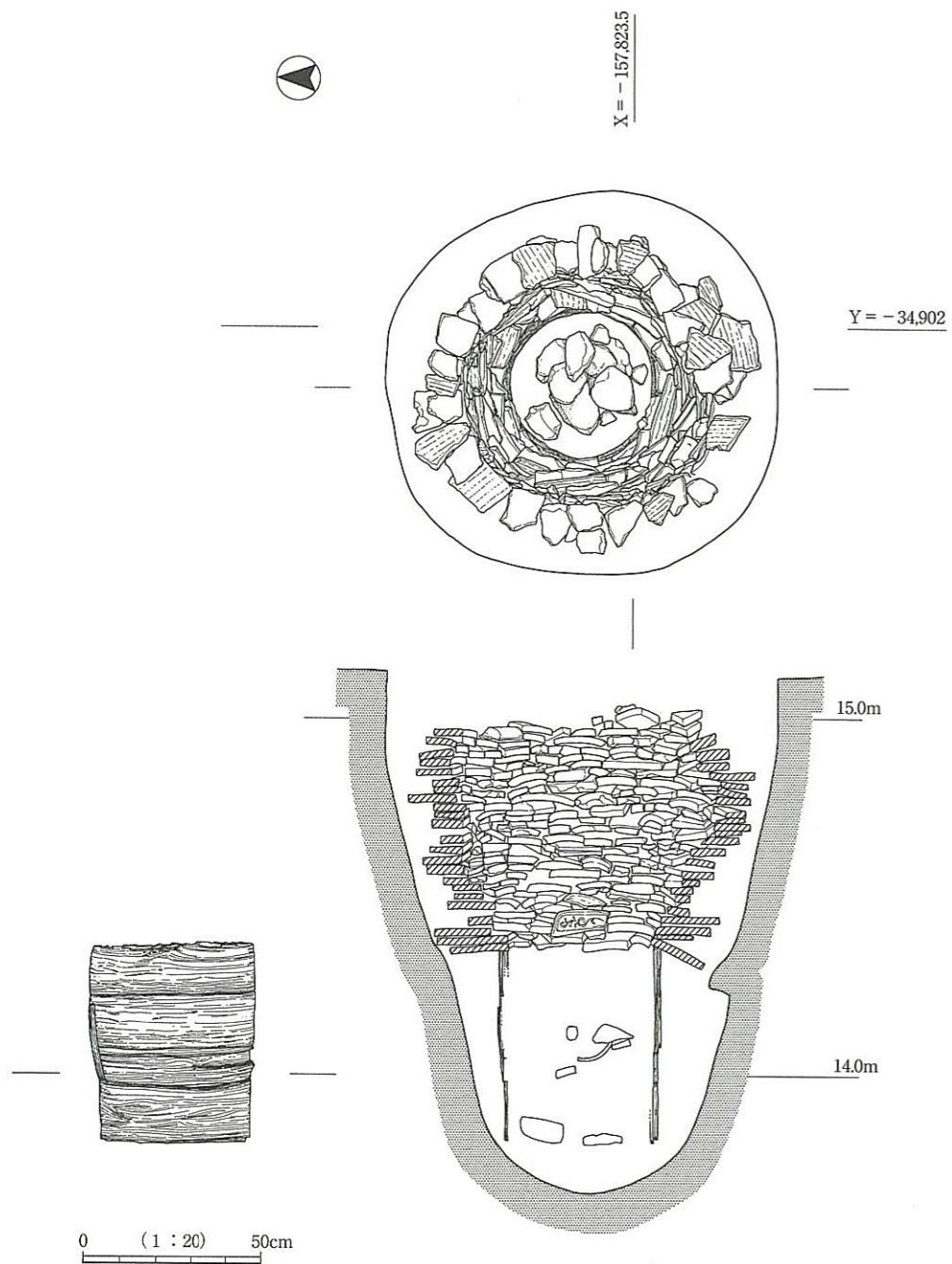


図13 96-1-5 トレンチ 第3面 遺構172平・断面図

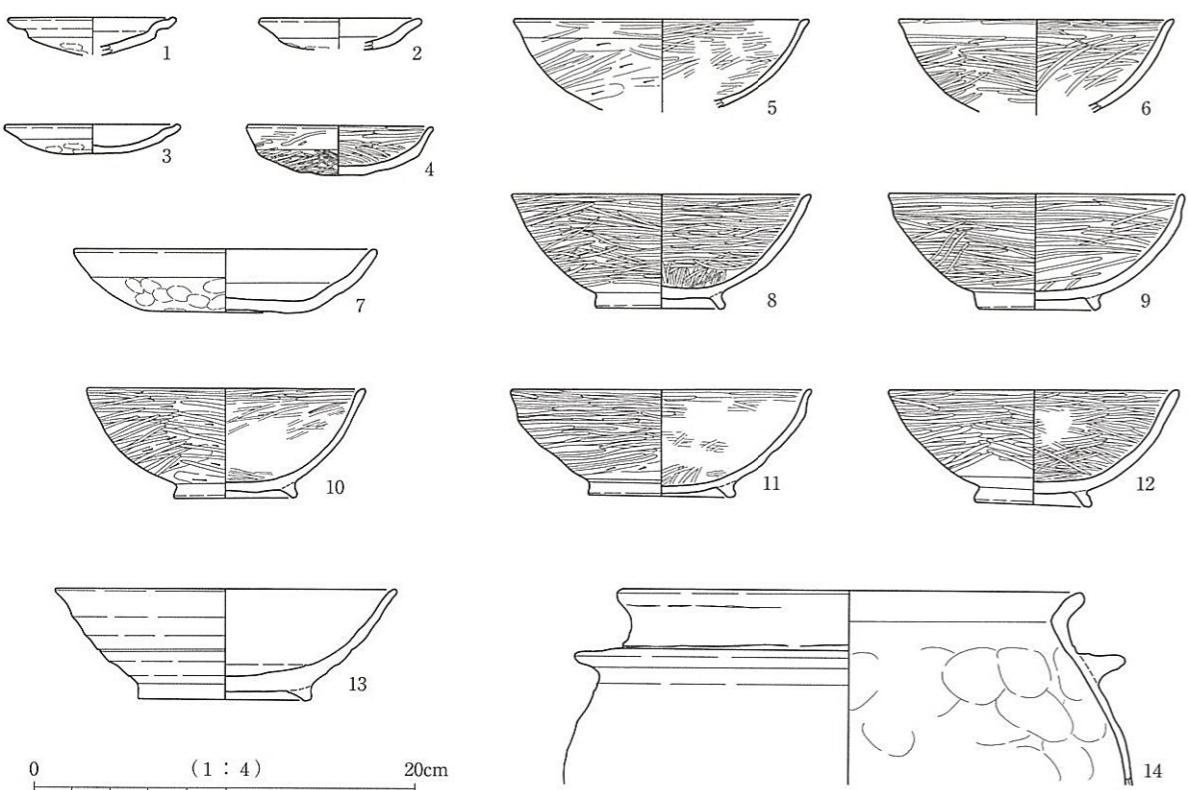


図14 96-1-1・2トレンチ 第3面 出土遺物

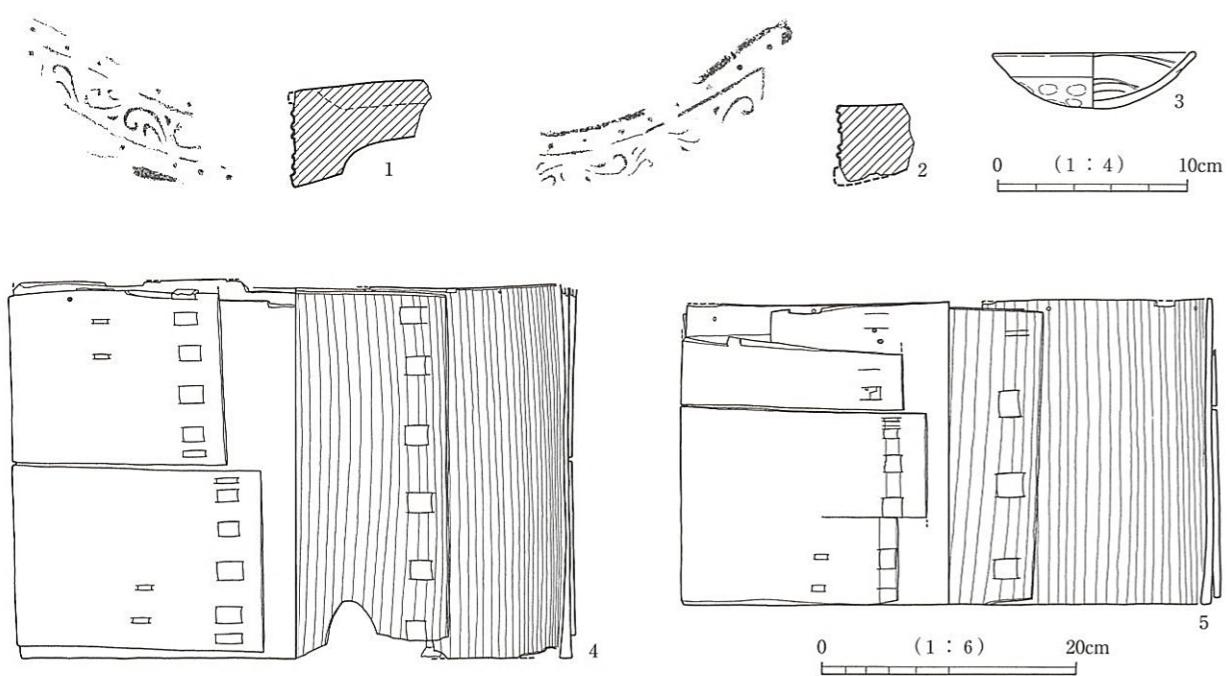


図15 96-1-5トレンチ 第3面 遺構172 出土遺物

第4面（図16.17 写真図版5.6）

96-1-1 トレンチ東端から蛇行しながら西流し、調査区中央で北へ抜ける遺構1（流路）と、96-1-3 トレンチから96-1-1 トレンチ中央、96-1-5 トレンチ東半では遺構5（流路）の右岸部を検出した。それより南西は流路部である。

流路に切られていらない面で遺構2（溝）・遺構3・4（窪み）を検出した。

遺構1（流路）は幅約10～13m、深さは約2～3m、流路底はT.P.12mを測る。埋土は大きく上層シルトと下層粗砂～極粗砂層に分層できる。96-1-1 トレンチ中央、左岸肩部寄りの上層シルト層上面近くで流路の窪みから多量の遺物が出土した。瓦器椀等完形土器も多く含まれていることから流路が埋没した後に廃棄されたものと見られる。

下層砂礫層からは磨滅した遺物が大量に出土した。

遺構5（流路）は左岸が未検出であるため幅は明らかではない。深さは約3mで流路底でT.P.12mを測る。河床には水流による窪みが南東から北西方向に認められる。遺物は両遺構で弥生土器・土師器・須恵器・軒丸瓦・軒平瓦・子持ち勾玉等各種出土した。遺構1・5合わせてコンテナ130箱出土した。

96-1-1～5 トレンチ第4面遺構1・5（流路）出土遺物（図19）

遺構1からの出土品には、弥生時代～中世までの幅広い時期のものがみられる。弥生時代の遺物としては19-11,12がある。19-11は口縁内面に円形浮文、口縁端面と頸部に櫛描簾状文を施す広口壺で、文様構成・形態から弥生中期後半の所産と考えられる。19-12は受け口状の口縁形態を取る大型壺である。口縁部が強く内湾する特徴は、一般的な近畿地方の中期中～後葉の受口状口縁壺とは異なっており、搬入品・外来系の模倣品の可能性がある。北部九州の同時期の壺に類似した形態のものがあり、関連を考慮する必要があろう。

古墳時代初頭の古式土師器としては、19-6～10,13がある。19-6は、小型の丸底鉢で底部外面をヘラケズリ調整で仕上げている。口縁部が強いナデ調整によって仕上げられ、外面に段が形成されている。定型化以前の小型精製器種の一つと考えられ、庄内式期から布留式初頭の所産と推定できる。19-13は斜め上方に拡張した口縁部外面に円形浮文を貼付した広口壺であり、二重口縁壺との中間形態ともいえよう。庄内式～布留式初頭の所産と考えられる。19-8,9,10は小型丸底土器で、粘土に細かな砂粒だけを混和した精良な胎土で作られている。19-8,9は内外面ともナデ調整、19-10は横方向の細密なヘラミガキ調整で仕上げられ、いずれも庄内式～布留式初頭の所産と考えられる。19-7は明確に屈曲して裾部が広がる形態の高壺で、柱状部外面は縦方向にナデ調整が行われている。布留式中～後葉の所産と考えられる。

中世の遺物としては、19-1～5の瓦器椀がある。いずれも比較的深い器形のものであり、口縁端部は外反気味で丸く納める形態である。このうち底部が残存しているものについては、高さ6～7mm程度の高台が粘土帶貼付によって作り出されている。内外面には比較的密に斜めもしくは横方向のヘラミガキ調整が行われている。これらの特徴から、19-1～5はいずれも12世紀前半の所産と考えられる。なかでも、19-4,5は底部の外面の高台内側に「大」と墨書きされているのは注目される。遺跡・遺構の性格を類推する上で参考となろう。

遺構5からは、古代を中心とした時期の遺物が出土している。須恵器としては、19-16の壺身、19-17の須恵器壺蓋がある。前者はいわゆる壺Hとされる器形や小型という特徴から7世紀前半、後者は扁平な摘まみ部の形態や口径が大型という特徴から7世紀後半の所産と考えられる。土師器では、

19-14の大型の浅い形態の土師器皿がある。口縁端部がつまみあげ氣味形態をとり、内面に放射状と螺旋状の暗文を施す特徴から奈良時代の所産と考えられる。また、19-15は、「て」字形態口縁の土師器皿で、11世紀の所産と考えられる。

瓦では、19-18の重圈文軒丸瓦、19-19の重圈文軒平瓦、19-20, 21の珠文・山形文を外縁にめぐらせた複弁形式軒丸瓦など奈良時代のものが出土している。

その他に、祭祀関連の遺物も出土している。19-22は滑石製の子持勾玉で、背部・側面に付属する勾玉部は著しく退化した単なる突起状の形態である。形態からは子持勾玉の最末期のものと考えられ、7世紀にまで使用年代が下る可能性がある。19-23は土馬の頸～頭部片である。頸～頭部だけで長さ約15cmにも及ぶ大型品であること、長く伸びた頸部形態、前方を向いた両目、粘土帯によって写実的に面繋が表現されるなどの特徴は、奈良時代に通有な定型化した土馬とは異なっている。定型化以前の土馬と推定され、7世紀に使用された可能性も想定できよう。

第4面ベース（図18・20、写真図版6・7）

4層シルトを除去して検出した。4層は部分的に分層可能であったが、一括して掘削した。5層との境に自然堆積層がなく、土壤化層が連続しているので第4面ベース=5面となる。

96-1-1トレーナーで東西・南北方向の溝群と、ピットを検出した。溝群は平行もしくは直交するもので、耕作に伴う遺構と思われる。ピットは北半で集中して検出した。遺構12（ピット）は掘方中位から遺物がまとまって出土した。埋土は1層で10Y4/1灰色極細砂、遺物は重なった状態で下から土師皿2点、黒色土器1点、土師皿1点・羽釜1点である。各遺物間には炭化物が遺存していた。遺構97（ピット）は平面橢円形で埋土は1層、底よりやや浮いた状態で土師皿2点が口縁を下にした状態で重なって出土した。遺構99（ピット）の埋土は3層に分層でき2層から土師皿が出土した。遺構103（ピット）は底近くから10~20cm大の礫が出土した。

多数のピットを検出した中で、柱痕跡が確認できたのは遺構81・91・98・102・107・109（ピット）、礫が出土したのは遺構82・85・86・90・103（ピット）で、掘方底部から出土したのは遺構90・103で、他は掘方中位からの出土である。柱痕跡を確認した遺構（ピット）が6基と掘立柱建物の存在をうかがわせるが、調査区内で建物を復元するには至らなかった。第4面遺構1（流路）で削られたピット群南側と、調査区外である北側にその可能性を考えておきたい。

96-1-1・2・3トレーナー第4面ベース遺構12・97・99・103出土遺物（図20）

上記遺構のうち、遺構12・97から出土した土器は図20に掲載している。20-1~4は遺構12から出土した土器である。20-1, 3, 4は、土師器皿である。このうち20-1は、口縁端部をつまみあげた形態の「て」字状口縁形態であり、11世紀の所産と考えられる。20-2は黒色土器B類で、口縁内面に段をもつ深い形態である。底部外面には粘土帶貼付によって断面台形の高台が作り出されている。内外面はきわめて密なヘラミガキ調整で仕上げられている。20-5, 6は遺構97から出土した土師器皿である。底面に指押さえ痕がみられ、形態から12~13世紀のものと考えられる。

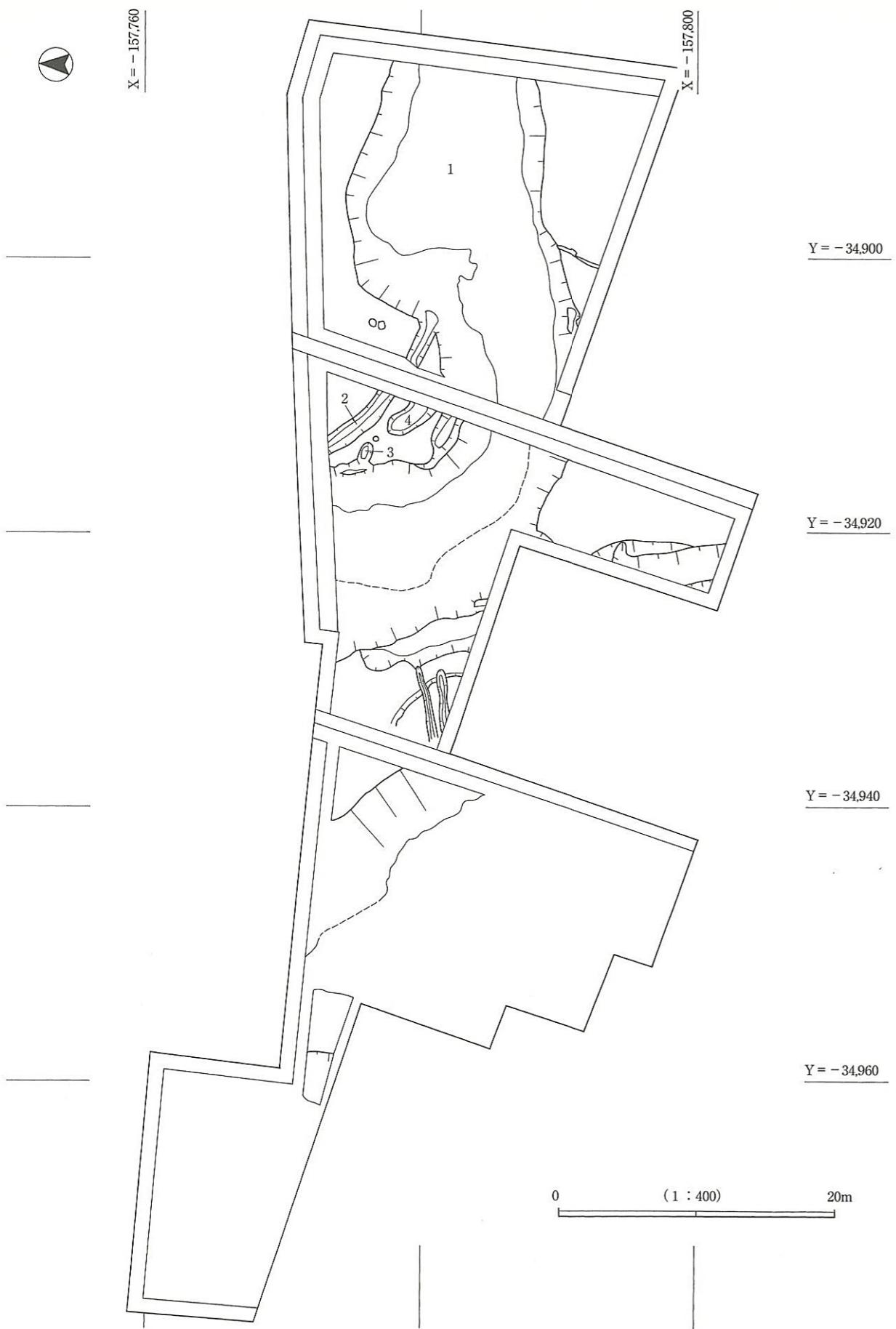


図16 96-1-1・2・3 トレンチ 第4面 平面図

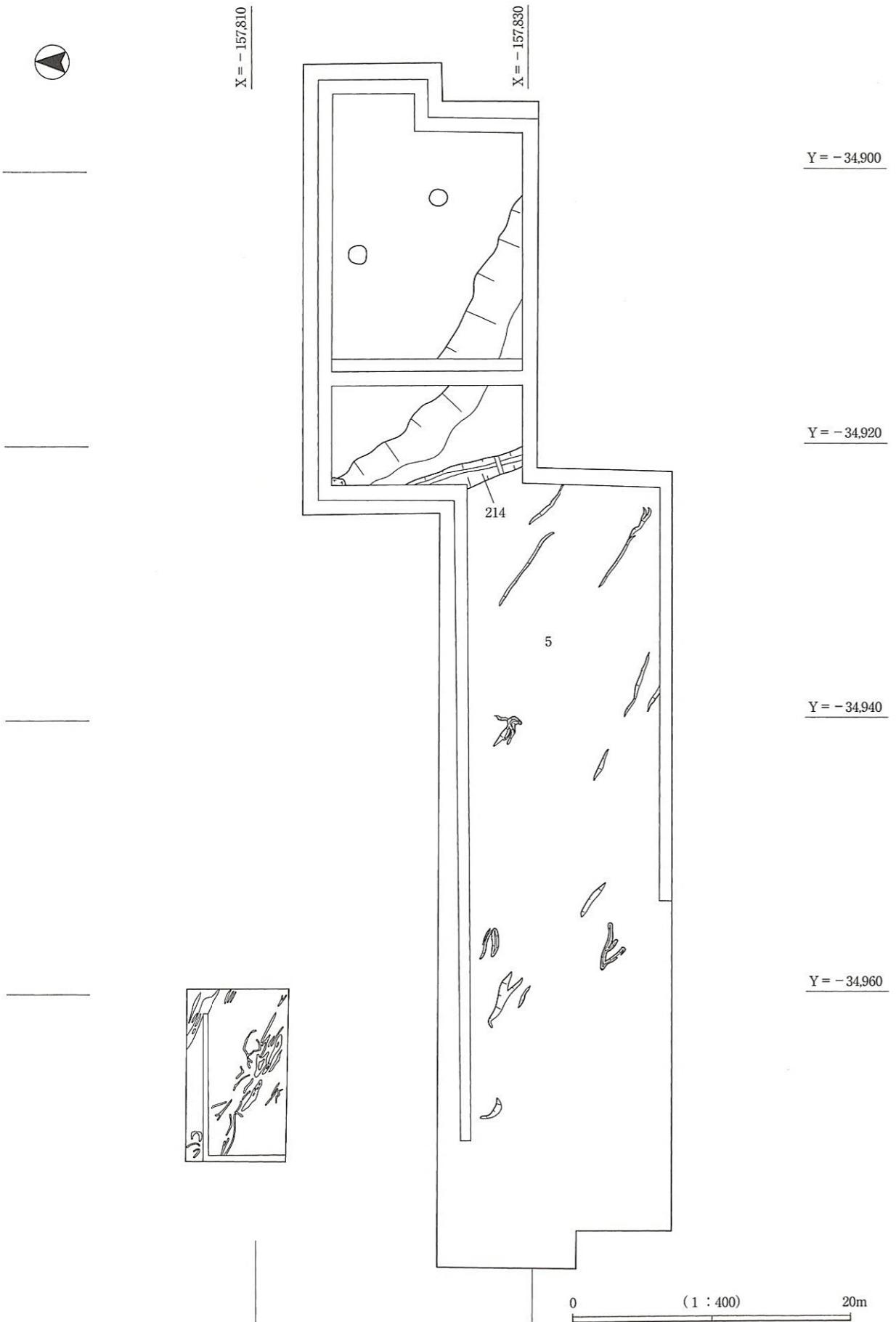


図17 96-1-4・5トレンチ 第4面 平面図

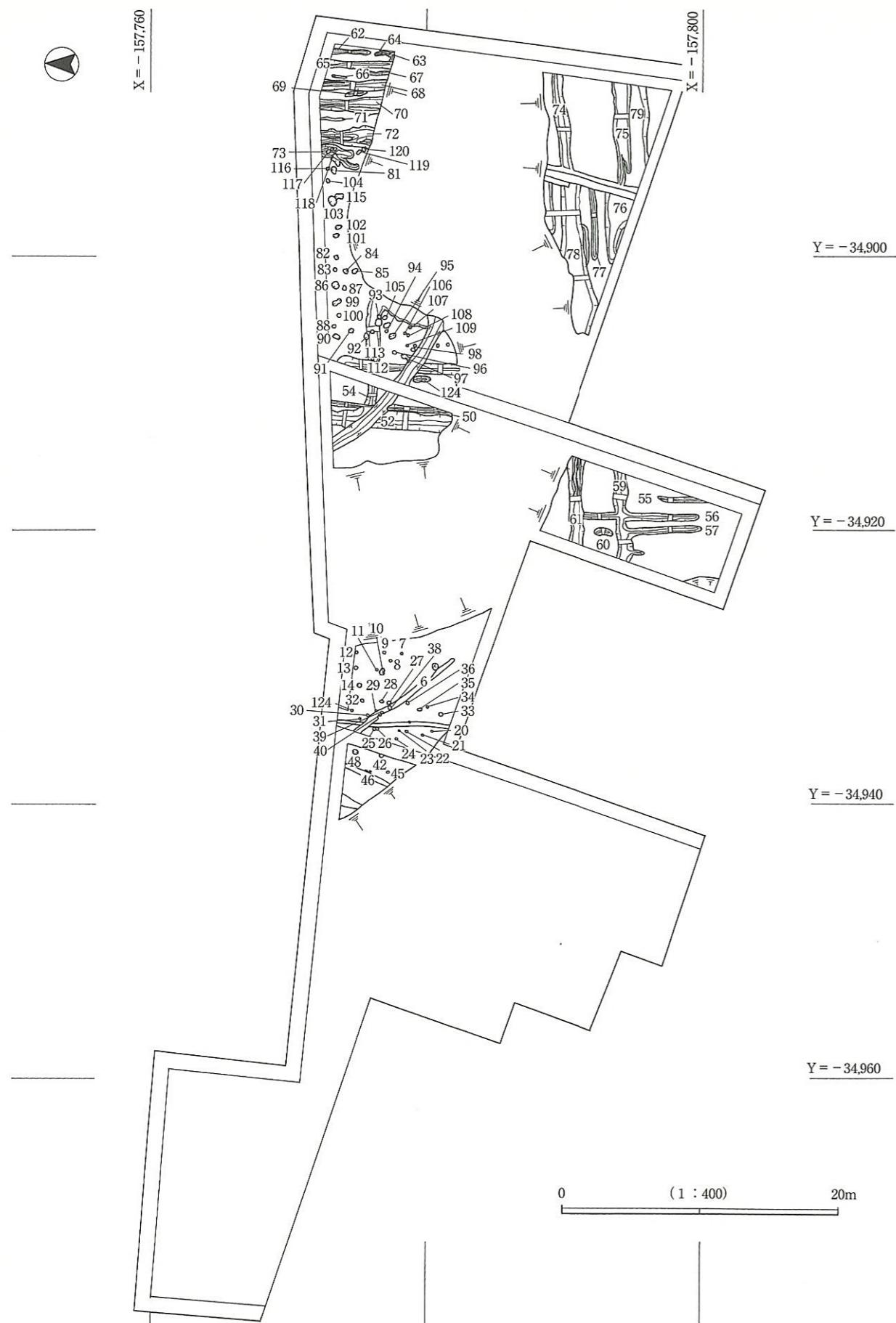


図18 96-1-1・2・3 ブランチ 第4面ベース 平面図

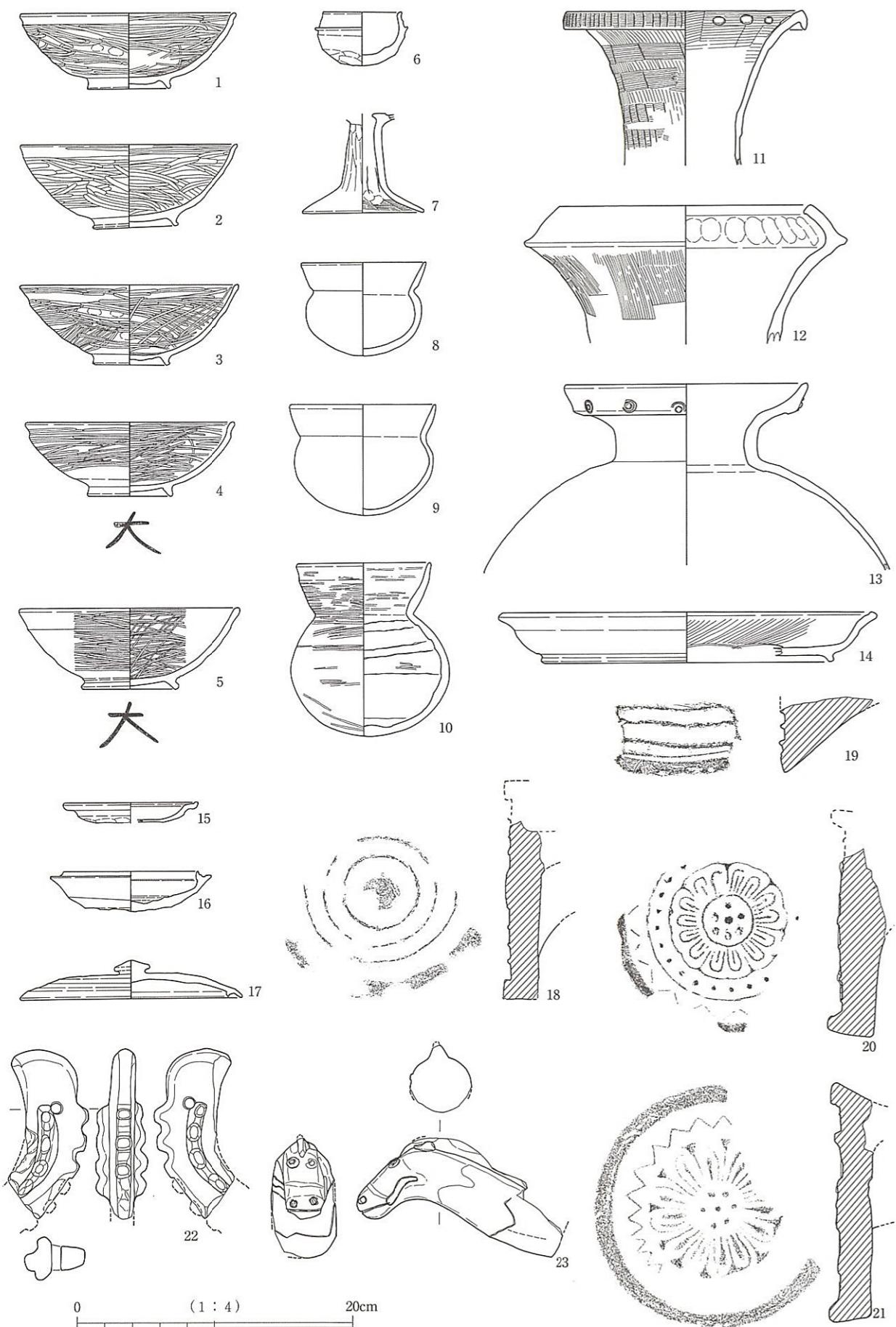


図19 96-1-1~5 トレンチ 第4面 遺構1(1~13)・5 (14~23)出土遺物

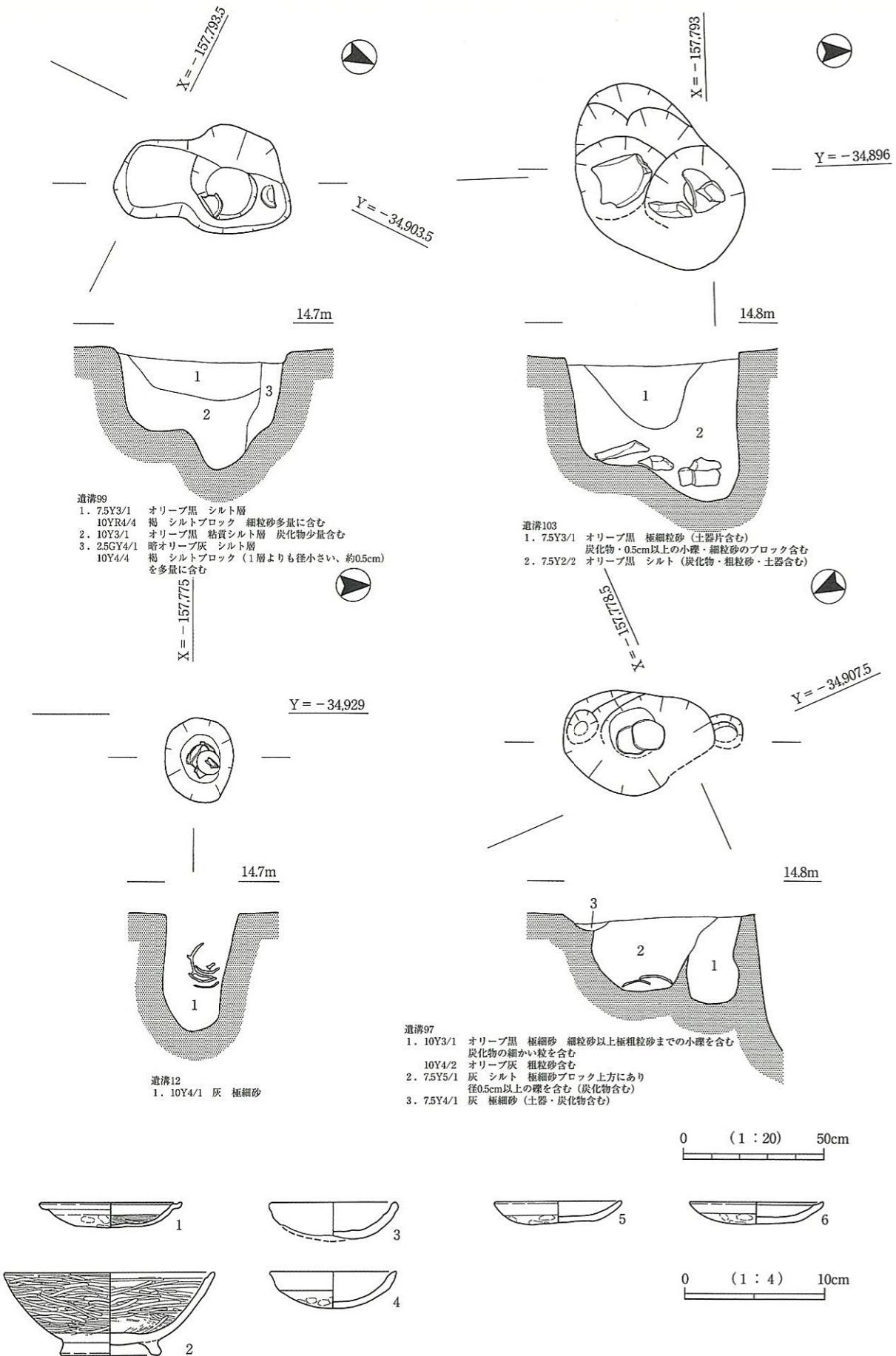


図20 96-1-1・2・3トレンチ 第4面ベース 遺構12 (1~4)・97(5.6)・99・103平・断面図、出土遺物

第5面（図21～23・26～36、写真図版7～12）

第4面との間に自然堆積層がないため、遺構面の検出・認識・帰属に混乱があった。96-1-1・2・3トレンチ第5面と96-1-5トレンチ第5-2面が対応する古墳時代前期面である。

全体平面図で便宜的に5-1面とした96-1-5トレンチでは南北方向の溝群と掘立柱建物1棟を検出したが、遺構埋土、溝群・建物の方向から本来4面あるいは4面ベースに帰属すべき遺構である。

96-1-1トレンチで遺構114・122・125・219（溝）、遺構123・142（土坑）を検出した。

96-1-5トレンチ（第5-2面）では遺構185・186・207（溝）と遺構207掘削中に須恵器が出土した遺構206（ピット）を検出した。遺構207は位置関係から96-1-1・3トレンチの遺構114と同一の溝と考えられる。

遺構114・207（溝）南側は第4面遺構5（流路）に、北側では東肩部を遺構1（流路）に切られている。幅は南側で広く6m、北へ行くほど狭くなり3m、深さは遺構114で1.4m、遺構207では2.5mを測る。埋土はラミナが顕著に認められる砂層が主体で下層からは木片、種実が出土した。

遺物は主に96-1-5トレンチ遺構207（溝）から東肩部に並行して6層より上層から出土した。平面図に図示した遺物のうち、土器262・263・264・265・268は肩部東からの出土で後述する遺構186（溝）に帰属する可能性が高い。体部下半に穿孔が見られるのは土器262・264・265・268である。遺物出土レベルはいずれもT.P.14.5mである。

遺構122（溝）は平面逆L字形で、幅はコーナー部がもっとも広く約2m、西端は狭く0.7m、深さは30cmを測る。西は第4面遺構1（流路）に切られ南は調査区外となる。

溝コーナー北肩部掘削中に北方向に約1.2mまで土器が続いているのを確認した。遺構検出時に掘方は確認できなかったが、浅い溝であった可能性がある。

遺構125（溝）は弧を描きながら北は調査区外となる。幅40～60cm、深さ15cmを測る。溝内から土師器甕1点が出土した。

遺構219（溝）は検出長2.1m、幅30cm、深さ6～7cmを測る。溝が収束する北東では3cmと浅い。南西側は第4面遺構5（流路）に切られている。遺物は肩部からも出土したことから、本来の掘方は少し上方であったと考えられる。

遺構123（土坑）は平面不整円形で、径2.6m、深さ1.8mを測る。埋土は9層に分層できたが、遺物の大部分は主に3層から上層で出土したほか、6～8層からも少量ながら出土した。4・6～9層はブロック土が顕著で埋め戻されたと考えられる。南側は第4面遺構1（流路）に切られている。

遺構142（土坑）は調査区北端で土層観察用アゼを掘削中に検出した。平面は不整橢円形で長辺約1m、短辺0.7mを測る。遺物は25-1甕が下層T.P.13.2m～13.5mで、その他はT.P.14m～14.2mで出土した。

遺構185（溝）は調査区東端で南東から北西に走る。幅は北端で0.7m、南端では2.5m、深さは約35cm～40cmを測る。遺物の出土レベルはT.P.14.7m～14.8m前後の範囲に収まる。溝の幅が広くなる南東肩部で遺物は出土しなかった。図示した遺物のうち体部下半に穿孔が見られるものが2点ある。

遺構186（溝）はほぼ直角に曲がり、東は遺構185と西は遺構207と切りあっている。溝の幅は0.7m～1.3m、深さは20cmを測る。遺物の出土レベルはT.P.14.4m～14.8mの範囲である。図示した遺物のうち体部下半に穿孔が見られるもの3点、遺構207の記述の中で当遺構に属する可能性のあるとした遺物のうち4点（土器262・264・265・268）にも穿孔が見られる。

遺構 185 と遺構 186 西辺がほぼ平行していること、遺構 185 で南東部で溝幅が広くなる東肩部を掘りすぎた可能性があること、遺構 185 で遺構 186 南辺と接する部分から南側で遺物が出土しないことから、コの字に巡る溝であった可能性がある。さらにこれらに接して検出した遺構 185・186・207（溝）から出土した土器のうち 9 点に穿孔が見られること、遺物に大きな時期差がないこと、遺構 186 西辺東肩から遺構 185 西肩間の距離が約 9 m、北側は調査区外で明らかではないが、一辺 9 m 程度で溝が方形に巡ることが想定されることなどから墓（方形周溝墓）である可能性が考えられる。

遺構 206（ピット）は遺構 207（溝）西斜面で検出した。平面不整円形で、残存径 40 cm、深さ 10 cm を測る。須恵器坏身 2 点が底からやや上位で、南側の坏身は正置、北側は横位に近い状態で出土した。

遺構の底近くで径が 40 cm と、ピットとするにはやや大きいと思われる。本来の面は 5 面もしくはそれより上位であったと考えられる。遺構 206 底のレベルは T.P. 14.0 m、遺構 207 の肩のレベルが T.P. 14.7 m で、浅くても約 70 cm 程度の深さを有していた土坑の可能性がある。

96-1-5 トレンチ第 5 面遺構 114 出土遺物（図 24）

遺構 114 出土遺物のなかで図化可能な個体は 5 点 24-1～5 であった。24-1 は口縁部が緩やかに外反し、内外面がヘラミガキ調整で仕上げられる大型鉢である。24-2 は、半球形の受け部をもつ小型器台で、細密な砂粒を混和させた精良胎土によりつくられている。外面は横方向の、内面は横方向後放射状のヘラミガキ調整で仕上げられている。庄内式～布留式初頭の所産であろう。24-3 は小型の甕で、器面荒れのため調整手法などは不明である。

24-4 は、球形胴部に小型で突出する底部をもつ器形で、庄内式～布留式初頭の広口壺あるいは二重口縁壺である。24-5 は、直立する頸～口縁部をもち底部が丸底の直口壺である。胴部外面と頸部内面はハケ調整で、胴部内面はヘラケズリで仕上げられている。頸部外面には粘土帶接合痕が 2 条うかがわれ、粘土帶 3 段によって頸部が成形されたことがわかる。布留式初頭～前葉の所産と考えられる。

以上の諸特徴から、ここに掲載した当遺構出土遺物はすべて布留式初頭期を中心とする時期のものと考えられ、遺構の埋没もその時期に比定できよう。

96-1-1 トレンチ第 5 面遺構 142 出土遺物（図 25）

遺構 142 からは、古式土師器が出土しており、10 点が図化可能であった。25-1 は、胴部形態が球形で、外面を前面ハケ調整後肩部に横方向のハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり端部に面をもつ、いわゆる「布留式甕」で布留式期前～中葉の所産と考えられる。25-2 は、口縁部が直立して外面に木製工具による条線を施す甕である。岡山平野の古墳時代初頭甕の搬入品もしくは模倣品と考えられる。

25-3 は小型丸底土器で、頸部外面を細密なヘラミガキ調整、頸部内面をハケ調整で仕上げている。内外面のヘラミガキ調整が省略傾向にあることから、布留式期前葉の所産と考えられる。25-4, 5, 6 は小型のミニチュア土器で、形態から小型丸底土器の模倣品と推定される。布留式前葉の小型丸底土器が模倣対象と考えられ、所属時期も同一と考えたい。

25-7, 8 は高坏で、いずれも外面はナデ調整で仕上げられている。25-7 の坏部内面にはヘラミガキ調整を粗に施している。25-8 の脚部は柱状部が長めで、裾が明確に屈曲して広がる形態である。いずれも、布留式期前～中葉の所産と考えられる。

25-9は複合口縁壺、25-10は直口壺で、いずれも胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整で仕上げられている。25-9の胴部上半外面にはヘラ状工具による刺突文が施されている。2点とも布留式前～中葉の所産と考えられる。

96-1-1 トレンチ第5面遺構125出土土器（図27）

遺構125から出土した土器には、27-1がある。胴部外面をタタキ成形後ハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げた甕で、口縁端部を摘み上げた形状である。胎土には、角閃石・長石・石英の角礫が多数含まれている。いわゆる生駒西麓産胎土で製作されていることや、器面調整・形態の特徴から、庄内式後半～布留式初頭の「庄内河内型甕」と考えられる。

96-1-1 トレンチ第5面遺構219出土遺物（図28）

遺構219から出土した土器のうち図化可能だったのは、28-1～4である。28-1は、胴部が球形、口縁部が直線的に立上がる形態の甕である。器面調整痕などは不明であるが、口縁屈曲部の内面にヘラケズリ調整による明瞭な稜線がみられ、いわゆる庄内式甕の形態である。28-2は小型器台の脚部で、中位に円孔透かしが穿たれている。28-3,4は、外面を細密なヘラミガキ調整で仕上げた有段口縁鉢である。内面は、28-4に数条のヘラミガキ調整が認められる。

これらの土器はすべて、庄内式後半から布留式初頭の所産と考えられ、当遺構の埋没時もその時期と考えられる。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構206出土遺物（図34）

当遺構の北側立ちあがり部・中央部から、須恵器坏身が2点（34-1,2）が出土している。34-1は口縁部が欠失しているが、34-2は完形品である。いずれも、深めの器形で外面の回転ヘラケズリ調整が中位まで残存している。34-2は、口縁部の立ちあがりは大きく、口縁端部内面に明確な稜線が形成されている。形態・調整手法からTK47型式を中心とする時期のものと思われ、5世紀後葉～6世紀初頭に製作されたと考えられる。

96-1-1 トレンチ第5面遺構122出土遺物（図37～43）

当遺構から出土した多量の土器のうち、主要なものを（図37～43）に掲載した。上述のように、当遺構埋土は上下2層に分別可能で、図43に図示した個体の出土層位は、そのうちの下層に限定できる。

まず注目されるのは、43-18の土製品である。中空の体部の下方に底面をもつ突出部があり、上半は前後に紡錘上に延びる形状である。鳥形土製品と考えられるが、頭部と尾部は欠損している。脚部は土器底部状に合一されている。外面はヘラケズリ後ナデ調整によって仕上げられている。

43-1,2は高坏で、いずれも斜め外方に直線的に延びる坏部形態で、外面は横方向の、坏部内面は横方向後放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-2の脚柱状部は短い。43-7は椀形高坏で、短い柱状部から明確に屈曲して大きく裾部が広がる脚部形態である。坏部内外面・脚部外面は細密なヘラミガキ調整で仕上げられている。

43-3は小型器台脚部で、直線的に裾部が広がる形態で、中位の3方に円孔が穿たれている。外面は細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-4,5,6は小型丸底壺で、いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作され、外面は横方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。頸部内面に関しては43-4は右上がりの斜め方向、43-6は横方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-8は口縁部が屈曲する形態の有段口縁鉢で、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。外面は横方向の、内面は横方向後放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。43-9は直口する形態の丸底鉢

である。外面はヘラケズリ調整後ナデ調整またはハケ調整、内面はナデ調整で仕上げられている。

43-10~17は中型の甕である。いずれも球形胴部に端部を摘み上げる形状の口縁部をもつ器形で、胴部内面はヘラケズリ調整、口縁部内面はハケ調整後ナデ調整で仕上げられている。ただ、胴部外面の調整痕には差異が見られる。43-14~17は、胴部外面がタタキ整形後ハケ調整で仕上げられ、胎土中には角閃石・長石・石英角礫が多く含まれている。いわゆる「生駒西麓産」胎土で製作され、形態・器面調整手法から「庄内河内型甕」に分類できる土器群である。一方、43-10~13は、いずれも胴部外面を斜め方向のハケ調整で仕上げられている。布留式期の定型的甕のように外面肩部ヨコハケ調整を施すものではなく、いずれも「布留傾向甕」「布留系甕」と呼ばれる型式といえよう。

図43に掲載した土器群を通観すると、古式土師器の小型精製器種の型式がほとんど揃いつつも、中空（「X」形）小型器台や定型的布留式甕が共伴していないことがわかる。この組成上の特徴から、遺構122下層出土土器群は、平城宮下層S D 6030出土[井上和人 1980『平城宮発掘調査報告X』奈良国立文化財研究所]の典型的な「布留式古相」の直前の状況を示している。類似した型式的特徴・組成を持つ一群として、八尾市久宝寺遺跡南地区K 3号墓周溝内下層およびk-s x-3出土土器群[(財)大阪府文化財調査研究センター 1999『河内平野遺跡群の動態VII』]などが挙げられる。寺沢薰氏の「布留0式」[寺沢薰 1986『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所]の新相もしくはその直後、米田敏幸氏の「庄内V/布留I期」[米田敏幸 1990『土師器の編年I近畿』『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣]の古相に相当する土器群と考えられ、布留式成立過程を考える上での基準資料といえよう。

図37~42は遺構122上~下層出土の土器群である。37-17, 18は大型鉢で、いずれも外面はハケ後ナデ調整で仕上げられている。37-17は口縁屈曲部外面に刻み目入り突帯を貼付し、37-18は口縁部が段をもって直立する形態である。

37-1~14は小型丸底壺である。いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されていて、頸~口縁部長が胴部高の2/3以下となる形態である。器面調整では、外面が横方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられているもの（37-3, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 13, 14）とそうでないものの（37-1, 2, 4, 7, 11）2種類がみられる。前者の下地にはヘラケズリ後ナデ調整を行っているものが多い。後者でも最終器面調整はヘラケズリ後ナデ調整である。両者は基本的に同一手法で作られ、最終段階のヘラミガキ調整の有無だけが各個体差となって現れている。37-15は小型の丸底鉢でヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。37-16は有段口縁鉢で外面を横方向の、内面を横方向後放射状のヘラミガキ調整で仕上げられている。

38-1~7は、小型器台である。受け部は断面が半円形となる形態で、いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。38-5は内外面を細いヘラミガキ調整で仕上げられているが、その他の個体はナデ調整で仕上げられている。38-8~15は高壺で、いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。壺部口径からみると、38-8, 9, 10, 11, 12の中型品と、38-14, 15の大型品が存在する。完形品は38-11, 12だけであるが、上半部が残存している個体では、すべて断面逆台形の壺部形態である。下半部が残存している38-11, 12, 13では、いずれも柱状部の短い脚部形態で、直線的に広がる裾部には円孔が穿たれている。壺部外面は横方向の、内面は横方向および放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられているものが多い。

38-17, 18は大型の、38-19は小型の二重口縁壺である。38-17, 18は頸~口縁部のみの破片であるが、いずれも内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられている。38-19は細砂粒のみを含む精良な胎土で

製作されており、丸底で胴部形態は球形である。38-20,21,22は小型で完形の直口壺で、いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。38-21,22は、胴部外面は横方向、頸部の内外面は横方向後斜め方向の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。39-1,2,3,4,6,7は大型の直口壺である。いずれも破片状態で、球形の胴部が完存しているのは39-6の1点のみである。どれも内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられている。39-5は、広口壺の完形品である。胴部外面はタタキ整形後ハケ調整、内面はハケ調整で仕上げられており、胴部中位に焼成後穿孔が行われている。

図40～42に掲載している土器群は甕である。40-1～19、41-3,9,10は胴部外面をタタキ整形後ハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げ、口縁端部をつまみあげた形態の甕である。底部が残存している個体では、すべて丸底形態である。いずれも、角閃石・長石・石英の角礫を多量に含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。形態・調整手法・胎土の特徴から庄内河内型甕といわれる型式である。41-1,2,4～8,11～18は、胴部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる甕である。大半の個体は口縁端部を摘み上げる形態をとり、庄内式甕と類似している。ただ、41-16,17,18は端部に面をもち、内側に稜線に形成される口縁形態で、特に胴上半部が残存している41-18は横方向のハケメが認められる。これらは布留式甕に通有な属性といえる。41-1,2,4～8,11～15は、「布留系甕」「布留式傾向甕」と呼ばれる型式、41-16,17,18は定型的布留式甕といえよう。42-1,2,4,8は内面ヘラケズリ調整を行わない小型の甕である。

42-5,9は、庄内式～布留式にはみられない形態の甕である。42-5は、口縁部が短く外反する形態で、胴部外面がハケ調整、内面がナデ調整で仕上げられている。四国北部の古墳時代初頭の甕に形態は類似しているが、内面調整がヘラケズリ調整でないことから搬入品とは考えられない。また、42-9は口縁端部が立ち上がる形態で、胴部内面がヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。古墳時代初頭の岡山平野の甕に類似しており、搬入品もしくは模倣品の可能性が高い。

42-3,6,7,10,11,12,13は胴部が長楕円球形で、頸部が長く伸びる形態の土器群である。胴部外面はタタキ整形後ハケ調整が行われたと考えられ、弥生後期以来の甕製作手法・形態をもっている。ただし、頸部～口縁部が発達して直立もしくは広口壺状に外反し、壺・甕の中間形態ともいえる。42-3,12,13とともに残存している底部は小さな平底である。

以上、図37～42に示した遺構122上～下層出土土器は、図43に示した遺構122下層出土土器に類似した土器群ではあるが、甕にみられるように定型的布留式にみられる型式も共伴している。つまり、後続する土器群を含むことになり、図37～42に示した土器群の廃棄には庄内式末期～布留式確立期間での一定の時間幅を考慮する必要がある。

96-1-5 トレンチ第5面遺構123出土遺物（図44～48）

遺構123からも多量の古式土師器が出土しており、その主要なものに関しては図44～48に図示した。44-1,2,3,4,5,6は小型丸底壺で、いずれも頸～口縁部が短い形態で、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。44-2,3,4,5,6は外面が横方向、頸部内面が横方向もしくは斜め方向の細かいヘラミガキ調整で仕上げられており、外面のヘラミガキ調整の下地にはヘラケズリ調整痕がうかがわれる。44-12,13,14,15,16は有段口縁鉢であり、これらも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。外面は底部が縦方向で口縁～胴部が横方向、内面は横方向後放射状のヘラミガキ調整が施されている。小型丸底壺同様に、外面のヘラミガキ調整の下地にはヘラケズリ調整痕がうかがわれる。もう1点特殊形態の有段口縁鉢として、脚部の付属した個体（44-7）がある。鉢部は他の44-12,13,14,15,16と同

じ形態・製作手法で、脚部は当該期の高坏と同じ形態である。有段口縁鉢と高坏の折衷形式と考えるべきであろうか。また、中型の鉢として44-18がある。外面ハケ調整後ナデ調整、内面ヘラケズリ調整後ナデ調整で仕上げられ、有段口縁鉢とは異なる手法で製作されている。

44-8は緩やかに裾部が外反する形態の高坏脚部で、弥生時代後期後葉～庄内式前半にみられる形態である。既往の当該期土器編年案では、有段口縁鉢出現以前の形式と考えられていることから、先行する時期の堆積層からの混入品の可能性が高い。また、44-11の椀形高坏も、深い坏部器形や外面の斜め方向のヘラミガキ調整などは、庄内式前半の型式の特徴であり、混入品と考えたい。また、47-4, 5は口縁端部に円形浮文を貼付する広口壺である。これらも庄内式前半の型式と考えられ、既往の良好な一括資料においては有段口縁鉢と共に伴する例はない。混入品と考えたい。

44-17,19,20,21,22は丸底で球形の胴部をもつ小型壺である。完形品は44-17のみであるが、その他もこの個体同様直口壺と考えられる。いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられており、頸部が残存する個体ではその内面にも横方向もしくは放射状の細いヘラミガキ調整が施されている。小型の壺としては、胴部上半に櫛描直線文・波状文を施す47-15がある。広口壺もしくは二重口縁壺と考えられる。

45-1,2,3,4は中型の直口壺である。45-1は外面と頸部内面がヘラミガキ調整で仕上げられているが、その他の3点（45-2,3,4）は外面がハケ後ナデ調整で仕上げられている。いずれも胴部内面はヘラケズリ調整である。46-1,2,3も直口壺の形態であるが、胴部が橢円球形であり、外面がタタキ整形後ハケ調整で仕上げられるなど、弥生後期の甕に類似した型式である。いずれも内面はハケ後ナデ調整で仕上げられている。

45-5,6,46-4,5は二重口縁壺である。45-5,6は口縁部が外反する形態で、胴部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ後ナデ調整で仕上げるタイプである。46-5は、口縁部が直線的に広がり、底部が微妙に平底状を呈する形態である。全体に内外面ともハケ調整で仕上げられている。46-4は口縁部が直立する形態の大型品である。胴部内外面はハケ調整で仕上げられるものの、頸～口縁部の内面は横方向、外面は横方向後縦方向のヘラミガキ調整が施される。高松平野で多く見られるタイプの大型壺であるが、搬入品か模倣品かは不明である。

図47・48には甕を掲載している。掲載した甕は、その特徴から主に3群に類別することができる。一つは、胴部外面をタタキ整形後ハケ調整、胴部内面をヘラケズリ調整で仕上げ、口縁端部を摘み上げる形態の一群（48-1,4,5,6）である。これらは、すべて角閃石・長石・石英の角礫を含む「生駒西麓産」胎土で製作されており、庄内河内型甕と呼ばれる型式である。もう一つは、内湾気味の口縁部に端面をもつ形態で、胴部外面全体にハケ調整、特に肩部に横方向のハケ調整が施され、胴部内面はヘラケズリ調整で仕上げられる一群（47-1,6,7,48-18）である。これらは、布留式の定型的な甕の型式である。これら2者にはその中間形態ともいべき一群がある。口縁端部を摘み上げる形態で、胴部外面がハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げるもの（48-7,8,9,10,11,13,14,15,16,17）が多数みられる。これらは、「布留傾向甕」「布留系甕」と呼ばれる一群である。また、これら主要3種の甕のほかに、48-1,3のように胴部外面にタタキ整形を明瞭に残し、胴部内面をハケ後ナデ調整で仕上げるものがある。これらは、弥生後期以来の手法によって製作されたものである。

これらを通観すると、当遺構出土土器群の中心は定型的布留式の古相（布留Ⅰ期〔前掲米田1991〕）に相当するが、小数の庄内式前半の土器群が混在する状況にあると考えられる。

そのほかに、庄内式～布留式にはみられない特徴を持つ土器も出土している。47-9, 10は内傾する広い口縁端面に凹線文状の沈線を施し、口縁部内面にヘラミガキ調整を行う土器である。このような口縁部の特徴は北陸・北近畿・山陰地方の当該期の器台に通有で、日本海沿岸部とその周辺地域からの搬入品もしくはその模倣品の可能性が高い。47-12は、上方へ拡張した口縁部に木製工具による条線を施す甕で、岡山平野を中心に分布する当該期の甕に通有の特徴をもっている。中部瀬戸内地方からの搬入品もしくはその模倣品と考えられる。47-13, 16は、「S」字状口縁を呈する甕で、特に47-16には脚台が付属している。これらは東海地方に通有の型式であり、その地方からの搬入品もしくはその模倣品と考えられる。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構185出土遺物（図49～51）

遺構185から出土した多量の古式土師器は図49～51に掲載している。49-1, 2, 8, 9は、胴部外面をタタキ整形後ハケ調整、胴部内面をヘラケズリ調整で仕上げ、口縁端部を摘み上げる形態の甕である。これらは、すべて角閃石・長石・石英の角礫を含む「生駒西麓産」胎土で製作されており、庄内河内型甕と呼ばれる型式である。49-4, 5, 6, 7, 10, 11, 12, 50-3, 4, 5, 8, 9, 10は、内湾気味の口縁部に端面をもつ形態で、胴部外面全体にハケ調整、特に肩部に横方向のハケ調整が施され、胴部内面はヘラケズリ調整で仕上げられる甕である。これらは、布留式の定型的型式である。そのほかに、口縁端部を摘み上げる形態で、胴部外面がハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる甕（49-3, 50-1, 2, 7, 11）もみられる。これらは、「布留傾向甕」「布留系甕」と呼ばれる一群である。また、口縁部が段を持って立ちあがる形状の大型甕として、51-1, 2がある。いずれも胴部外面にはハケ調整を行うが、51-2では、胴中～下位にヘラミガキ調整をまばらに施している。

50-12～16は小型丸底土器である。50-16以外は、頸～口縁部長が胴部長とほぼ同等になる形狀である。50-13, 14には外面あるいは頸部内面に細いヘラミガキ調整を施すが、それ以外は内外面ともナデ調整で仕上げられている。いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。50-17は細砂粒のみを含む精良な胎土で製作された小型直口壺である。外面全体と頸部内面を横方向のヘラミガキ調整後、頸部内外面には最終段階で放射状のヘラミガキ調整を施している。胴部中位に焼成後穿孔が行なわれている。大型直口壺としては51-3, 4, 5があり、球形の胴部がハケ調整で仕上げられ、頸部外面にまばらなヘラミガキ調整を行っていることがわかる。

50-18は高坏で、断面逆台形の坏部に、長い柱状部から裾が明確に屈曲して広がる脚部を持つ形態である。内外面はすべてナデ調整で仕上げられている。

以上を通して観ると、甕のうち定型的布留式甕が多数を占めること、小型丸底壺が頸部の発達する形態でヘラミガキ調整が省略される特徴をもつこと、高坏の脚柱部が長い形態であることなどから、当遺構出土土器群は布留式前葉（布留Ⅰ～Ⅱ期〔前掲米田1991〕）に位置付けることが可能である。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構186出土遺物（図52）

遺構186出土の古式土師器は、図52に掲載している。52-1, 2, 3, 4, 5は、頸～口縁部長が胴部長とほぼ同等になる形態の小型丸底壺である。52-1の頸部内面、52-4の外面・頸部内面にヘラミガキ調整が行なわれている以外は、すべてナデ調整で仕上げられている。いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。52-6は小型の二重口縁壺である。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作され、外面は細いヘラミガキ調整で仕上げられている。52-7, 8は小型器台で、いずれも細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。52-7は受け部が中空の「X」形の断面形状で、52-8は半円形の受け部

断面形態である。いずれも、内外面ともナデ調整で仕上げられている。

52-9,10,11,12,13は甕である。52-9,11,12は、口縁端部を摘み上げる形態で、胴部外面がハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる「布留傾向甕」「布留系甕」と呼ばれる一群である。52-10,13は、内湾気味の口縁部に端面をもつ形態で、胴部外面全体にハケ調整、特に肩部に横方向のハケ調整が施され、胴部内面はヘラケズリ調整で仕上げられる甕である。これらは、布留式の定型的型式である。

以上を通観すると、小型器台の受け部が中空の「X」形の断面形状であること、小型丸底壺が頸部の発達する形態でヘラミガキ調整が省略される特徴をもつことから、当遺構出土土器群は布留式前葉（布留I〔前掲米田1991〕）に位置付けることが可能である。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構 208出土遺物（図53）

遺構208からは、53-2が出土している。口縁部が短く外反して頸部上位に段をもつ形態の広口壺で、外面と頸～口縁部内面はヘラミガキ調整で仕上げられている。弥生時代前～中葉の所産である。

96-1-5 トレンチ第5-2面遺構 207出土遺物（図53・54）

遺構207からは、53-1が出土している。胴部外面を縦方向のヘラミガキ調整で仕上げ、口縁部が短く外反する形態の甕である。弥生時代中期中～後葉の所産である。

また、当遺構からは、53-1のほかに古式土師器も多量に出土している。54-1は有段口縁鉢で、外面が横方向の、内面が横方向後、放射状の細いヘラミガキ調整で仕上げられている。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-12は、頸～口縁長が胴部高の1/2程度と短い形態の小型丸底壺で、胴下半部外面には細いヘラミガキ調整がまばらに施されている。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-2は、受け部が断面半円形の小型器台で、脚裾部外面に横方向の、受け部内面に横方向後、放射状のヘラミガキ調整が施されている。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。

54-5,6,7,8は、小型の二重口縁壺で、いずれも外面と口縁部内面が細密なヘラミガキ調整によって仕上げられている。いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-10は大型で球形胴部をもつと推測される広口壺で、外面がハケ調整、口縁部内面が横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。54-14,15は大型の二重口縁壺で、球形の胴部外面はハケ調整後まばらなヘラミガキ調整が縦方向に施される。胴部内面はヘラケズリ後ナデ調整で仕上げられている。

54-3,4は、坏部側面が逆台形を呈し、脚部は短い柱状部から明確に屈曲して広がる裾部形態の高坏である。坏部外面は横方向、坏部内面は横方向もしくは放射状の細いヘラミガキ調整によって仕上げられる。いずれも、細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。54-11は椀形高坏で、坏部外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられる。細砂粒のみを含む精良な胎土で製作されている。

54-9は平底、54-13は尖底の甕である。いずれも胴部外面にタタキ整形痕がうかがわれるが、内面の器面調整は、54-9ではハケ後ナデ調整、54-13ではヘラケズリ調整である。54-13は、角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されており、庄内河内型甕と呼ばれる型式に相当する。

以上を通観すると、脚柱部の短い高坏形態、小型器種へのヘラミガキ調整の徹底などの特徴から、当遺構出土の古式土師器は、庄内式末～布留式初頭の所産と考えられる。

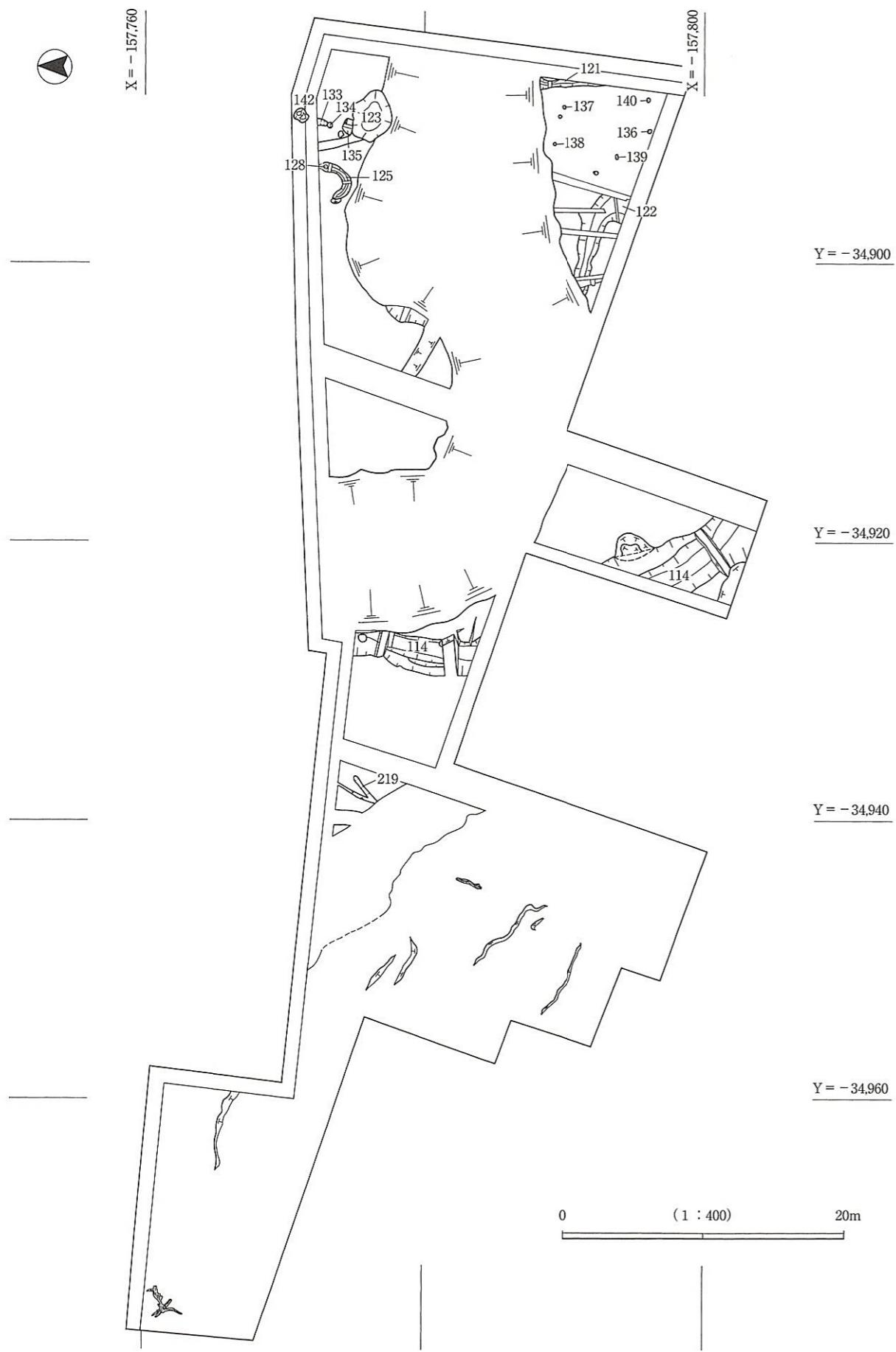


図21 96-1-1・2・3 トレンチ 第5面 平面図

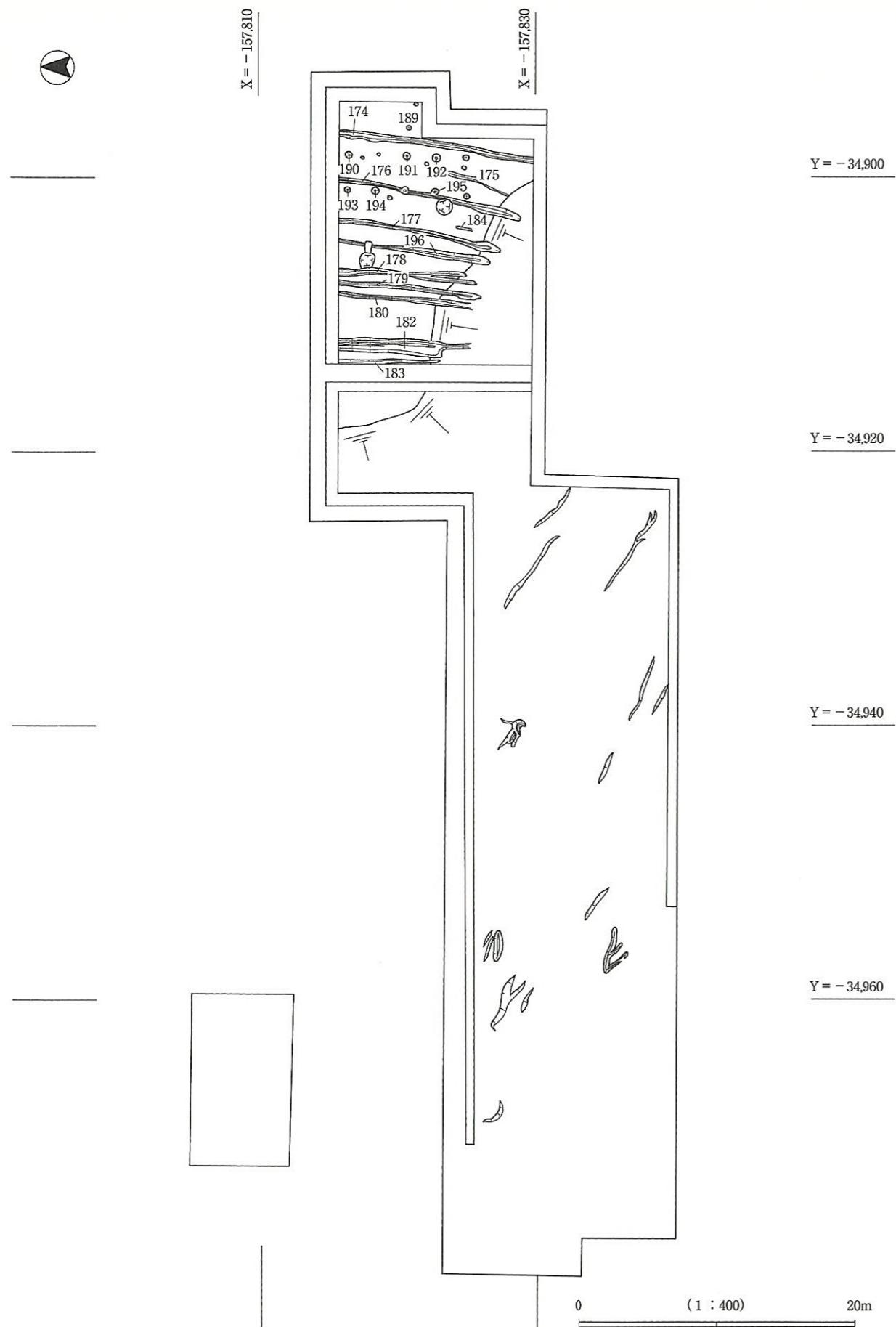


図22 96-1-4・5 トレンチ 第5-1面 平面図

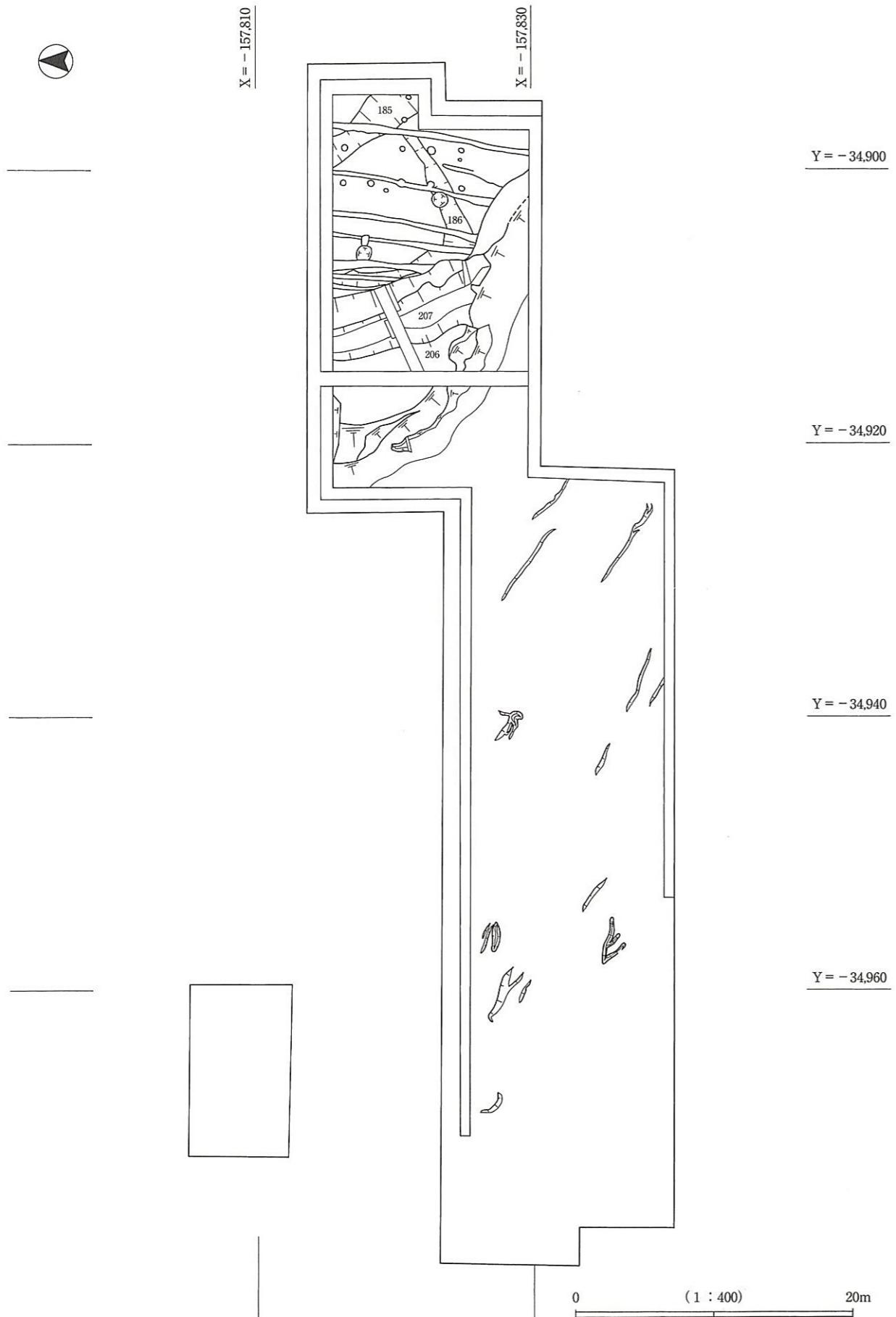


図23 96-1-4・5 トレンチ 第5-2面 平面図

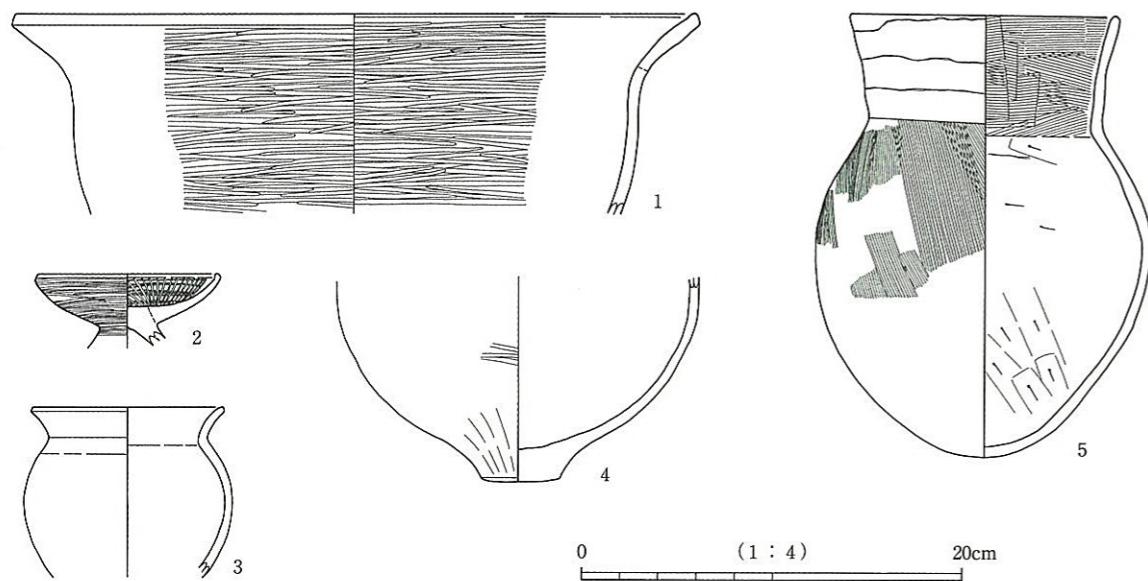


図24 96-1-1・3トレンチ 第5面 遺構114出土遺物

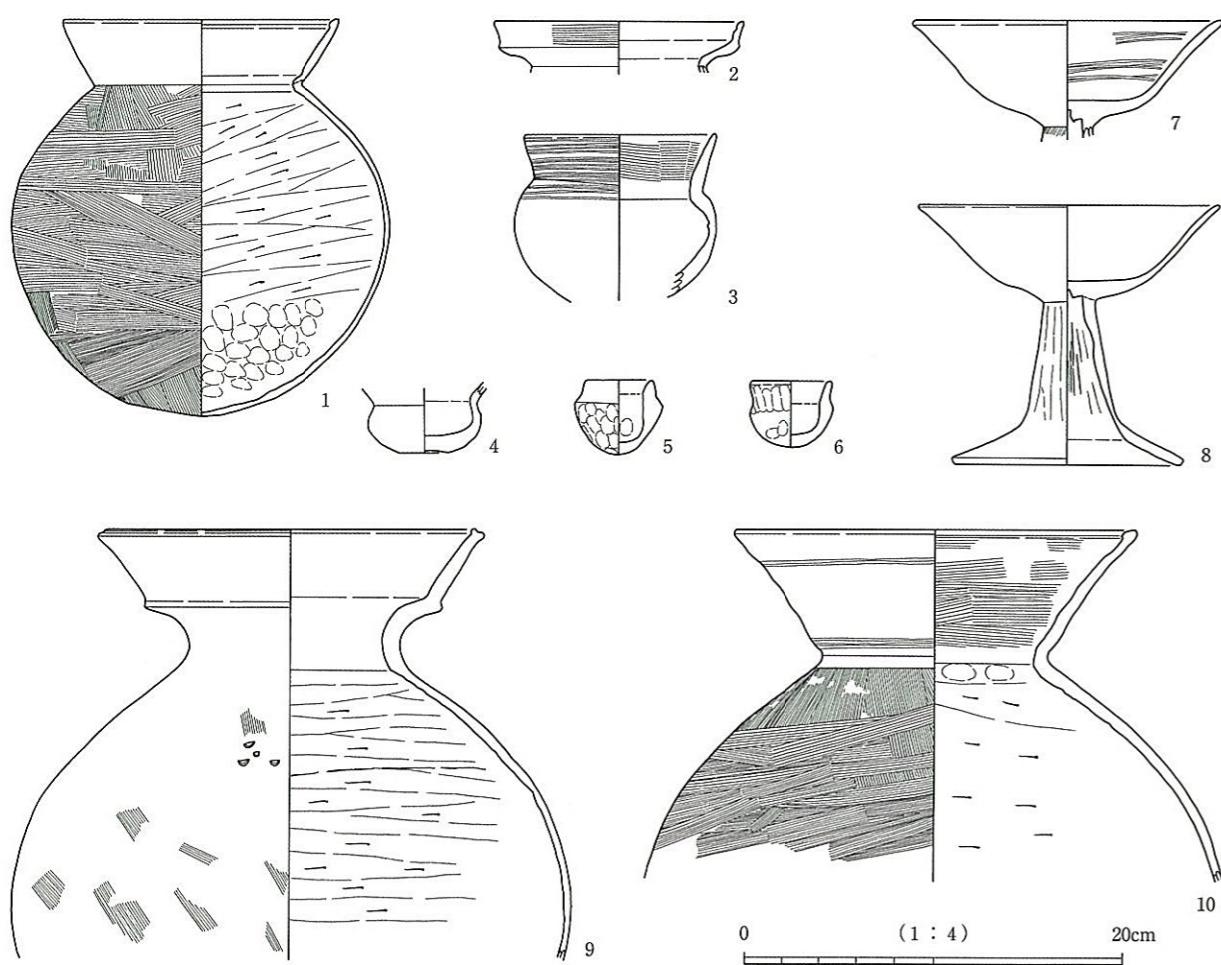


図25 96-1-1トレンチ 第5面 遺構142出土遺物

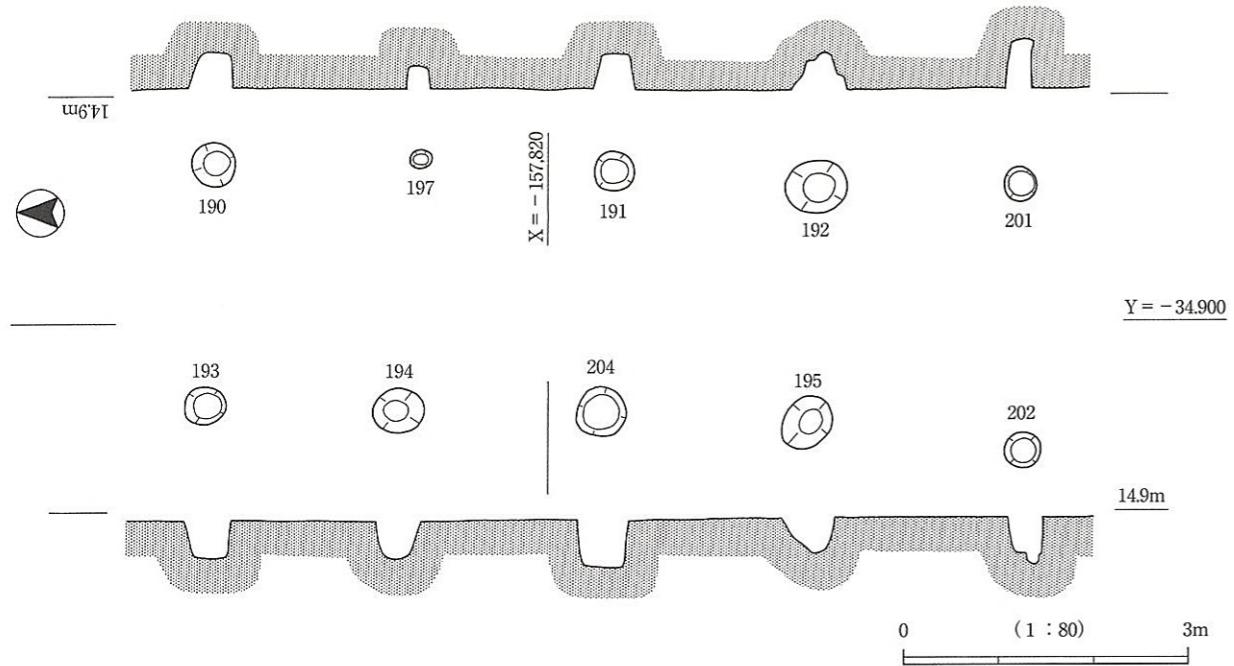


図26 96-1-5 トレンチ 第5-1面 ピット190~195、197、201~203、204

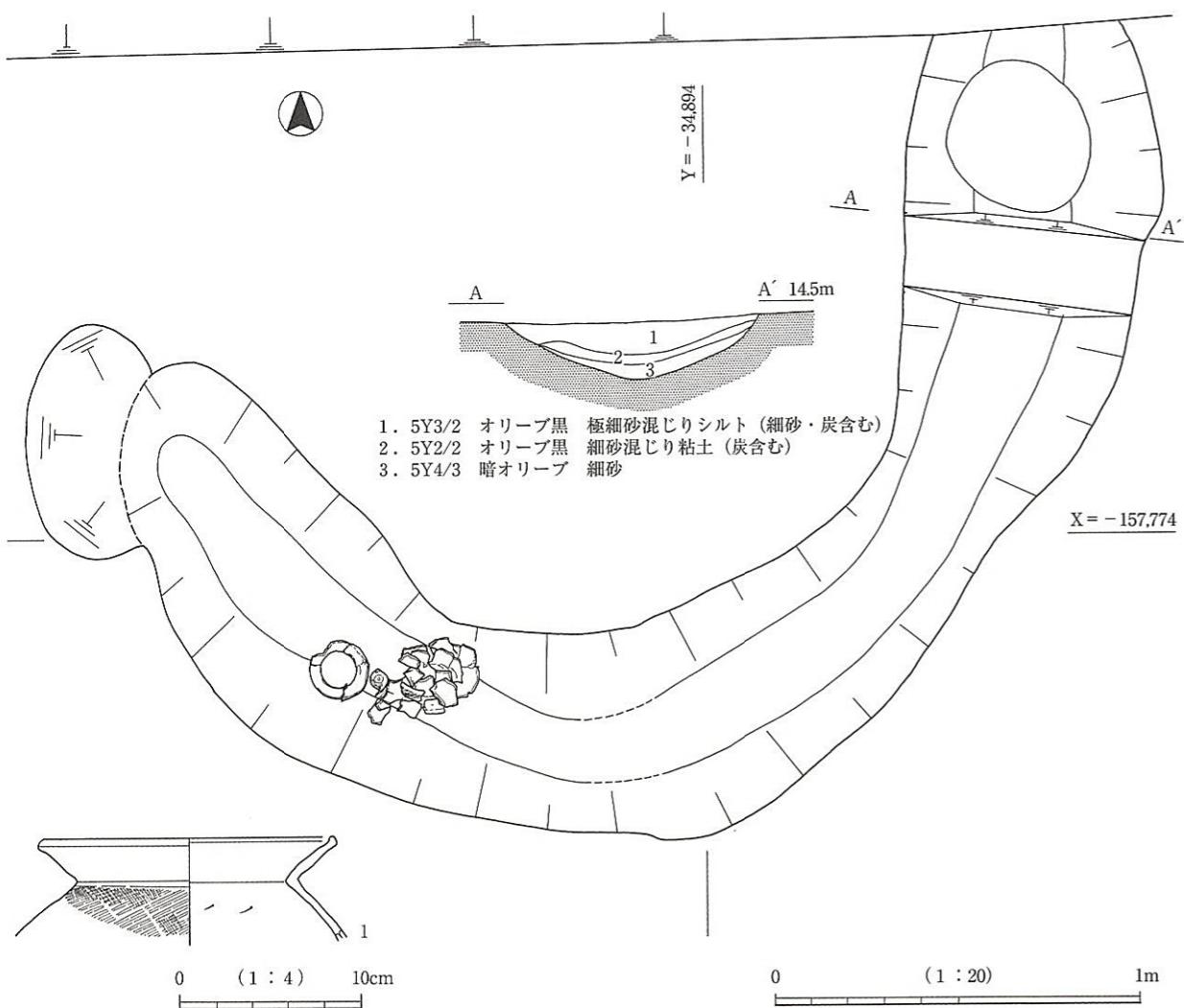


図27 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構125 平・断面図、出土遺物

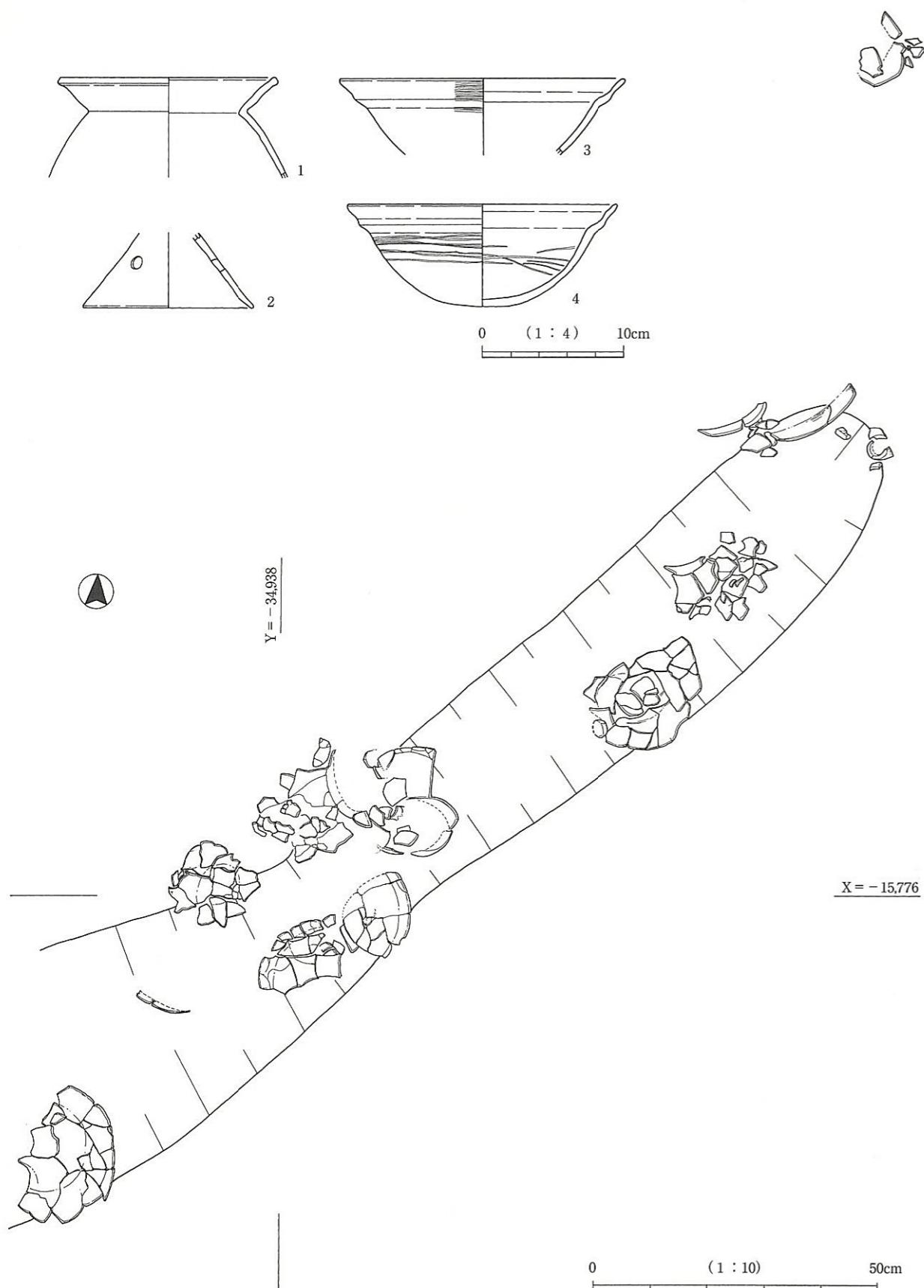


図28 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構219平面図、出土遺物



図29 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122平・断面図

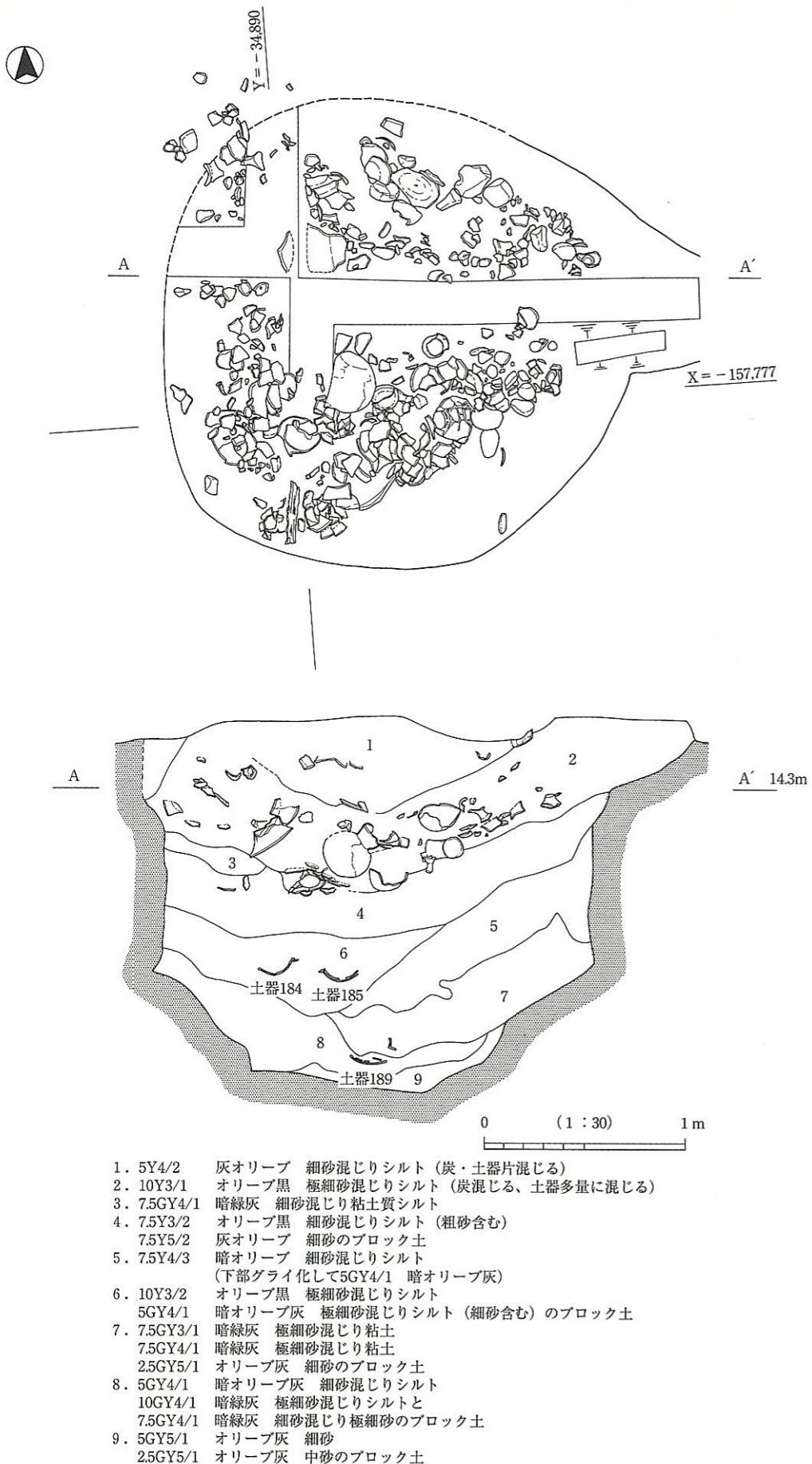


図30 96-1-1トレンチ 第5面 遺構123平・断面図

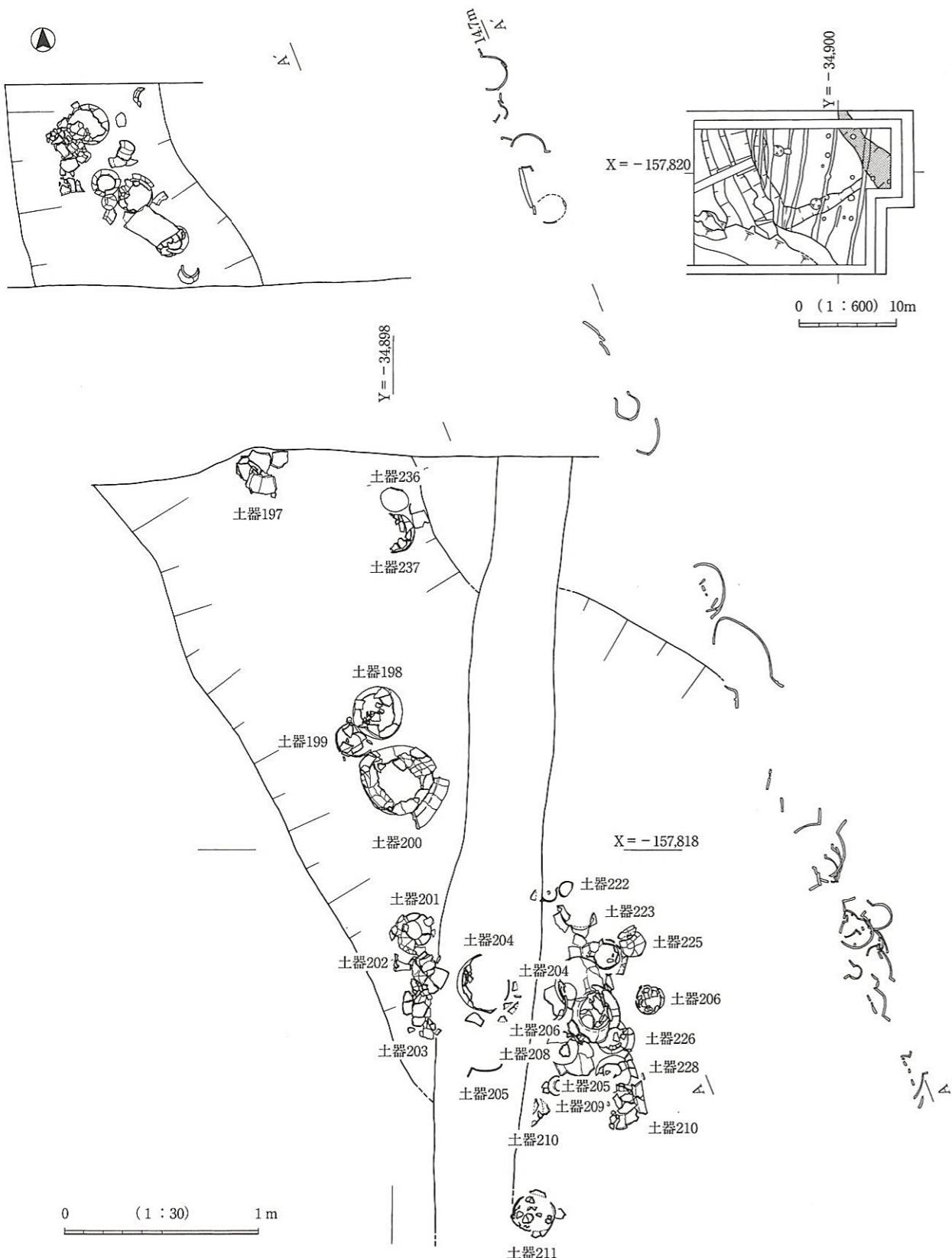


図31 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構185平・断面図

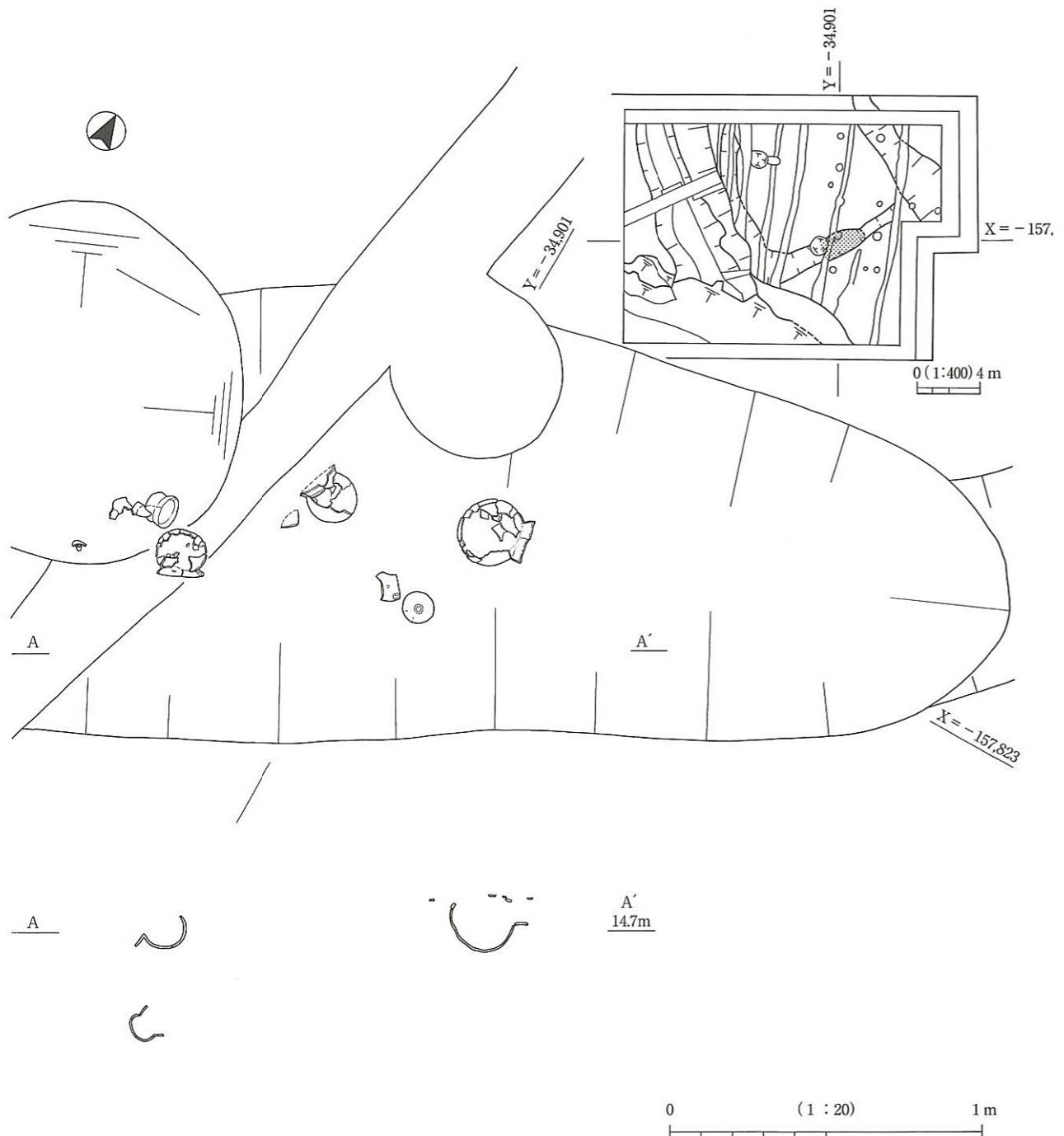


図32 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構186遺物出土状況図1

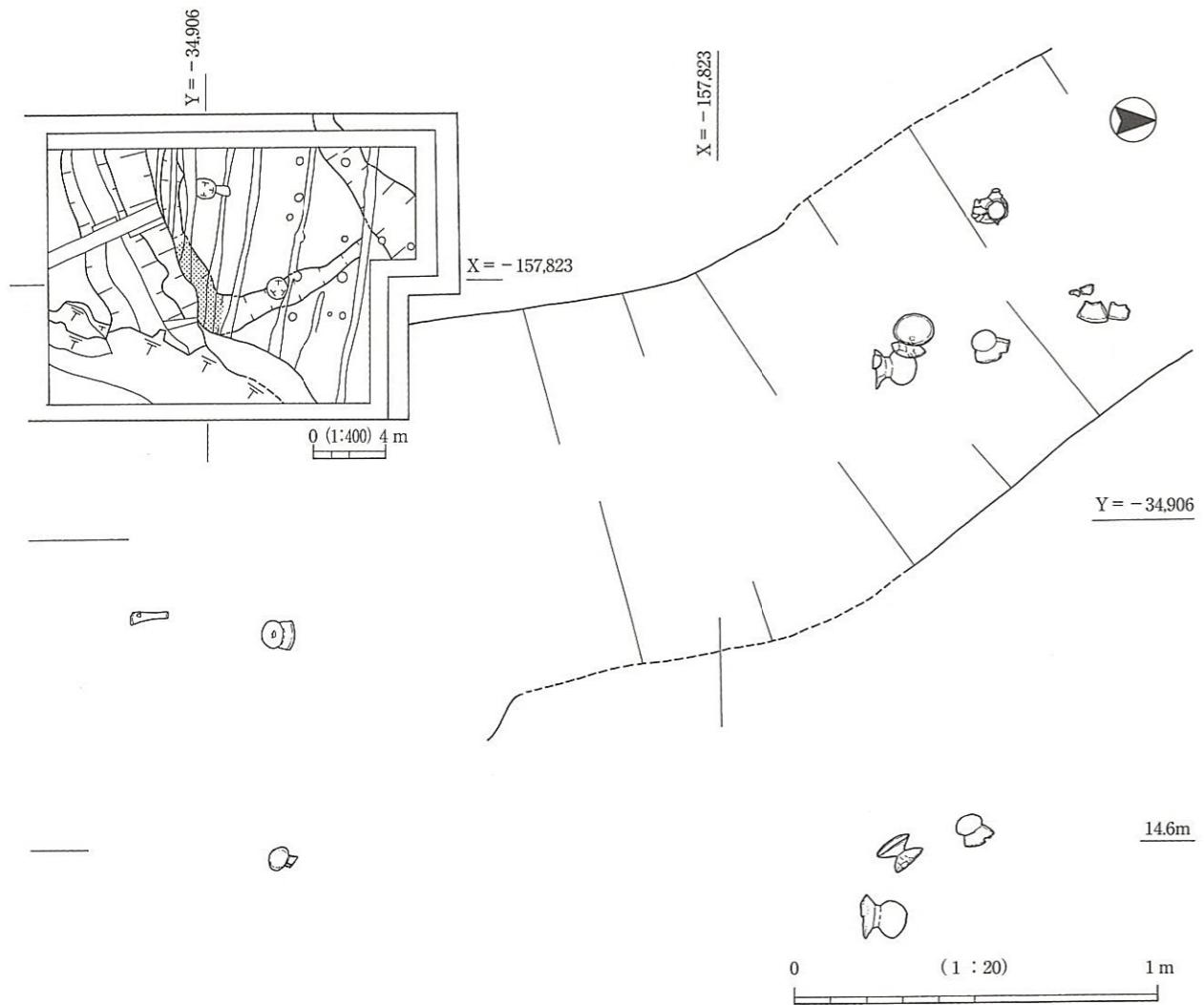


図33 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構186遺物出土状況図2

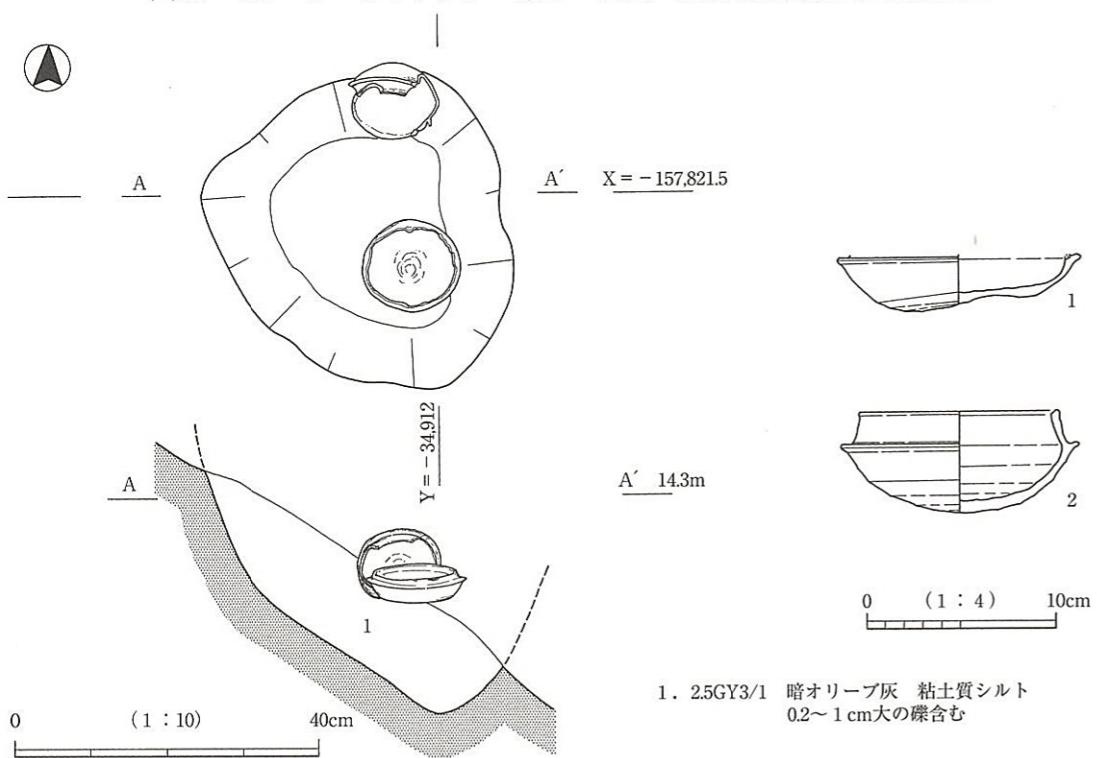
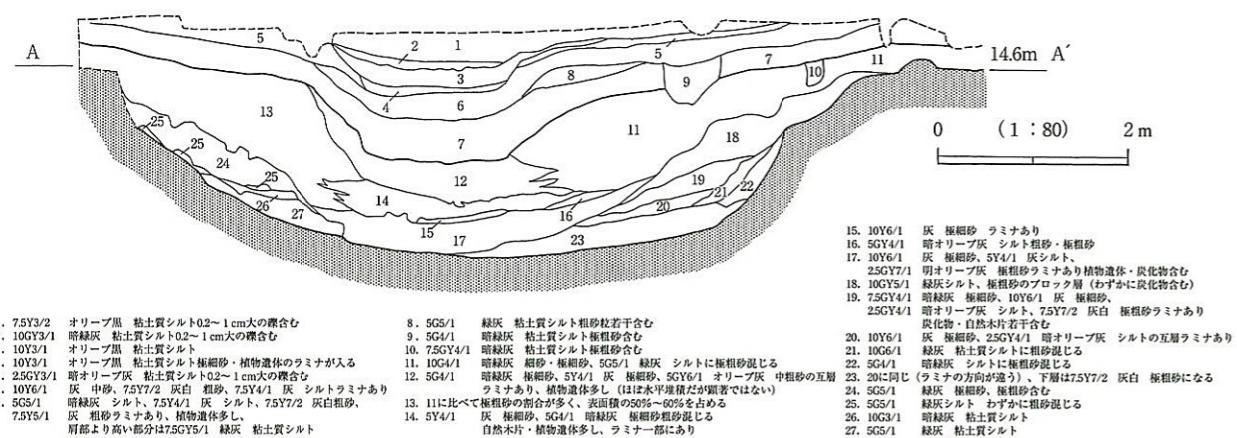
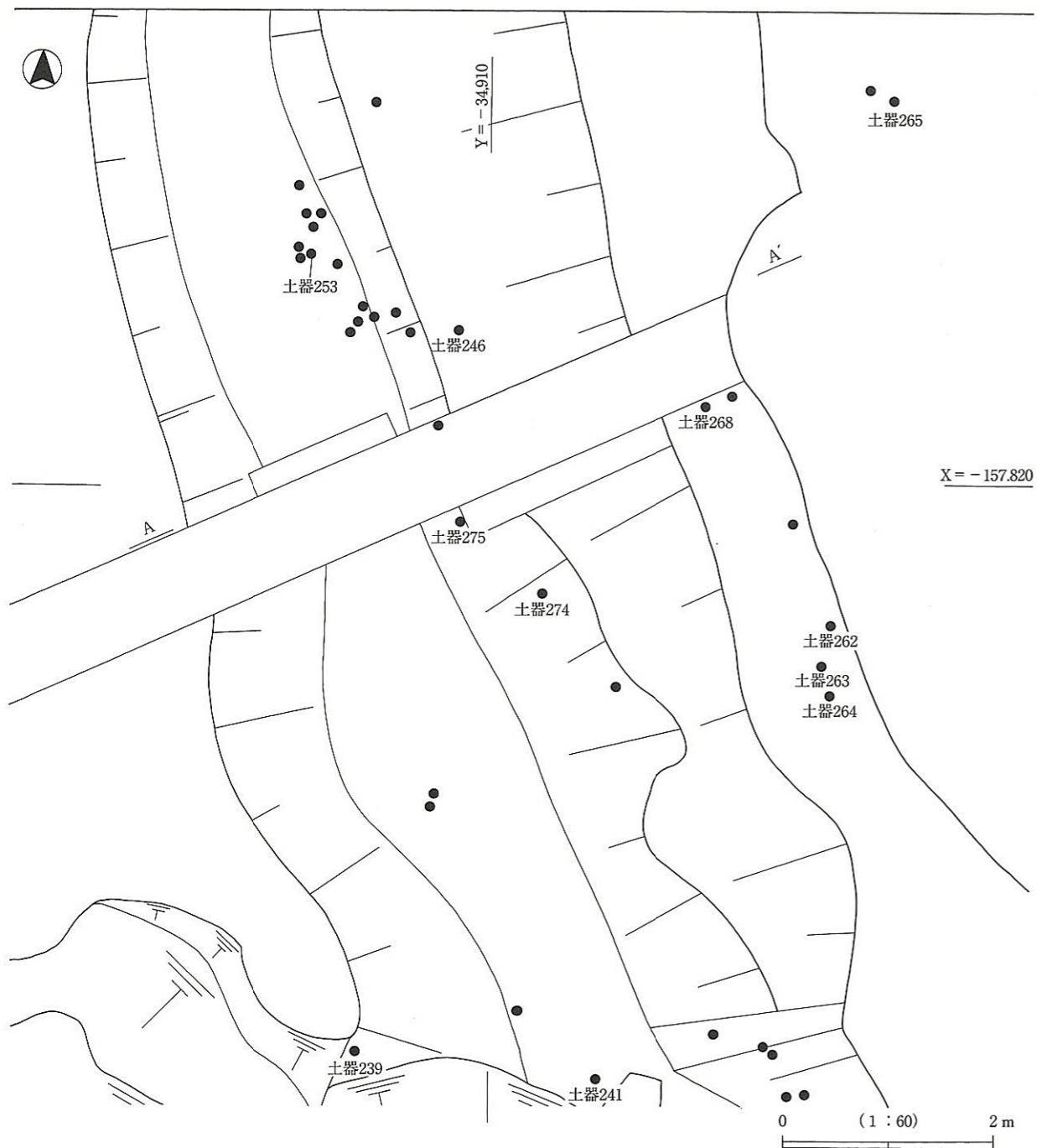


図34 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構206平・断面図、出土遺物



1. 75Y3/2 オリーブ黒 粘土質シルト0.2~1cmの大の疊合む
2. 100Y3/1 暗緑灰 粘土質シルト0.2~1cmの大の疊合む
3. 10Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト
4. 10Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト 植物遺体のラミナが入る
5. 25G3/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト 植物遺体・植物遺体のラミナが入る
6. 10Y6/1 土灰 中砂、7.5Y7/2 灰白 粗砂、7.5Y4/1 土 粉砂 ラミナミナあり
7. 5GS/1 暗緑灰 シルト、7.5Y4/1 土 シルト、7.5Y7/2 灰白粗砂、
7.5Y5/1 土 粗砂ラミナあり、植物遺体多し
肩部より高い部分は7.5GY5/1 緑灰 粘土質シルト
8. 5G5/1 緑灰 粘土質シルト粗砂若干含む
9. 5G4/1 暗緑灰 粘土質シルト粗砂含む
10. 75G4/1 暗緑灰 粘土質シルト粗砂含む
11. 10G4/1 暗緑灰 粗砂・粗細砂、5G5/1 暗緑灰 シルトに板根砂混じる
12. 5G4/1 暗緑灰 粗砂・粗細砂、5Y4/1 土 粗砂、5GY6/1 オリーブ灰 中粗砂の互層
13. 11に比べて板根砂の前後が多く、表面積の50%~60%を占める
14. 5Y4/1 土 粗砂、5G4/1 暗緑灰 板根砂粗砂混じる
自然木片・植物遺体多し、ラミナ一部にあり
15. 10Y6/1 土 粗砂ラミナあり
16. 5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト粗砂・板根砂
17. 10Y6/1 土 粗砂、板根砂ラミナあり 植物遺体・炭化物含む
18. 10GY5/1 緑灰シルト、板根砂のブロック層 (わざかに炭化物含む)
19. 7.5GY4/1 暗緑灰 板根砂、10Y6/1 土 粗砂、
20. 10Y6/1 土 粗砂、25GY4/1 暗オリーブ灰 シルトの互層ラミナあり
21. 10GY5/1 緑灰シルト、板根砂シルトに板根砂混じる
22. 5G4/1 暗緑灰 シルトに板根砂混じる
23. 2G5/1 同じ (ラミナの方向が違う) 下層は7.5Y7/2 灰白 粗砂になる
24. 5G5/1 緑灰 シルト、板根砂含む
25. 5G5/1 緑灰シルト わざかに粗砂混じる
26. 10G3/1 暗緑灰 粘土質シルト
27. 5G5/1 緑灰 粘土質シルト

図35 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構207平・断面図

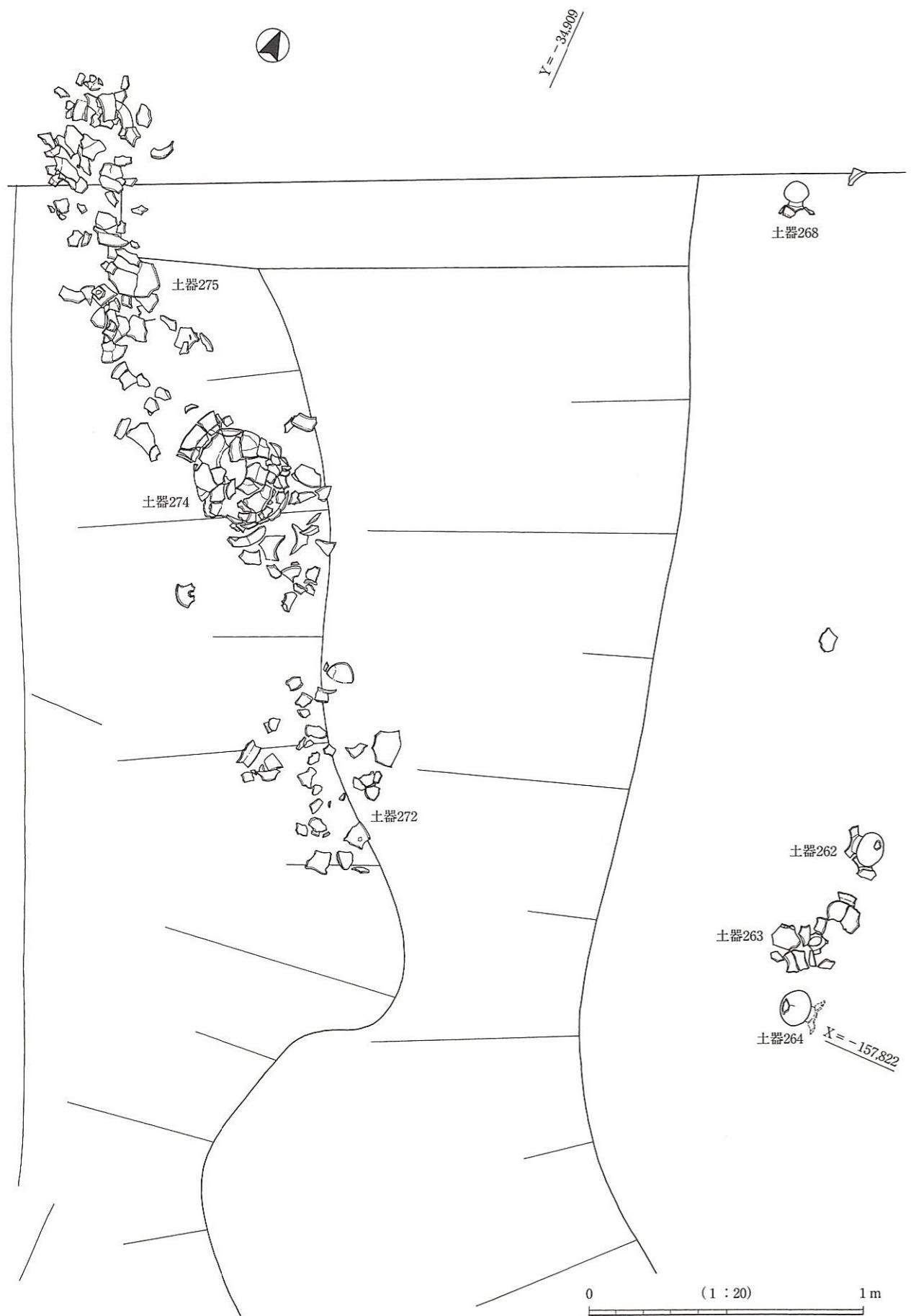


図36 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構207平面図

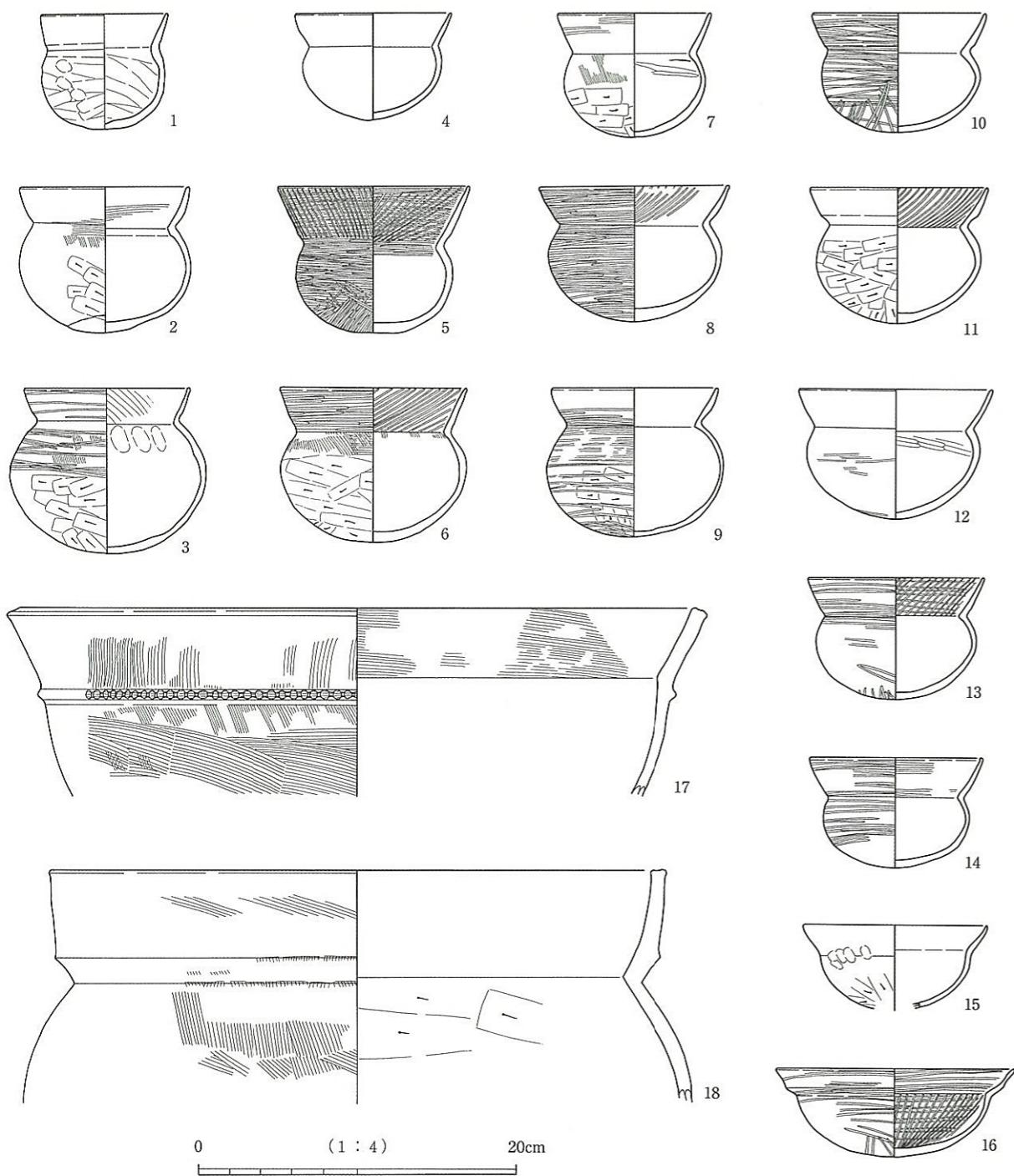


図37 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物1



図38 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物2

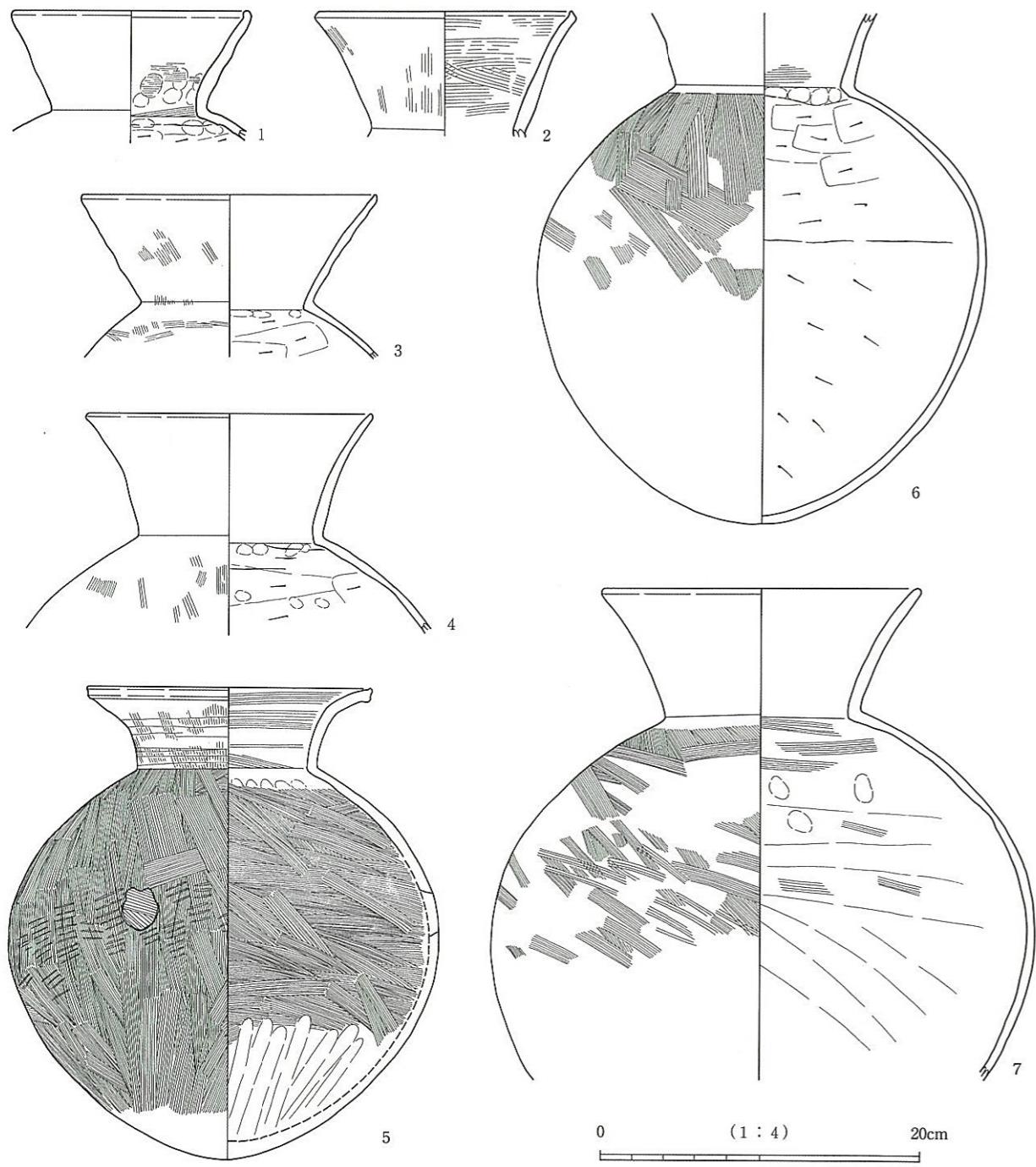


図39 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物 3

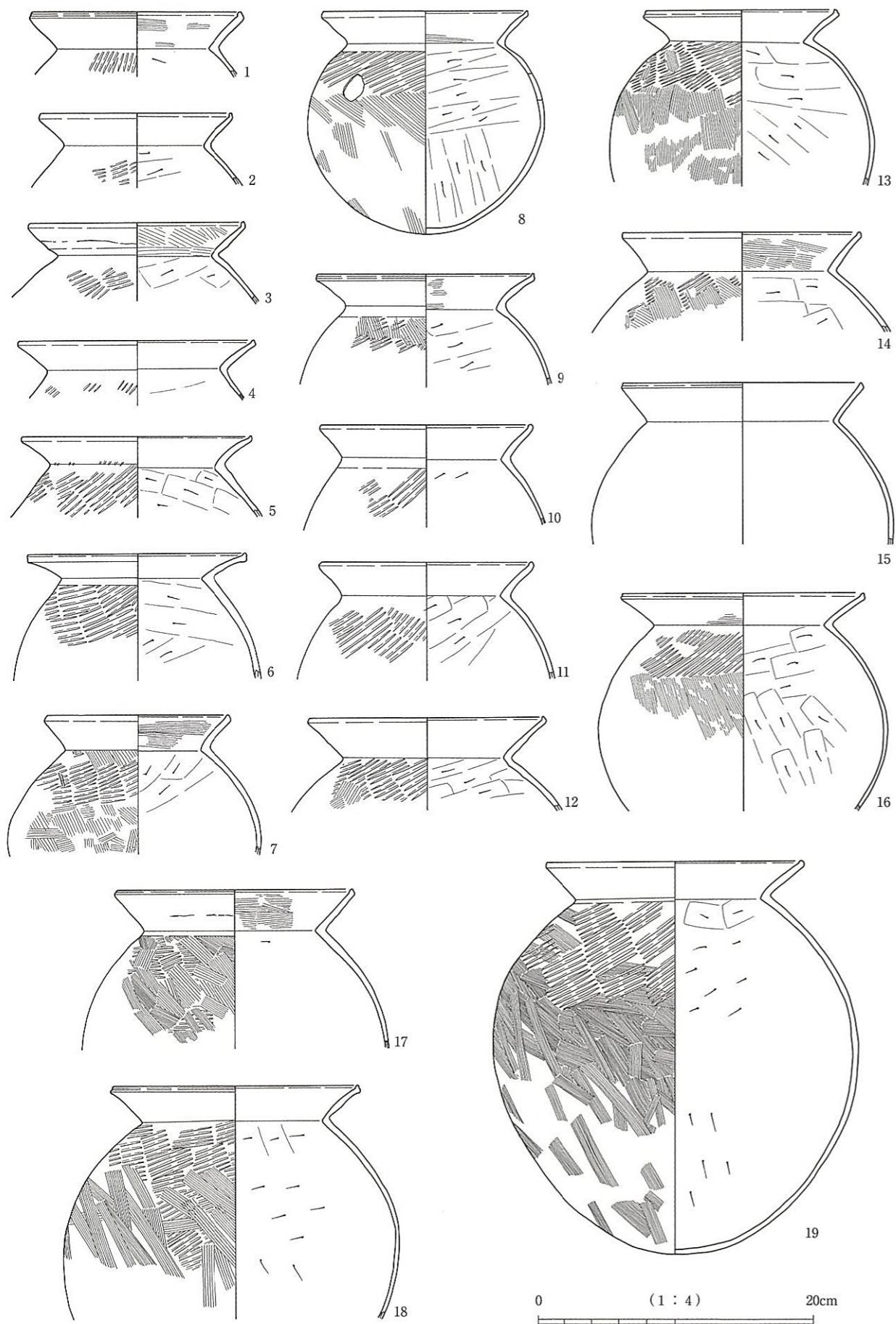


図40 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物4

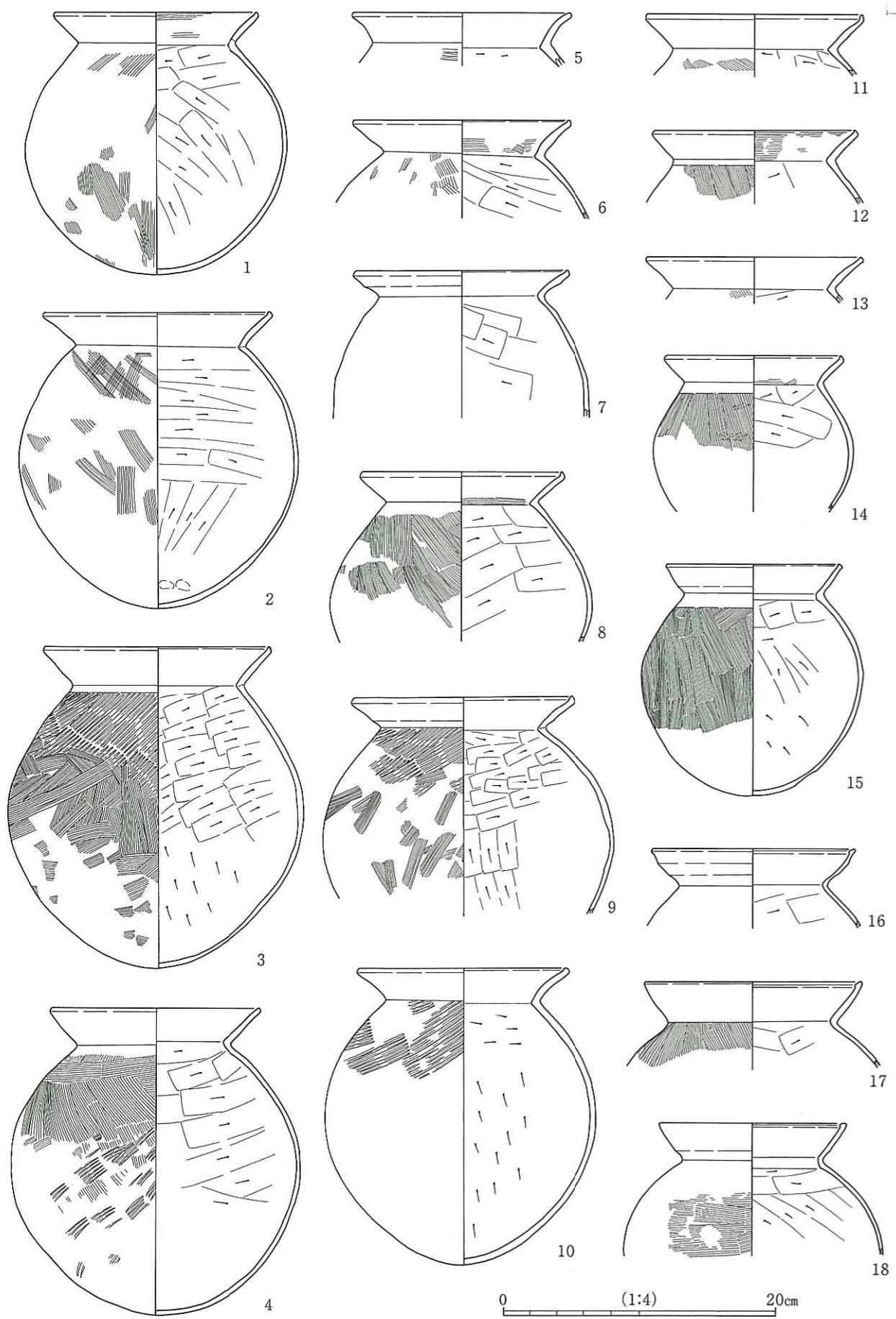


図41 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物5

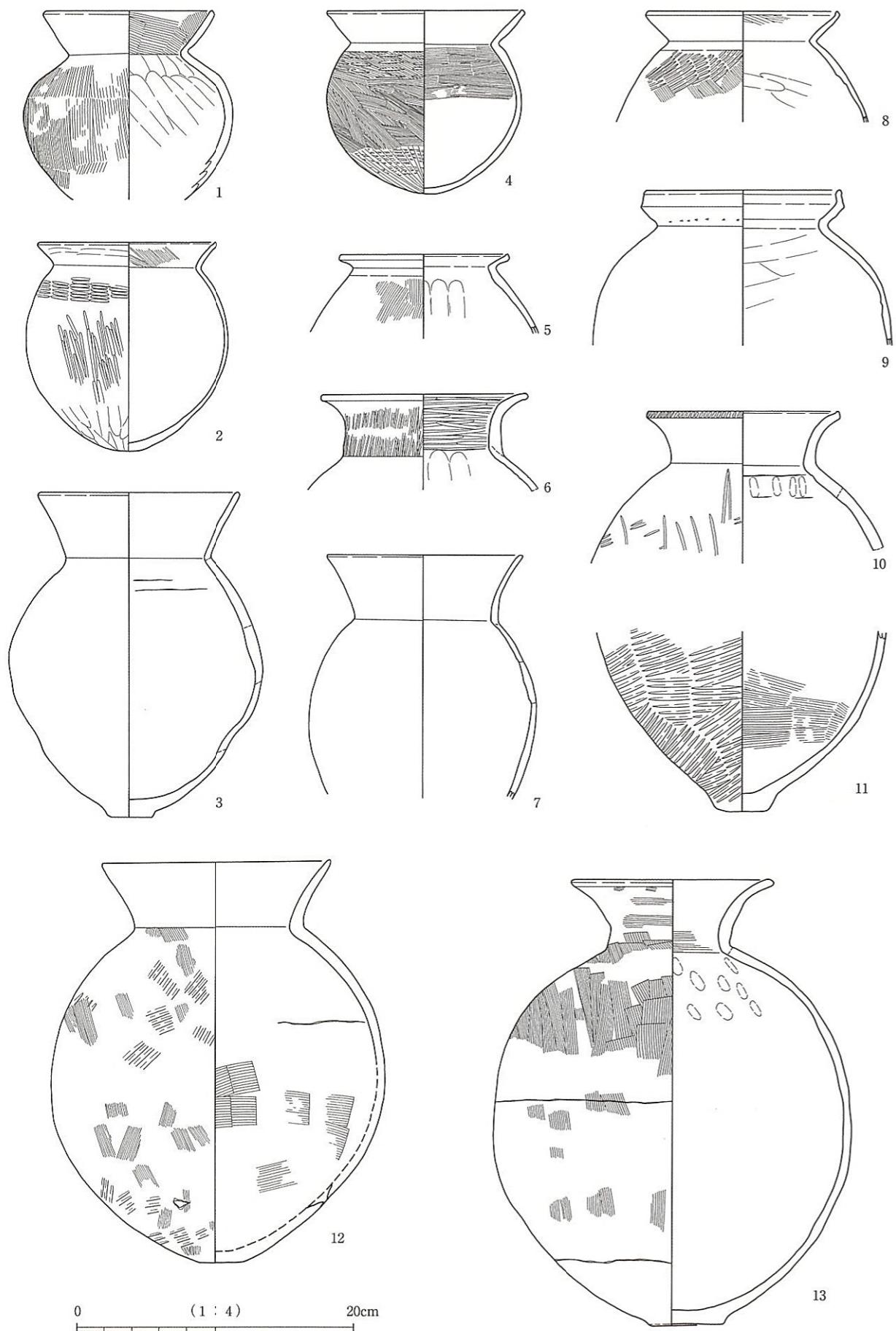


図42 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物6

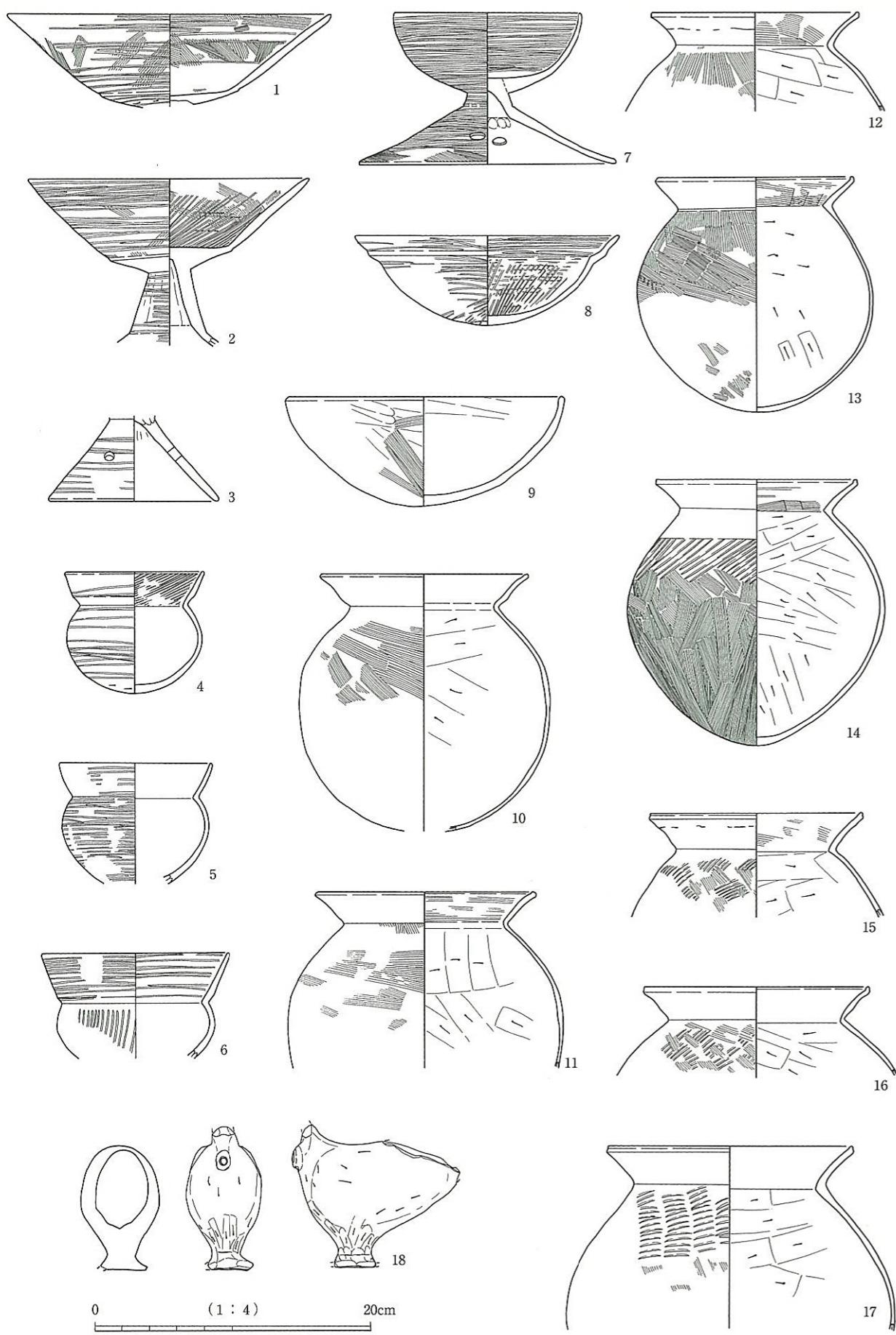


図43 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構122出土遺物7

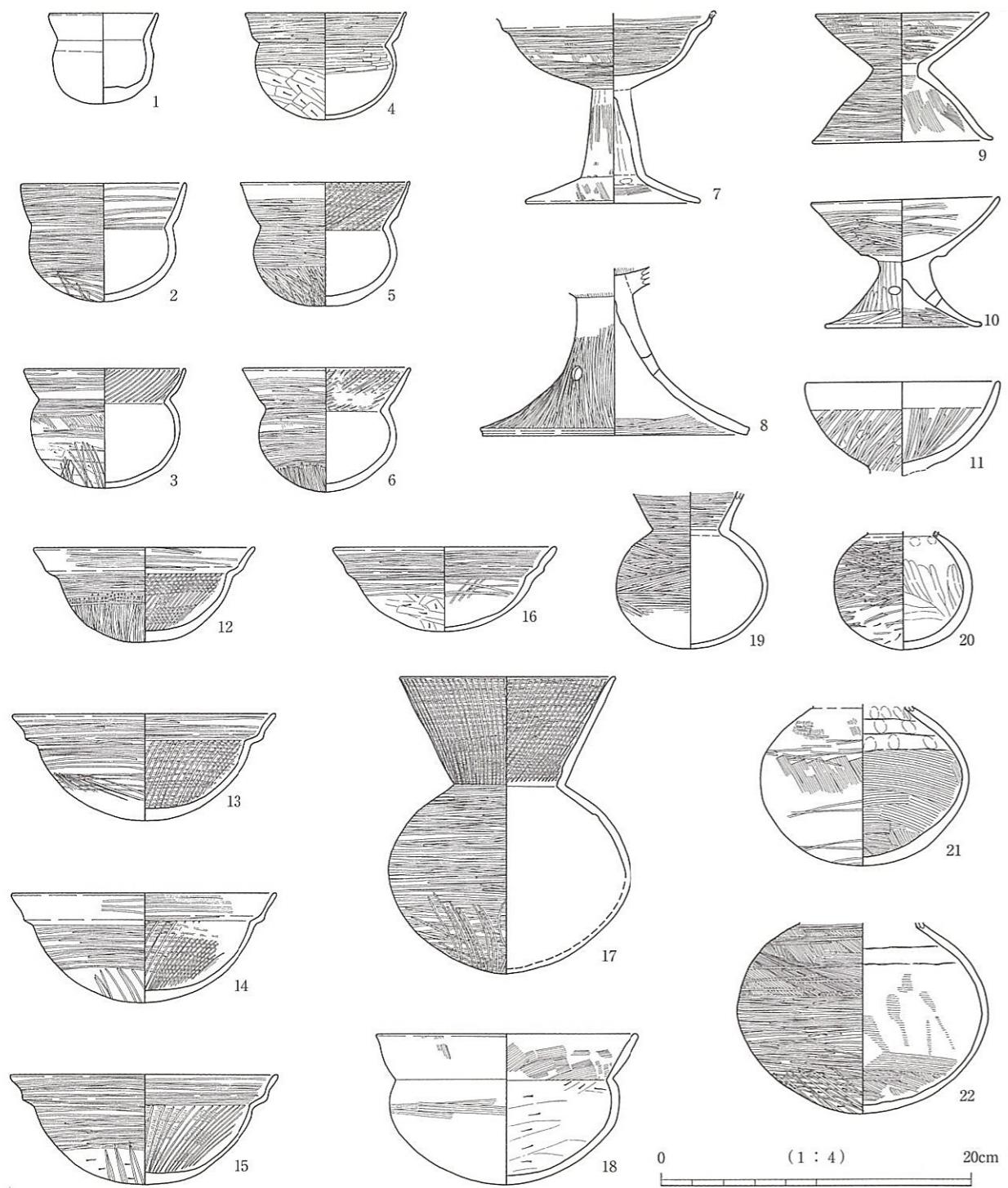


図44 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物1

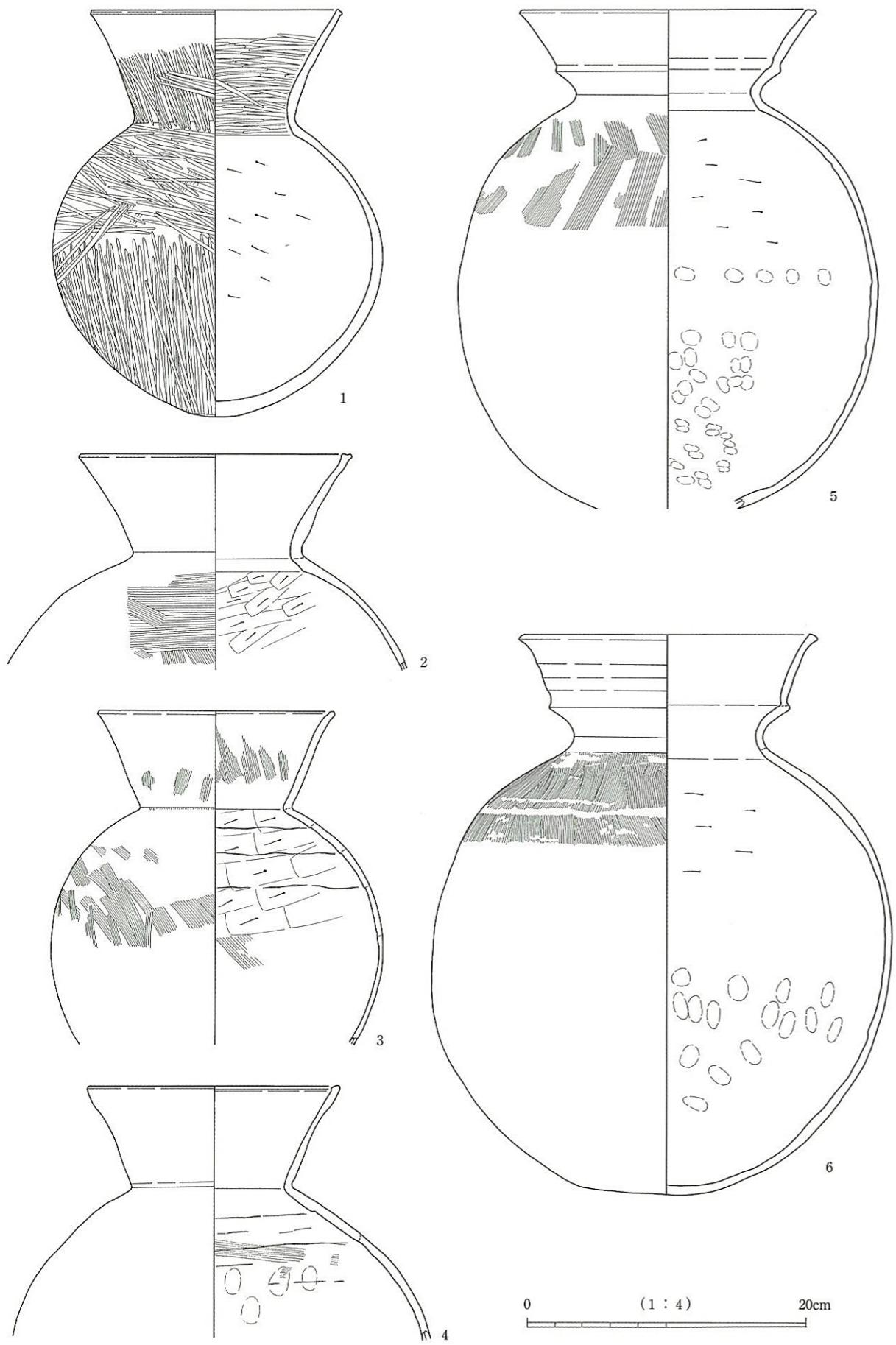


図45 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物 2

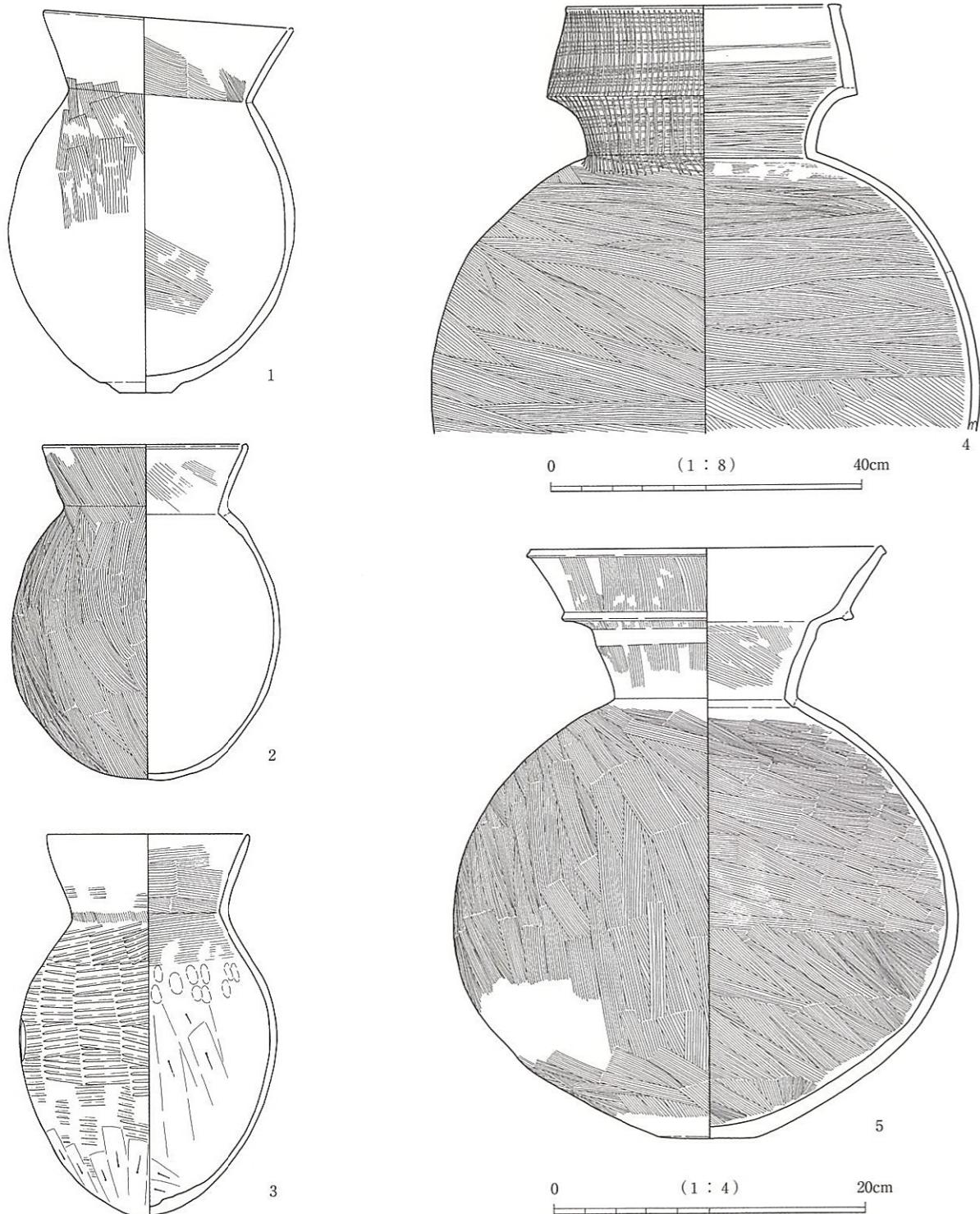


図46 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物3

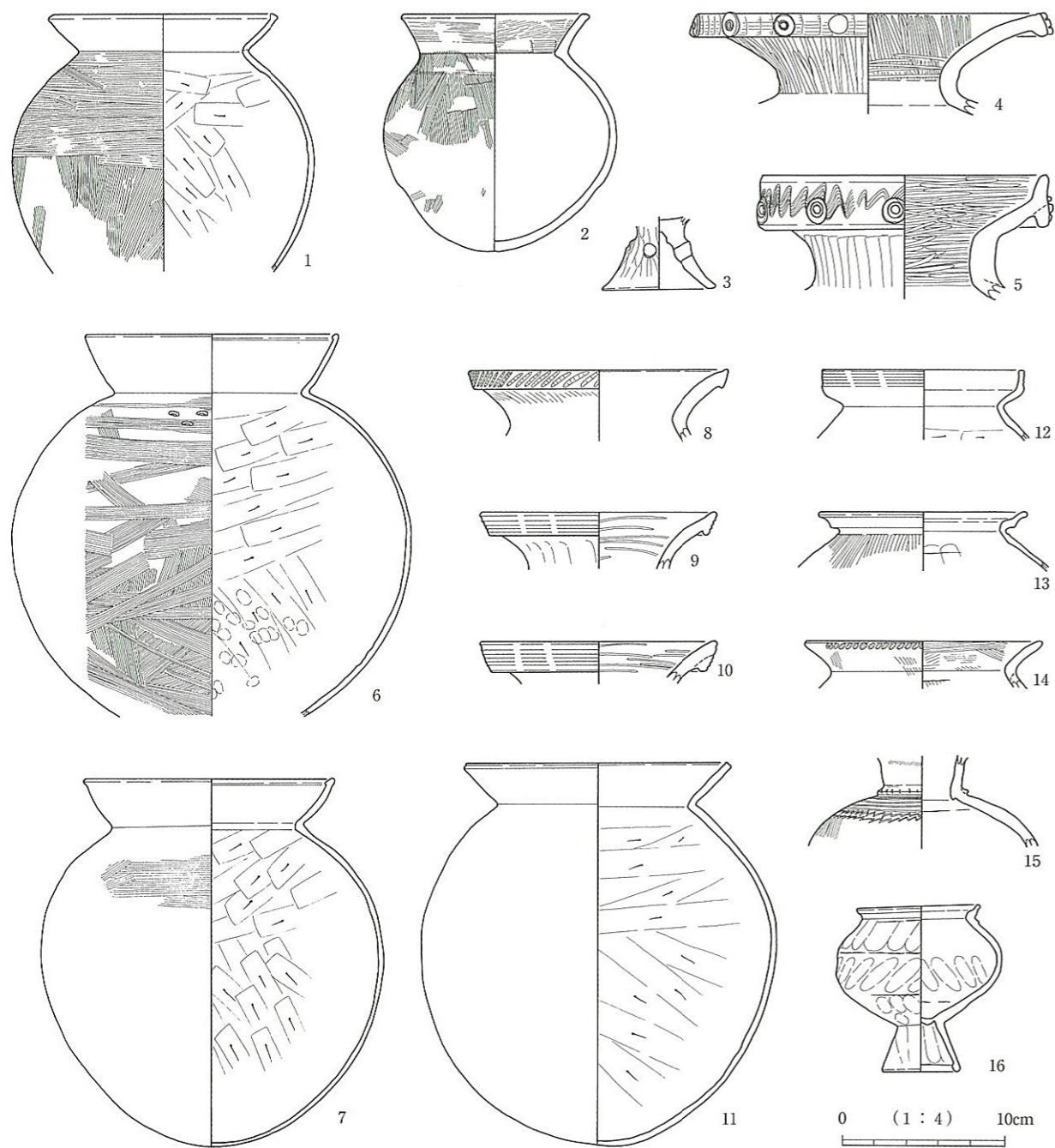


図47 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物4

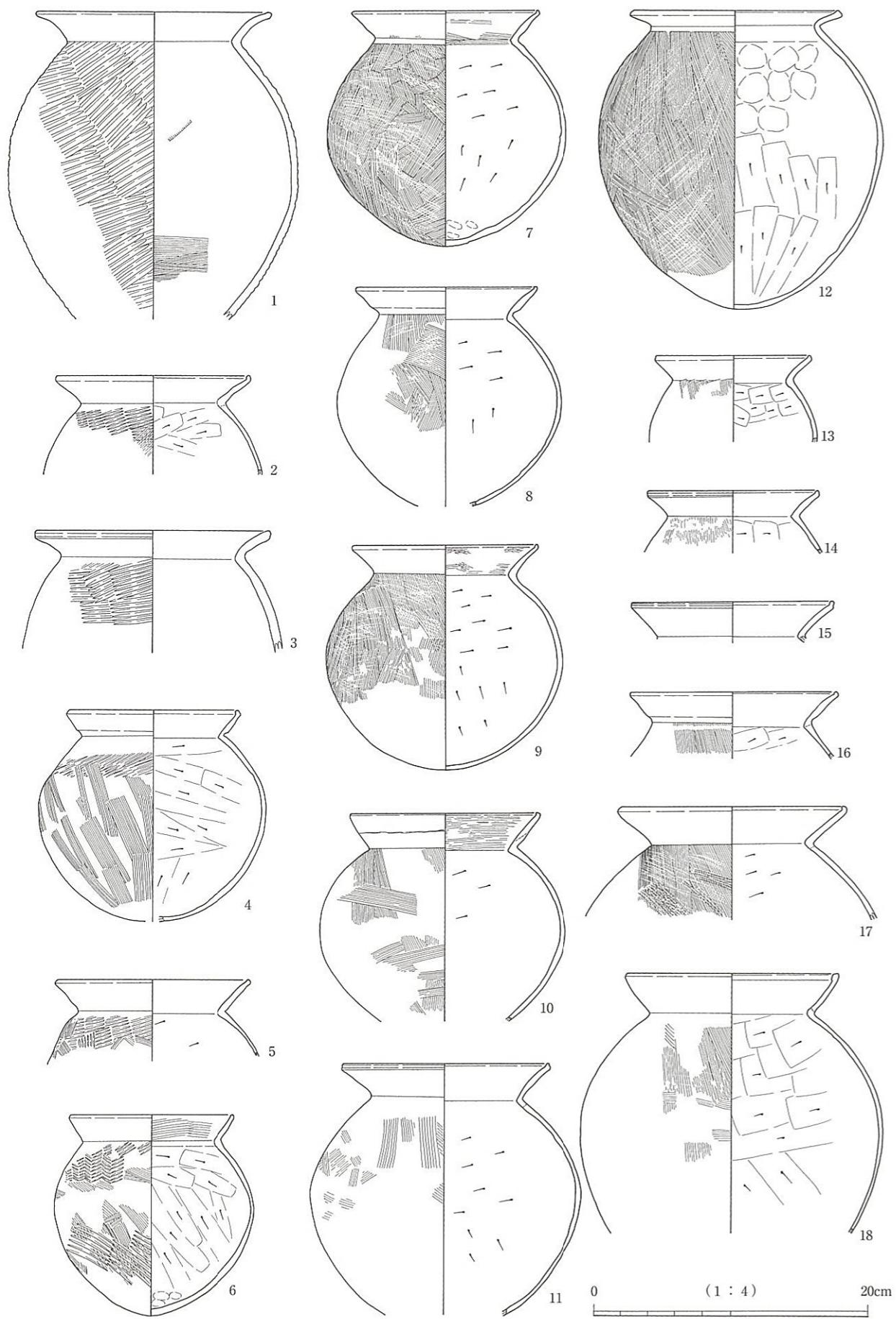


図48 96-1-1 トレンチ 第5面 遺構123出土遺物5

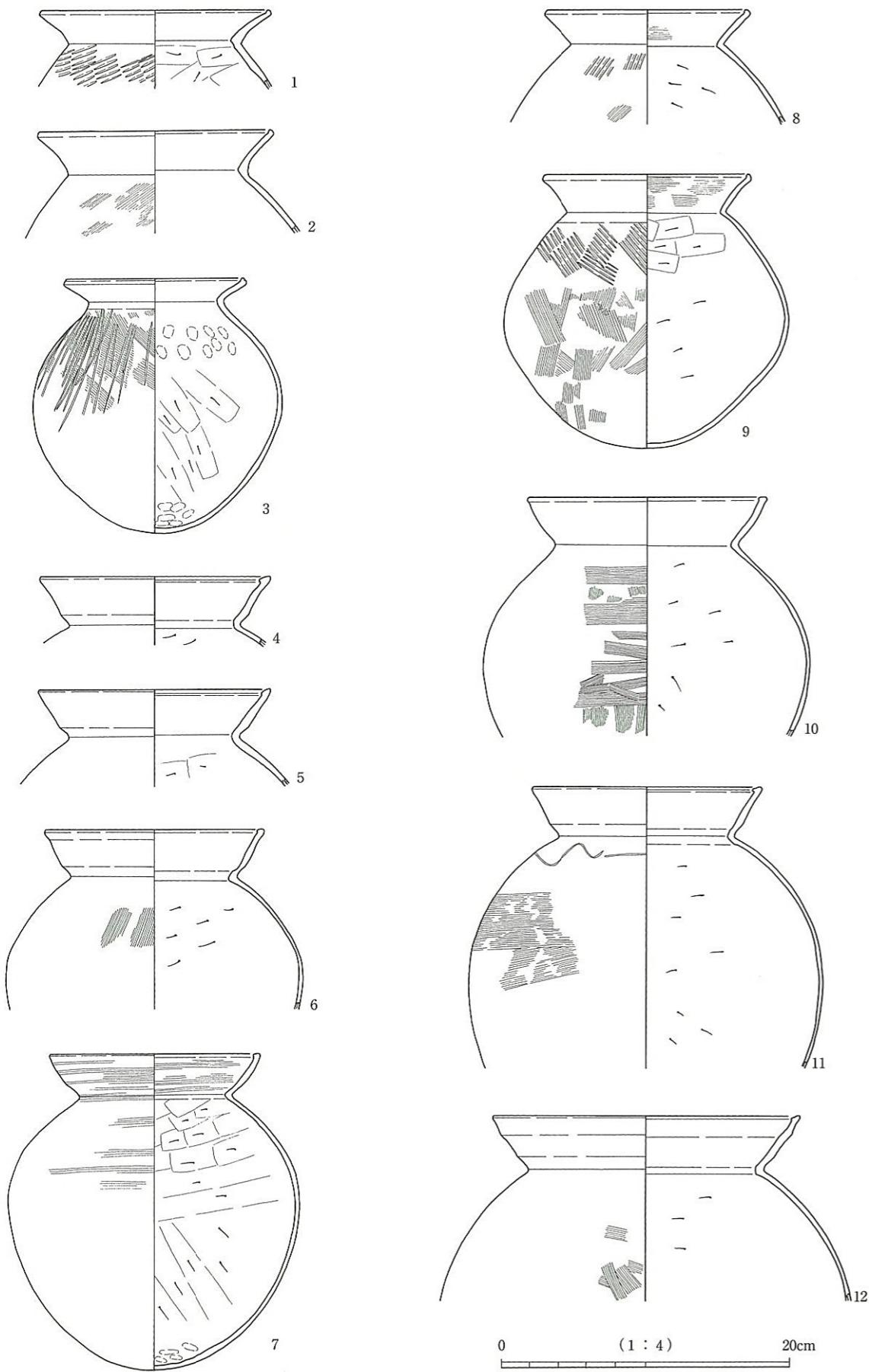


図49 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構185出土遺物1

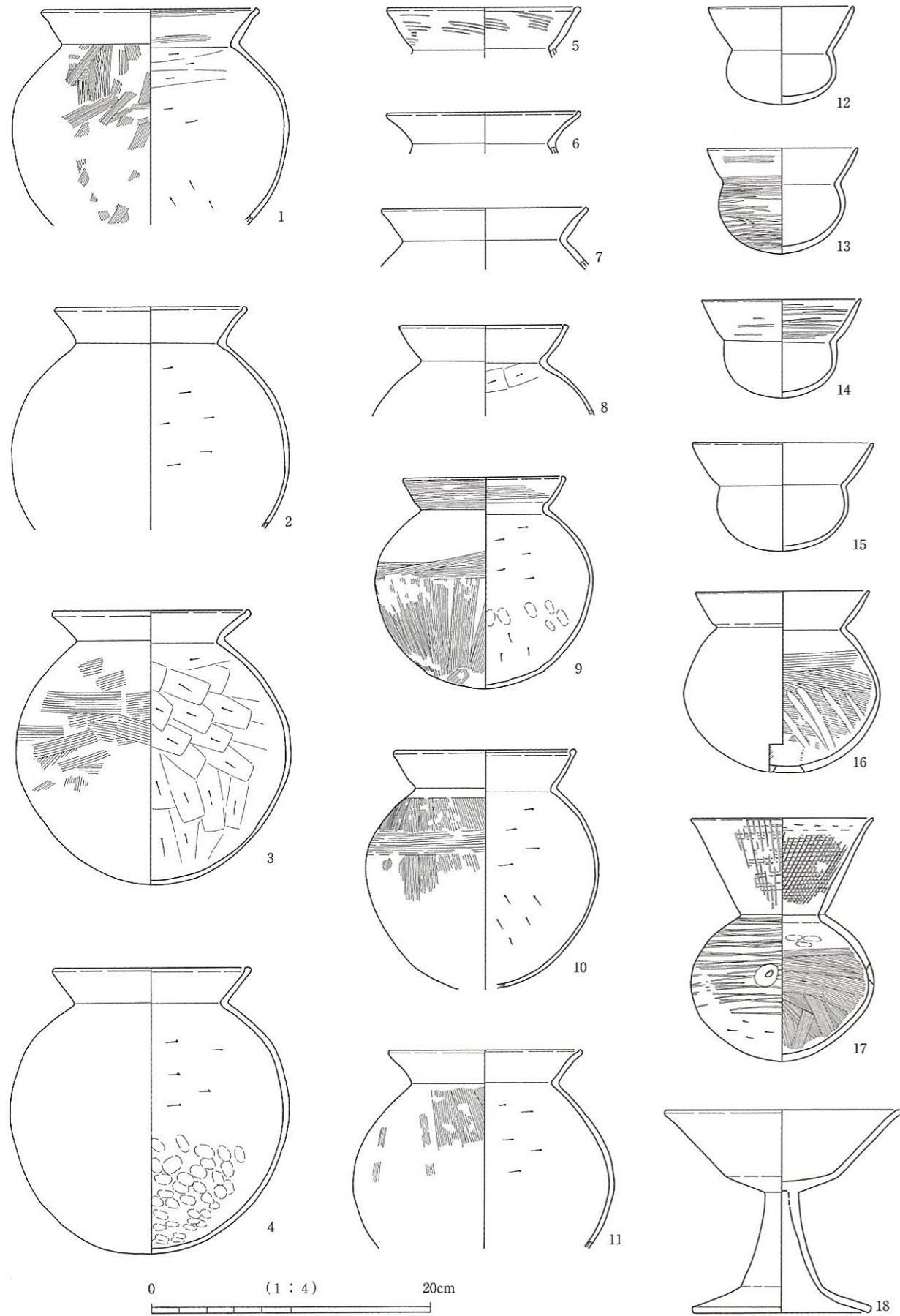


図50 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構185出土遺物 2

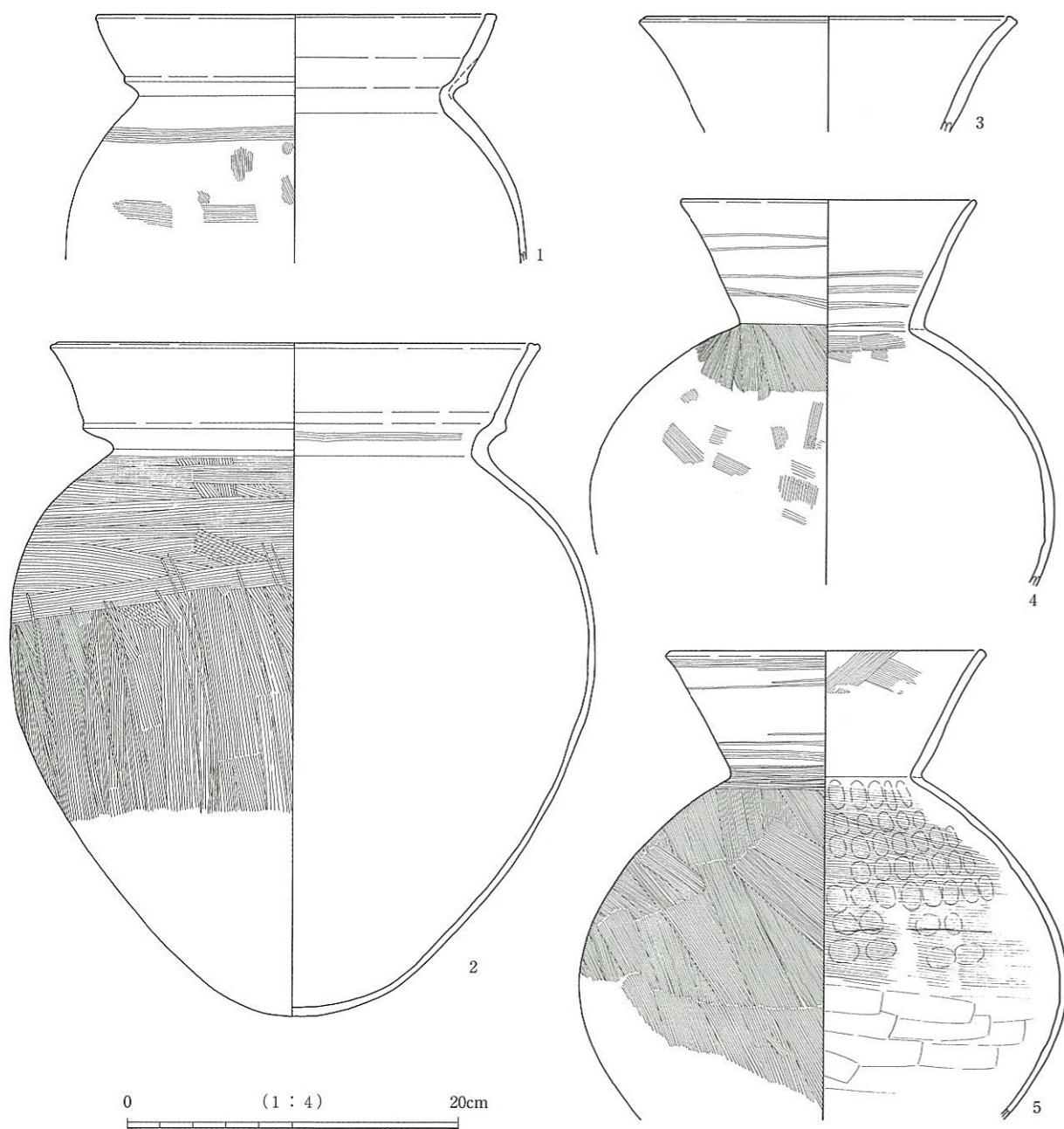


図51 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構185出土遺物 3

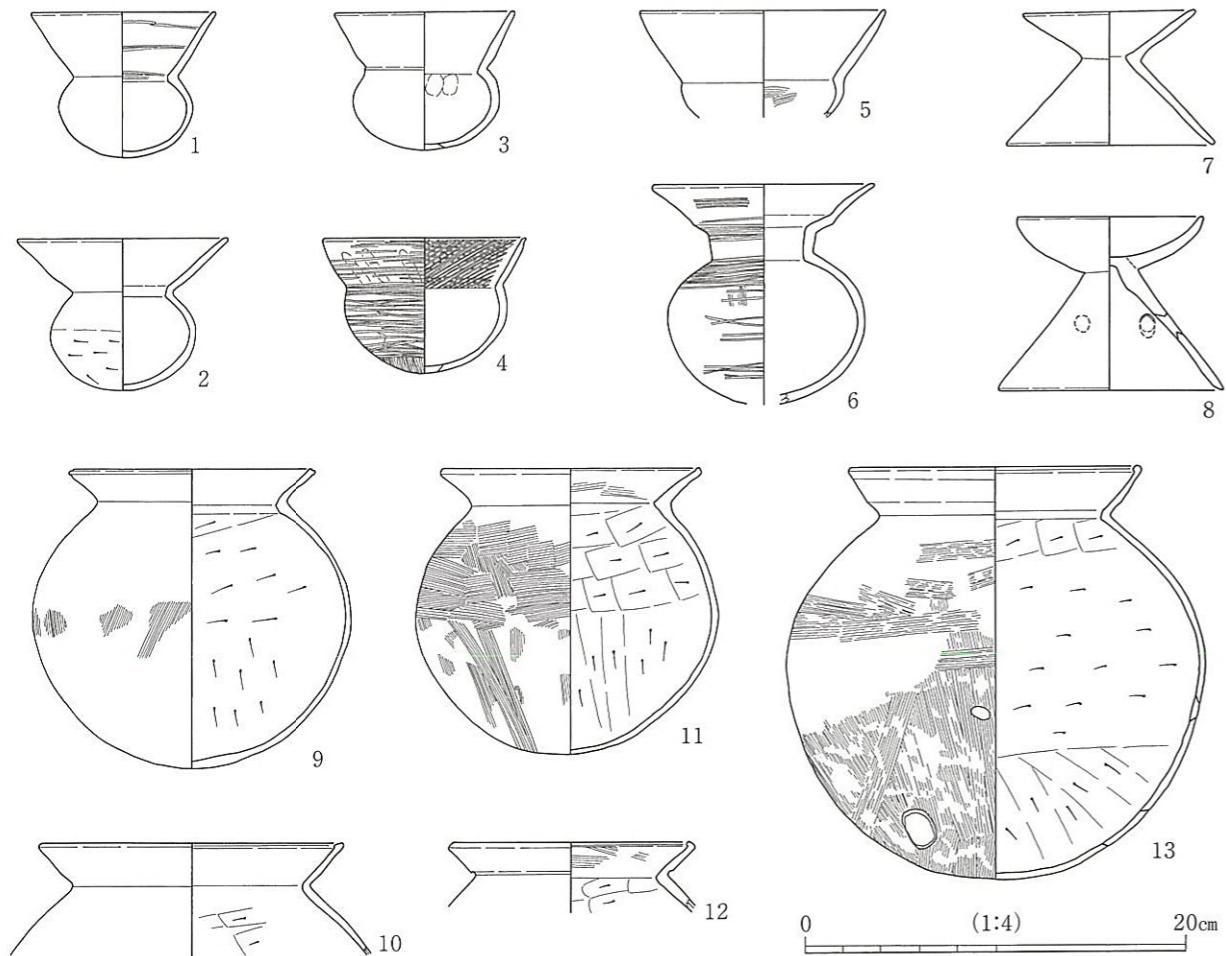


図52 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構186出土遺物

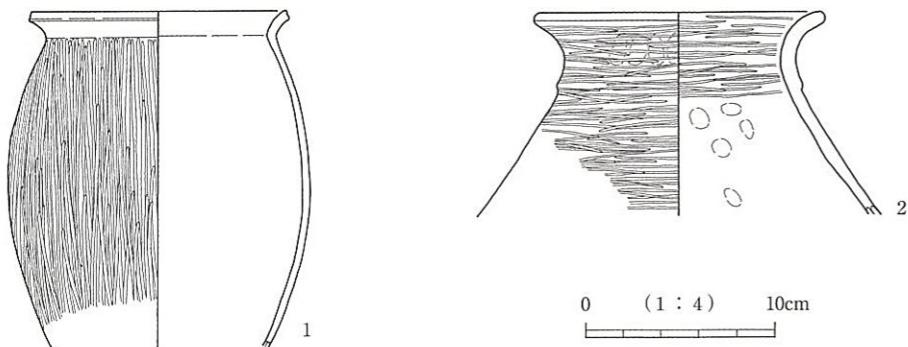


図53 96-1-5 トレンチ 第5-2面 遺構207 (1)・208 (2) 出土遺物

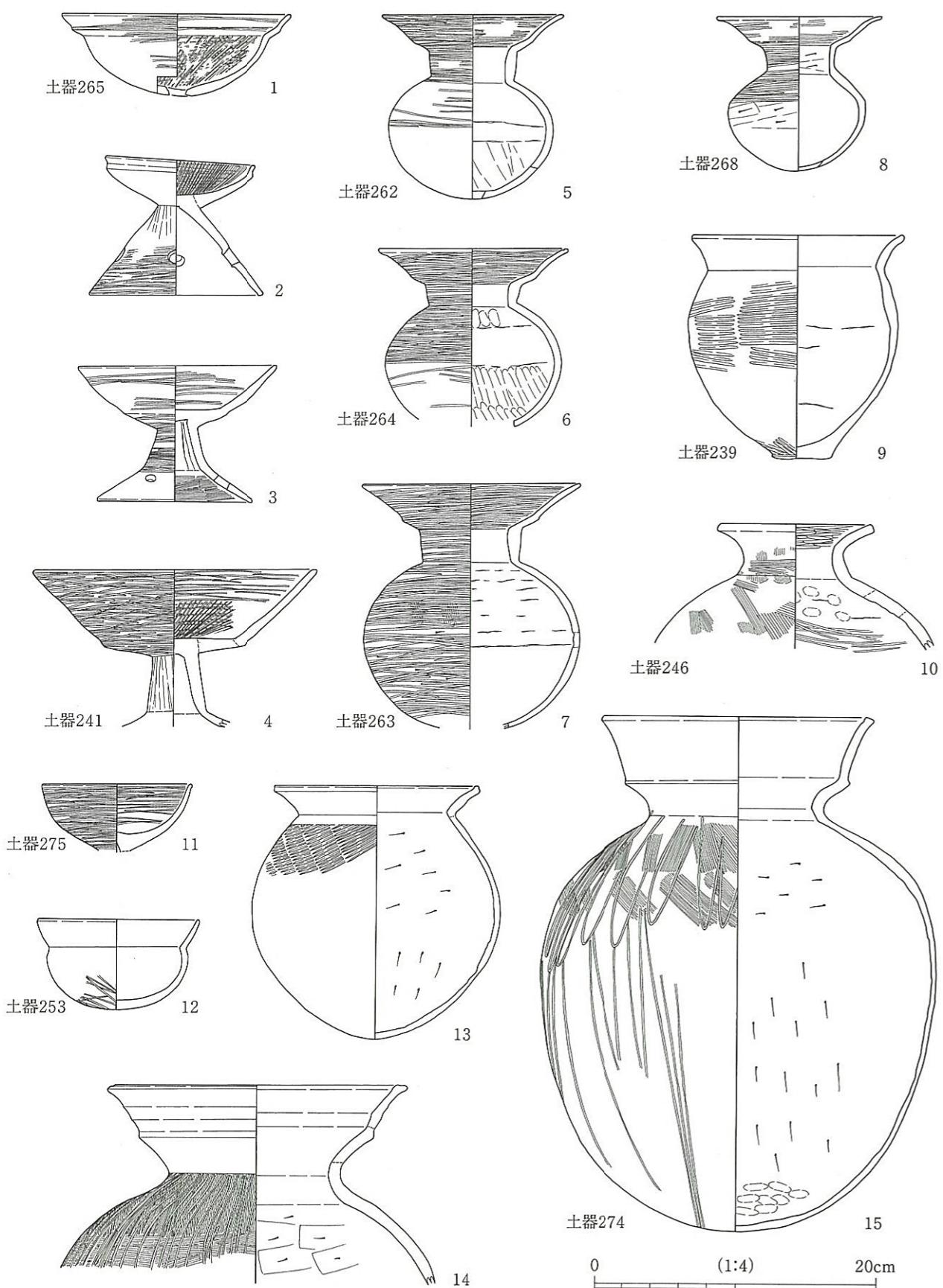


図54 96-1-5トレンチ 第5-2面 遺構207出土遺物

第6面・第6面ベース（図55～64、写真図版13～17）

第5面と同様に5層との間に自然堆積層がなく土壤化層が連続している。

96-1-1・2・3トレンチでは第6面で遺構は検出できず、6層を除去した第6面ベースで検出した。遺構131・141（溝）、遺構126・129・130（土坑）の他、土器が直線的に並んで出土した土器151～158・160～162がある。

96-1-5トレンチでは第6面で遺構209・210（土坑）遺構211（溝）を検出した。弥生時代中期面である。

遺構131（溝）は検出長5m、幅90cm、深さは約35cmを測る。南は遺構129（土坑）に切られている。遺物は出土しなかった。

遺構141（溝）は調査区北辺東西側溝を掘削中に検出した。側溝内に収まるため詳細は明らかではないが、残存長4m、深さ70cmを測る。肩部に平行して3点出土した遺物のうち、甕は上部から、高壙2点は中位からいずれも横位で出土した。高壙部下には穿孔が見られる。

遺構126（土坑）は平面不整橢円形の深い土坑である。下層では長辺95cm、短辺40cm、深さ5cm程度の橢円形となる、底面近くT.P.14.23m～14.25mでサヌカイト製石鏃が10点と剥片が出土した。

遺構129（土坑）は第4面遺構1（流路）肩部で検出した。平面不整橢円形で長径4m、短径2m、深さは1.1mを測る。遺物は完形に近いものが大半を占め、横位で下層から出土した。出土レベルはT.P.13m～13.4mである。62-1・2は体部下半に穿孔が見られる。

遺構130（土坑）は、遺構129の西側で検出した。南半は遺構（流路）に切られている。平面橢円形、長径約2.5m、短径1.7、深さは75cmを測る。遺物は3・4層境で土器片が出土した。

土器151～158・160～162は6層を掘削中に検出した。北端の土器151から土器162までの5点はほぼ南北方向に、土器154-1から南端の土器158は角度を違え北東から南西方向にそれぞれ並ぶ。

土器はいずれも横位の状態で出土した。土器底面のレベルは土器151（T.P.14.3m）、土器161（T.P.14.08m）、土器152（T.P.14.03m）、土器153（T.P.14.13m）、土器154-1（T.P.14.08m）、土器160（T.P.14.11m）、土器155（T.P.14.14m）、土器157-1（T.P.14.3m）、土器157-2（T.P.14.37m）、土器158（T.P.14.47m）、土器156（T.P.14.10m）、土器162（T.P.14.00m）、である。

第6層掘削中に遺物が並んで出土し、完形あるいはそれに近い状態であることから、遺構の有無を確認するために精査及び断面観察を行ったが、遺構であるという確証は得られなかった。

遺構209・210（土坑）は東側を第5-2面遺構207（溝）に切られている。遺構209は平面不整橢円形で長径3.5m、短径2.3m、深さは約80cmを測る。埋土は5層に分層でき、遺物は最上層から広口壺が出土した。

遺構210（土坑）は深さ25cm程度の不定形な遺構である。遺物は縄文晩期の浅鉢片がT.P.13.8mで出土した。便宜的に同一遺構平面図図61に弥生中期の直口壺を図示した。調査時には第6層出土遺物として認識している。土器底面レベルがT.P.14.27mと前述遺物とのレベル差は約50cmを測る。

遺構211（溝）は調査区東端で検出した。バチ形に広がる浅い溝である、深さは約15cmを測る。遺物は甕が2点出土した。

96-1-1 トレンチ第6面ベース遺構141出土遺物（図58）

遺構141の中層から出土した土器は図58に掲載している。58-1は甕で、胴部外面が縦方向の、胴部内面下半が縦方向、上半が横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。

58-2は垂下する口縁形態の高坏である。口縁部は内外面とも横方向の、坏・脚部外面は縦方向の、坏部内面は放射状後下半部のみ横方向のヘラミガキ調整によって仕上げられている。脚部内面中位には横方向にはヘラケズリ調整が行なわれている。58-3は、坏部が椀形で、脚部が柱状部から明確に屈曲して裾部が広がる形態の高坏である。坏部内外面とも、放射状後上位のみ横方向のヘラミガキ調整、脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。脚裾部内面にはハケ調整痕が残存している。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。図示した3点の当遺構出土土器は、いずれも弥生時代中期中葉後半の所産と考えることができる。

96-1-1 トレンチ第6面ベース遺構129出土遺物（図62）

遺構129から出土した土器群は、図62に掲載している。62-1,4は、胴部下位に屈曲部をもち、口縁部を垂下させて端面を形成する形態の広口壺である。いずれも、口縁端面・頸～胴部外面に櫛描簾状文を施している。62-4では外面の櫛描文帯の最下段に扇形文を施している。いずれも、胴中～下位外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。いずれも、角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。

62-5も頸部の長い広口壺で、頸部～胴部上半外面に直線文・簾状文を施している。簾状文2帯は胴～頸部の境界に配されている。胴中～下位外面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。

62-2,3は無文の広口壺である。62-2は胴部外面がハケ調整された後、下半部のみヘラケズリ調整が行なわれている。62-3は、胴～頸部外面がヘラミガキ調整で仕上げられている。これら遺構129出土土器群は中期中葉の所産と考えられる。

96-1-5 トレンチ第6面遺構209,211出土遺物（図63）

遺構209からは63-1,3が出土している。63-3は、口縁部が稜をもちながら外反気味に直立する形態の浅鉢である。体部下半外面はヘラケズリ調整、口縁部外面と内面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。縄文時代晩期後半、口酒井式段階の浅鉢と考えられる。63-1は、算盤玉形の胴部に長い頸部をもつ広口壺で、垂下した口縁端部に波状に刻目を施している。頸～胴部上半外面には櫛描直線文・扇形文が施されており、各櫛描文帯間隔にはヘラミガキ調整が施されている。胴部下半外面および口縁部内面にもヘラミガキ調整が行なわれている。形態・文様構成から弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。

遺構211からは63-2,4が出土している。いずれも、短く側方に延び端面を形成する形態の口縁部をもつ甕で、63-2は中型品、63-4は大型品である。体部外面は主に縦方向のヘラミガキ調整、口縁部～体部内面は横～斜め方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。2点とも、弥生中期中葉前半の所産と考えられる。

66-2は小型の直口壺で、第6面からの出土品である。頸部～胴部上半には櫛描直線文が連続的に施され、最下段には櫛描波状文が配されている。弥生中期中葉前半の所産と考えられる。

96-1-1 トレンチ第6面ベース遺構126出土石器（図67）

遺構126から出土した石器は、図67に掲載している。いずれもサヌカイト製の打製石器である。67-

1,2は有茎式石鏃で、いずれも茎部は欠損している。67-1は作用部が正三角形に近い形状で、67-2は作用部が縦長で全体に平面が菱形に近い形態である。どちらも、片面に主要剥離面が残存し、断面形態はレンズ形である。67-3,4,5,6,7,8は平面柳葉形の石鏃である。67-3,4,5,7は基部が欠損していて全体形態は不明である。67-3,4,5の小型品では、全面に調整剥離が及んでいる。一方、67-6,7,8のやや大きめの柳葉形石鏃は側縁に調整剥離を行うものの、片面には主要剥離面が残存している。特に、67-6は非常に薄く、湾曲した剥片を用いて製作されている。67-9は、長さ約2.9cm、幅約1.7cmと大型の平基式石鏃である。両面とも側縁に調整剥離を行うものの、主要剥離面が残存している。断面も平たい形状で、薄い剥片を用いて製作されたと考えられる。67-10は両側に小突起を持つ形状のサヌカイト製刃器である。先端部や基部が欠損しているため定かではないが、奈良盆地の弥生時代打製石器に一般的な「石小刀」に類似した形態のものと考えられる。ただし、現状での残存部分の形態からは、定型的な石小刀のように全体に湾曲した形状になるとは考えにくい。直線的に延びる尖頭器上の体部の左右に小突起を作り出す形態であったと推定できる。以上の打製石器はいずれも弥生時代中期後半の所産と考えられる。

96-1-1 トレンチ第6面ベース出土土器（図65・66）

第6面ベース・6層からは多量の弥生中期土器が出土しており、図65・66に掲載している。65-9は、長頸の広口壺で頸～胴上半部外面に櫛描直線文を連続的に施し、一部に縦方向に櫛描直線文を施す。口縁部は小さく垂下し、端部に刻み目が施されている。胴部下半外面は斜め方向のヘラミガキ調整で仕上げられる。弥生中期中葉前半の所産と考えられる。65-10は、口縁端部を上下に拡張する形態の広口壺で、口縁端面に櫛描簾状文、胴～頸部には櫛描簾状文と最下段に波状文、口縁部内面に櫛描列点文が施されている。胴部下半外面はヘラミガキ調整で仕上げられている。弥生中期中葉後半の所産と考えられる。

65-1,2,3,8,66-6は口縁部を垂下させて端面を形成し、胴部最大径を著しく下位に持つ形態の広口壺である。65-1,2は頸部が細くしまり、65-3,8,66-6は頸部が太い形態である。いずれも、口縁部・胴～頸部に櫛描簾状文を中心に施され、櫛描文帯間と胴部下半外面ヘラミガキ調整で仕上げられている。66-6は胴部が球形に近く、それ以外では最大径部位で胴部が明確に屈曲している。前者では扇状文が最下段に配されることから弥生中期中葉前半、後者は櫛描文原体幅が広く円形浮文などを貼付することから弥生中期中葉後半の所産と考えられる。いずれも、角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。

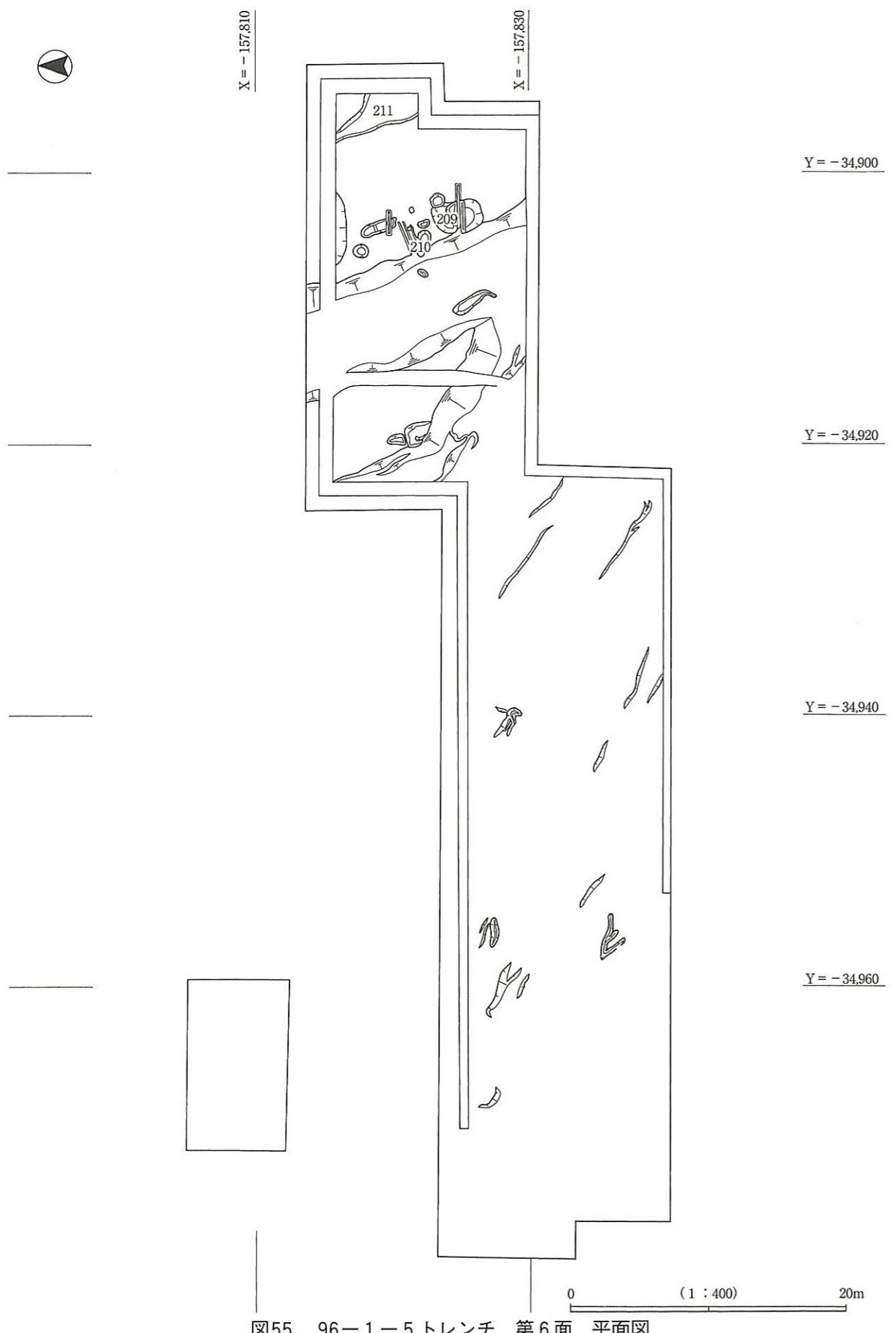
65-5,6,7,66-10,14,15は無文の広口壺である。65-7は長頸で、頸部・胴部下半外面は縦方向の、胴部中位は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。66-10,65-5,6は頸部の短いタイプで、内外面ともにヘラミガキ調整で仕上げられる。いずれも、弥生時代中期前葉の所産と考えられる。

65-4は、大型の細頸壺である。頸～口縁部しか残存していないが、口縁部付近は櫛描列点文と円形浮文、頸部には簾状文が施されている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。その他の壺類では、頸部以上が欠失した66-16があり、胴部上半に櫛描流水文が施されている。流水文は縦形に展開するもので、弥生時代中期中～後葉に位置付けられる文様構成である。胴部中～下位にはヘラミガキ調整が行なわれている。

66-2,13は水差形土器である。66-2は、頸部～胴部上半に櫛描直線文と列点文が施され、胴部中～下位にはヘラミガキ調整が施されている。66-13は、胴部最大径を著しく下位にもつ器形で、頸部が

列点文、胴部が簾状文により加飾が行なわれている。角閃石・長石・石英の角礫を多く含む「生駒西麓産」胎土で製作されている。いずれも、弥生時代中期中葉後半に位置付けられる。

66-1は口縁端部に上方を向いた面をもつ高坏である。外面全体と坏部内面にヘラミガキ調整を施している。66-7は、口縁部が緩やかに外反する形態の甕である。内外面は、ヘラミガキ調整で仕上げられている。66-11は、上面に平面橢円形の突起が多数貼付された蓋である。中央部分の突起は特に大きく、つまみの機能を持っていたと思われる。明確な時期は不明であるが、弥生時代前期～中期前葉の所産と考えられる。また、66-17は、縦長の袋形の小型土器で、いわゆる「瓢形土器」と呼ばれるものである。斜めにカットされた口縁部の直下に小さな円孔が穿たれている。外面上半には横型の櫛描流水文が施されている。流水文の手法から、弥生時代中期前葉の所産と考えられる。



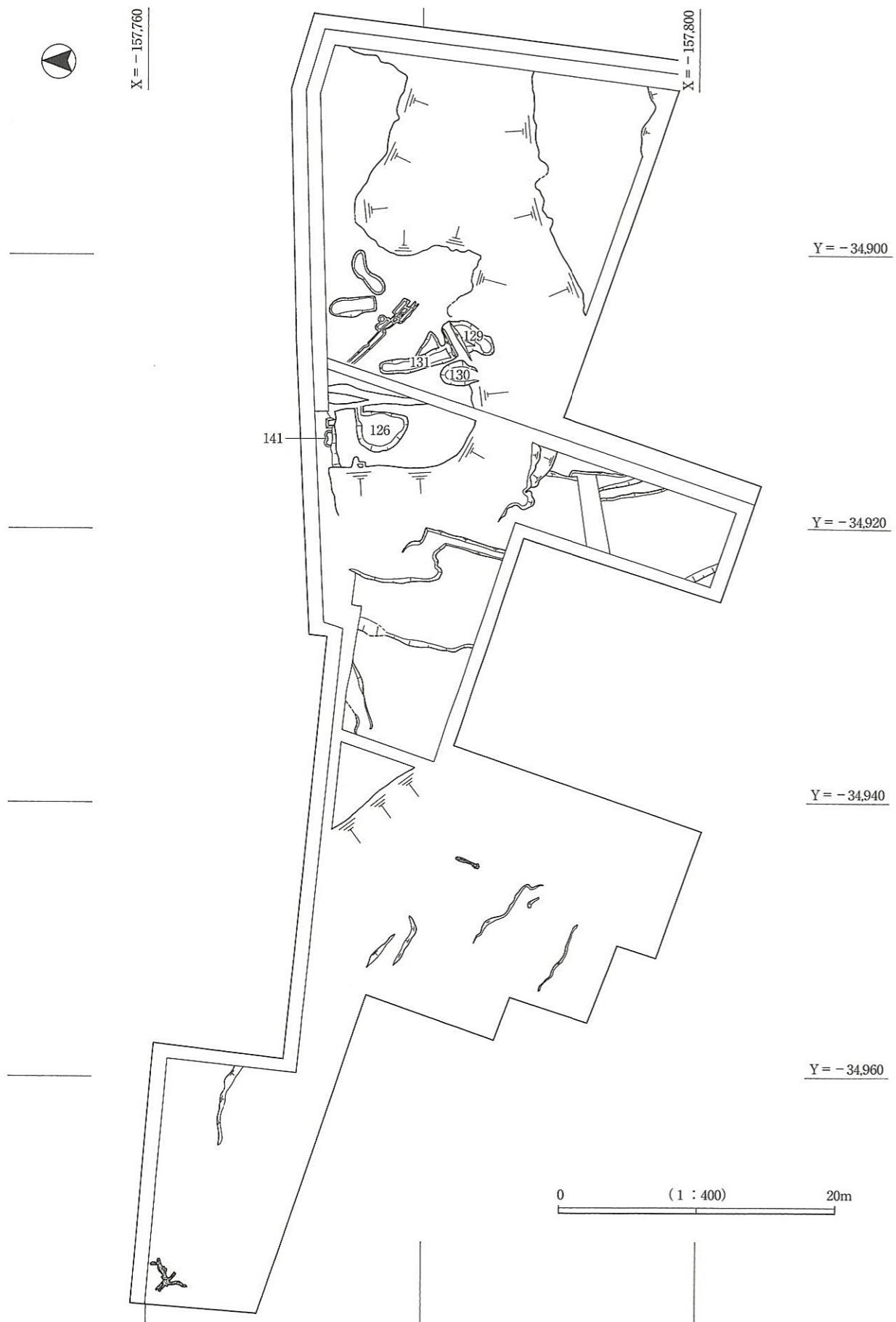


図56 96-1-1・2・3 トレンチ 第6面ベース 平面図

1. 75Y4/2 黒オリーブ 細砂混じりシルト粘土小塊 (0.3~0.8cm) 合t:
2. 56Y4/1 黒オリーブ灰 極細砂混じりシルト炭化物細砂含む

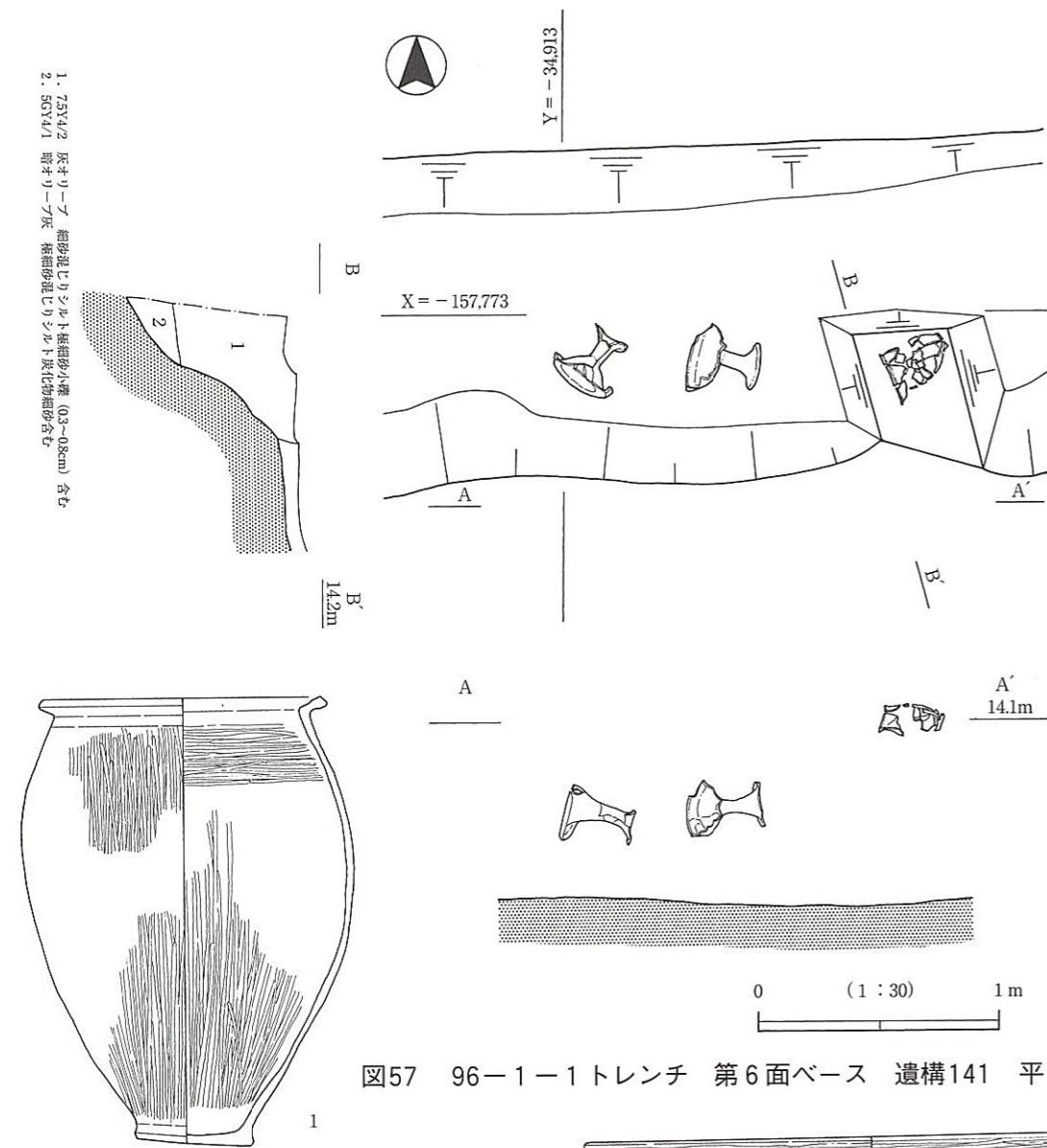


図57 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 遺構141 平・断面図

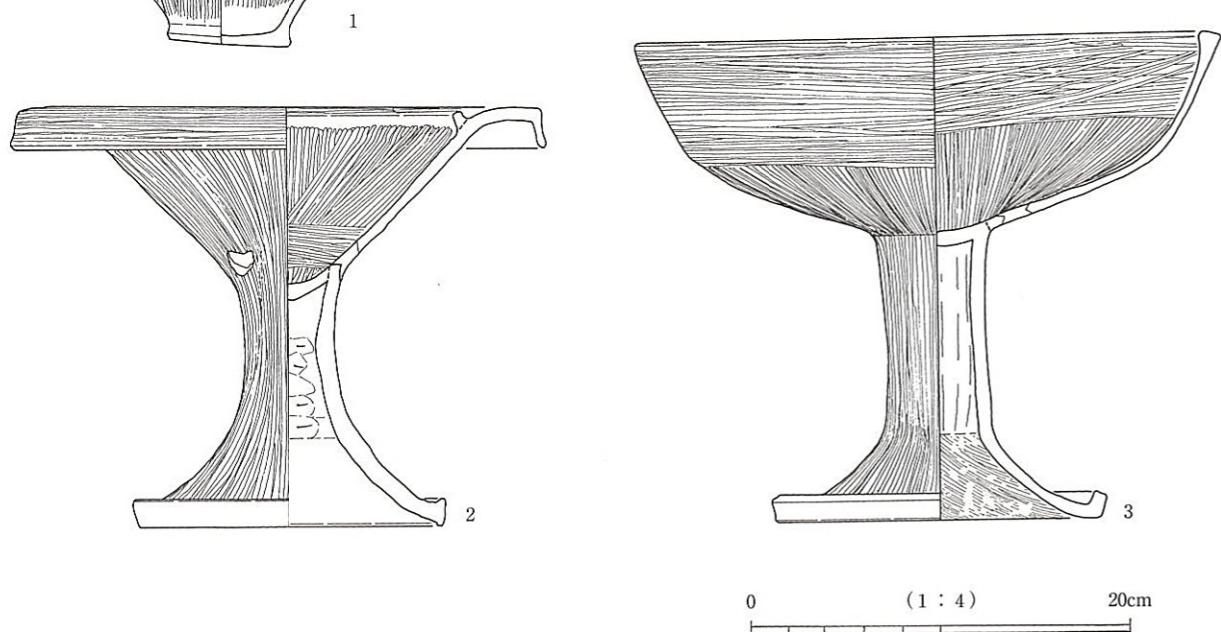


図58 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 遺構141 出土遺物

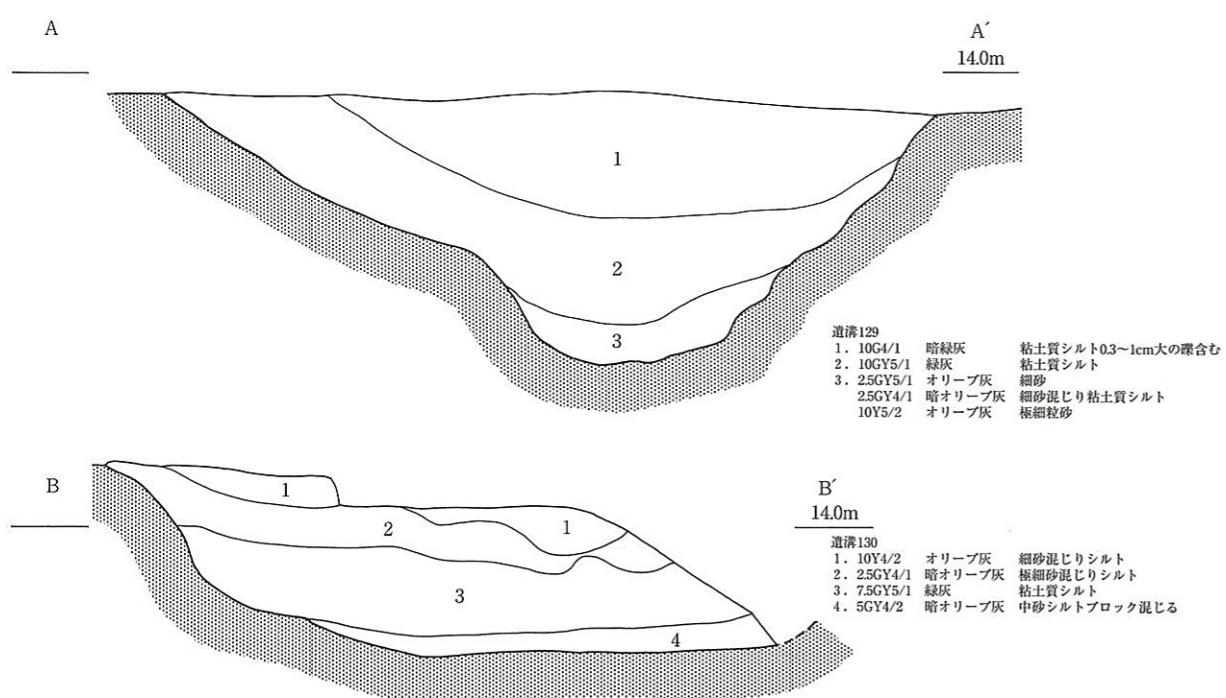
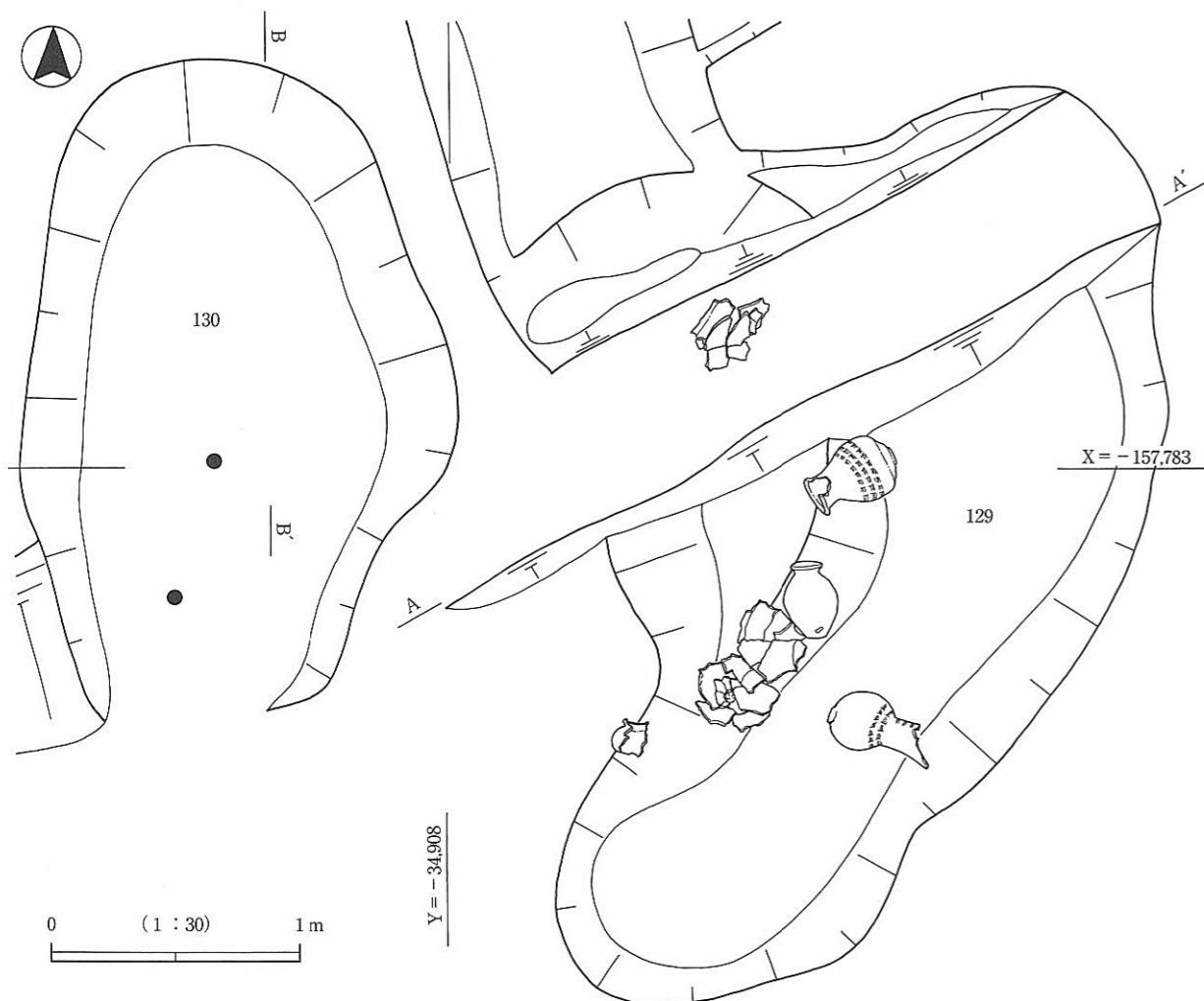
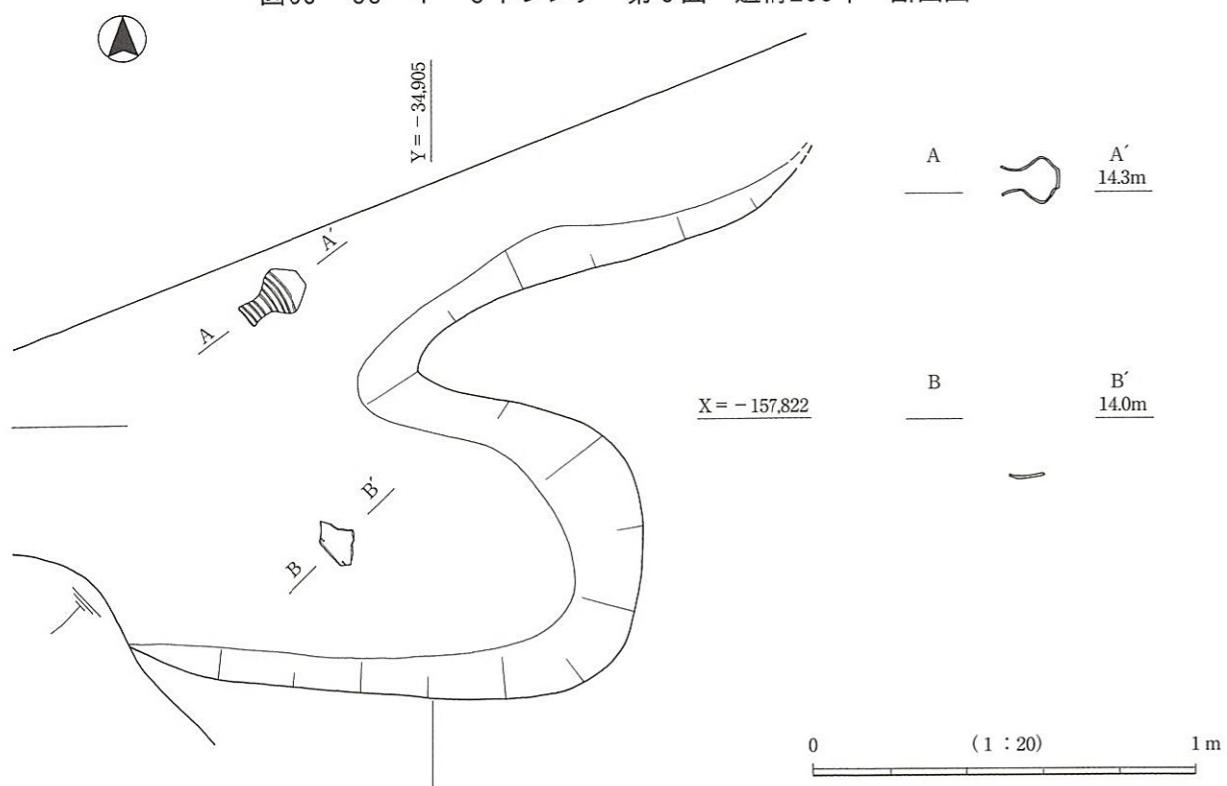
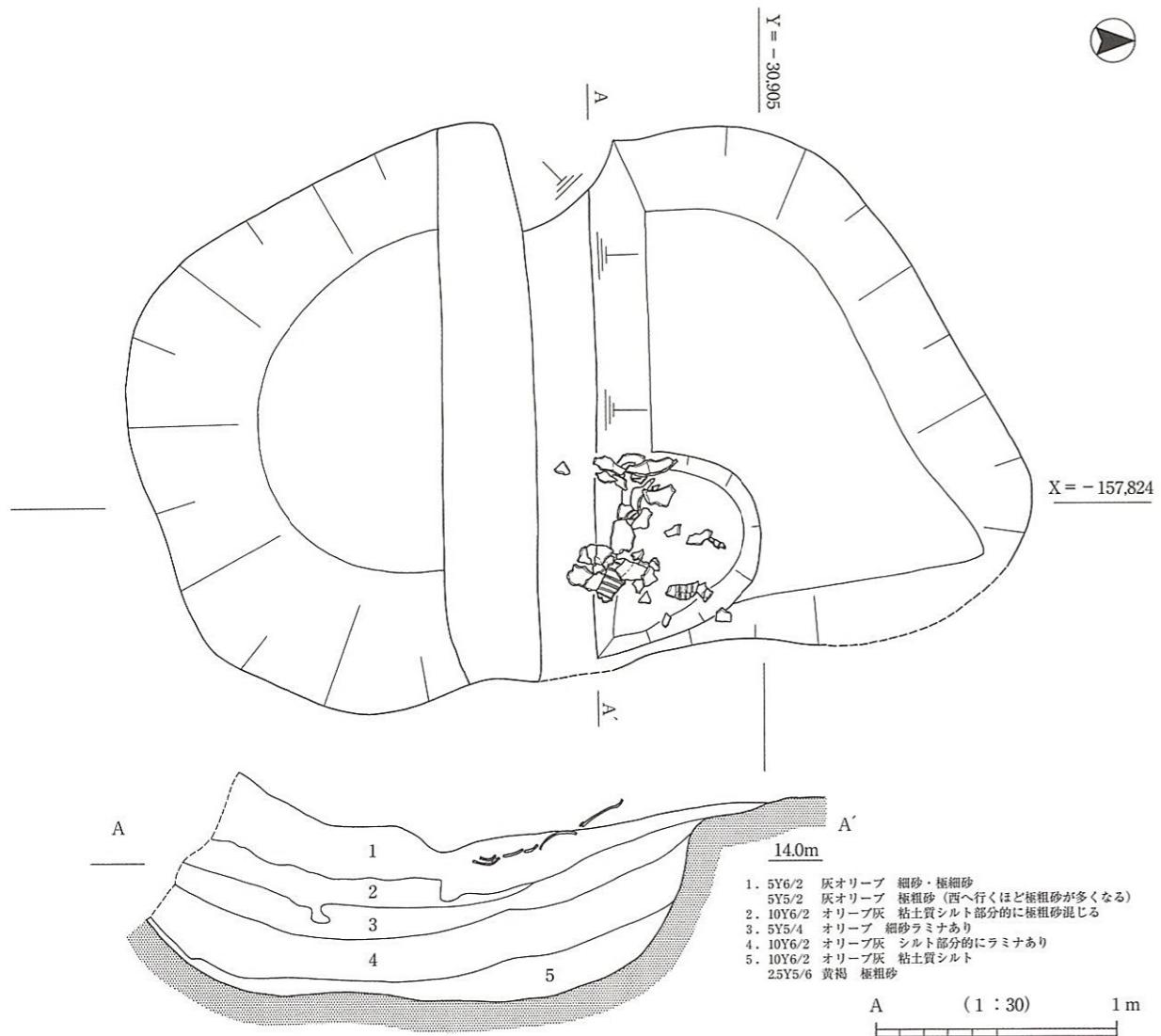


図59 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 遺構129・130 平・断面図



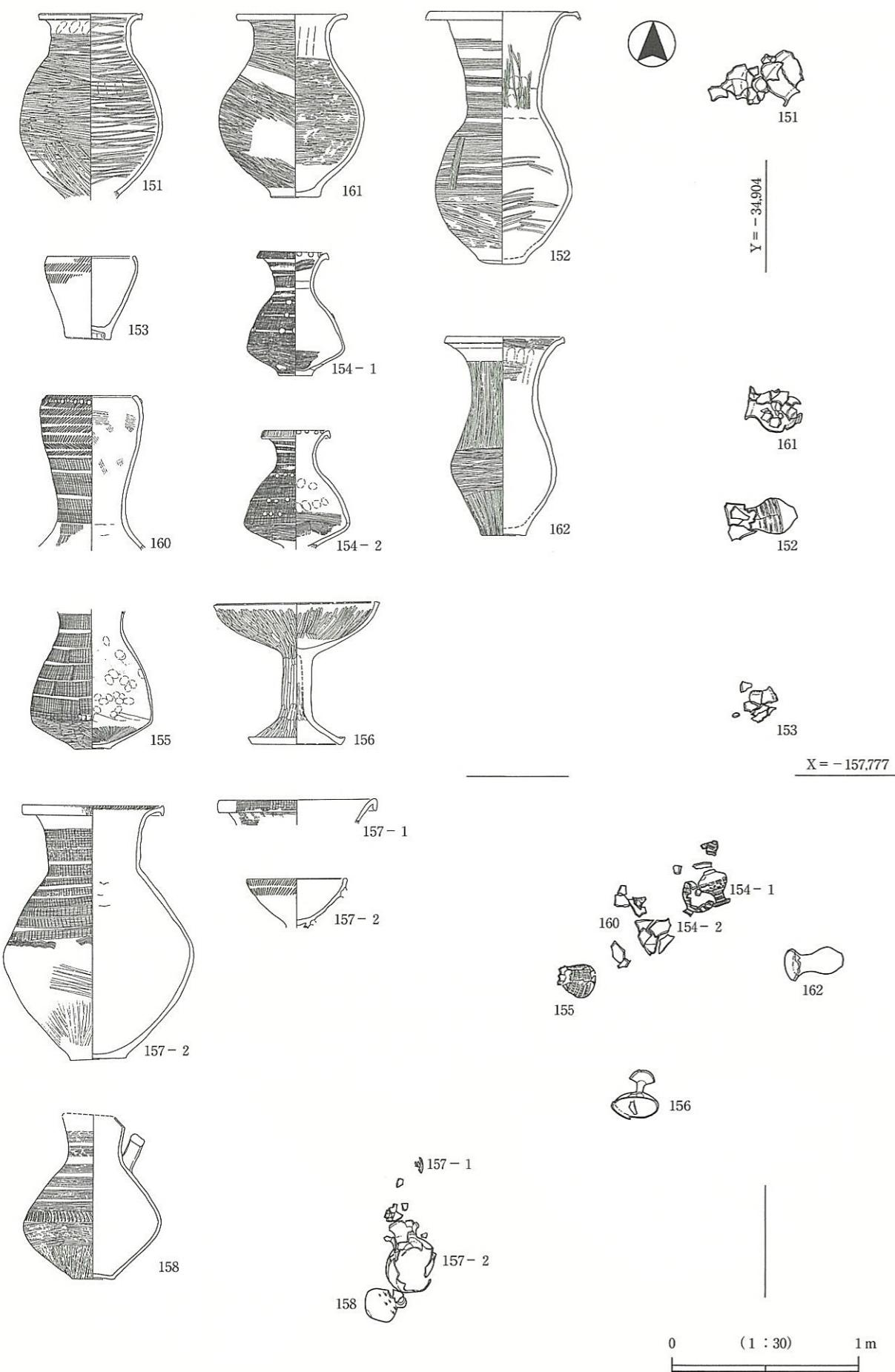


図64 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 土器151~158、160~162出土状況

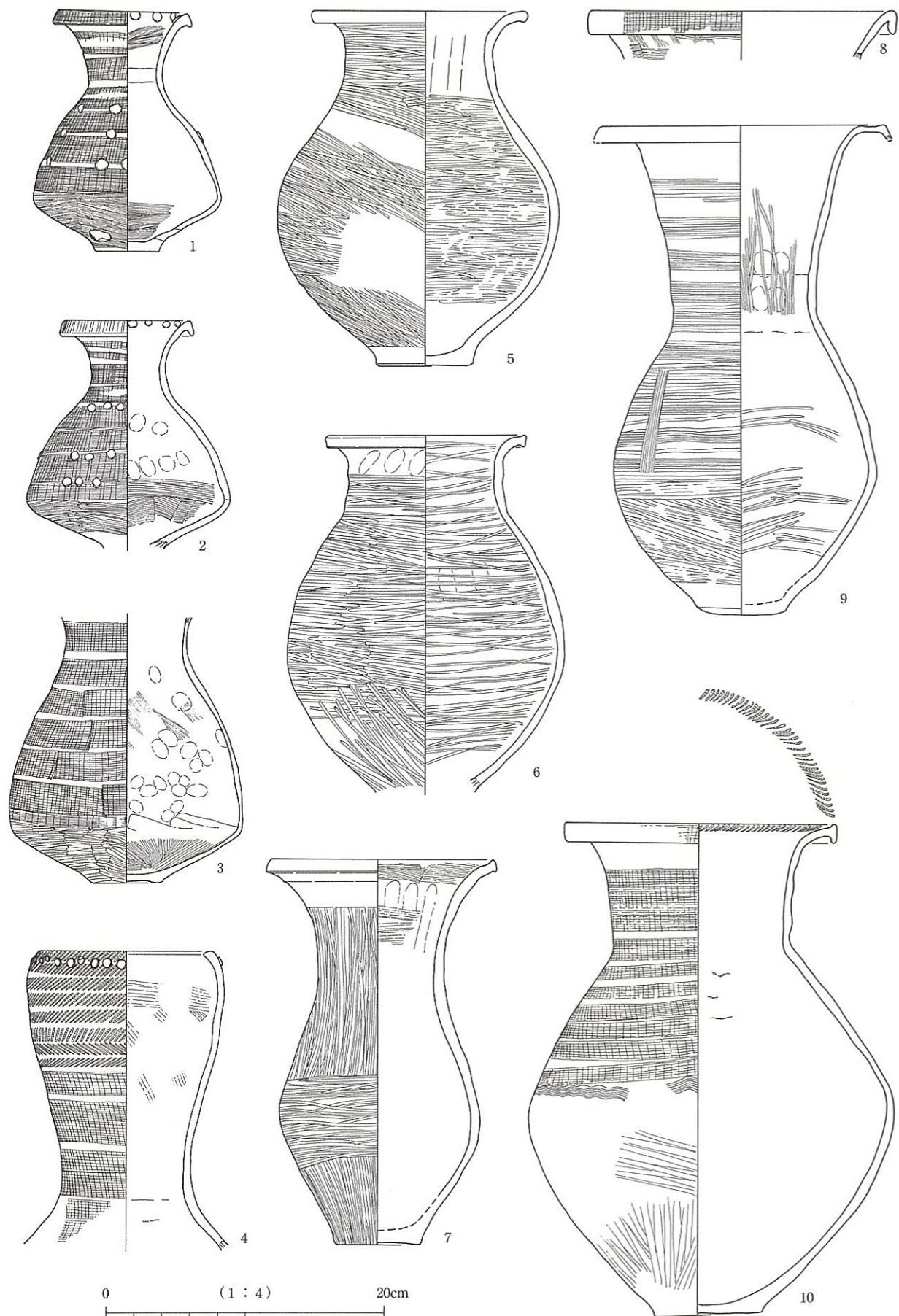


図65 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 土器 151・152・154-1・154-2・155・157-1・157-3・160・161・162

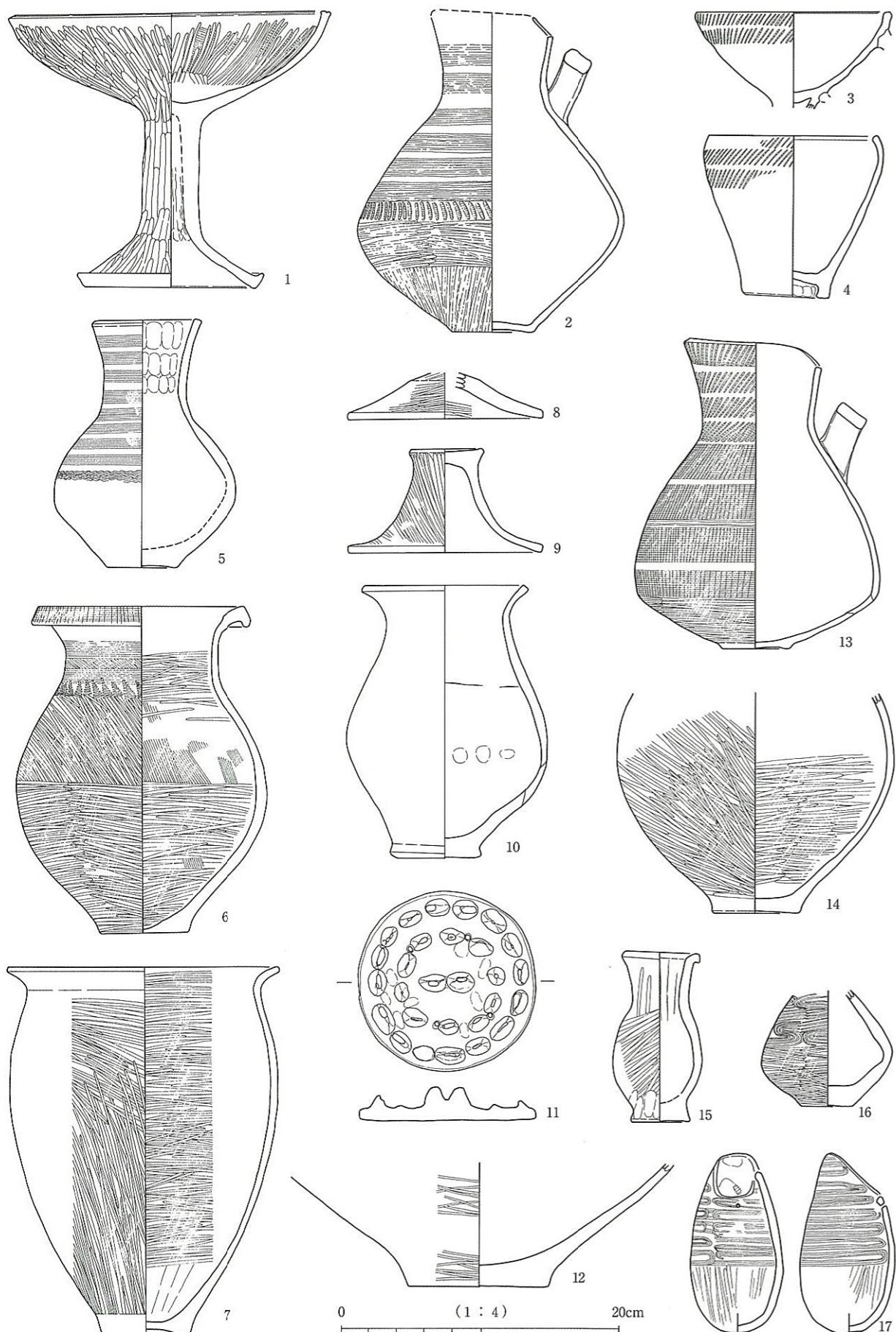


図66 96-1-1 トレンチ 第6面ベース 土器 153(4)・156(1)・157-2(3)・158(2)・6層
土器 279(5)・6面ベース (6~17) 出土遺物

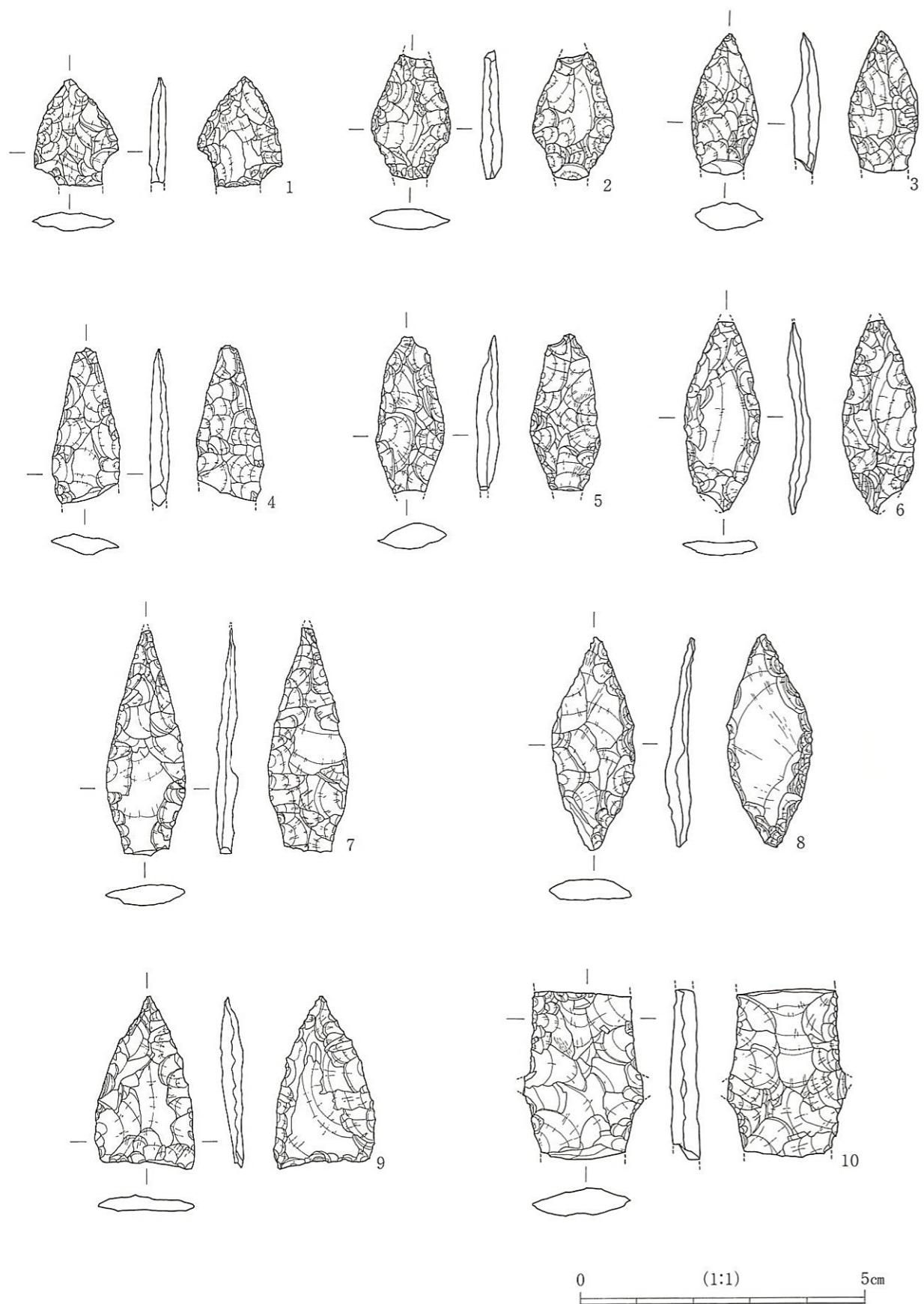


図67 96-1-1トレンチ 第6面ベース 遺構126出土石器

第7面（図68・69、写真図版17）

第7面・7面ベースで遺構は検出できなかった。7面の標高はT.P. 14m前後である。7層は層厚10cm程度で炭化物を少量含むオリーブ黒粘土質シルトである。遺物は7面ベース層である極細粒砂から縄文晚期の土器が3点出土した。

96-1-5 トレンチ第7面ベース7b層出土遺物（図69）

7b層から出土した土器は図69に掲載している。69-1,2は浅鉢の破片である。69-1は底部片で、端部が左右につまみ出されたような形態である。胴下半部にかけて縦方向のヘラケズリ調整で仕上げられている。69-2は、胴中位～口縁部片である。屈曲して外反気味に立ち上がる口縁形態で、端部直下に断面3角形の突帯文を貼付している。外面は、屈曲部より下位がヘラケズリ調整、上位がナデ調整で仕上げられている。2点とも縄文晚期船橋式に位置付けられる浅鉢である。

69-3は、2条突帯を貼付した深鉢である。口縁部は胴上位の突帯部で屈曲して内傾し、やや外反気味に直立する形態である。口縁部の2～3mm下に突帯文を貼付している。突帯は2条とも、「D」字形の刻み目を施している。形態、突帯文の特徴などから、縄文晚期船橋式に位置付けられる深鉢である。

第8面・8面ベース（図70～72）

96-1-1 トレンチでは第8面で落ち込み・流路、第8面ベースで土坑を検出した。96-1-4・5 トレンチで遺構は検出できなかった。

落ち込みは調査区中央で検出した。東は第4面遺構1に切られ、北は調査区外となる。平面円形で検出長7m、深さは約10cmを測る。

流路は調査区東端で南東から北西方向に走る左岸部を検出した。検出幅22m、深さは1.5mを測る。埋土はラミナがみられる細粒砂・極細粒砂である。

第8面ベースでは調査区中央を中心として土坑を5基検出した。いずれも平面形は不定形である、深さは5～10cm程度である。埋土は8a層の灰オリーブ細砂混じりシルトである。

第9面・9面ベース、10面、11面（図73～77）

96-1-5 トレンチ9面ベースで遺構215（溝）を1条検出した他に遺構・遺物は検出できなかった。遺構215（溝）は調査区北端で検出した。検出長3.5m、幅50cm、深さ20cmを測る。埋土は9a層であるオリーブ黒極細粒砂混じり粘土である。

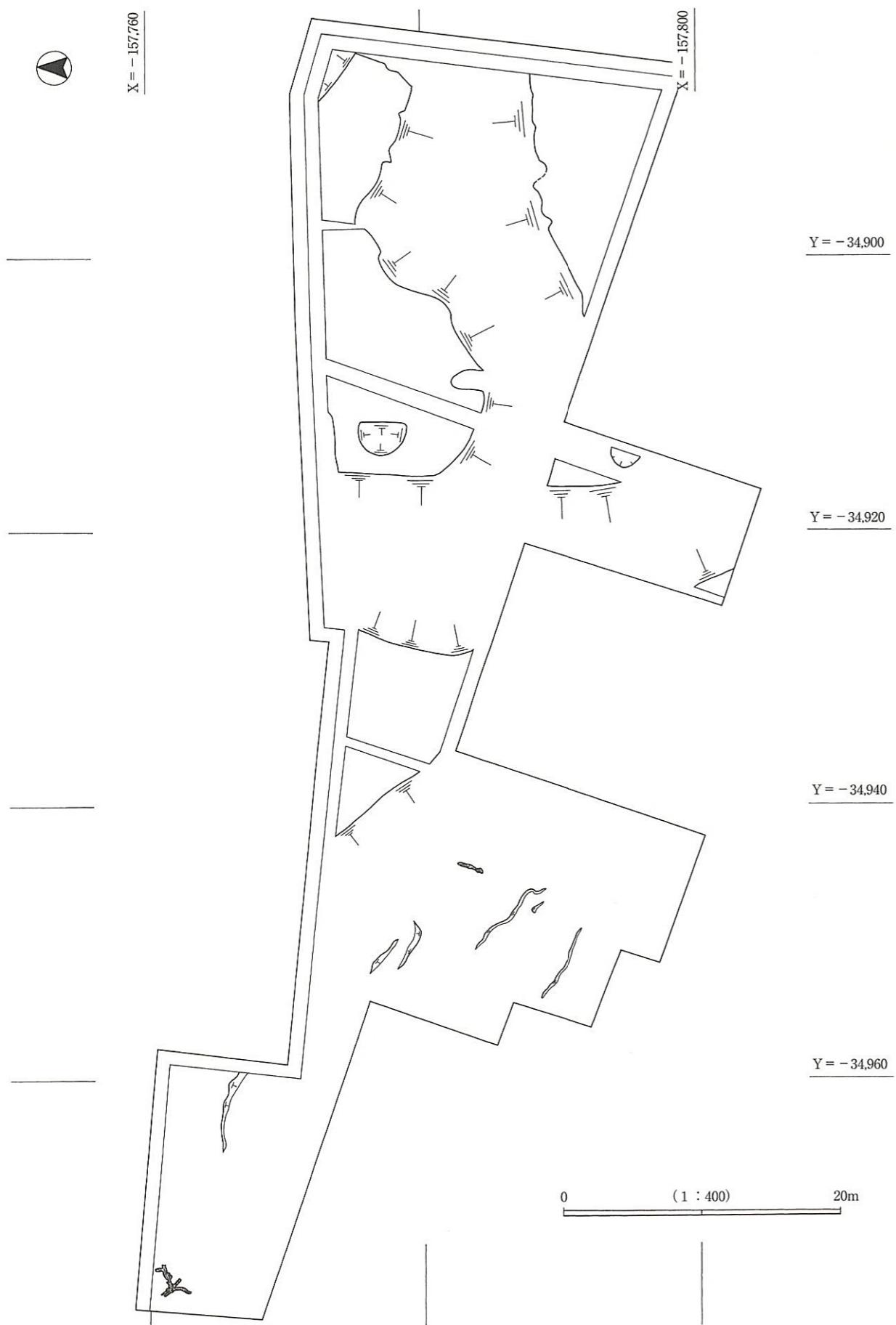


図68 96-1-1・2・3トレンチ 第7面ベース 平面図

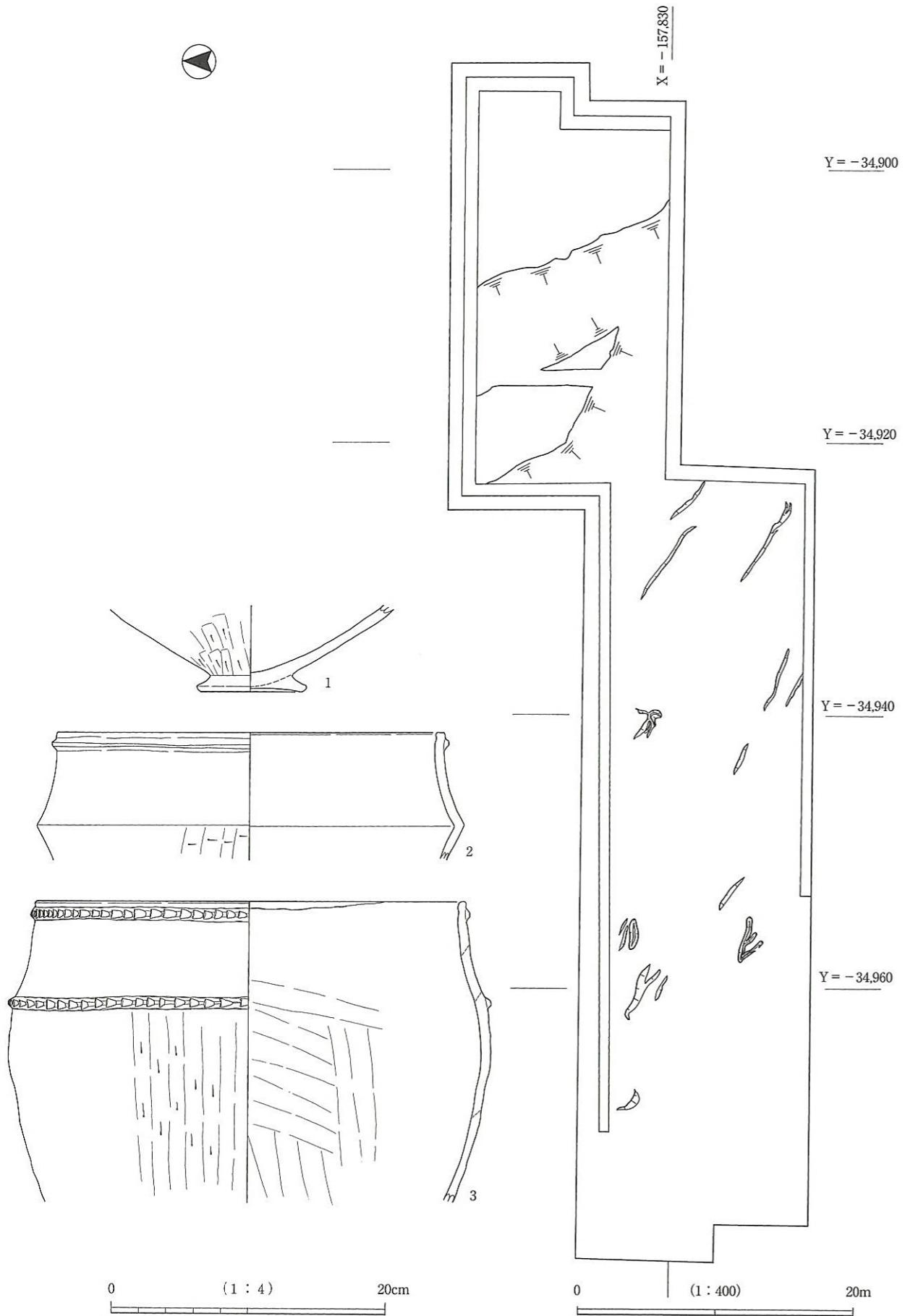


図69 96-1-5 トレンチ 第7面ベース 平面図・7 b層出土遺物



図70 96-1-1・2・3 トレンチ 第8面 平面図



図71 96-1-1・2・3 トレンチ 第8面ベース 平面図

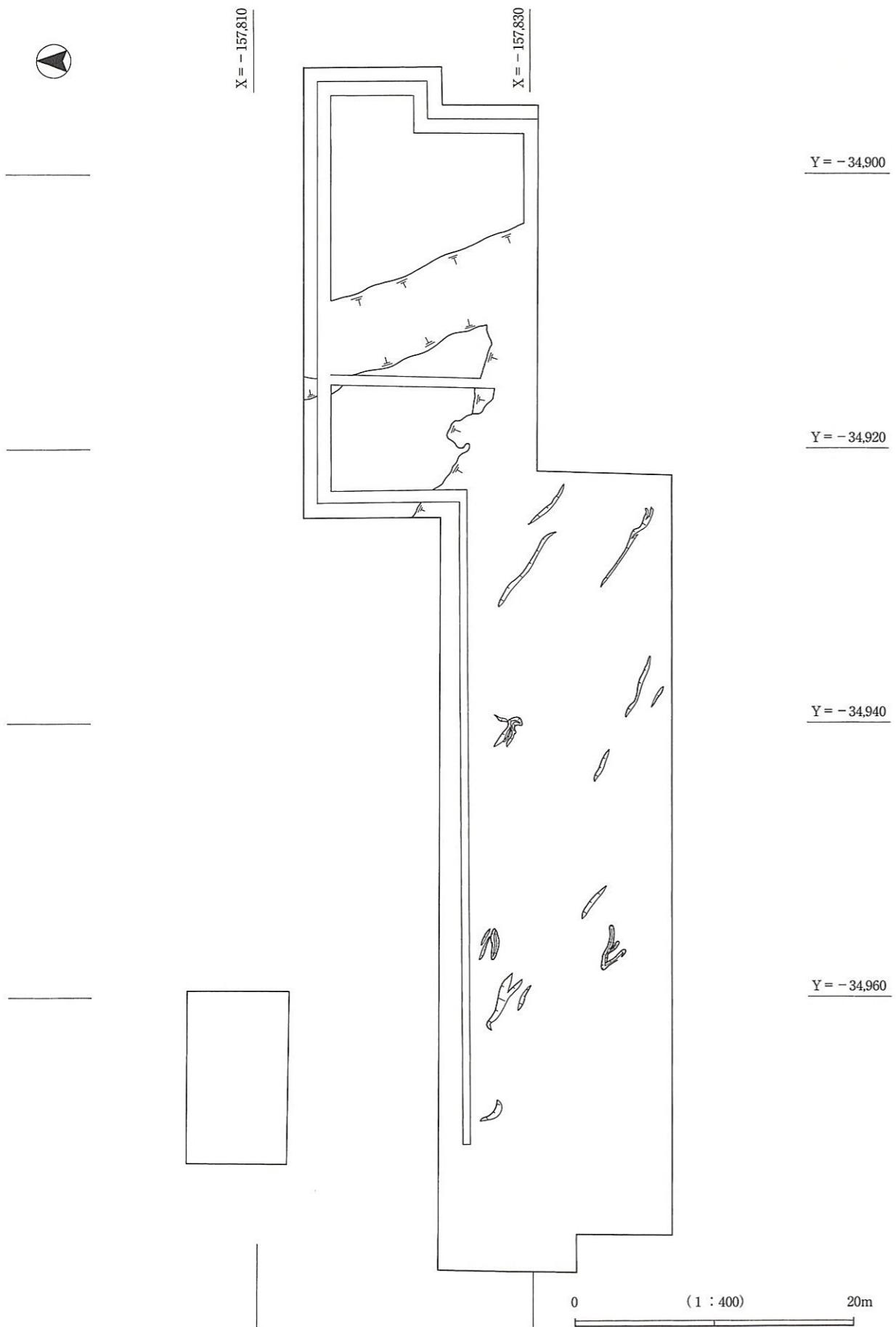


図72 96-1-5 トレンチ 第8面ベース 平面図

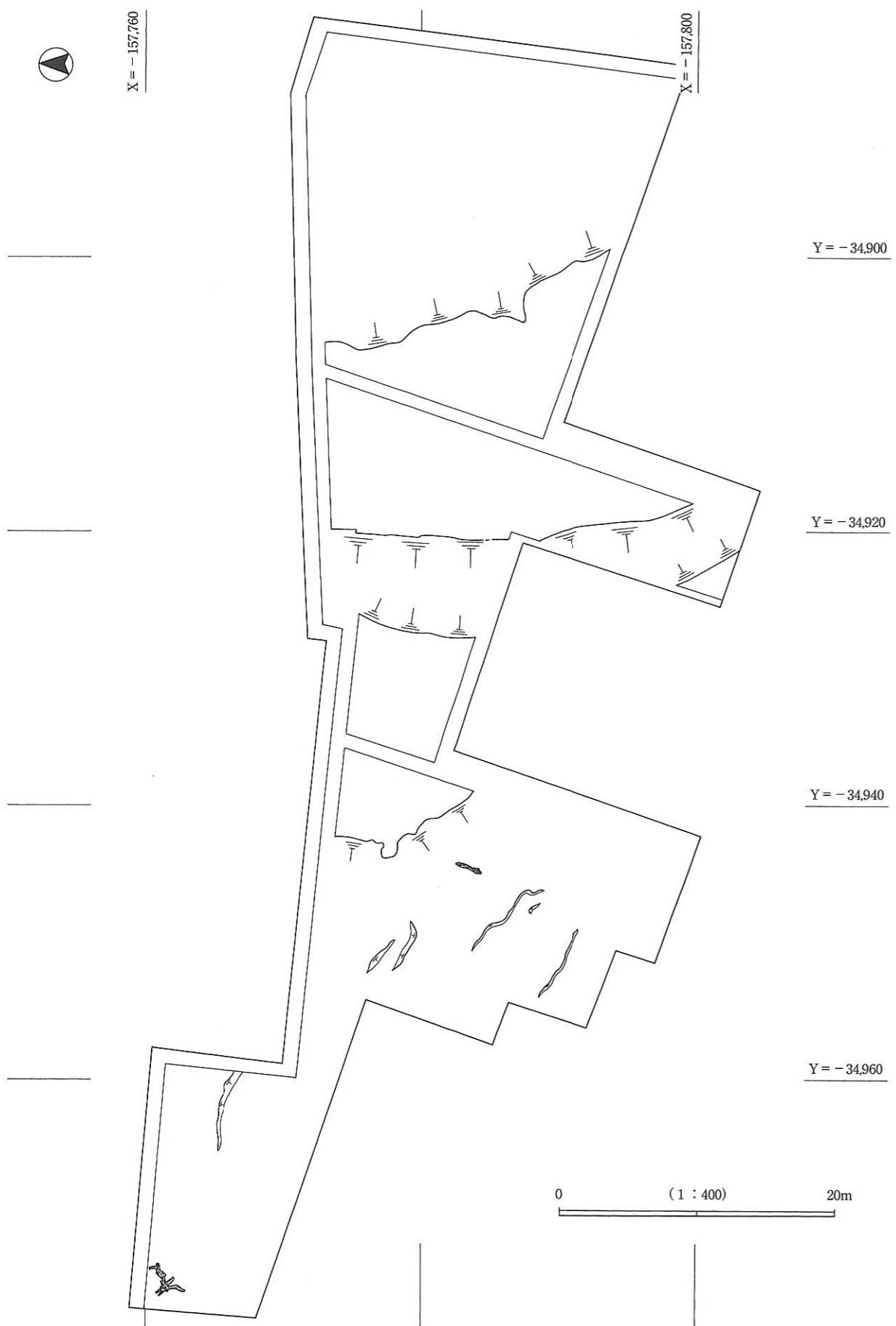


図73 96-1-1・2・3トレンチ 第9面 平面図

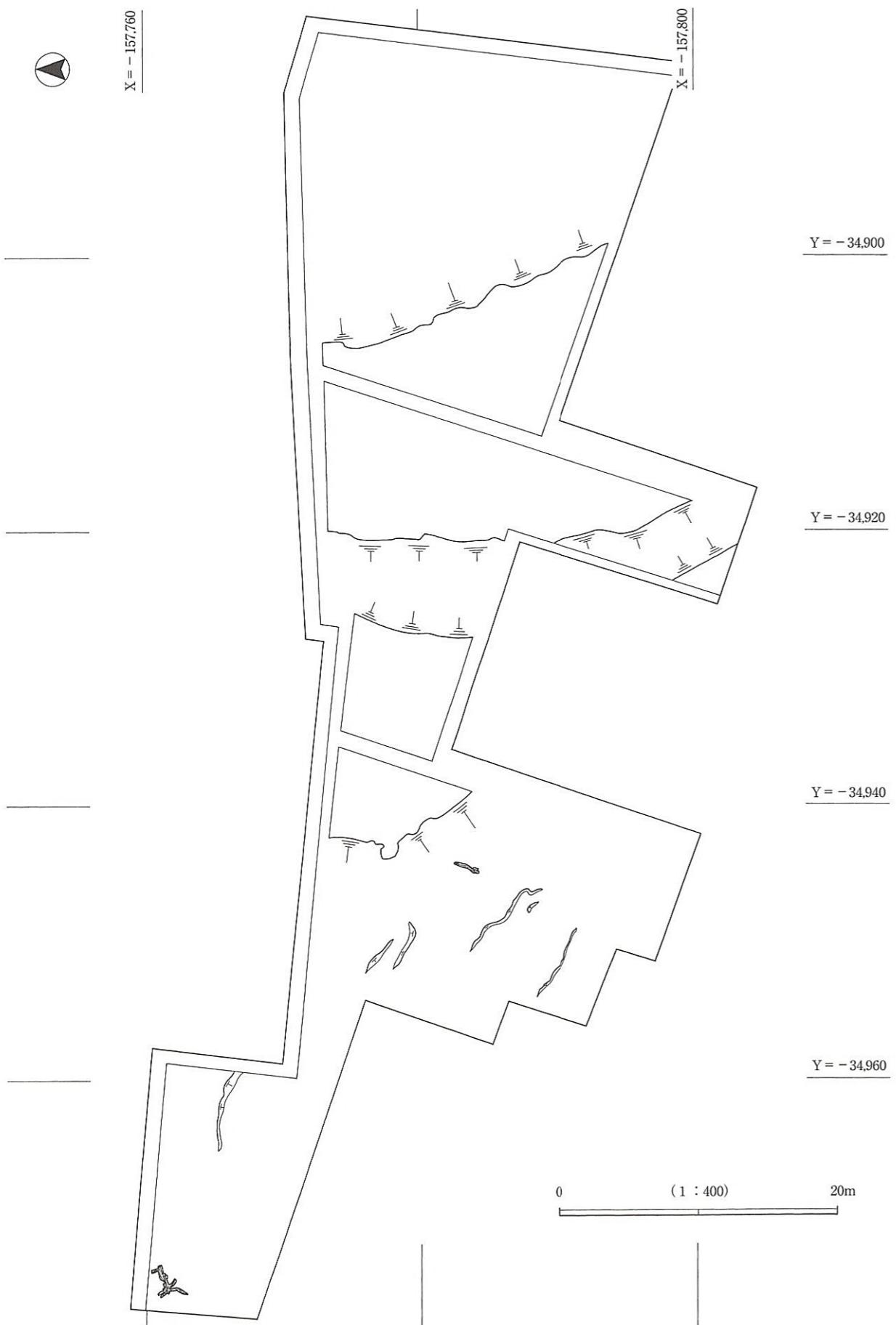


図74 96-1-1・2・3 トレンチ 第9面ベース 平面図

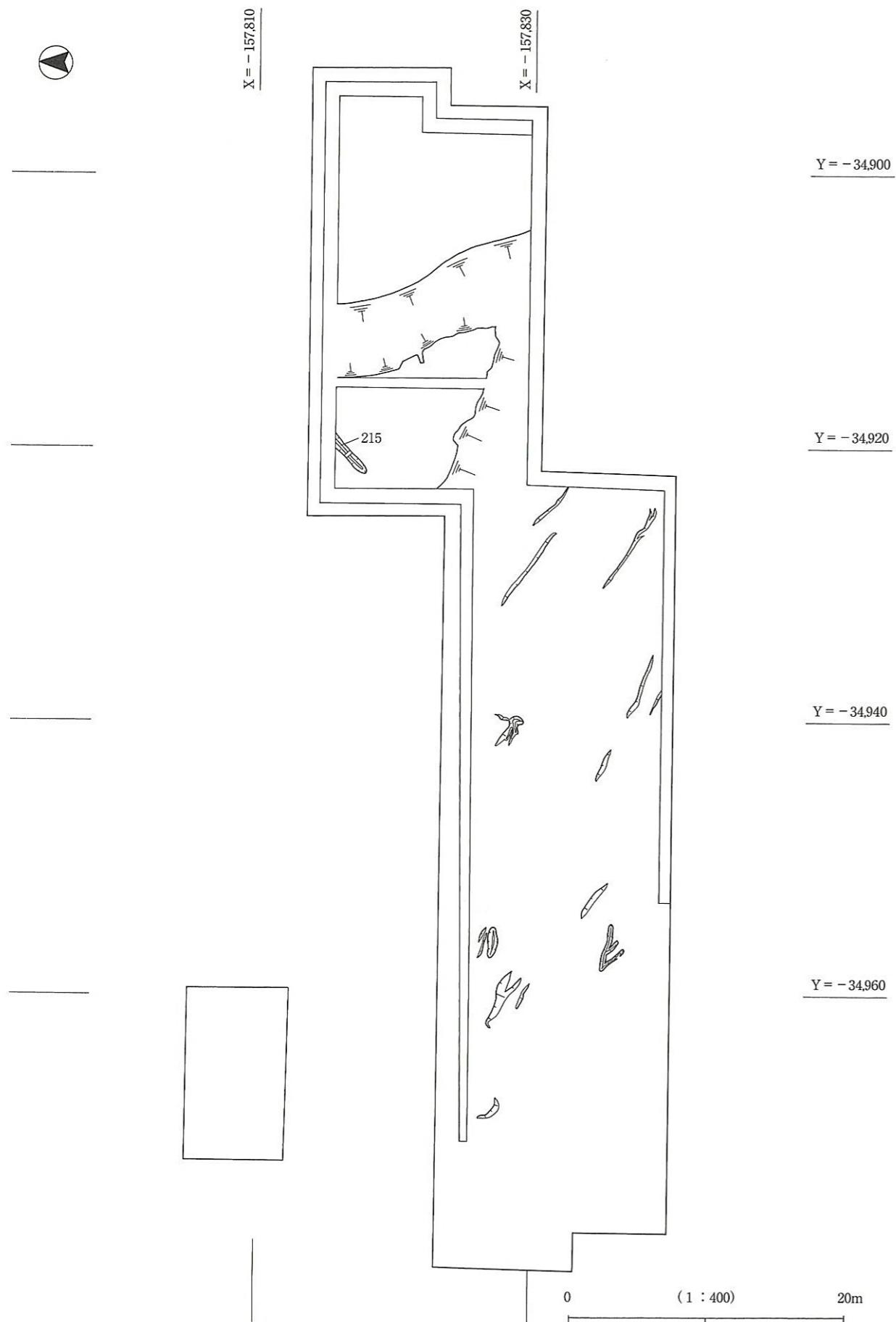


図75 96-1-5 トレンチ 第9面ベース 平面図

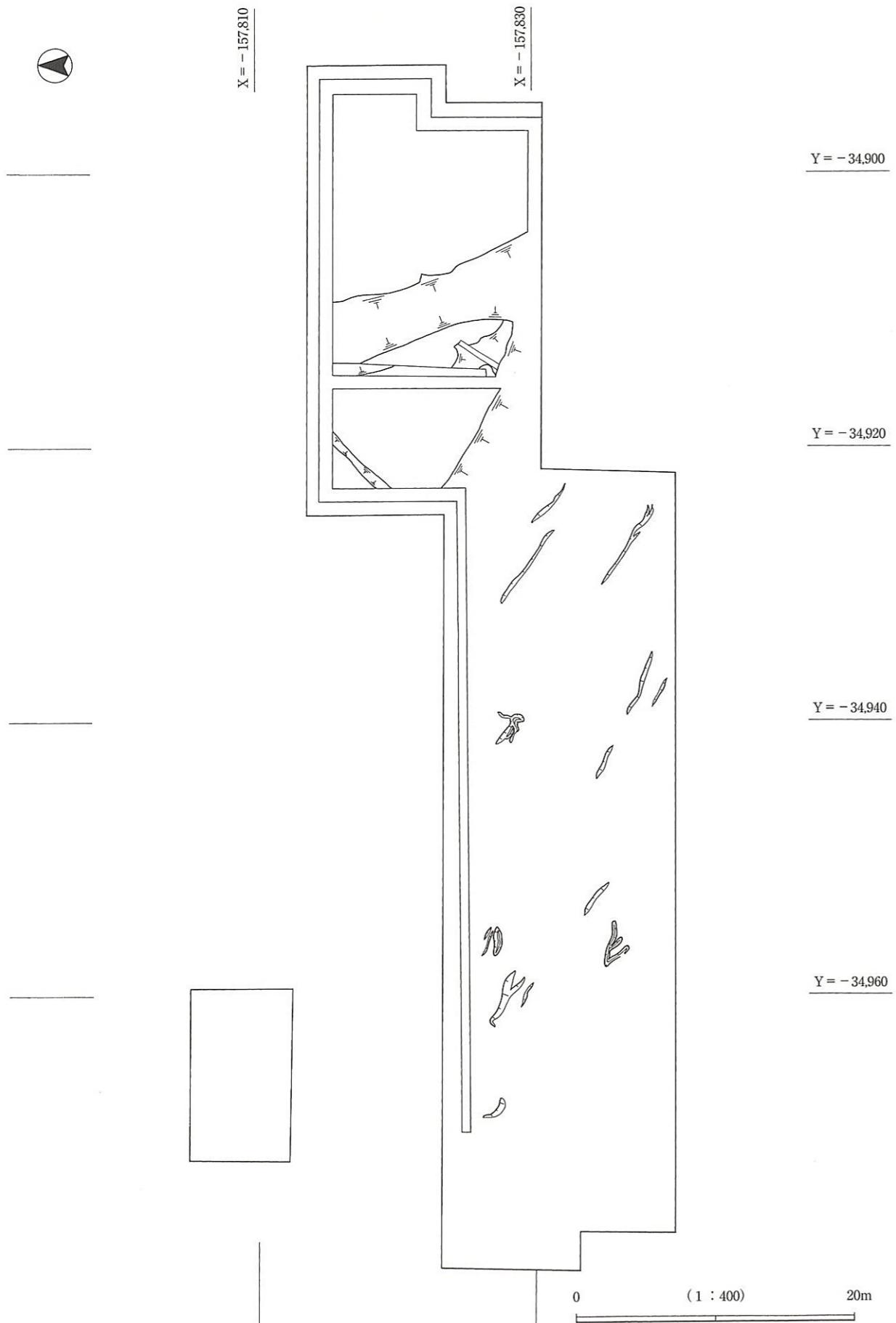


図76 96-1-5 トレンチ 第10面 平面図

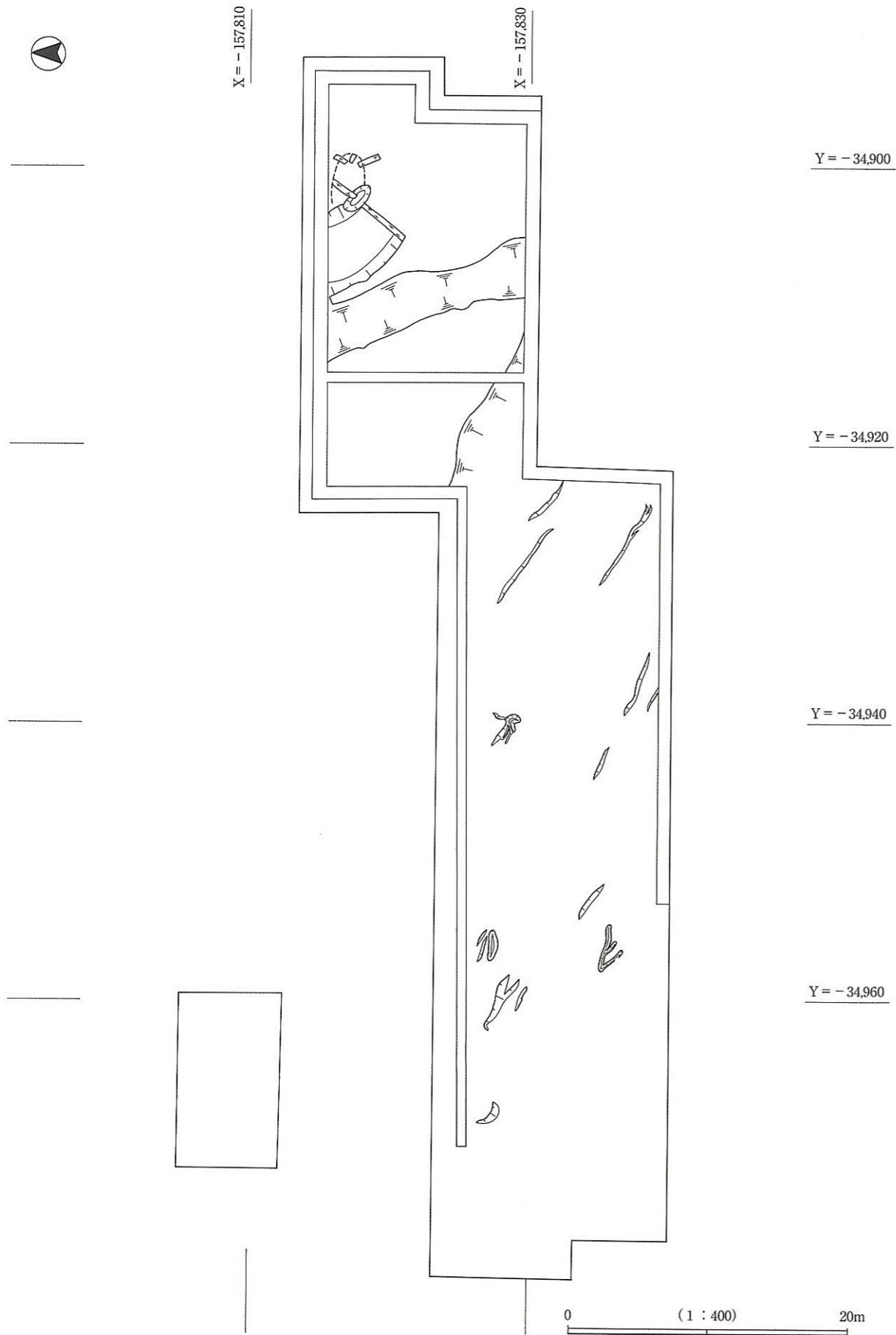


図77 96-1-5 トレンチ 第11面 平面図

第2節 96-2-1～3トレンチ

第1面（図79. 写真図版20）

府営住宅建設時の盛土・旧表土・洪水砂層を除去した面である。

3トレンチから1トレンチにかけて南北方向の畦畔、1トレンチではそれにつながる東西方向の畦畔、さらに東西方向畦畔から北へのびる畦畔を検出した他、1～3トレンチ全域で東西方向の鋤溝を検出した。鋤溝内には部分的に耕作具痕が見られた。

標高は2トレンチではT.P.15m～15.1m、3トレンチではT.P.15.3m前後で東側が高い傾向にある。3トレンチの畦畔上面の標高はT.P.15.4m。当面を覆う洪水砂層から、染付碗等が出土した。

第2面（図80. 写真図版21）

1～2面間に自然堆積層はなく、1面作土を除去した面が第2面となる。

1層が粗砂混じりシルトであることから、本来2面上に堆積していた自然堆積層が、1面耕作時に攪拌され1層に取りこまれたと理解している。

全域で南北方向の鋤溝を検出した他、1トレンチでピット・土坑、2トレンチ西側で南北6.5m、東西2.5～3mの平面方形の範囲で足跡が密集する部分、3トレンチで南北に連なる土坑群を検出した。

標高は2トレンチでT.P.14.8m、3トレンチ西側でT.P.14.9m、東側ではT.P.15.15m前後を測る。1面と同様に東が高い傾向にある。

第3面～第5面

第3・4面は2トレンチ西半で部分的に検出した。3・4層は、第5面が2トレンチ東端で西へ落ちて低くなる部分に堆積している。3・4層共に砂混じり粘土である。

5面は2トレンチから3トレンチ西半で検出した。いずれの面でも足跡を検出したにとどまる。

遺物は5層から土師器小皿が1点出土した。

第6面（図81. 写真図版22・23）

下面の洪水砂層上面でほぼ南北方向に走る溝を6条検出した。溝の深さは5cm～15cm程度と浅く凹地状を呈する。

第7面（図82. 写真図版23・24）

2トレンチ西端の低い部分で南北に走る溝1条を検出した。幅2m～4.5m、深さは25cm～50cmを測る。埋土は上層中礫混じりシルト、下層は粘土である。

第8面（図83. 写真図版24～26）

厚く堆積した砂層を除去した河床面である。水流によるものか、南東から北西方向に幾筋もの抉れが見られる。河床までの砂の堆積は約3mで、河床の標高はT.P.12mを測る。

第8面上に堆積している砂は、河床の抉れの方向、砂の厚みからみて、96-1-4・5トレンチ第4面で検出した遺構5（流路）埋土と同一であると考えられる。

第8面では縄文時代晚期の土器が1点出土した。（図85）

96-2-1～3トレンチ出土遺物（図84）

96-2-1～3トレンチで出土した遺物は図84に掲載している。84-1～7は近代洪水砂層、8は5層、9～15, 22, 23は洪水砂層、16, 19, 20は洪水砂最下層、21, 24～26は河川、17, 18はトレンチ壁および側溝から出土している。

1～7は肥前系磁器の染付碗または皿で、見込部に二重圈線とコンニヤク印判五弁花文が施されたものが多い。1, 3の高台内の銘はそれぞれ「寿」・「渦福」であろう。1, 4の外面文様は丸文で、2の外面文様は1重網目文である。5の見込部には胎土目が残存している。6は見込部に「松竹梅」の文様が施され、蛇ノ目釉剥ぎ凹形の高台を有している。これらの磁器はおおむね18世紀前半代の所産であろう。

8, 9は土師器小皿である。8の口縁部にはヨコナデが施される。9の口縁部はいわゆる「ての字」で、底部には指頭圧痕が認められる。10は土師器高台付皿で、坏部外面下半にはユビオサエが確認できる。11は和泉型瓦器椀で、外面はユビオサエ・ヘラケズリが施された後ヘラミガキが施される。内面は全面にヘラミガキが施され、見込部には斜格子状暗文が施される。8～11はいずれも中世の所産で、11～12世紀の範疇で捉えられる。16は土師質真蛸壺で、口縁部に穿孔が認められる。体部外面にはヘラ記号（屋号か）が線刻されている。田山遺跡（阪南市）に類例があり、12～13世紀の所産であろう。

12～15は須恵器である。12は小型短頸壺で、全体が回転ナデで調整されているが底部は未調整である。13は有蓋高坏で、坏部の一部を欠損している。坏部外面下半は回転ヘラケズリで調整される。14は初期須恵器と考えられる把手付椀で、把手部を欠損している。底部には静止ヘラケズリが施されている。15は高台付坏である。14は5世紀中頃、13は5世紀後半、12, 15は8世紀の所産である。

17, 18は均整唐草文軒平瓦で、河内国分寺系瓦と考えられる。古代の所産である。

19は銅製の鉈尾（鎗帶用）で、完成品ではなく2個体を分離していない連鋸式の鋸放し状態である。このような状態での出土例はほとんど類をみない。それぞれ体部に3つの足が残存している。体部の一端には切断した痕跡があり、もともとは3連で鋸造されたと考えられ、1個体は使用されたのであろう。もう一端には鉤状の押湯に相当する部分が残されている。この部分は本来鋸上がったあと切断されて再利用されるものである。鋸放し状態であることや押湯部分が残存することから、周辺で鋸造作業がおこなわれていたことは確実である。8～9世紀の所産であろう。20は銅製の責金具で、大きさから刀子用であると推定できる。19と同時期であろうか。23は石製巡方（鎗帶）である。サヌカイト製で全面が丁寧に研磨されている。2孔1対の潜り穴が2箇所残存し、欠損部にもう2箇所痕跡が確認でき、もともと4箇所潜り穴があったことがわかる。この潜り穴は、非常に細かい敲打によって貫通させている。残存状態から4.2cm四方の正方形であったと推定できる。西大路遺跡（岸和田市）に類例があり、9世紀の所産であろう。

21は形象埴輪の端部片である。鋸歯文線刻が認められることから盾形埴輪の可能性が考えられる。胎土に角閃石を含む。24は円筒埴輪片で、底部あるいはスカシ孔部分が残存している。7本/cmのタテハケ1次調整後にB種ヨコハケが施される。B種ヨコハケが施されることから川西編年IV期であると考えられるが、タガが低い台形を呈していることからV期に下るものかもしれない。両者とも5世紀後半の所産であろうか。

22は壺形土器で、頸部に櫛描直線文が3条確認でき、弥生時代中期前葉の所産である。

25・26は縄文土器である。25には突帯が1条認められ、体部外面に横方向のヘラケズリ調整が確認できる。船橋式であろう。26は口縁部外面が強くなられ、一部に二枚貝条痕が認められる。頸部にわずかながら屈曲が確認でき、屈曲部より下間に横方向のヘラケズリが施される。体部内面は板ナデによる調整が施され、一部にハケ目状の痕跡が確認できる。滋賀里IIIa式であろう。

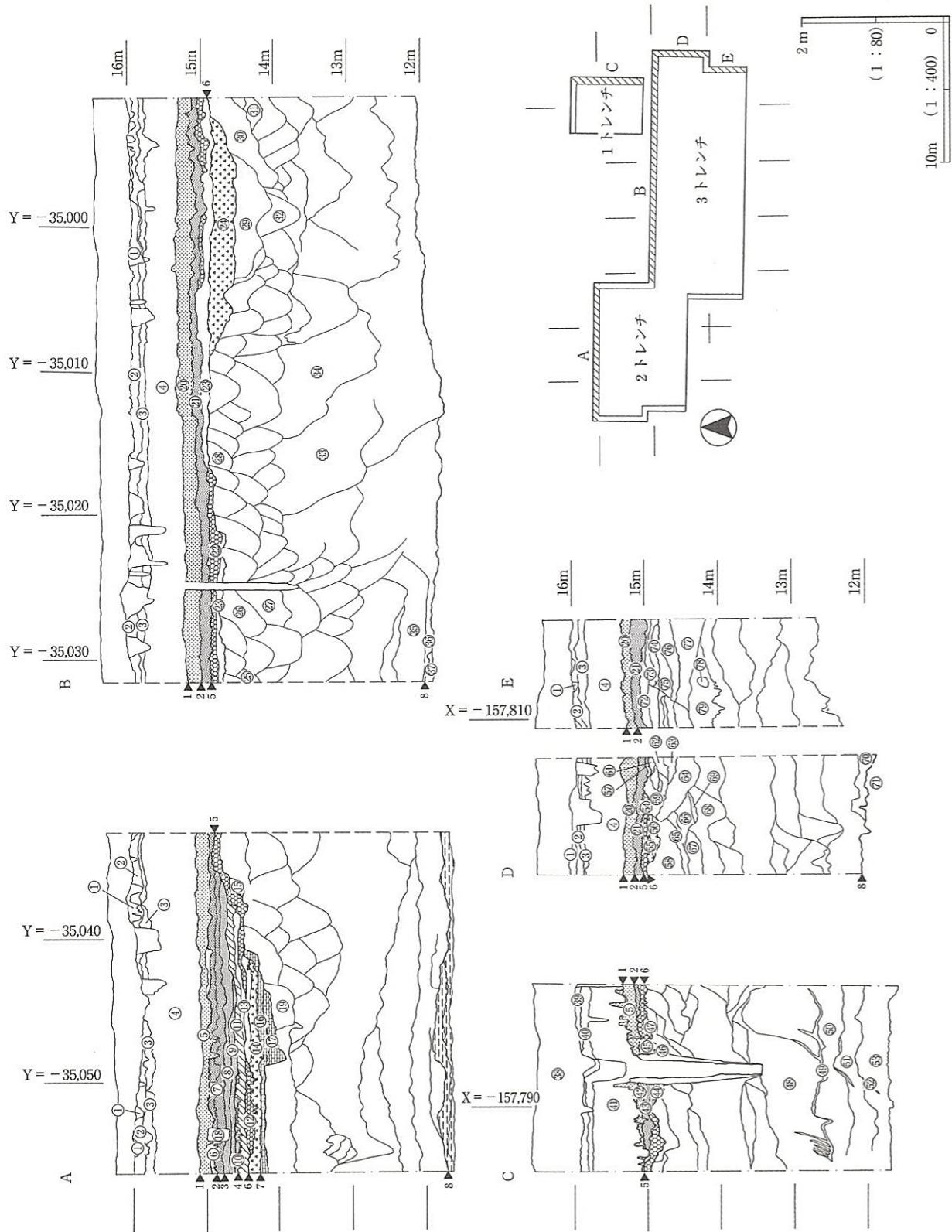


図78 96-2-1・2・3トレンチ 断面図

1	2.5Y7/6	明黄褐色砂
2	2.5Y4/2	暗灰黄砂混シルト
3	10YR4/2	灰黄褐色砂混シルト
4	2.5YR7/6	明黄褐色砾混砂
5	10Y6/2	オリーブ灰粗砂混シルト 1層
6	7.5Y6/1	灰粗砂混シルト (やや砂多し)
7	7.5Y4/2	灰オリーブ中粒砂混粘土 2層
8	10Y4/2	オリーブ灰中粒砂混粘土 3層
9	10Y3/1	オリーブ黒中粒砂混粘土
10	10Y5/1	灰粗砂混中粒砂
11	2.5GY3/1	暗オリーブ灰細砂混粘土 4層
12	2.5GY3/1	暗オリーブ灰細砂混シルト 5層
13	7.5Y5/2	灰オリーブ中粒砂
14	10Y3/2	オリーブ黒中粒砂混粘土 6層
15	2.5Y6/4	にぶい黄褐色混粗砂・2.5Y7/3 浅黄細砂 (中粒砂と粗砂含む。ラミナ有り)
16	5GY3/1	暗オリーブ灰中砾混シルト (砂やや含む) 7層
17	10Y3/1	オリーブ黒粘土
18	5Y6/3	オリーブ黄粗粒砂 (細砾混)
19	7.5Y3/1	オリーブ黒粘土
20	2.5Y4/2	暗灰黄シルト混細砂 (粗砂含む) 管状斑 1層
21	5Y4/2	灰オリーブ細砂混シルト (中粒砂含む) 管状斑 2層
22	2.5Y4/3	オリーブ褐細砂 (シルトと中粒砂含む) 管状斑 3層
23	5Y5/1	灰中粒砂と細砂 (シルトと粗砂含む)
24	2.5Y7/3	浅黄細砂 (中粒砂と粗砂含む。ラミナ有り) · 2.5Y6/4 にぶい黄褐色混粗砂
25	5Y56/4	オリーブ黄粗砂
26	2.5Y6/6	明黄褐色中砾混粗砂
27	2.5Y7/4	浅黄中砾混粗砂 · 2.5Y6/4 にぶい黄粗砂
28	2.5Y7/6	明黄褐色中粒砂 (粗砂含む)
29	5Y6/3	オリーブ黄細砂 (中粒砂含む・ラミナ有り) · 5Y5/2 灰オリーブ細砂混シルト (ラミナ)
30	7.5Y5/1	灰中粒砂 (粗砂と砾含む。擬砾有り)
31	2.5Y7/3	浅黄細砂と中粒砂 (ラミナ)
32	2.5Y7/2	灰黄細砂
33		暗茶褐色粗砂、砾
34		黄褐色粗砂
35		淡灰砾混粗砂
36	5GY4/1	暗オリーブ灰シルト
37	10Y3/1	オリーブ黒粘土 (上部に植物炭化物含む)
38	2.5Y6/6	明黄褐色中砾混中粒砂
39	5G3/2	オリーブ黑シルト質細砂
40	2.5Y4/3	オリーブ褐中砾混シルト質細砂
41	5Y6/4	オリーブ黄中砾混粗砂
42	5Y4/2	灰オリーブ粗砂混シルト (1層より砾多い) 2層
43	2.5Y5/4	黄褐色中砾混粗砂 (土壤化している) 5層
44	5Y5/2	灰オリーブ砂混シルト質細砂 (土壤化している)
45	10YR5/6	黄褐色中砾混粗砂 6層
46	2.5Y6/3	にぶい黄中粒砂 6層
47	2.5Y5/4	黄褐色中粒砂 (やや土壤化している) 6層
48	10YR5/3	にぶい黄褐色粗砂 · 7.5Y6/8 橙粗砂
49	2.5YR3/6	暗赤褐色砂
50	10YR6/4	にぶい黄橙極粗砂
51	10YR5/2	灰黄褐色混砂
52	5YR2/4	極暗赤褐色砂
53	10YR6/4	にぶい黄橙粗砂
54	10YR5/6	黄褐色シルト混細砂 · 2.5Y5/4 黄褐色シルト 5層
55	5Y6/2	灰オリーブ粗砂 6層
56	7.5Y5/2	灰オリーブシルト混細砂 6層
57	5Y4/2	灰オリーブ中粒砂混シルト 6層
58	2.5Y5/6	黄褐色粗砂混中粒砂
59	5Y5/3	灰オリーブ細砾混粗砂
60	5Y4/4	灰オリーブ細砾混中粒砂
61	10YR3/2	黑褐色細砾混粗砂
62	5Y5/2	灰オリーブ細砂
63	5Y5/3	灰オリーブ粗砂
64	10YR5/3	にぶい黄褐色混粗砂
65	2.5Y7/6	明黄褐色砂
66	5Y6/6	オリーブ中粒砂
67	5Y6/6	オリーブ粗砂混細砂
68	2.5Y6/4	にぶい黄褐色混粗砂 · 5Y6/3 オリーブ黄中粒砂
69	5Y6/4	オリーブ黄中粒砂
70	2.5GY2/1	黑細砂混シルト
71	10GY5/1	綠灰粘土 8層
72	2.5Y5/2	暗灰黄中砾混粗砂
73	5Y5/3	灰オリーブ中粒砂
74	5Y5/4	オリーブ粗砂
75	10YR6/6	明黄褐色細砾混中粒砂
76	5Y6/3	オリーブ黄細砂
77	5Y5/3	灰オリーブ極細砂
78	2.5GY4/1	暗オリーブ灰粘土
79	10YR6/6	明黄褐色粗砂 (細砾含む)

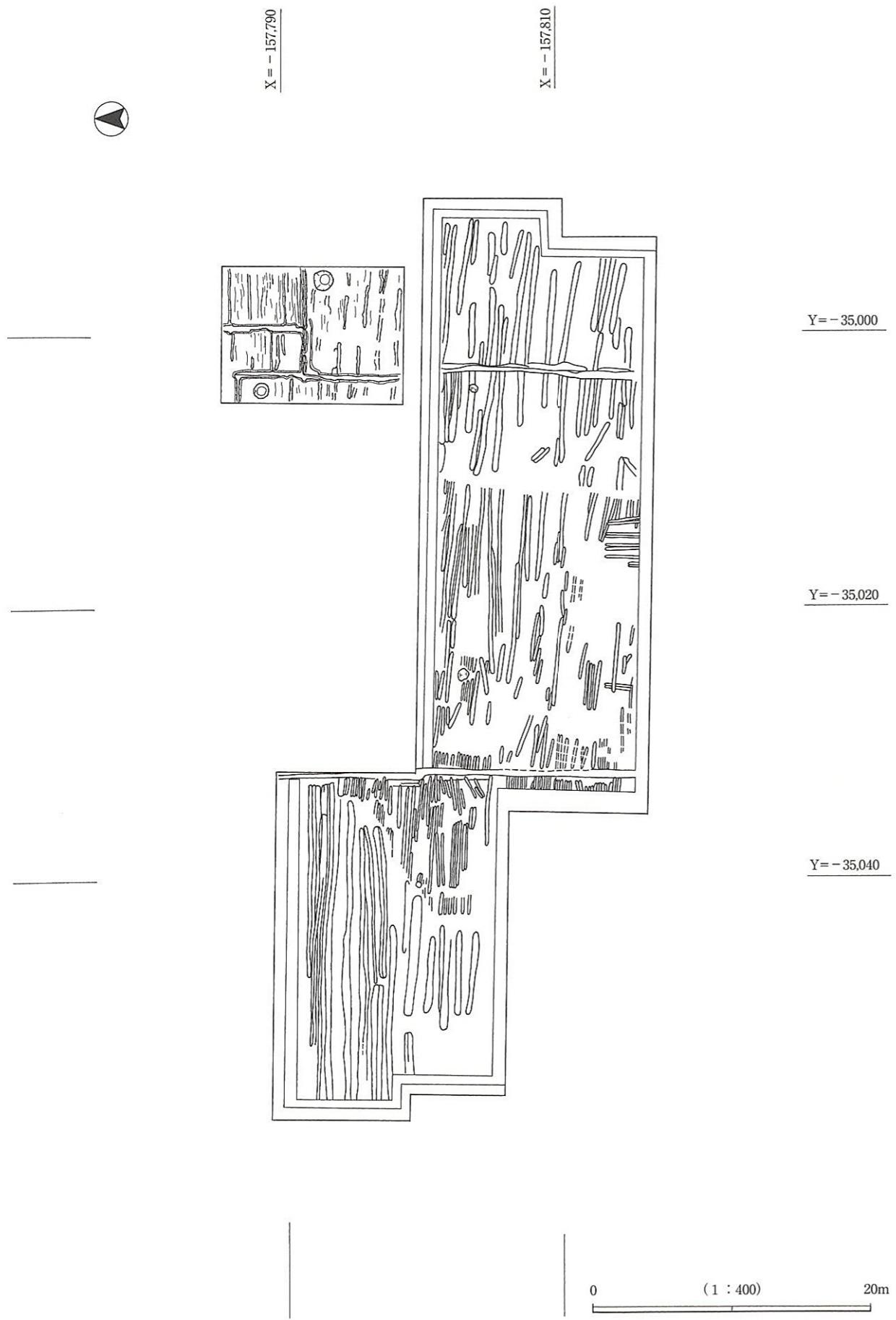


図79 96-2-1・2・3 トレンチ 第1面 平面図



X = - 157,790

X = - 157,810

Y = - 35,000

Y = - 35,020

Y = - 35,040

0 (1 : 400) 20m

図80 96-2-1・2・3 トレンチ 第2面 平面図

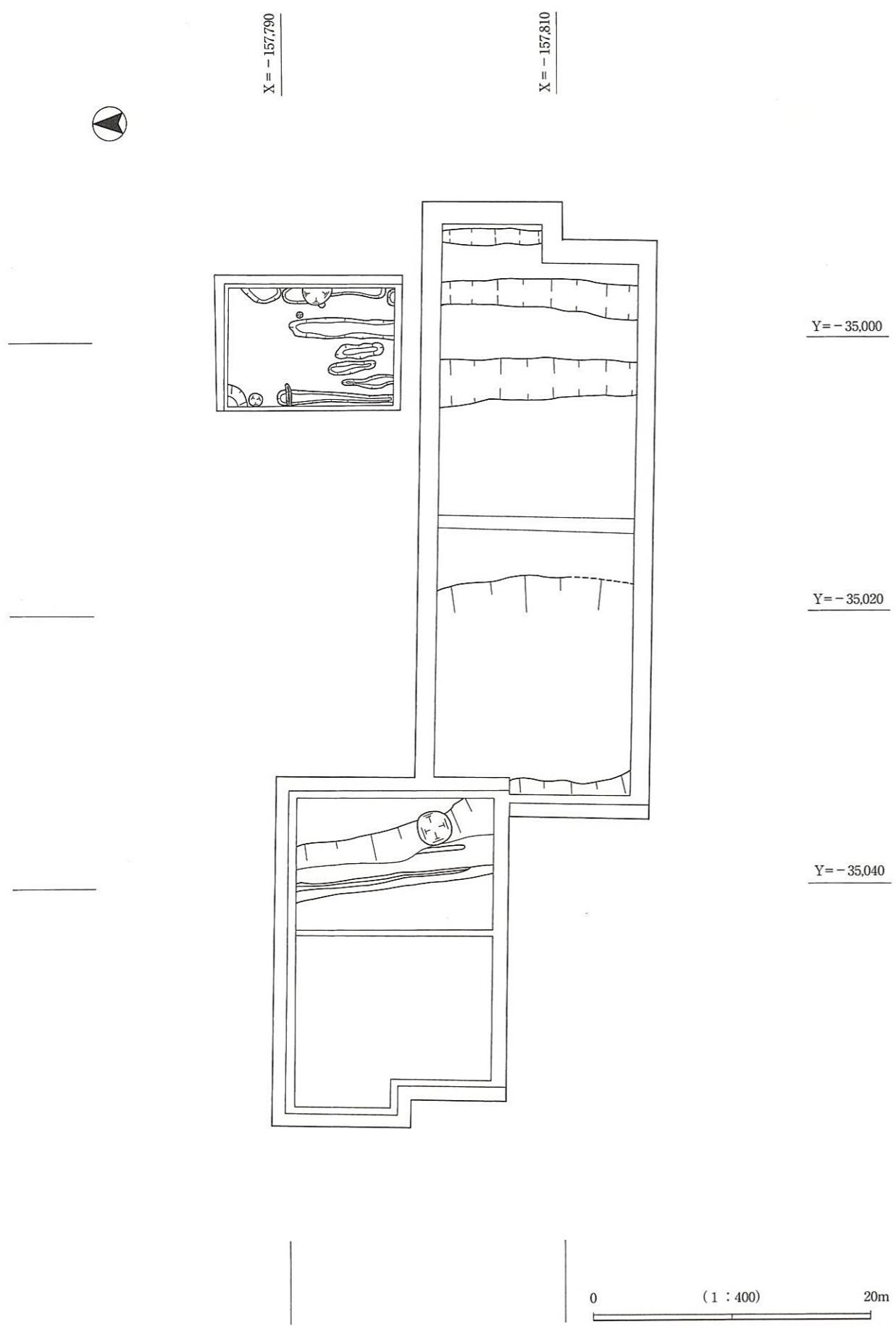


図81 96-2-1・2・3 トレンチ 第6面 平面図



X = - 157,790

X = - 157,810

Y = - 35,000

Y = - 35,020

Y = - 35,040

0 (1 : 400) 20m

図82 96-2-1・2・3 トレンチ 第7面 平面図

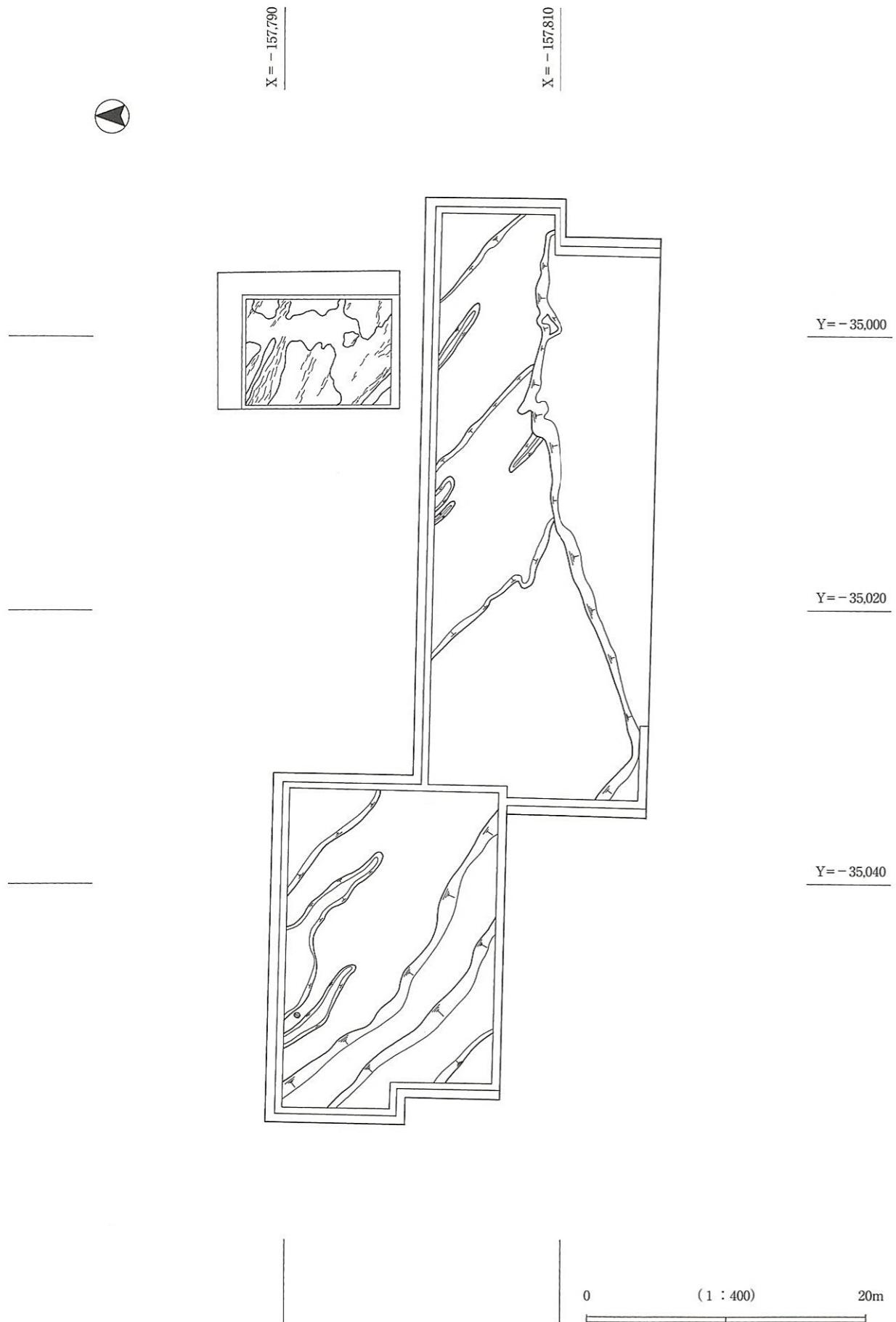


図83 96-2-1・2・3トレンチ 第8面 平面図

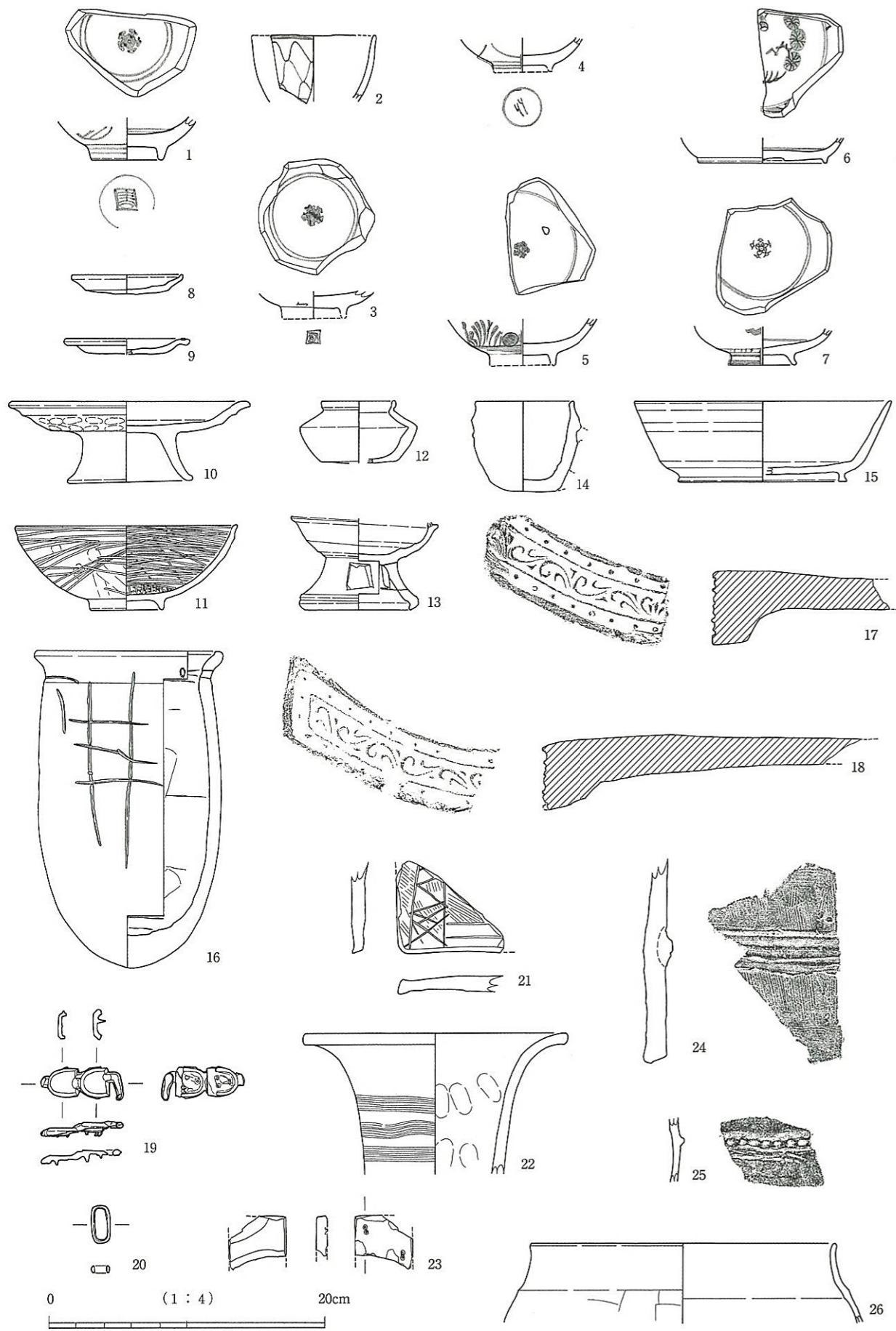


図84 96-2-1・2・3 トレンチ 出土遺物



図85 96-2-1・2・3トレンチ 第8面 遺物出土状況

第IV章 まとめにかえて

船橋遺跡は昭和31年から33年にかけて大和川遺跡調査会により調査が行われ、豊富な資料が出土し、つとにその名が知られるようになった。

しかし、それ以降は大規模な調査が行われることはなかった。今回府営住宅・建設省河川事業に伴い約4,700m²の調査を行い、中世から古代末、古墳時代前期、弥生時代中期の遺構・遺物を検出した。

以下2調査区の遺構面の対応関係を列記し、まとめにかえたい。

96-1調査区第1面から第4面、96-2調査区第1面から第7面は、耕地として利用されていた。ただし96-1調査区第4面ベースで柱痕跡が確認できるピットが存在することから近くに集落の存在が想定される。

96-1調査区第4面で流路が占める割合は65%、96-2調査区第7面では100%流路上面となり、96-1調査区で部分的に検出した古墳・弥生時代（第5・6）面は遺存していない。

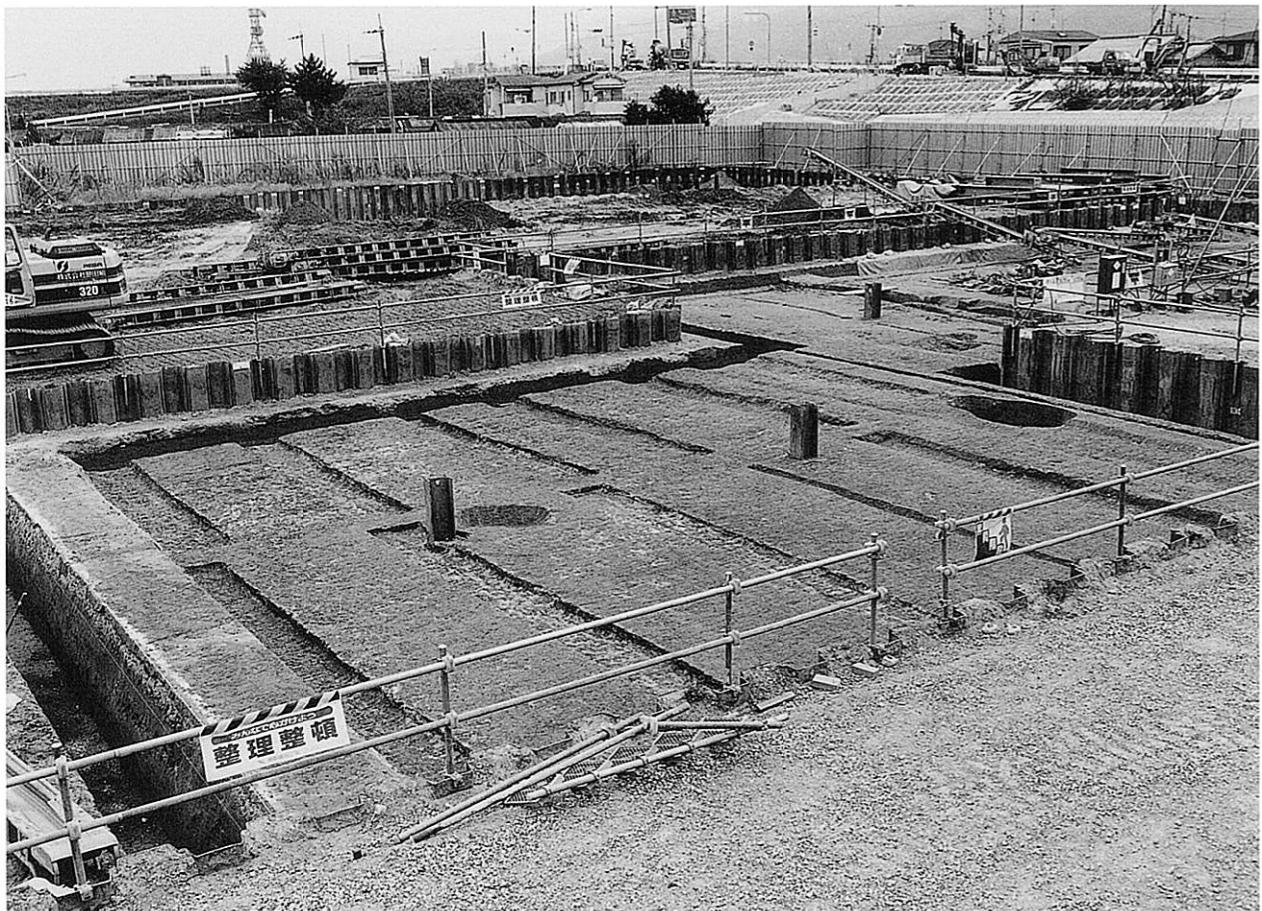
96-1調査区第5～5-2面では古墳時代前期庄内式～布留式にかけての遺構・遺物を検出した。特に96-1-5トレンチの遺構185・186（溝）は先述したようにコ字形に曲がる溝である可能性があること、同様に96-1-1トレンチで検出した遺構122（溝）もほぼ直角に曲がることから1辺10m程度の方形周溝墓の可能性が考えられる。

第6面では弥生時代中期を中心とする遺構・遺物を検出したが、詳細は明らかにできなかった。

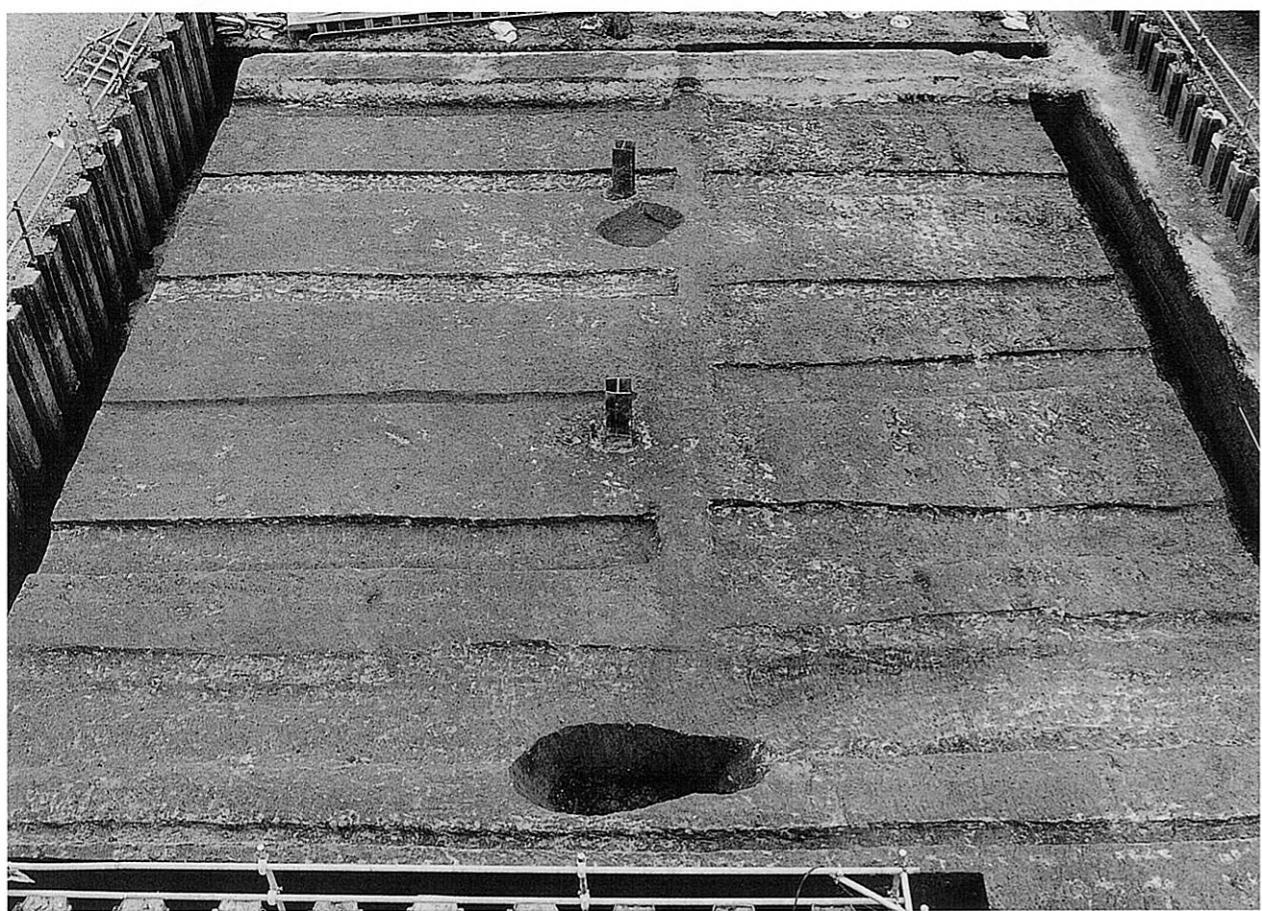
第7面ではベース層から縄文時代晩期の船橋式土器を検出した。96-2調査区第8面と対応すると考えられるが標高が96-1調査区でT.P.14m、96-2調査区でT.P.12mと2mの比高差があることから、周辺の調査を待って結論を出したい。

図 版

図版 1



96-1-5 トレンチ 1面 (南西から)

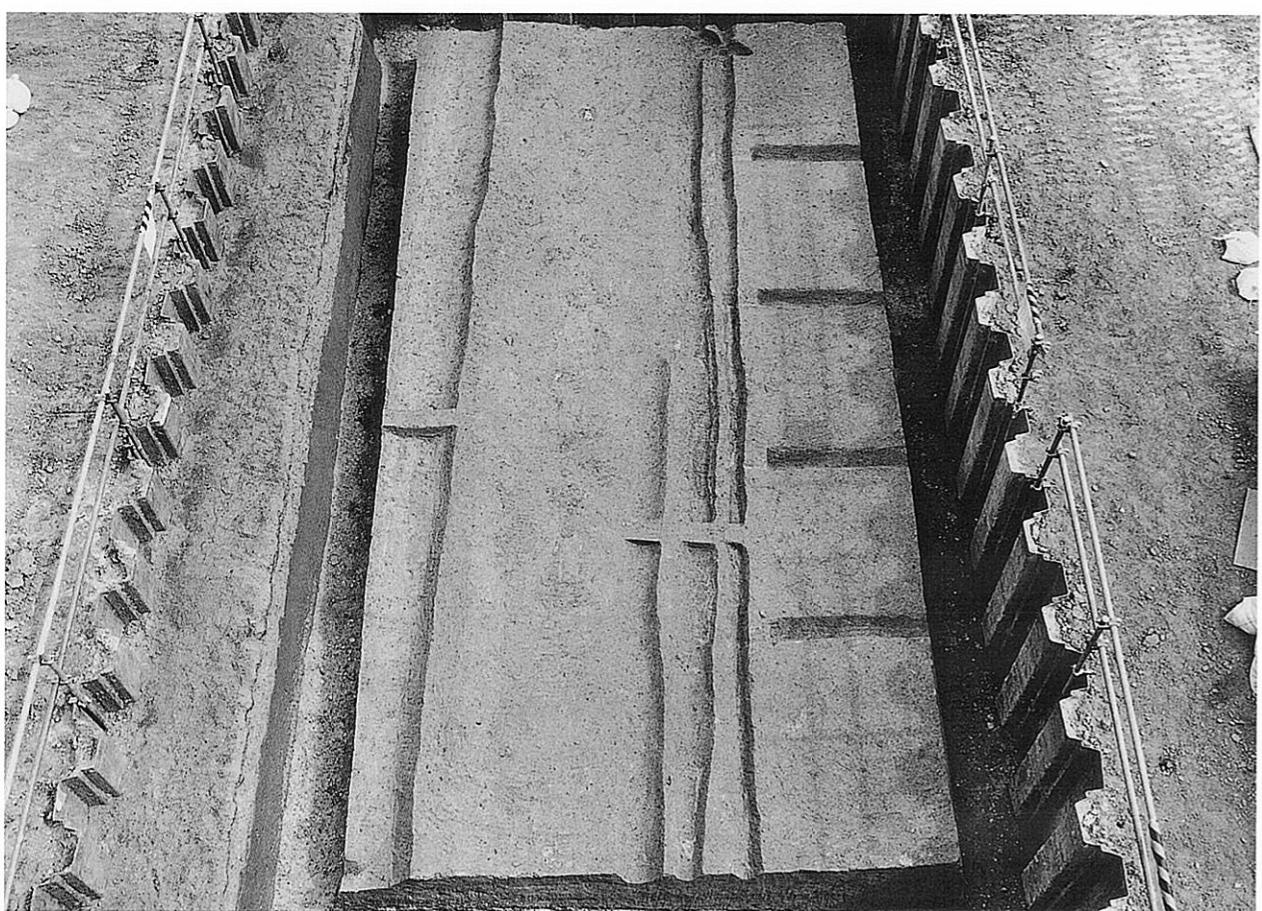


96-1-5 トレンチ 1面 (東から)

図版2

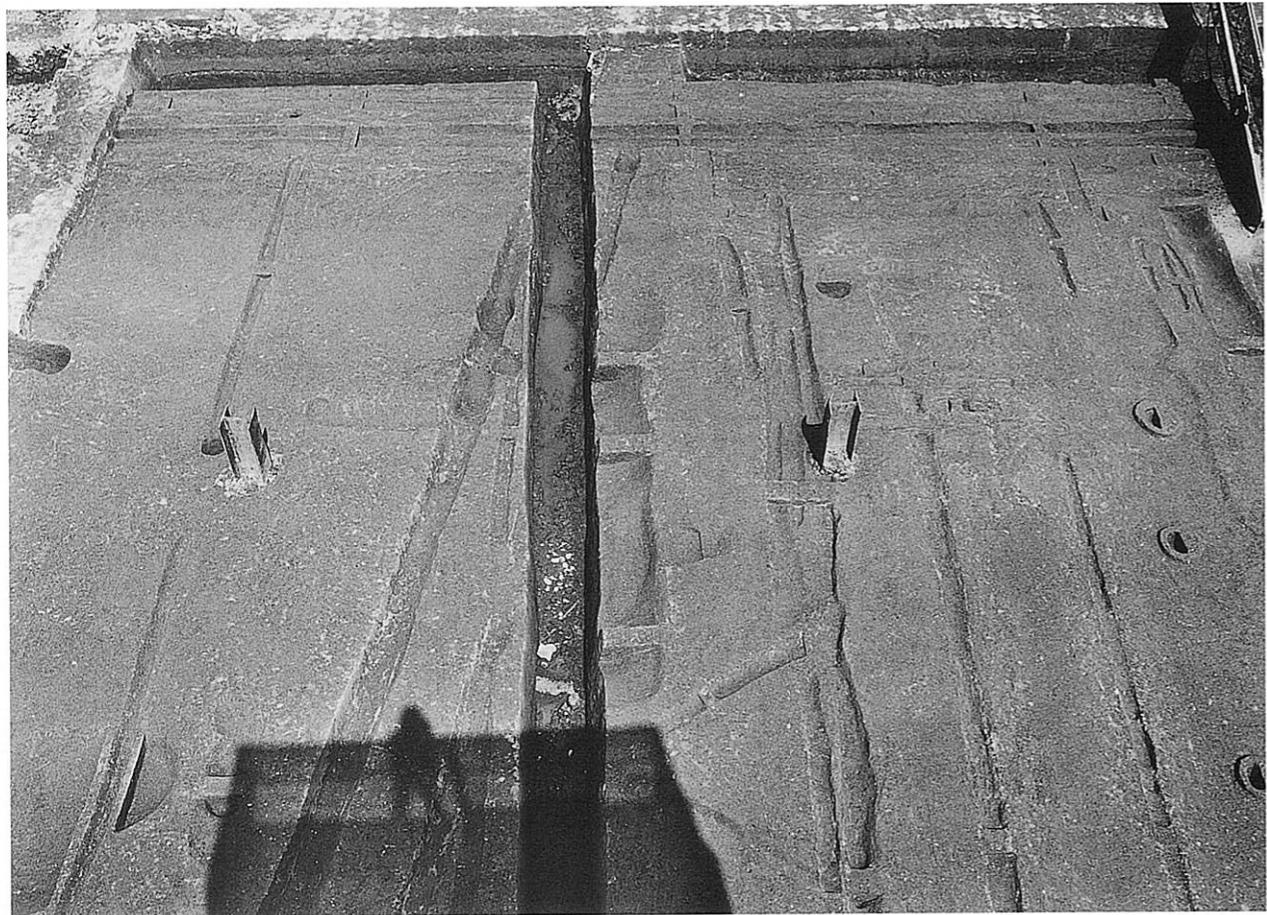


96-1-5 トレンチ1面（南から）



96-1-4 トレンチ2面（西から）

図版 3



96-1-5 トレンチ 2 面（南から）



96-1-5 トレンチ 3 面 遺構172瓦積井戸枠（西から）

図版 4



96-1-5 トレンチ3面 遺構172曲げ物（西から）



96-1-5 トレンチ3面 遺構172曲げ物内（西から）

図版 5

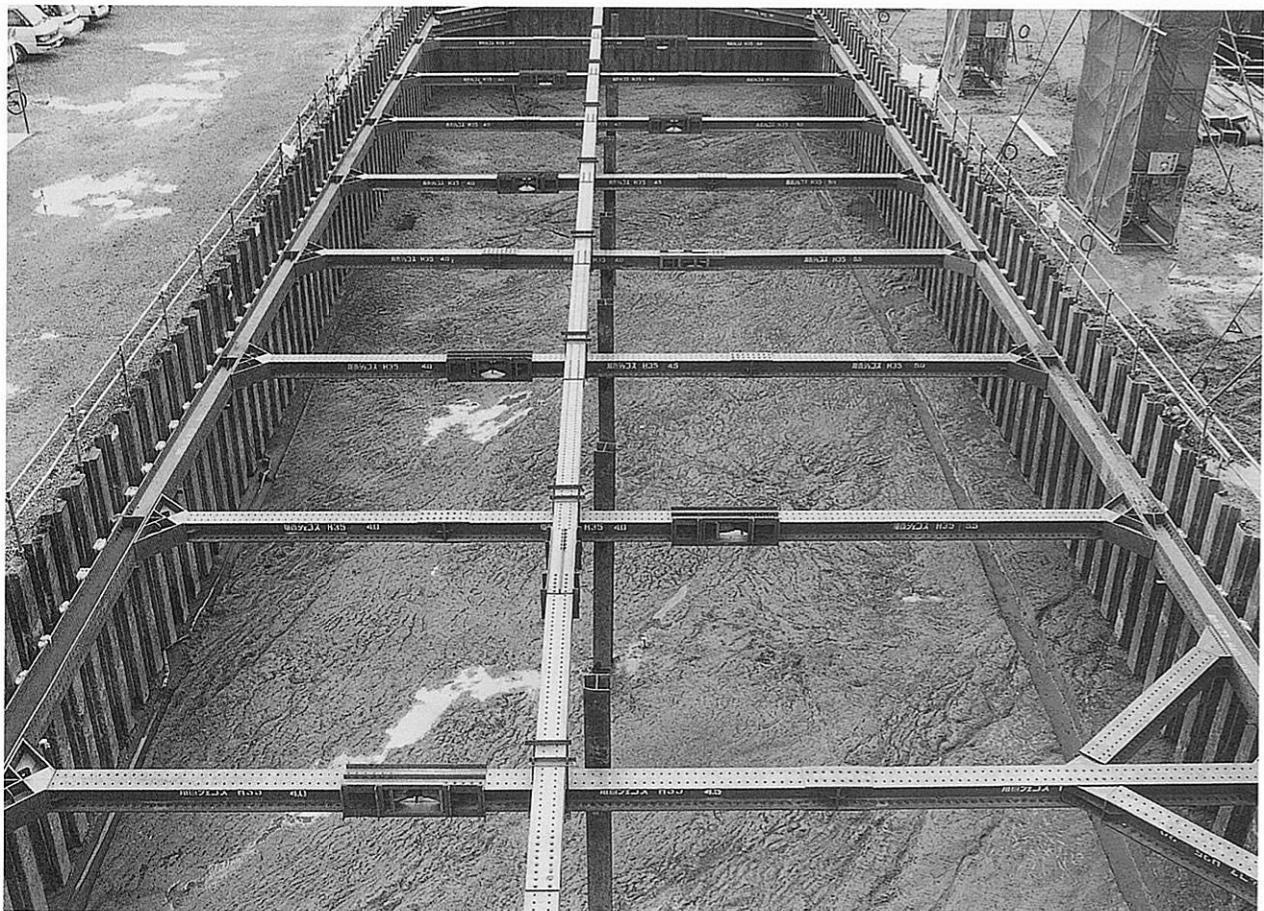


96-1-1 トレンチ4面 遺構1東壁（西から）

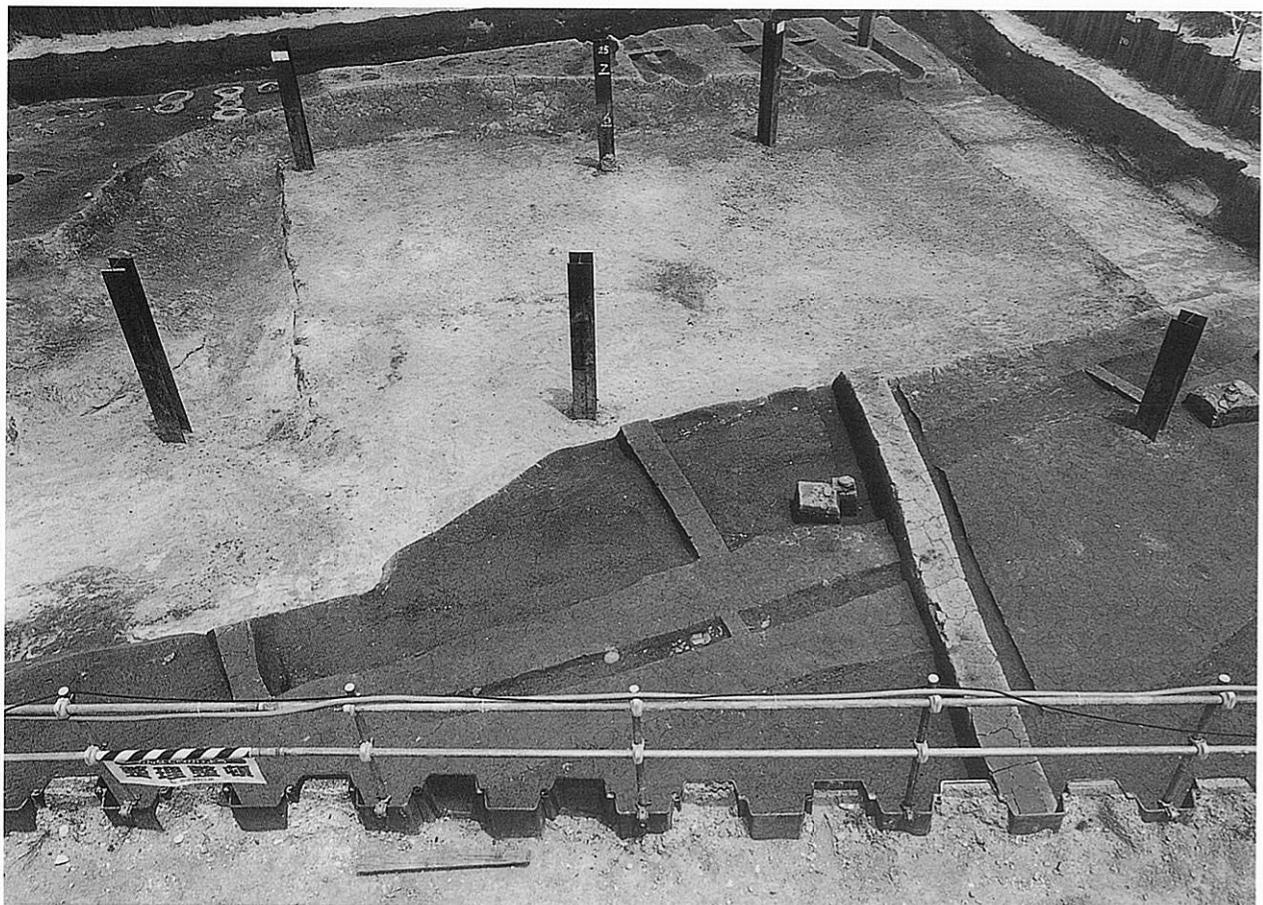


96-1-1 トレンチ4面 遺構5肩部断面（西から）

図版 6



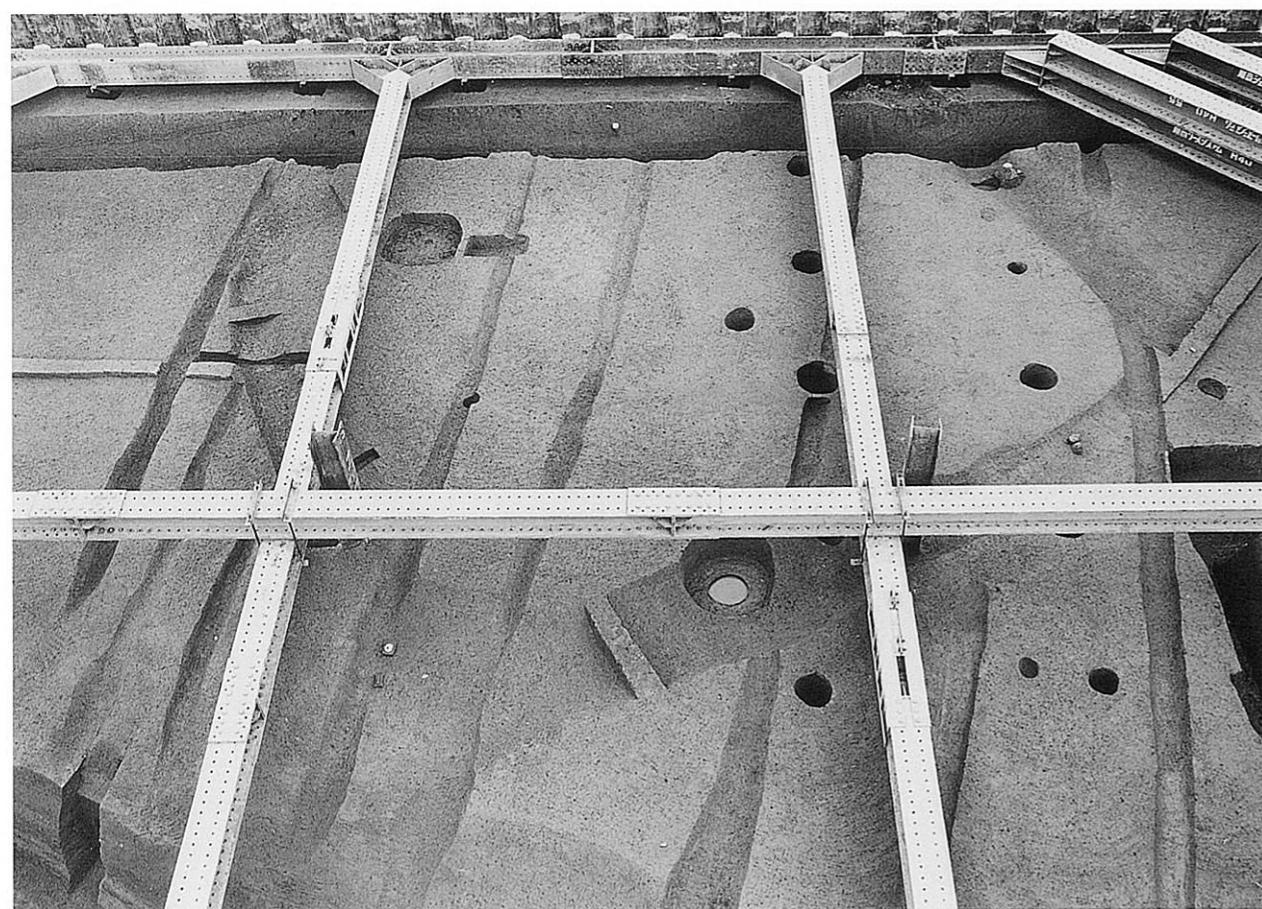
96-1-5 トレンチ4面 遺構5（東から）



96-1-1 トレンチ4面ベース（南から）

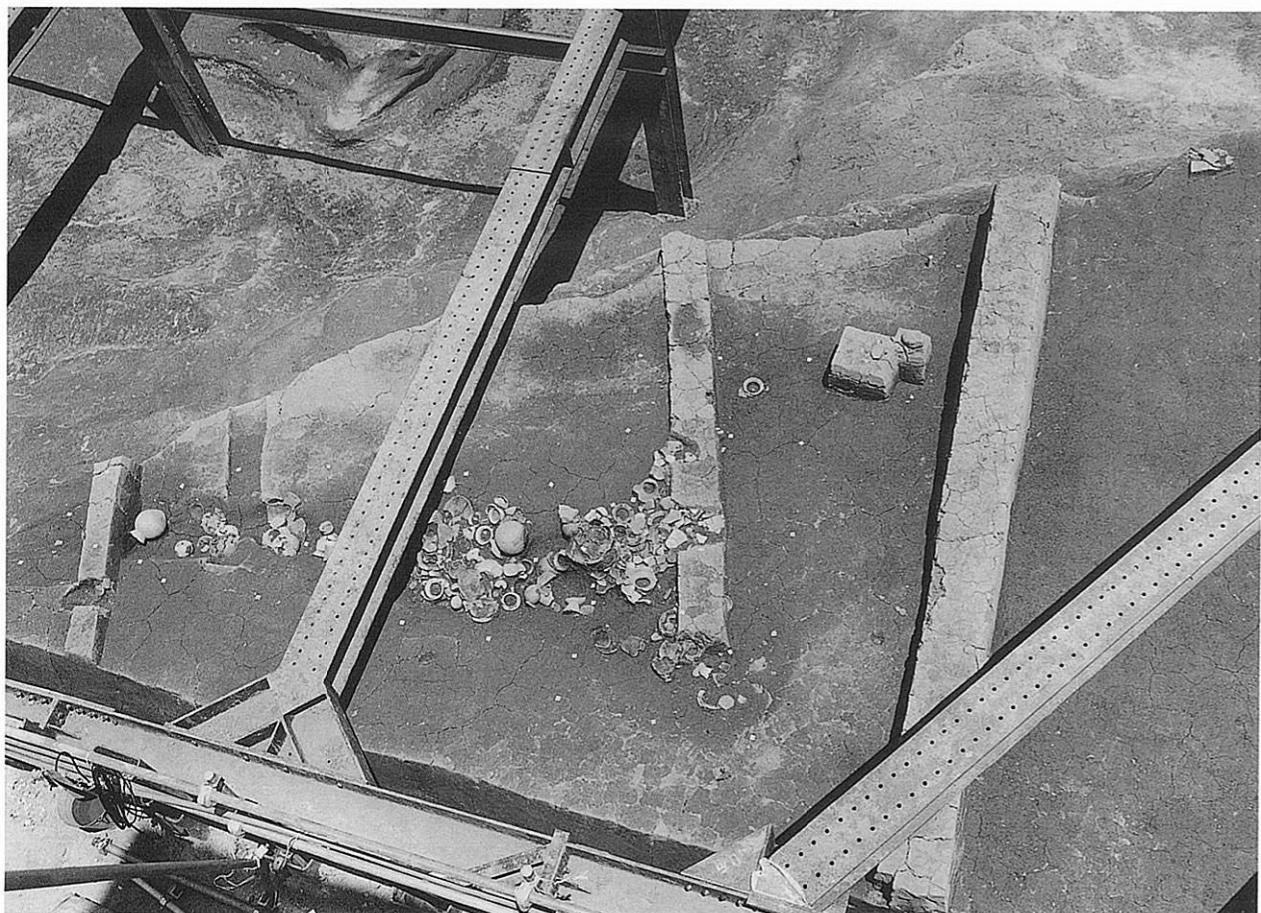


96-1-1 トレンチ 4面ベース 遺構99（東から）



96-1-5 トレンチ 5面（南から）

図版 8



96-1-1 トレンチ 5面 (南から)



96-1-1 トレンチ 5面 遺構122 (東から)



96-1-1 トレンチ5面 遺構122（南から）



96-1-1 トレンチ5面 遺構123（南から）

図版 10



96-1-5 トレンチ5面 遺構185北壁面内（南西から）



96-1-5 トレンチ5面 遺構185（南西から）

図版 11

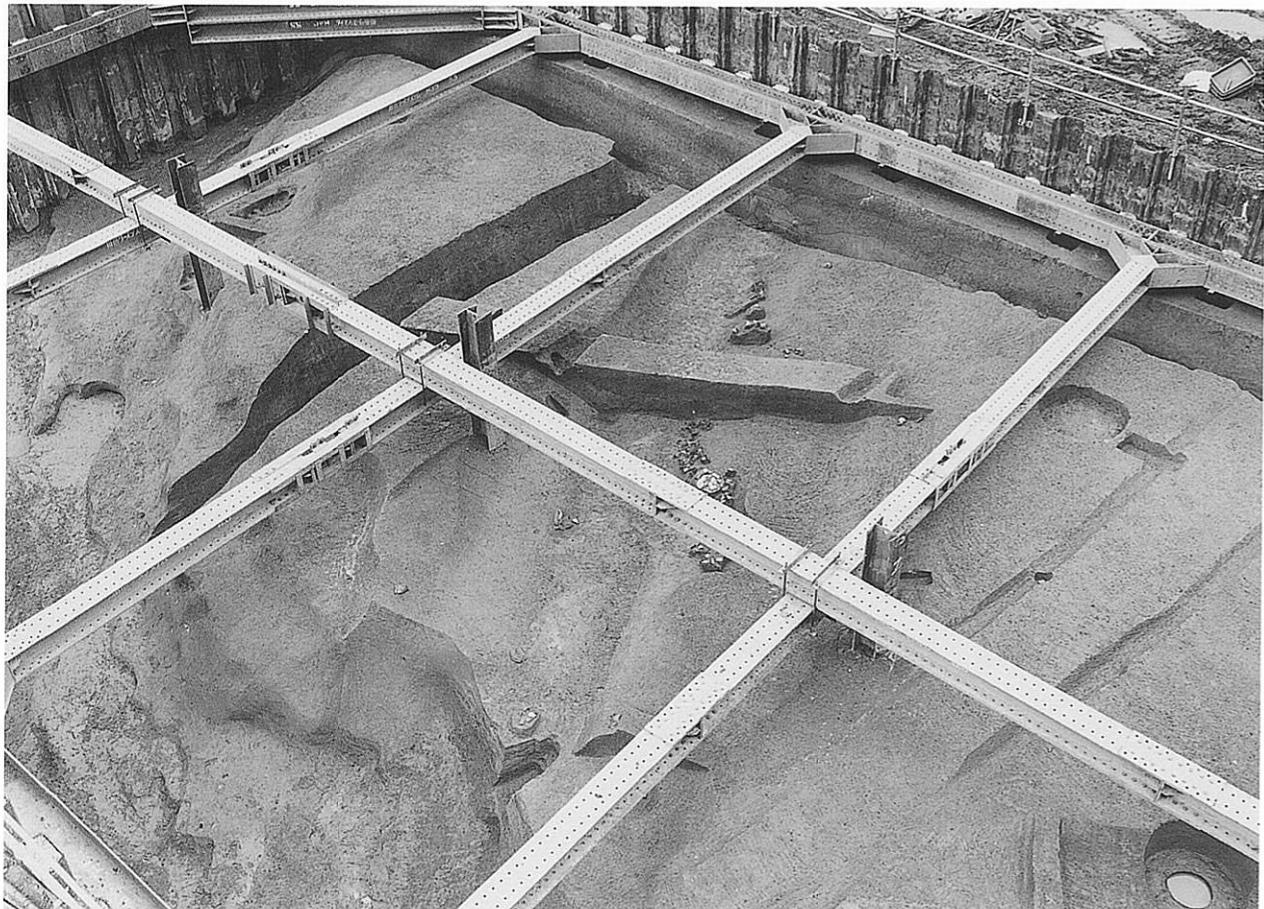


96-1-5 トレンチ 5 面 遺構185 (南西から)



96-1-5 トレンチ 5 面 遺構185 (南から)

図版 12



96-1-5 トレンチ5面 遺構207（南東から）



96-1-5 トレンチ5面 遺構207断面（南東から）

図版 13



96-1-5 トレンチ 6面（西から）



96-1-5 トレンチ 6面（南東から）

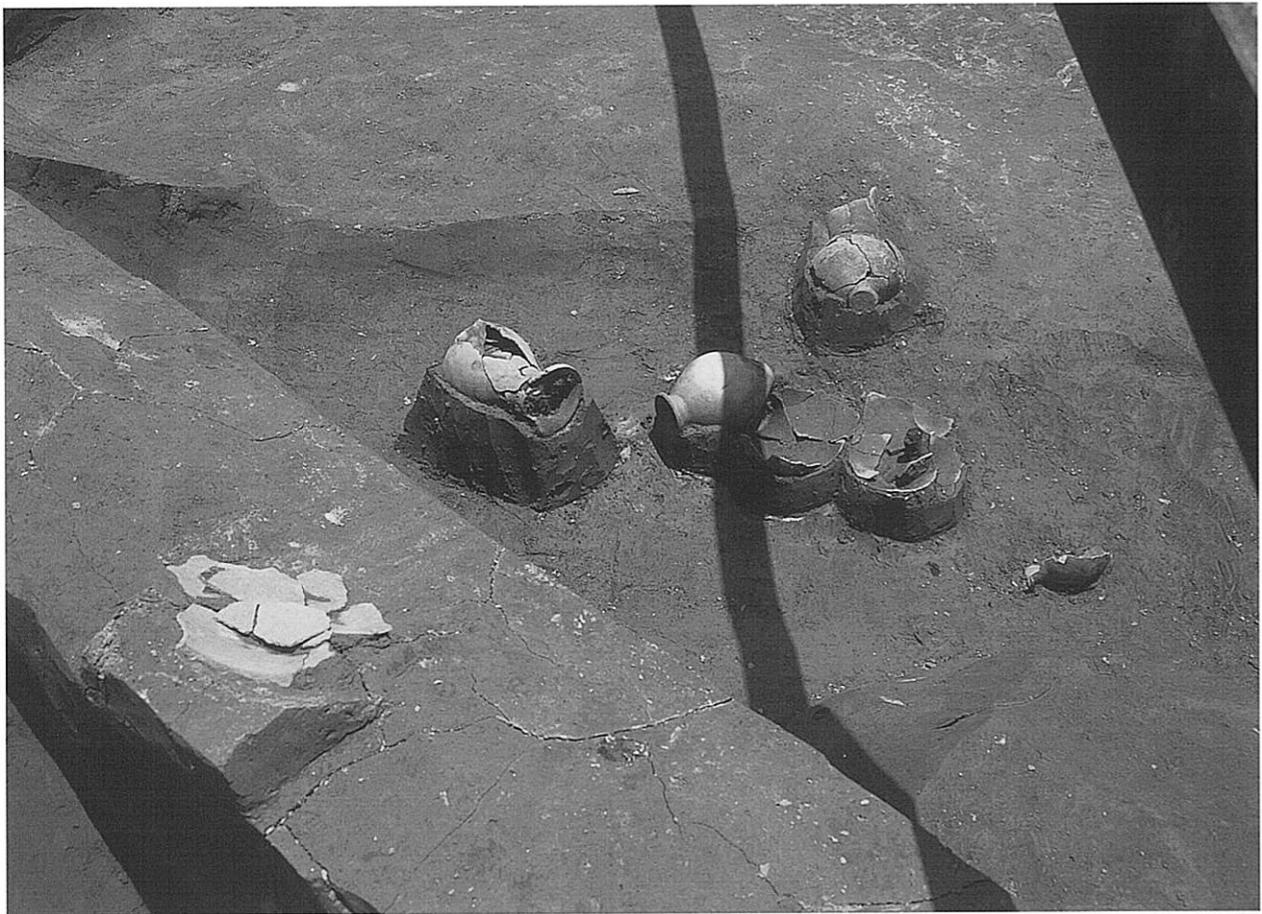
図版 14



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺物出土状況（南から）



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺構141（西から）



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺構129（北西から）

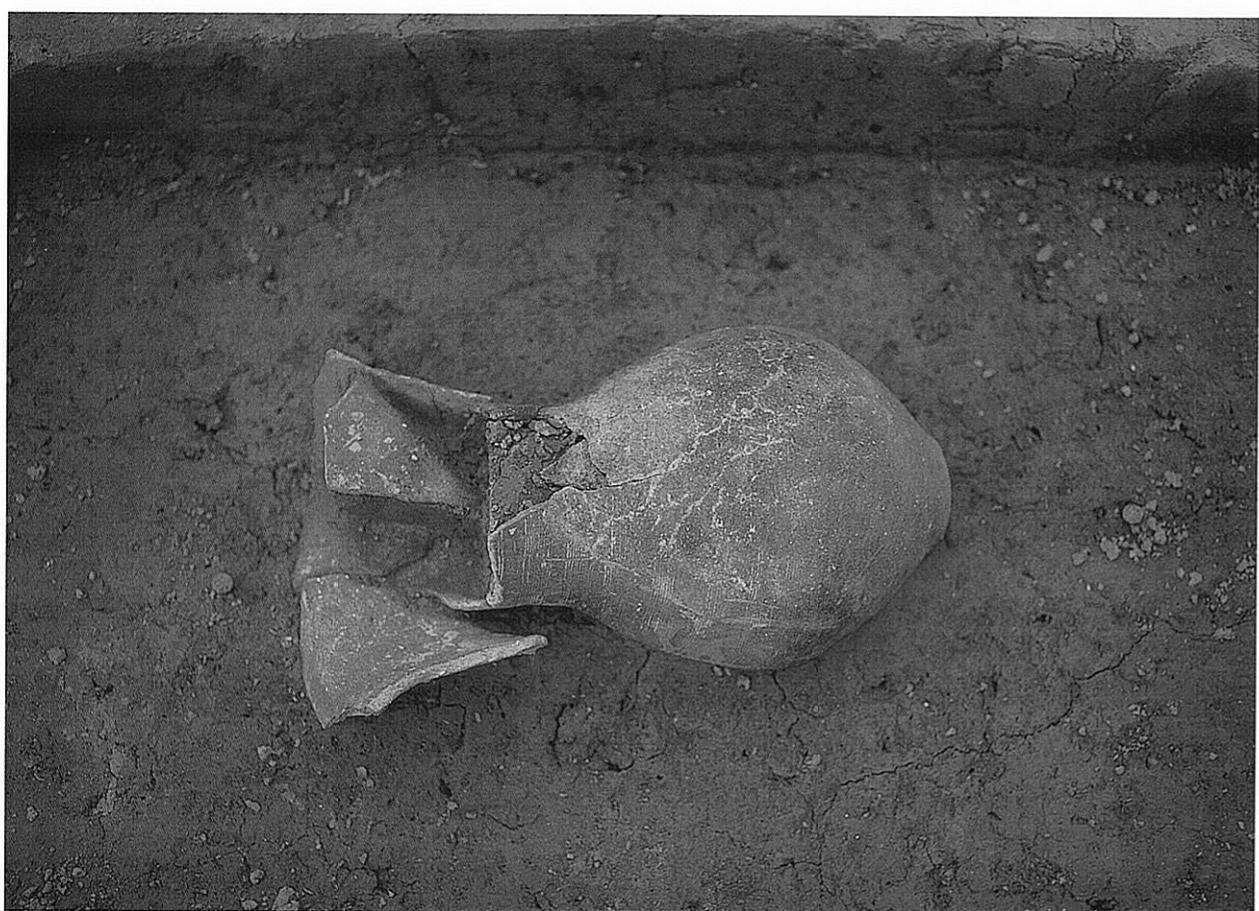


96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺構126 石鏃出土状況（東から）

図版 16



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺物出土状況



96-1-1 トレンチ 6面ベース 土器152 (南から)

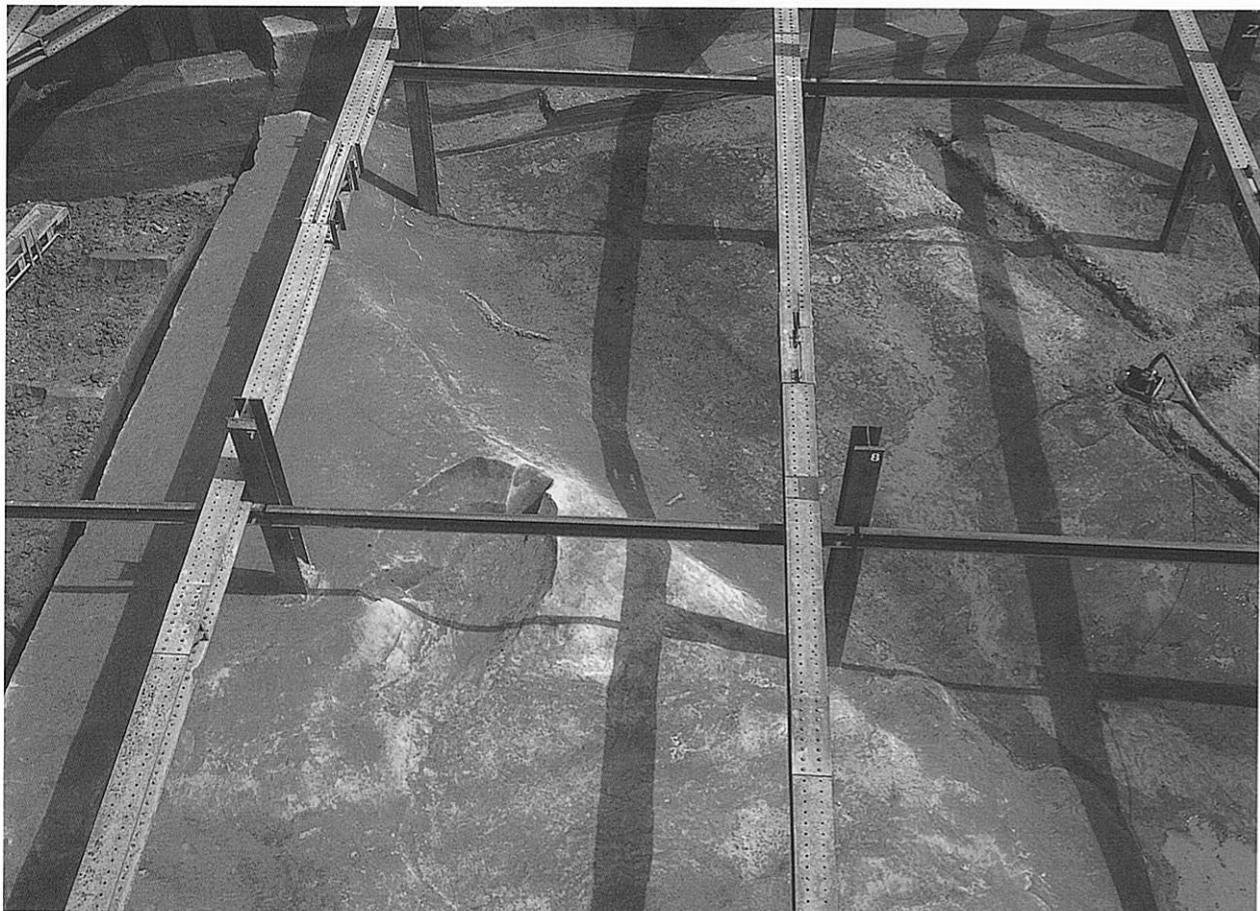


96-1-5 トレンチ 6層 土器279 (南から)



96-1-1 トレンチ 7面 (南から)

図版 18



96-1-1 トレンチ 8 面（南から）



96-1-1 トレンチ 遺構 1 東壁断面（南西から）

図版 19

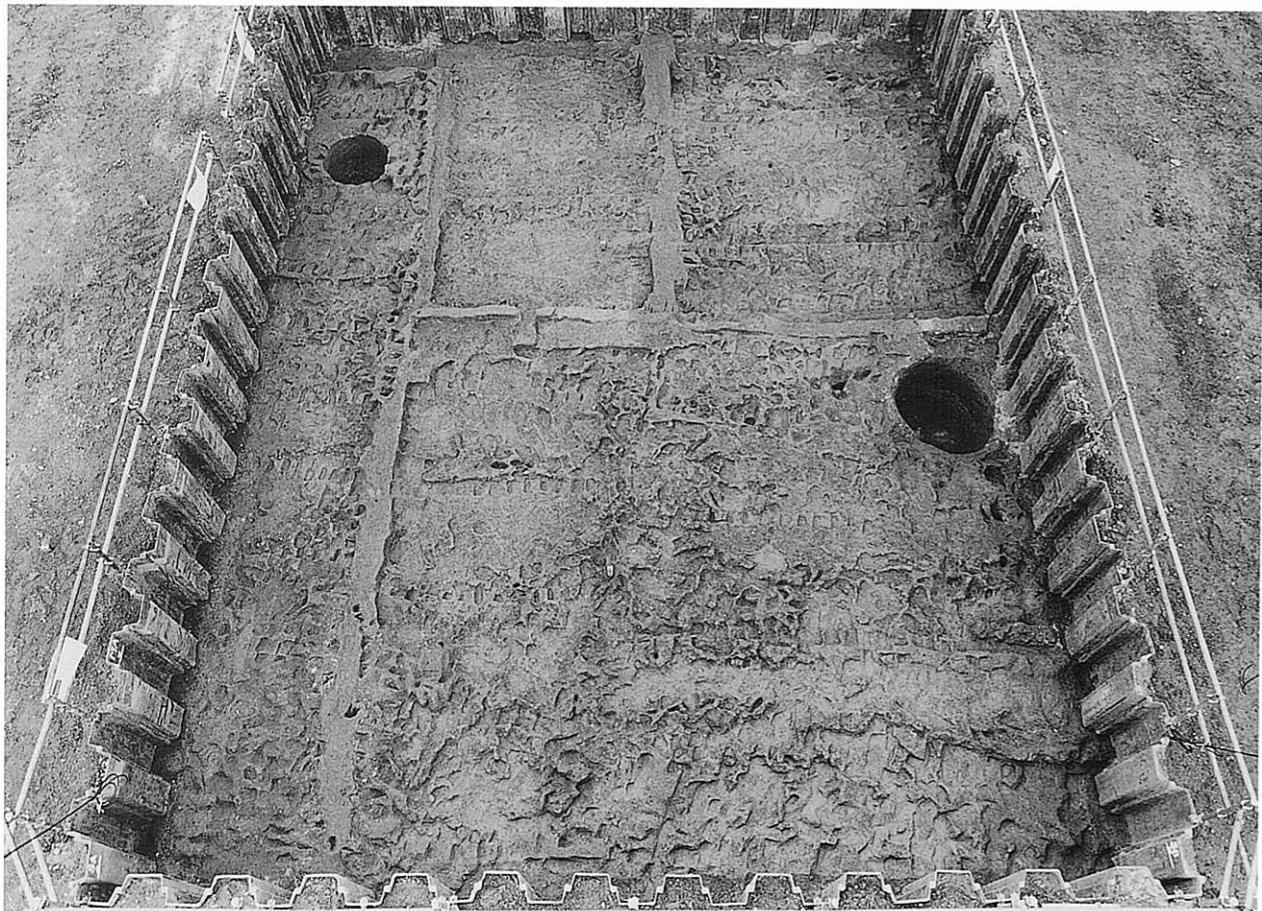


96-1-5 トレンチ 7~9層 北壁（南西から）



96-1-1 トレンチ 8面 8面～下層北壁（南東から）

図版 20



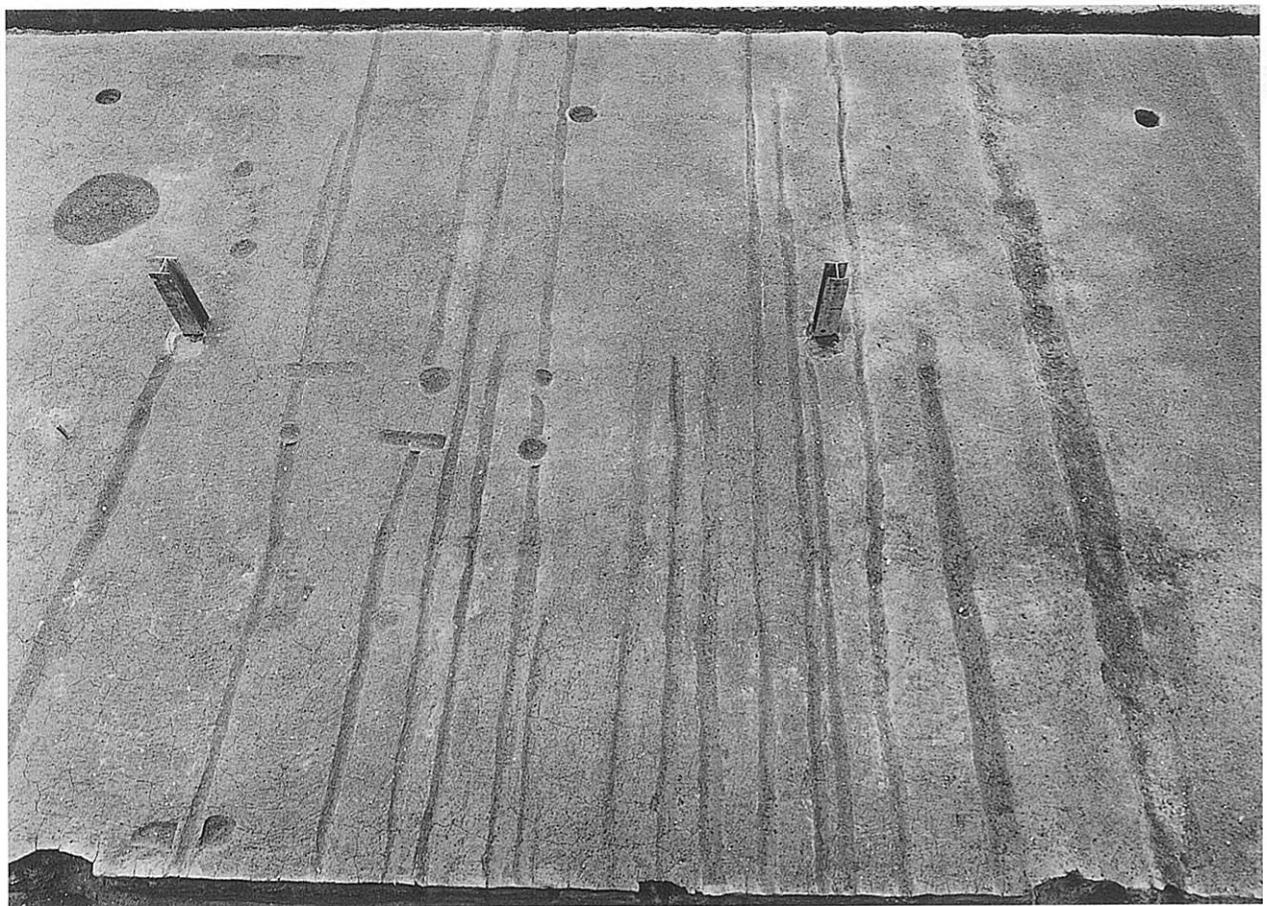
96-2-1 トレンチ 1面 (南から)



96-2-3 トレンチ 1面 東半 (南東から)



96-2-2 トレンチ 2面 西半（南から）

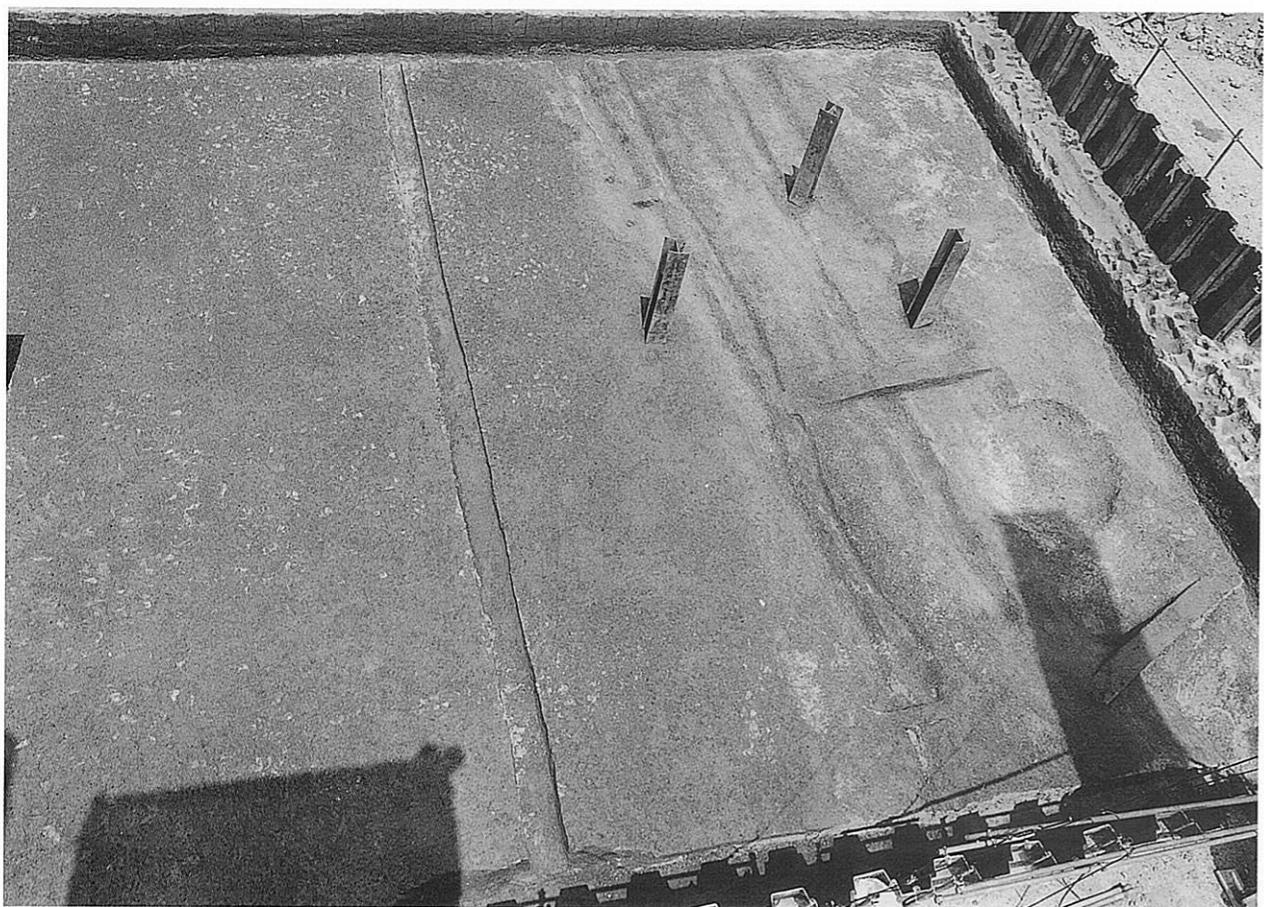


96-2-3 トレンチ 2面 中央（南から）

図版 22



96-2-1 トレンチ 6面 全景 (南から)



96-2-2 トレンチ 6面 東半 (南から)



96-2-2 トレンチ 6面 溝断面

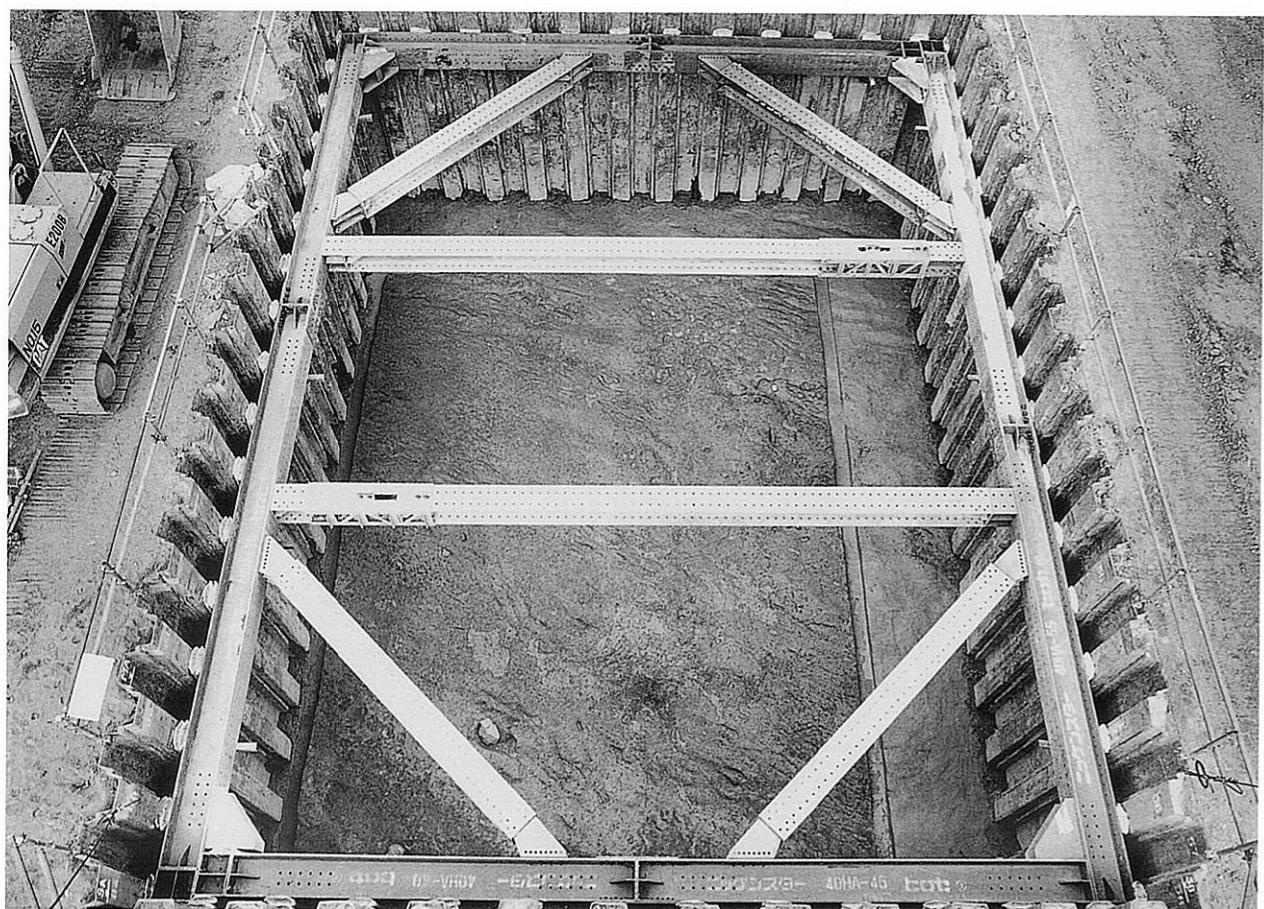


96-2-2 トレンチ 7面 全景（南から）

図版 24



96-2-2 トレンチ7面 溝断面



96-2-1 トレンチ 河床検出状況（南から）



96-2-2 トレンチ 河床 全景（南から）



96-2-1 トレンチ 河床 足跡

図版 26



96-2-3 トレンチ 河床検出状況（南東から）



96-2-3 トレンチ 河床 遺物出土状況



96-1-1 トレンチ 6面ベース 遺構129出土遺物

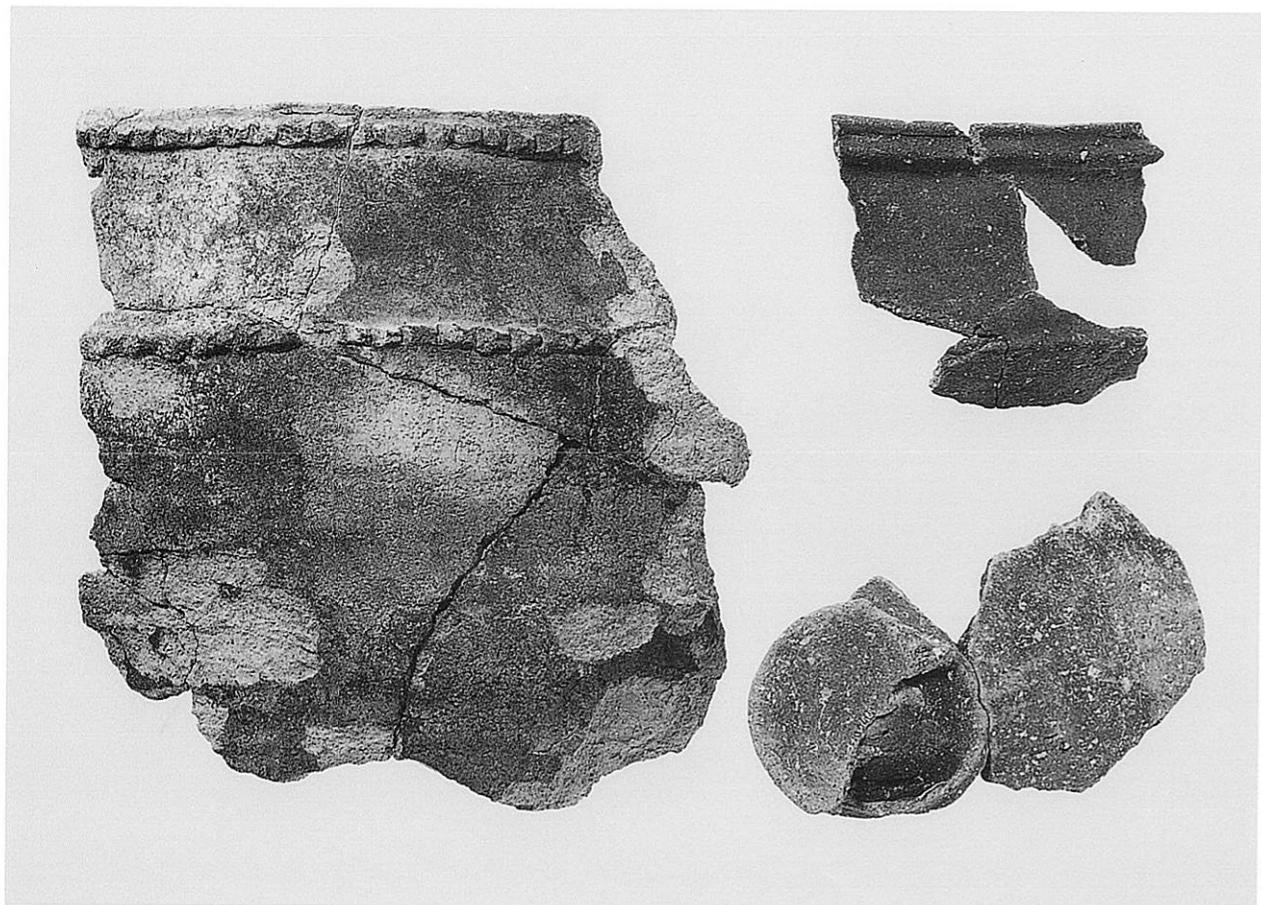


96-1-1 トレンチ 6面ベース 出土遺物

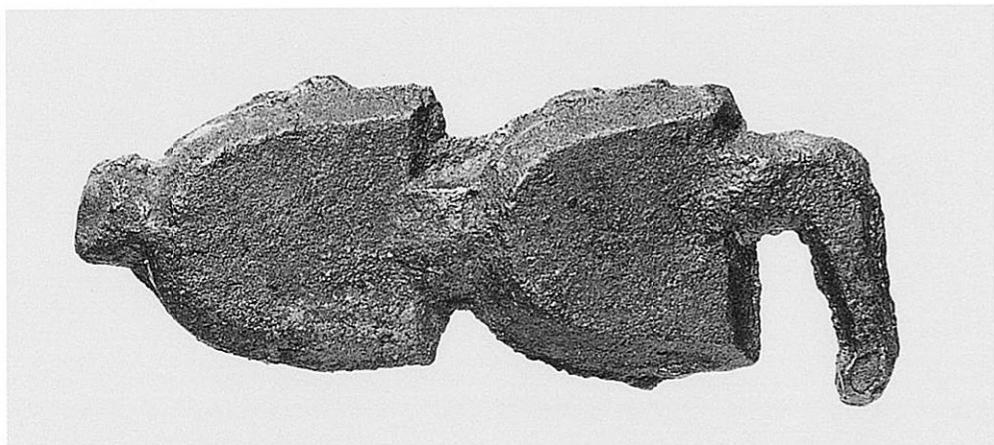
図版 28



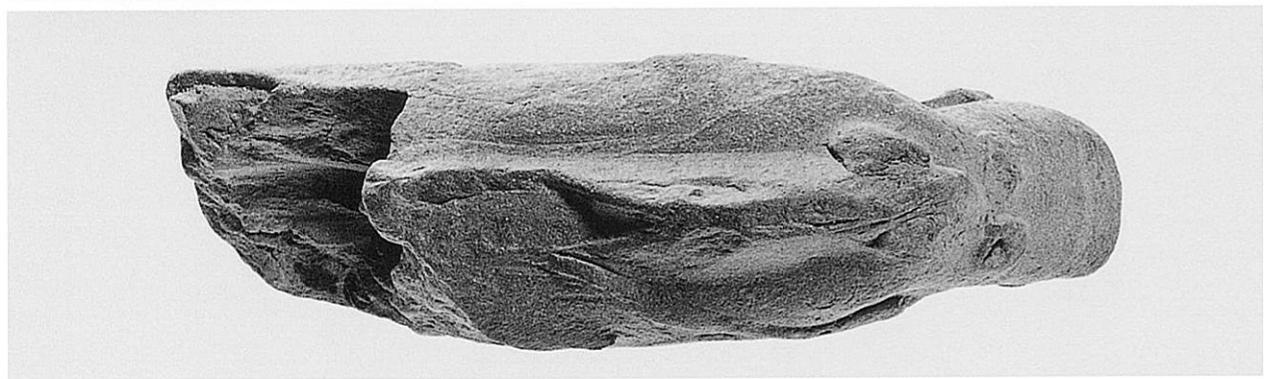
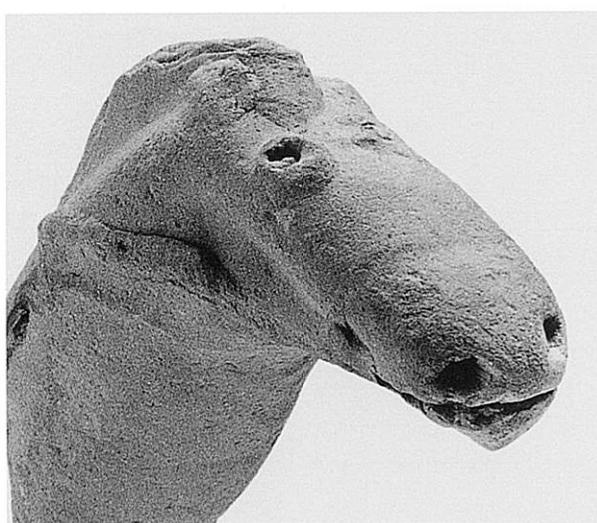
96-1-1 トレンチ 6面ベース 出土遺物



96-1-1 トレンチ 7b層 出土遺物



96-1-1～5 トレンチ遺構 5 出土遺物



96-2-3 トレンチ洪水砂層 出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふなはしいせき							
書名	船橋遺跡							
副書名	建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	寺川史郎・若林邦彦・仲原知之							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒536-0016 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目11-3 小森ビル4階 TEL 06-6934-6651							
発行年月日	1998年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積/m ²	調査原因
ふなはしいせき 船橋遺跡	おおさかふふじいでらし 大阪府藤井寺市 おおいごちょうめ 大井5丁目	27226		34度 34分 36秒 X	135度 37分 6秒 Y	96-1調査区 1996年3月 ~ 1997年2月	3,434m ²	建設省河 川事業進 入路建設 に伴う事 前調査
				-157,760 ~157,840	-34,880 ~35,060	96-2調査区 1996年3月 ~ 1997年2月	1,271m ²	
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
船橋遺跡	田畠	近世~現代	土坑・溝・畦畔	陶磁器・土師器				
		中世	溝・井戸	瓦器・土師器・須恵器				
	古代	溝・ピット・流路	土師器・黒色土器					
		古墳時代	土坑・溝・ピット 方形周溝墓?	古式土師器・ 須恵器				
	弥生時代中期	溝・土坑・方形周溝墓?	弥生土器・打製石器					
	弥生時代前期~中期		弥生土器					
	縄文時代晩期	流路	縄文土器					

船 橋 遺 跡

(財) 大阪府文化財調査研究センター

調査報告書 第29集

-建設省河川事業進入路建設及び
府営美陵住宅建替に伴う調査報告書-

編集・発行 1998年2月28日

(財) 大阪府文化財調査研究センター

〒536-0016 大阪市城東区蒲生2丁目11番3号 小森ビル4階

TEL 06-934-6651

印刷・製本 (株) 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6番8号

TEL 06-976-8761
